



法政大学創立百周年記念誌

文学部の百年

法政大学文学部編

文学部の百年

法政大学文学部編

文学部の百年 目次

文学部百周年に寄せて	廣瀬克哉	6
文学部で培った「考えるちから」	田中優子	10
シンポジウム「文学部の過去・現在・未来——百年間のたからもの」		14
学部・学科の歩み		47
文学部		49
一 法政大学の出発	49	
二 大学令による法政大学の誕生	50	
三 「法政騒動」と戦時下の文学部	64	
改組	54	
四 戦後の再建	57	
五 「大学紛争」の激化	62	
六 大学院の本格的始動	64	
七 市ヶ谷キャンパス再開発	65	
八 心理学科新設から今日まで	66	
*		
哲学科		70
一 草創期	70	
二 大戦前の黄金時代	72	
三 戦時下	75	
四 戦後復興期	76	

五	大学紛争からの再建期	81	六	ミレニアム新世紀の刷新	84
---	------------	----	---	-------------	----

日本文学科	100
-------	-----

一一一	法文学部時代（一九四五）	93	一二	日本文学科時代	100
-----	--------------	----	----	---------	-----

二	国文学会と『日本文学誌要』	113	三	大学院と通信教育部	117	四	主な出身作家	119
---	---------------	-----	---	-----------	-----	---	--------	-----

英文学科	123
------	-----

一	法文学部時代（一九二二～一九四七）	123	二	再編と再建の時代（一九四七～一九七二）	137
---	-------------------	-----	---	---------------------	-----

三	改編の時代（一九七二～一九九七）	144	四	変革の時代（一九九七～二〇二二）	149
---	------------------	-----	---	------------------	-----

史学科	156
-----	-----

一	草創期（一九三七～一九六五）	156	二	第一次世代交代と繚乱期（一九六五～一九九九）	159
---	----------------	-----	---	------------------------	-----

三	ボアソナード・タワー（BT）での活動と第二次世代交代期（二〇〇〇～現在）	165
---	--------------------------------------	-----

地理学科	171
------	-----

一	ルーツ	171	二	地理学科という空間	172	三	スタッフ	174	四	イベント	178
---	-----	-----	---	-----------	-----	---	------	-----	---	------	-----

五	刊行物	181	六	カリキュラムなど	182
---	-----	-----	---	----------	-----

心理学科	186
------	-----

一	法政大学に心理学ができるまで	186	二	心理学科の誕生	186
---	----------------	-----	---	---------	-----

三	人文科学研究科心理学専攻の誕生と法政大学心理学会の開設	190
---	-----------------------------	-----

四	文学部心理学と大学院人文科学研究科心理学専攻の誕生後の略歴	192
	学科の卒業生	196
	六 今後の問題点	196
	七 心理学カリキュラムの変遷	198
	コラム	205

教育学科

心理学コース

一	戦前にはじまる法政大学の心理学教育	208
	コースの設置	209
	三 熱気あふれる心理学コースの学び	211
	四 心理学コースから文学部心理学科及び現代福祉学部臨床心理学へ	214

教育学コース

一	戦前における教育学研究と教育の展開	216
	二 戦後における教育学科の設置と研究・教育の展開	218
	三 教育学科（教育学コース）における研究・教育、学生の学び	220
	四 教育学科の募集停止からキャリアデザイン学部設置へ	223

資料編

文学部教員一覧	226
歴代文学部長一覧	244
文学部学生定員数・卒業生数の推移	245

文学部年表	251
-------	-----

後記	283
----	-----

文学部百周年に寄せて

廣瀬 克哉（法政大学総長）

文学部百周年おめでとうございます。

文学部が百周年を迎えたということは、明治期に創設された夜学の法律専門学校から始まった法政大学が、今日の全日制の総合大学に向けた大きな発展の一步を刻んでから百年が経過したということを意味しています。

大学令にもとづいて、私立大学が制度上公式に認められる前から、法政を始めとしていくつかの私立の専門学校が「大学」を名乗りはじめていました。法政の場合は、法律単科の専門学校から、専門学校令にもとづく高等教育機関として、法律と政治経済を教授する学校へと改革を進め、明治36（一九〇三）年から、和仏法律学校法政大学という名称を使い始めています。しかしその段階でもなお、授業は基本的に夜間に行い、法律実務家をはじめとする兼任教員に多く依存しており、専任教員はまだまだ人数的にも限られておりました。

その後大正7（一九一八）年には大学令が制定され、法政をはじめとする幾つかの私立大学が、はじめて法制度上も正式の大学となったのが一九二〇年のことでした。法学部と経済学部が二〇

二〇年に創立百年を迎えることとなりました。この時の大学昇格にあたって、法政ではさらに教育を充実させるため、文学科と哲学科を新たに設置し、人文科学と社会科学の両方を擁する、名実ともに総合大学となったのが一九二二年のことでした。文学、哲学の両学科は、充実した専任教員を擁する全日制の教育機関として設計されました。それを機に、法律、経済の領域でも専任教員による全日制教育へと改革を進め、今日イメージされるような総合大学の体制が整うことになりました。

また、初期の文学部を担った専任教員たちは、夏目漱石門下の教養主義の思想系譜の人たちが軸となっており、その人々が「大学にふさわしい自由な知的活気にみちた法政の教授室と教室とをもたらし、それは経済学や法学に教授、講師として新しく入ってきた人たちもインスパイアしたほりであった」と『法政大学八十年史』は後に記述しています。自由な学風を形成する上でも文学部の設置は法政全体の歴史に大きく貢献したのです。

現在では「人間と文化の本質を追求する」6学科を擁し、個性あふれる教授陣と学風によって、人文学の発展に貢献しています。

ところで、最近、日本社会では未来に向けて必要とされるような人材が不足しているという声をよく耳にします。そのなかで、大学教育に対して「成長分野への再編」が政府によって提言されたりしています。それを表面的、短絡的に受け止めてしまうと、AI学科、プログラミング学科、バイオテクノロジー学科、といったイメージになってしまったりします。でも、その発想自体が、政策形成過程を担う人材が不足していることによる、表層的な対症療法に陥ってしまっているの

ではないかと懸念します。

そんな表層的な誤解を払拭するとともに、これからの未来において文学部に期待すべきだ、ということの理由を示す一つのエピソードをご紹介しますと思います。

コロナ禍の少し前の時期に、私は、法政大学の在学生の父母の会である、法政大学後援会の、ある地方支部の総会に参加する機会がありました。その場には、在学生の父母と共に、その地方の校友会の役員の方々と、就職についての情報提供やアドバイスのために招待された、比較的卒業後間もない卒業生などが参加していました。地元の金融機関に就職した卒業生が、就活についてのアドバイスなどを話してくれたのですが、質疑応答に移ると、ある新入生の親御さんから「先輩は文学部を卒業されているけれども、なぜ文学部から金融機関に就職したのですか？ 学んだ専門と就職はどう関係しているのでしょうか」という趣旨の質問が出されました。つい少し前まで高校の進路指導のアドバイスを受けながら学部選択をされた新入生の親御さんとしては、文学部から金融機関へという進路に違和感を覚えられたのだろうと思います。

とはいえ、些か失礼でもあるこの質問に対して、20代半ばのこの卒業生はこのように答えました。「金融機関にとってもちろん経済や数字といったものは重要です。しかし、金融機関の仕事のほとんどはことばをつかって行われています。私は文学部で4年間、それまでの人生では想像もできなかったほど、集中して真剣にことばと向かい合いました。その経験は今の仕事に大変役に立っています。文学部を卒業していて良かったと実感しています」

このことばのなかに、文学部が育てている力の本質や意義がみごとに表現されていると私は受

け止めました。私のすぐ近くでこのやりとりを聞いておられた校友会の役員の方は、若い卒業生の在籍している金融機関の役員を経験された方で、経済系の学部を半世紀ほど前に卒業されていた方でしたが、「みごとな答えだ」と大きく頷きながら拍手されていたことが印象的でした。

デジタル人材が足りない、データサイエンスを使える人が欲しい、AIエンジニアがいなくてこれからの日本経済の国際競争力があやうい、といった声はこれからも聞こえ続けると思います。しかしそのような場面でこそ、「人間と文化の本質を追求する」姿勢や、手段を身に付けている人こそが、何よりも必要であり、本質的な意味において「役に立つ」のだと思います。文学部の役割はこれからますます重大だということです。ただし、それが広く社会の常識として理解されているかと言えば、残念ながらそうではありません。その点では、大学や文学部からの意識的な発信は不可欠です。今日の行事もまた、そのような発信のひとつの場となることを期待して、祝辞とさせていただきます。

(※二〇二二年一〇月一五日開催の文学部創立百周年記念式典における総長祝辞を採録)

文学部で培った「考えるちから」

田中 優子（法政大学名誉教授・前総長）

文学部が百周年を迎えましたこと、まことにおめでとうございます。

法政大学文学部日本文学科で学んだ4年間と、人文科学研究科で学んだ6年間は、私にとって最も自由に充実した時間でした。そこで培ったものは「自ら考えるちから」です。その「ちから」は「姿勢」とか「習慣」とか「覚悟」と言い換えることができます。

なぜ文学部で学ぶことで自ら考える姿勢が育ったのかといえば、法政大学文学部には権威主義を嫌う空気があったからです。先生がたお一人お一人に、権威に依存しない姿勢がはつきりしていました。その自由な雰囲気の中で学生たちは、先生がたの言葉に深い関心をもって耳を傾けても、にわかに信じたり従ったりはしませんでした。常に批判的な眼差しを向けながら、自分自身の内側で消化し、自分の言葉に彫琢していくことこそが、大切だと思えました。

私は高校生の時に国語の教師から、法政大学日本文学科で教えている教員たちの話を聞き、小田切秀雄先生の著書や、広末保先生、西郷信綱先生などが共著した『日本文学の古典』や、益田勝実先生の文章を読みました。古代から近代にわたってそれぞれの研究の面白さに心躍り、法政

大学の日本文学科に入りました。入ってみると、思った以上にその世界は広く、自由な発想が許されていて、まさに水を得た魚のように、読みたい本を読み、考えたいことを考え抜く毎日になりました。

私が在学中はまだ1、2年生は教養部の学生として教養課程を学ぶ仕組みでした。教養部の授業は学部学科が混在していますので、他学科他学部の学生とともに学ぶ機会も多くありました。その中で学部学年を問わずゼミのような方法で受講した言語社会学からは、大きな影響を受けました。学生どうしで共に本を読み、議論し、調査を実施しまとめる、という学生主体の授業だったからです。同様に集会やデモにおいても、他学部、他学年の学生たちと行動を共にし、議論する機会が多くありました。

今は市ヶ谷キャンパス内に限れば学部混在で学ぶことができる仕組みになっていますが、大学生活の中で、他学科、他学部の学生や、他キャンパスで学ぶ学生たちと出会うことは、物事を考える上で大きな刺激となります。社会や政治の問題を自分はどう考えるか、それを迫られる体験も、極めて大切なものです。考えるちからをつけるきっかけを、今まで以上に得られるよう、期待しています。

自由に考えようとしている時、特定の主義主張や信仰や世間的・政治的権威を押し付けようとする圧力は邪魔です。大学にはその邪魔者が、昔も今も必ずいます。しかし大学や学部の方針が多様性の容認を明確に持っていれば、学生や教職員はその邪魔者に振り回されません。二〇一六年に定めた法政大学憲章「自由を生き抜く実践知」とダイバーシティ宣言に照らし合わせ、学生、

教職員がのびのびとそれぞれの才能を発揮できる学部づくりをしていただきたいと願っています。文学部が創建当時から持ち続けてきたその自由と批判精神に加え、これからの文学部とりわけ日本文学科の未来に向けて、3つのことを期待しています。1つ目は沖縄学の充実です。私が在学当時、教養課程においても専門科目を履修することができました。その中に外間守善先生による『おもろさうし』の講義がありました。視野が広がり、目が覚めるような思いでした。大学に入ってすぐに沖縄文学を学ぶことができる大学は、極めて希少で貴重でした。沖縄学・沖縄文学の伝統を、法政大学で絶えさせてはなりません。現在、沖縄文化研究所の活動はさまざまな専門の先生がたによって担われていますが、沖縄関係の専門家がごく少数なのです。文学部に専門家が増えることで、東京都にキャンパスのある大学として、大きな特徴を持つことになります。

2つ目は、東アジアのなかの日本学を充実させることです。私自身が大学院に進んで江戸文学を専攻するようになった時、日本文学には中国語と中国文学、韓国語と韓国文学の素養が必要だ、と思いました。中国語と中国文学については中途半端ながら教員になってから取り組みましたが、韓国語と韓国文学までは追い付かず、教養課程の文学の授業に在日作家たちの作品を取り込むぐらしいできませんでした。漢字文化圏としてはさらにベトナムの古典チュノム文学も必要でしたので、いささか勉強しました。学部時代に中国語と韓国語が必修であつたら、もっと早くから比較学に入れたであらう、と思いました。

3つ目は文理の壁を越えた学びです。すでに史学科の小口雅史教授が電子史料学を提唱しておられますが、今後はますます文学、史学、地理学などの情報整理や分析や図像化に電子媒体が必

要になります。それだけでなく論理的な思考力、科学的な説明方法などが、言葉の素養や深さに不可欠なのです。地球環境学や宇宙や時空の理論が文学者に与える想像力の広がりとは言うまでもありません。知の広がりには混乱を招くのではなく、むしろ理解と解釈の幅を広げるのです。

すでに大学を離れた身ですので以上は希望でしかありません。どのような学部になっても、卒業生たちが考えるちからを携えて社会で才能を発揮できるよう、文学部には大いに期待しています。

シンポジウム「文学部の過去・現在・未来——百年間のたからもの」

日時…二〇二二年一〇月一五日 一五時～

場所…法政大学ボアソナード・タワー（スカイホール）

登壇者

牧野英二（哲学科）

堀江拓充（日本文学科）

結城英雄（英文学科）

山名弘史（史学科）

佐藤典人（地理学科）

吉村浩一（心理学科）

司会

奥田和夫（哲学科教授）

奥田 これより、「文学部の過去・現在・未来——百年間のたからもの」と題しまして、各学科の名誉教授の先生方に登壇していただき、シンポジウムを始めたいと思います。

各学科の先生方から、過去・現在を振り返っていた

だき、未来への展望をお話いただきますけれども、初めに哲学科の牧野先生から、文学部全体に関しての基調報告を含めてお話いただきたいと思います。牧野先生よろしく願います。

○牧野英二 哲学の使命と役割から考える

牧野

ご紹介いただきました牧野でございます。それでは早速、時間も限られておりますので、私としては哲学の使命と役割から見た「文学部の過去・現在・未来——百年間のたからもの」について報告させていただきます。

はじめに文学部および哲学科の教育研究の百年と今後の展望について、次に創立期の状況と学問研究の主要動向について、三番目に「法政学派」と哲学科の「黄



牧野英二

金時代」、四番目に一九七〇年代以降の哲学科再建の動向について、五番目に哲学科の新たな教育研究の展望、そして最後に結論として新たな百年に向けてお話をさせていただきます。

法文学部創立時、大正一一（一九二二）年の教養主義から、軍国主義、太平洋戦争、戦後民主主義の時代を経て、今日まで教育研究活動が国家体制と社会状況の変化によって大きな影響を受けてきました。そこでその間に培われたもの、かけがえのないもの、大きな財産とは一体何なのか。それは存在したのか。また、それは現在継承されているのか。今後継承されるべきものは何なのか。危機が常態化した状況下で今後の文系学問、特に哲学研究と教育のあり方に対して何を語るができるのかが問われています。とりわけ新型コロナウイルスのパンデミックと国際秩序の混乱の中で日本の大学の教育研究、特に文系学問のあり方も急激な変化を強いられているのではないかと思うわけです。

そこで私は本学の教学改革や斯学の学会運営に携わり、文学部長時代に総合人文学部の構想を提起した経験を踏まえまして、これらの課題に応答してみたいと思います。最初に、創立期の状況と学問研究の主要動向についてです。

創立時期には夏目漱石門下による学部・学科の教育研究活動が進められました。主要なメンバーとしては、和辻哲郎、安倍能成、森田草平、小宮豊隆、内田百閒、野上豊一郎など、錚々たる学者・研究者がいました。

大正教養主義の時代はイマニエル・カントを中心とするドイツ哲学の研究が学界で主流となりまして、本学教授陣はその一翼を担っていました。本学におけるカントおよびドイツ哲学研究の伝統は、昭和・平成・令和でも継承され、斯学の発展と研究者育成、学生教育に貢献しました。

この伝統の中で私も教育研究に携わり、非常勤三年専任三十六年の教育経験の中で教壇に立ち、二〇一九年の三月に退職しました。私は教育者・研究者・哲学者として今後の文学部、そして哲学科の展望を語ることで、私自身の教育研究の成果を回顧しつつ「百年間のたからもの」の一端を垣間見てみたいと思います。

本学におけるカントおよびドイツ哲学研究の伝統は、大正期まで哲学研究がドイツ哲学、特にカント哲学研究が主流だったわけですが、その理由は近代化のモデルをドイツ帝国に依拠したことによります。日本のカント哲学研究は新カント学派の影響のもとでのカント研究でした。したがって新カント学派のフィルタールを通して進められました。当時それは哲学・倫理学・美学に細分化される前の広い意味での哲学および文学・

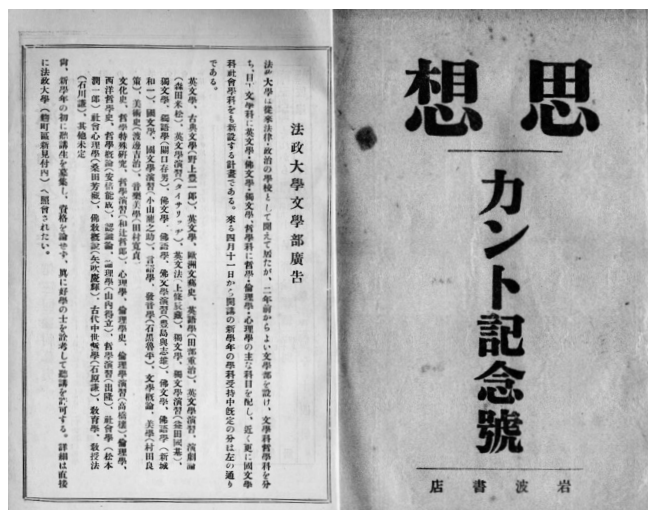
歴史学・心理学・社会学などを含む体系的な学問であつたわけですね。

当時の哲学研究の特徴と水準としましては、大正教養主義を支えた日本の知識人・大学教授の中でも、本学の教授陣は精力的な執筆活動を通じて、学生や知識人、研究者に影響を及ぼしました。特に当時の哲学研究は歴史的社会的現実との密接な関係が特徴的でありまして、哲学科と縁のあつた西田幾多郎や田辺元等の執筆活動も例外ではありません。本学の人文・社会学部の教授陣の活躍ぶりは、官立大学の教授陣と比較して遜色がありませんでした。本学とドイツ哲学との関係には顕著な特徴があります。ドイツ哲学研究に携わった哲学科教員には、カント研究と岩波書店との深い関わりがありました。

ご参考までに紹介しますと、カント生誕二〇〇年の企画として岩波書店が『思想』の記念号を出しております。その巻末に法政大学文学部の広告が掲載されています。「法政大学は、……二年前からよい文学部を設け、文学科哲学科を分ち……哲学科に哲学・倫理学・心理学の主な科目を配し」、「文化史、哲学特殊研究、哲学演習（和辻哲郎）、心理学、倫理学史、倫理学演習（高橋穰）、倫理学、西洋哲学史、哲学概論（安倍能成）、認識論、論理学（山内得立）、哲学演習（出隆）……古代中世哲学（石原謙）」などと紹介してい

ます。

そしてこの広告の中に、文学科は英文学専攻・仏文学専攻・独文学専攻で、哲学科は哲学それから倫理学・心理学の各専攻、そしてさらに国文学科と社会学科も新設するという計画がうたわれています。これらを担う教授陣の多くは第一級の哲学研究者で、カント



研究者でもありまして、帝国大学の教授陣と比べ勝るとも劣らず、当時の法政大学と岩波書店、漱石と文学部との深い関係を窺わせています。

さて、そこで法政大学文学部の沿革について概略を振り返ってみたいと思います。

百年の中で、一九二二年の法文学部の創立以降、戦中戦後の混乱期を除きまして、一九四七年になってから法文学部が文学部として正式に独立いたします。その時は哲学科・国文学科・英文学科の三学科です。同じ時期に第二部（夜間）が設置されます。この時は国文学科・英文学科・地理歴史学科です。前年に通信教育部が設置されたことに伴って、四八年に国文学科を改称した日本文学科・史学科が設置されます。地理学科は五五年です。一九四九年に文学部昼夜二部制導入により、第一文学部は哲学科・日本文学科・英文学科、第二文学部は日本文学科・英文学科・史学科・地理学科の四学科で発足しました。五一年には新制大学院の人文科学研究科修士課程が設置されます。五二年になりますと、第二文学部に教育学科が増設されました。六一年になりました、史学科・地理学科が第一部に移行しております。二〇〇二年の四月に第二文学部が募集を停止しました。そして、二〇〇三年に心理学科が設置されました、以降この約二〇年間、現在の六学科体制が続いているという次第であります。

さて、そこで「法政学派」と哲学科の「黄金時代」について簡単に触れさせていただきます。まず、この時期、三木清が岩波茂雄の支援でヨーロッパ留学をし、戻ってきて新カント学派のハインリヒ・リッカートの下で学んだ成果とともに、新進気鋭のマルティン・ハイデガーの解釈学などを学び、そしてマルクス主義からの影響も受けてきました。帰国後、三木は一九二七年に教授として着任します。「人間学のマルクスの形態」をはじめとするマルクス主義との関係の論考を三本、『思想』に発表し、それをまとめた『唯物史観と現代の意識』という本が二八年に岩波書店から刊行されます。

三木は三〇年に治安維持法違反の疑いで検挙され、マルクス主義研究とも距離を取らざるを得なくなりますが、『歴史哲学』を岩波書店から三二年に出しています。その後、三木は本学に復職することができませんでしたので、ジャーナリズムで活躍しました。彼の卒業論文は「批判哲学と歴史哲学」というカント論です。最後まで彼はカントと哲学的対話と対決をした人間でありました。

三木は残念ながら敗戦後の九月二六日に獄死しました。そのため『構想力の論理』（岩波書店）は未完です。この書は特にカントの『判断力批判』における構想力および天才や技術の概念の影響を色濃く受けていまし

た。なお、彼の業績は、弟子で本学教授も務めた梶田啓三郎の編集により、初めは著作集、のち二次にわたる全集として刊行されています。キエルケゴール研究者の梶田啓三郎には、カント『純粹理性批判』の翻訳（共訳）もあります。

三木の辞職後、後任となった戸坂潤も一九三五年にマルクス主義的思想活動により検挙され、一九四五年の八月九日に獄死しています。戸坂には岩波版『カント著作集』収録の『自然哲学原理』（一九二八年）の翻訳があり、カント空間論に着眼して新たな解釈に取り組みました。その後、唯物論研究会の創設に関わり、マルクス主義に傾倒しましたが、一九三五年に刊行された『日本イデオロギー論』でもカントの常識や二律背反（アンチノミー）に着目して、カント哲学の重要概念を日常的な実践的概念として解釈し直すということで、社会的な影響力を発揮しようと試みました。

なお、三木、戸坂、和辻の蔵書は谷川徹三の尽力により、本学の図書館に寄贈されています。谷川は戦前から戦後まで哲学科教授を務め、戦前は哲学と文学との関係を重視して『日本人のこころ』『東洋と西洋』などの著作を岩波書店から刊行し、戦後は法政大学出版局から『宗教との対話』などの著作を刊行して平和運動に尽力し、法政大学総長も務めました。

さて、戦中・戦後の混乱時については、ほとんど触

れることはできませんので、戦後、特に一九六〇年代以降の哲学科の再建の道について報告させていただきます。戦後間もなく着任した瀬川行有——ペンネームは福田定良——ですが、『民衆と演芸』を岩波書店から一九五三年に、それから『落語としての哲学』を法政大学出版局から一九七三年に刊行し、生活者の視点から哲学の意義を説いています。

七〇年代になりまして教授陣の大幅な変更がありました。その間、様々な出来事がありまして、古代西洋古典学専攻で岩波版の『プラトン全集』の翻訳に携わった加来彰俊教授、フランス哲学の矢内原伊作教授、カント研究者の浜田義文教授が着任、浜田教授は『若きカントの思想形成』（一九六七年）や『カント倫理学の成立』（一九八二年）を勁草書房から刊行し、法政大学出版局からは『カント哲学の諸相』（一九九四年）を出されています。イギリスおよびドイツ哲学研究者の山崎正一教授は『カントの哲学』（東京大学出版会、一九五七年）、それから編著で『世界の思想家』シリーズの一冊として『カント』（平凡社、一九七七年）などにより、教育、研究に尽力されています。

そして一九七〇年代以降、八〇年代になりますと、私は八三年四月に山崎教授の後任として着任しまして、最初から岩波書店との深い関わりを持ちました。『哲学・思想事典』（一九九八年）で、牧野グループを結

成して編集協力者を務めました。また、私の発案で岩波版『カント全集』（全二三巻・別巻二）の編集・校閲・編著や『判断力批判』（八巻・一九九九年、九巻・二〇〇〇年）の個人訳と、『カントを読む——ポストモダンズム以降の批判哲学』（二〇〇三年）、『岩波人文書セレクション カントを読む』（二〇一四年）などを岩波書店から刊行しております。それ以外の出版社からは『カント事典』（弘文堂、一九九六年）や『カント純粹理性批判の研究』（法政大学出版局、一九八九年）、『東アジアのカント哲学』（法政大学出版局、二〇一五年）、『新・カント読本』（法政大学出版局、二〇一八年）を刊行しております。

一九七〇年代まで、日本の哲学界はマルクス主義・実存主義・分析哲学が競合する時代でありました。その後、イデオロギー的な傾向が退潮となりました。言語論的転回、解釈学的転回、宗教論的転回、自然主義的転回などにより、様々な学問との影響関係から哲学研究は伝統的な思考法の見直しを迫られました。

その後、新学部設置、旧教養部の改組などによりまして、哲学科に六名の先生方が参加されました。その中で私とほぼ同年の笠原賢介教授によるアドルノ『本来性という隠語』（未來社、一九九二年）個人訳や、単著の『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界』（未來社、二〇一七年）などがあります。山口誠一教授は『ヘー

ゲル哲学の根源』(法政大学出版局、一九八九年)とともにイエシユケ『ヘーゲルハンドブック』(知泉書館、二〇一六年)や『ヘーゲル全集』の新訳・共編の仕事があります。加来教授後任の奥田和夫教授は『西洋古典学研究』(岩波書店)にプラトン研究の論考が掲載されており、浜田教授後任の菅沢龍文教授にはキューン『カント伝』(春風社、二〇一七年)の共訳をはじめ、カント研究の業績がごさいます。

なお、現代の哲学研究は細分化が一方で進みますが、異分野間の連携の傾向も顕著になりました。哲学史研究や哲学者の個別研究以外に、横断的な研究や総合的な視点からの哲学・思想研究も進みます。先端科学の成果と連動した哲学・倫理学に関する研究——例えば脳神経倫理学です——も不可欠となりました。

さらに、近年の顕著な動向の一つとして人間の尊厳に関する研究が進み、カントやヘーゲルの伝統的枠組みを超えて、法哲学的・医学的観点からの研究とともに、その基礎を求め、動物から自然への尊厳概念が拡大されていきまして、東洋的な生命の尊厳との比較研究と統合も今求められています。とりわけ近年は、日本でも超高齢化社会の到来による生と死の尊厳や、ケアの倫理の見直し、出生主義と反出生主義との論争も生じ、存在と当為、自然と人間との伝統的対立図式、あるいは「人間とは何か」などの問いも、伝統的な発

想そのものが問い直されています。

特に、この数年のコロナ禍の影響の中で医療が政治化され、「トリアージ」や生命の尊厳などの問題が、エンハンスメント・医療・介護・政治・経済・年金制度などに関わる総合的な知の課題であることを浮き彫りにしました。例えば、人新世(アントロポセン)の哲学的課題なども連動しております。哲学の研究教育は、従来の枠組みを超えて人文・社会・自然科学の全体知を見据えて取り組むべき段階にきています。

今日、とりわけ哲学科は大きな世代交代の時期にきております。そこで、いち早くと言いまじょうか、先に退職しました私から、若い世代の人々そして今の時代の皆さんに対して四点ほどメッセージをお伝えしたいと思います。

一点目に、二〇一三年に『持続可能性の哲学』への道』(法政大学出版局)という拙著で提起しましたが、人文社会科学の持続可能性と社会の持続可能性との二重の意味での「持続可能性」を理論的・実践的に問うことが今、肝要であります。この問いは哲学における専門教育と教養教育との従来型の区分と教育システムの再検討を追っています。

二点目に「文系学問の不要論」に対抗して新たな知の地平を拓くため、学問の「持続可能性」を保証する基礎固めが必要になります。そのためには、主要な哲

学者の全集類などの基礎資料を刊行することが肝要です。私は、日本語版カント全集とともに、アカデミープラント全集を企画・編集したドイツの哲学者ヴィルヘルム・ディルタイの日本語版全集完結のために四半世紀を費やしておりますが、それはこうした狙いに基づいています。次世代の研究者の方々には、これらをも新たな研究教育活動に活用していただきたいと思っております。

三点目に今後の研究教育活動には、欧米との関係以外に東アジアの研究教育および教育活動のさらなる充実に努めていただきたいと思います。私は拙編著『東アジアのカント哲学』（法政大学出版局、二〇一五年）で中国・台湾・韓国・日本のカント研究者の共同研究と学問的連携の成果として、ほぼ同一内容の書物を日本語版・中国語版・韓国語版で刊行しました。

四点目に、退職後、このアイディアを拡大する方向で、京都の国際日本文化研究センターの共同研究会にも関わり、寄稿もし、『東アジアにおける哲学の生成と発展』（法政大学出版局、二〇二二年）という事典のような厚さの論文集を刊行いたしました。現在は、東北アジアから世界に向けた共同研究を進めています。次世代の研究者には、こうした企画をさらに発展させていただきたいと願っております。

結論です。「百年間のたからもの」というこの提題

の内実が、歴史的社会的に制約されていることは見た通りであります。同時に歴史を超えた普遍的な側面もあります。例えば、漢字文化圏の尊厳概念には西洋とは異なる価値観が潜んでいますし、『論語』思想と現代のサイバネティクスとの共通性も見られます。古代の中国思想と現代の西洋科学思想が重なる側面にも留意すべきでしょう。

特に、気候変動による急激な環境変化は、情報革命により一層複雑な課題を提起しています。また、知のグローバル化と価値観の多様化は、「多文化共生社会」に相応しい教育研究の制度改革を求めていると思います。

とりわけ、情報通信技術の急速な進展は、日常生活を大きく変えました。インターネットの普及によるリアリティとバーチャルリアリティとの融合は、ファクトとアナザファクトとの区別も不可視にさせ、コミュニケーションのあり方も変えました。AIに意識や感情があれば人間との違いはあるのか、AIにも人権が保障されるべきかなどの問いは、伝統的な哲学の問いと教育研究のあり方を変えつつあります。

私は、文学部そして哲学科が基礎的な古典研究から最先端の科学技術による教育研究に取り組み、総合的な知の共同体の営みを発展的に継承されるよう願っております。

最後に、混迷する国際社会と自文化中心的な愛国主義や民族主義を克服するような世界市民教育に向けて、新たな文学部、そして哲学科の新たな歩みに期待いたしました。私からの報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

奥田

牧野先生、ありがとうございました。

牧野先生からは文学部全体の回顧とともに哲学科及び哲学者としての積極的なご提言もいただいたと思います。

それでは続きまして、日本文学科の堀江先生からお話をいただきたいと思います。

よろしくお願いいたします。

○堀江拓充 多様化する文学や言語のあり方の探求

堀江

只今紹介されました、堀江でございます。

牧野さんの文学部における教育的・学問的な一つの総括を大変興味深く聞きました。わたしは少し碎けた形で教員（敬称略）やさまざまな出来事などを例示しながら、百年ないしは今後数十年先をふくめた見通しを提案できれば、と思っております。

大学令によって一九二二年に文学科、哲学科が創設

され、二年後の二四年に文学科の中に国文学主攻が設置され本学の教学上の専門領域を明確にしました。発足後に少しずつ文学科、哲学科の教学上の枠組みが明らかになってきたものと思われれます。

というのも、夏目漱石門下生で形成された教授陣は、哲学や外国語に秀でた人が多く、英文学、独文学、仏文学は成立しました。ただし、小説家や評論家がいいたとはいえ、純粹な国文学研究を専門とする教員は小山龍之輔しかいなかった。そのために、発足当初の国文学主攻には教員体制において専門家が不足していたといえます。

この教育・研究上の不備がある程度改善されてくるのが昭和三・一九二八年以降です。和田萬吉が兼任教授になり、同時に学生の履修体系も改定されます。三年に中国文学の長澤規矩也、翌年文学理論や古典から近代文学を専門とする近藤忠義が就任します。さらに三四年には近代文学の専門研究家・片岡良一が就任する運びとなります。それに西尾実、藤村作などの講師陣も加わり、『万葉集』『源氏物語』の古代文学から井原西鶴、松尾芭蕉、上田秋成などの近世文学、明治時代・大正時代の同時代文学まで、国文学主攻の教学体制が整備されてきました。戦前の一つのピークが昭和八・三三年前後から四、五年の間に形成されてきたといえましょう。



堀江拓充

同時に、後に少し詳しくのべますが三三年に『国文学誌要』という文学研究、情報発信を主とする雑誌が、近藤忠義などの教員、卒業生、熊谷孝などの大学院生を中心に発刊されます。この雑誌が、当時他主攻の教員などの『黒潮』『法政文学』などの雑誌とともに、国文学主攻の教学体制を脇から支える働きをしておりました。

ところが、三一年の満洲事変、三七年の日中事変などの戦争の拡大のために、三八年あたりから学生数減少によって文学部は経営危機に直面しました。経営合理化のために四〇年に文芸学科、文政学科に転換し、

この危機を乗り切ろうとしました。このやり方は苦肉の策ですが、三七年から軍人が学内に入り、三九年には軍事教練もはじまり、戦争の色が濃くなっておりまです。ついには本学の学生にも学徒動員がかかり、大学の教育・研究が正常な形で維持できなくなっています。

戦争の進展は、大学の人文系学部 of 教育体制でいえば、片岡良一は三九年には法政大学で教員として在職できなくなりました。左翼的な教員として排斥され、仙台（第二高等学校）に転籍することがきまっていたのですが、妨害にあい行けなくなりました。後に北京の高等師範に行きますが、ともかく、本学の教学のバックボーンである「自由主義」「ヒューマニズム」、「学生の教育の自由」や教育権・自治権の擁護などが侵害されてしまいました。また、例えばわたしの恩師である小田切秀雄は四一年に本学を卒業し、四二年に講師に就任しました。しかし、左翼思想の信奉者だとしてしばらく後に逮捕され、近藤忠義なども同じように逮捕されてしまいます。戦争の酷いありようが示されていたのです。

ようやく敗戦後になって、四六年の一二月頃から法文学部を文学部に、哲学科と国文学科と英文学科の三学科構成で独立する気運が高まります。そして、四七年三月学校教育法公布、大学令が廃止されることに

よって本学も法文学部が廃止されます。法学部、文学部、経済学部 of 三学部として改編されるとともに、三学科が独立します。それとともに、夜間に第二文学部——国文学科、英文学科、地理歴史学科——が設置されます。国文学科が、日本文学科に改名されるのは、翌年四八年で、その年の一〇月に通信教育課程を設置することになります。現在に近い学科構成です。

この動きの中で、国文学科は日本文学関係の近藤忠義、片岡良一、言語学や広い文学領域をカバーする西尾実、小田切秀雄などが中心になります。もう少し後になりますと教授、助教授、講師陣などがさらに充実してきました。古代の西郷信綱、永積安明、近世の重友毅、廣末保、言語学の岡本千万太郎、児童文学の古田擴、古代の益田勝実、言語学、沖縄文学の外間守善、中世の杉本圭三郎、表章、近代の小原元、西田勝など優れた教授陣が活躍することになります。

戦前の三三年前後数年間に充実した教学体制を実現できたとのべましたが、敗戦後の四〇年代後半から五〇年、六〇年代にかけては、それを上回る充実した教学体制を形成し有能な卒業生を世に送ることができたといえます。

詳しくのべることはできませんが、日本文学科ときわめて近い研究領域で、五二年四月設置の能楽研究所、七二年七月設置の沖縄文化研究所があり、多角的な協

力関係が成立しています。これらの研究所は独自で斬新な研究領域において本学・本学部の研究・教育に大きな貢献をすることになりました。

その後徐々に世代交代して近・現代の堀江拓充たちの世代になりますが、言語学の佐川誠義、中国文学の安藤信廣から近世の松田修、近・現代の勝又浩、古代の天野紀代子、近世の日暮聖、能楽の西野春雄、中国文学の黒田真美子などが続きます。そして、九〇年代に学科を文学、言語学、文芸の三コース制に移行したことで小説家の笠原淳などが加わり、さらに第一教養部、第二教養部が改組転換され、教員が学部にも所属することで現在の教授陣が形成される運びとなっています。現在の教授陣は、文学コースが古代の坂本勝、加藤昌嘉、中世の小秋元段、伊海孝充、阿部真弓、音楽史のステイヴン・ネルソン、近世の小林ふみ子、近・現代の藤村耕治、中丸宣明、佐藤未央子、中国文学の遠藤星希、言語コースが間宮厚司、尾谷昌則、王安、文芸コースが田中和生、中沢けいなどです。鋭意教学に集中し着実に成果を上げています。

断わるまでもありませんが、文学・文芸は不易流行であります。本質的に変わらない面と、時代とともに変化する側面があり、それに携わる者はつねに何が研究され、どのような領域が探求されているか、学生や時代などは何を要求しているのか、つねに考察しなが

に進める必要があります。たえざる文学の本質の考究が必要です。

例えば、先程牧野さんが総合人文学部という学部構想を提起したとおっしゃいましたが、誰にも賛同をえられなかったと私は記憶しています。当時文学部という学部名称が全国で転換されていましたが、相当国際的・国内的な大きな視点からきびしく検討され続けなければならぬことがあきらかであります。つまり、学部名称をふくめて、文学部全体の再構想をしなければならぬでしょう。短期的な五、六年先ではないと思いますが、中期的な二〇年前後先に起こりうるかもしれません。

図式的、概略的に戦前の一時期と敗戦後の一時期に日本文学科の充実期が訪れたといいましたが、百年の歴史的单位で詳しく跡をたどりますと、大変重要な時代的な、そして教育学問上の基本的にして本質的な問題が浮かびあがってきます。つまり、大学存続ばかりでなく、教育・学問の維持のために重要な要素がいくつかあります。

まず重要な一つは戦争の時代には文化的な事業、諸種の自由などが阻害され、もとより学問・教育などは酷いかたちで歪められてしまっています。とくに人文系の教育・学問は非実用的なものとして、弾圧、抑圧されてしまっています。ですから、戦争に対する徹底的な問題

の検討とあり方を根本から考えておかねばならない。

第二点は、七〇年前後、法政大学の場合は他大学より早かったのですが、全国の大学に紛争の嵐が襲ってきました。大学が閉鎖されてしまい、何年間も対面での授業ができなくなりました。試験もレポート提出となっていました。紛争の激化により多くの側面で停滯と破壊が生じます。ですから、学生諸君の学業を中心としたさまざまな要求と、学生が教育を受ける権利、学問の自由、表現の自由などとの重要な関係を真剣に考えておかねばならないことが明確です。学生紛争が起こることがないような教学システム、大学運営などを構築しておかねばならないでしょう。

第三点は一九二二年に大学令により発足した法文学部は、その翌年に関東大震災に逢着します。大学も学生も相当な打撃を受けた。二〇一一年の東日本大震災の時もそうです。このような自然災害と現在も続いているこのたびのCOVID-19のような世界的なパンデミックなどに対しても大学・学部・学科は事前に対処できる体制を整えておかねばなりません。

直接・間接に影響をうける事例を一つあげておきます。国文学主攻は一九三二年七月に国文学会を組織して会報を発行しました。三年の十二月に『法政大学国文学誌要』と雑誌の形にし、三四年一〇月から『国文学誌要』に改題し、情報誌と研究誌の両面を兼ねる

ことにしました。この雑誌で、教員・学生が一体となり文学の方法論、学問的な研究方法などをおし進め、「歴史・社会的な方法の確立」を図ります。戦前の文献学、書誌学、鑑賞主義などを揚棄する方法を学界に提示しました。日本文学作品・作家研究の研究方法に一つの転機をもたらしたといえます。近藤忠義や熊谷孝などが鋭意執筆しています。もとよりこの方法が現在でも有効であるか否かは、簡単にいえませんが、わたし自身は十分ではないと考えていますが、ここでは措きます。

この雑誌は三六年一月まで発刊されましたが、その翌年には発行できなくなりました。いうまでもなく、戦争の激化に影響され、戦中はずっと休刊となっております。敗戦後の復刊第一号は少し遅れて五七年一二月で『日本文学誌要』と改題して七〇年三月の二二号まで続き、その後また休刊となります。これは学内紛争によるものです。七四年九月に臨時号を発行し、八〇年に再々刊がでて、現在まで続いております。つまり、七〇年前後の学内紛争の影響もはかりしれないものがあります。

わたしが自然災害やウイルスなどによるパンデミックばかりでなく、戦争や学生紛争なども重大な問題であるといいましたのも、学部・学科などの研究誌の発行などにとっても、非常に大きな影響を及ぼしている

ということをいいたからにはかなりません。一つの重要な教訓として銘記しておくべきでしょう。

ともあれ、日本文学科が現在も法政大学の一大学院・一学部・一学科の教育・研究部門の一端を堅実に維持しているのは、百年の歴史の中で文学の本質を探究し続け、同時に時代の動向と根本的なあり方を常に省察し続けたことにその主因はあると考えております。意をつくしません、以上で終わります。

奥田 堀江先生、どうもありがとうございました。

国文学科から日本文学科への移行を踏まえて、いろいろと将来に対する提言も含めてお話ししていただきたいと思います。

続きまして、英文学科の結城先生お願いいたします。

○結城英雄 文学部と英文学科の発展を祈りつつ

結城 英文学科の結城英雄と申します。よろしくお願いいたします。

今、お二人の先生の包括的な、かつ情熱的なお話を受けた後では、ハムレットではございませんけれど、「あとは沈黙」という形にさせてほしいところです。ですが、ほんの少しだけ、ささやかな想い出をお話させていただきますことにいたします。

私のお話したいことは二点ございます。一点は文学部百周年記念と個人的な接点についてです。もう一点は英文学科にまつわる記憶に残ることや、組織についてでございます。

第一点目ですが、今年の六月に、私の所属する学会、日本ジェイムズ・ジョイス協会で、「日本ジェイムズ・ジョイス協会設立と『ユリシイズ』受容」という基調講演をいたしました。『ユリシイズ』はアイルランド出身の小説家、ジェイムズ・ジョイスの作品で一九二二年に刊行されました。学会はその百周年を祝うものでございました。

一九二二年というのは、もちろん法政大学文学部設立の年でもございます。これは偶然の一致というように思えますけれども、そうではないと思っております。『法政大学百年史』を紐解きますと、百年前のこと、法政大学の研究者が『ユリシイズ』の翻訳に取り組み、岩波文庫より一九三二年に刊行したと記されております。

『ユリシイズ』はバリで出版され、その直後に英語圏で発禁処分になりました。処分の取消は一九三三年のことです。この文学が革命的であると評価されたためでございます。でも、翻訳はその前年の一九三二年であるということを考えますと、大変な偉業であり、まさしく驚異ですし、革命的なお仕事であったと思います。

す。世界の潮流に即する、当時の法政大学の研究者の気概がすぐく伝わってきます。

その翻訳に携わったお一人の寄贈図書、これが市ヶ谷から多摩の図書館に移されております。その図書を眺めるだけで、当時の研究者たちの学識の深さ、豊かさを知ることができます。タイムスリップして、励ましの声が聞こえるようでした。

私は、一九九四年から二〇一九年まで在職しました。二五年間でございます。その在職期間の課題の一つは、その百年前の研究者たちとの距離を測定することにあつたような気がいたします。大変なところもございましたけれども、楽しく、そして弾んだ日々を過ごさせていただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。

続いて第二点のお話として、英文学科にまつわる記憶に残るイベント、そして組織について述べさせていただきます。大所高所からのビジョンは、今、持ち合わせてございません。回顧的なお話でご容赦ください。現在といえますのは過去の未来でございます。また、現在というのは未来の過去でございます。ですから、私の個人的な法政大学での短期間の想い出も、想像力をめぐらせていただき、法政大学文学部百周年のストーリーの隅にでも、収めていただければ幸いです。それで、先ほど述べました在職中の記憶に残ること



結城英雄

として、二つのイベントについてお話させていただきました。その一つはS A（スタディーアブロード）の推進でございました。国際交流課という機関によって、海外で学ぶ機会が学生に与えられておりますけれども、英文学科独自でもまた、多くの学生に海外でも学ぶ機会を与えたいという思いで、最初はアイルランド共和国、それからアメリカの大学と協定して推進することになりました。

英文学科の特徴というのは、人によって考え方が違うかもしれませんが、英語をベースにしていると私は考えております。それでその上に立って文学とか、

言語学といった、専門研究を進めることだろうと思います。同時に、留学によって外国の文化を見聞し、視野を広げてもらいたいという願いがございました。

こと文化ということで申し上げますと、先ほど『ユリシイズ』の翻訳のお話をしましたが、当時の先生方はたくさんさんの文献を渉猟して、その内容をつかもうとしたのだと思います。が、作品に登場する人物と同席していれば、わかるようなことがたくさんあるのです。今からすれば、そんなことを苦勞しながら研究してきたのだらうなと、思われます。実は、そういった同席していればわかるようなことに関心を抱いてS Aに参加し、じかにその問題について確認した学生がございました。感涙にむせんだ報告は推してしかるべきです。

もう一つのイベントは、どの学科でもおこなわれている、ゼミと合宿という活動でございます。ゼミでの学びというのは、自分の声を持つということ、そしてそれを発信するということでございます。教員としてはその成長を見守ること、これが何とも嬉しいことでございます。とりわけ合宿ということでは、懐かしい思い出に溢れ、毎年が楽しいことではございました。

そして卒業したOB・OGたちが、電車から法政大学が見えるらしく、職場の帰りにちょこっと立ち寄って、研究室を覗いてくれたりしました。再会は楽しいことではございました。また私が驚いたのは、大学を去っ

た三月三一日に帰宅しますと、家に花が届けられていたことでした。そんなことをされるようなことをした覚えはないのですけれども、嬉しいことでございました。

ゼミに関しては、もう一つ基礎ゼミについて申し上げます。新人生は輝いていて、新鮮で、友達との交流を培っておりました。それを見たとき私は、この基礎ゼミにおいても合宿をおこなうことができなかったら、という思いを抱き、いまだに実現できなかったことを残念に思っています。

最後に、英文学科の組織について述べさせていただきます。英文学科というのは、多様な分野の研究者が集まりでございますけれど、概して豪放磊落な先生が多くて、同僚として楽しい交流をさせていただきましたこと、本当に感謝しています。そして親しくしていただきながら、お亡くなりになった先生もおられ、辛いことでした。その先生のご冥福をお祈りしております。

文学部という組織も和やかで、非常に刺激的でございました。ご著書をご恵贈いただき、なかなか手がつけられないところがございましたけれども、なんとか読み込んで、啓発されるところが多かったです。これは非常にありがたいことで、組織としてのまとまりを改めて感じたことも再三でした。英文学科とともに文

学部の発展を願ってやみません。

以上、私からの報告でございます。どうもありがとうございます。ありがとうございました。

奥田

結城先生、どうもありがとうございました。

『ユリシーズ』刊行以来百年というお話から始めまして、学生の成長、文学部教員のまとまりということについて、貴重なお話をありがとうございます。

続きまして、史学科の山名先生お願いいたします。

○山名弘史 史学科の歩み管見

山名

史学科の山名弘史と申します。

これまでのお三方の先生方のお話のようにきちんとした話がなかなかできません。

文学部百年といっても、史学科として発足したのは戦後ですね。一九四七年から名前が出てくるわけでして、五〇数年ということです。しかも、私はその中の一九八三年から二〇一三年までの三〇年間に在籍しただけでありまして、本当に百年のなかで、途中乗車して途中下車した、とそういうような感じですから、見聞いたことは非常に限られているわけです。

そのことを前提に、私の経験したことを少しお話ししたいと思います。

史学科は一九四七年に文学部の第二部（夜間部ですが）として、地理歴史学科というのが設けられまして、その中の歴史学専攻ということになります。

その二年後、第二文学部というふうに学制が改まりまして、これも第二というのがつくわけですね。そして、史学科と地理学科とがこの際に分離しております。地理歴史学科から出発したというのは、学問の分化がまだ十分でなかったということもあるでしょう。それから、先生の数も足りないということもあつたのでしようけれども、私は後から考えて、歴史と地理が一緒になっていたというのは、何か一つ意味があつたのではないかと思っております。

そして、その文学部第二部あるいは第二文学部の発足の頃には、後から考えてみると本当にもつたないくらいに錚々たる方々が先生となつておられます。関野雄先生とか、周藤吉之先生とか、和田久徳先生とか、岩生成一先生とか、私は東洋史ですので、存じ上げている範囲で申し上げましたけれども、いずれも一つの分野を拓いた、のちのち大家と言われるような方々でした。そういう方々をお招きして史学科が始まったというふう感じております。その後、次々と新しい先生方がおいでになり、ここにはいちいちお名前を挙げませんけれども、それぞれの分野で活躍された先生方がおられました。

それで、八〇年代のことを私は本当に駆け出しの教員として経験したわけですが、法政に来て感じたことは、やはり七〇年安保の名残というものが非常にまだありまして、それが私の八三年の就任以後、まだ何年もその跡を引いておりました。先ほどお話をした先生方が、そういうことに非常に苦労をなさっていたのを脇で見ておりました。それがまあ法政に來た時の印象ですね。

そして、私が最初に入つた研究室というのは第一校舎という、今は無くなった建物で、これも由緒ある建物でありましたが、そのすぐ脇が学生会館であつて、そこで時々大騒ぎが起きるといふ、そういう中で過しておりました。

史学科の教員としての役割は果たしておりますけれども、同時に文学部全体あるいは法政大学全体を通じてお付き合いが生じたのは、入学試験の作成や採点などの場でした。大広間で色々な分野の先生方とお話する機会がありまして、これも私にとっては貴重な経験でありました。

その後、第一教養部が解体というか無くなりまして、そこに属しておられた三人の先生方が史学科に合流されました。それも、私にとっては新しい経験でした。私の初任時、西洋史にはロシア史の倉持俊一先生がおられたわけですが、その後ギリシャ・ローマ史



山名弘史

を専門とするお二人の先生（中村純先生・後藤篤子先生）が史学科に属するようになりました。また、私と割合近い時代を専門としておられた栃木利夫先生も一緒にいるということで、一〇人ほどの教員の中で、領域が近い教員がいるという変わった構成の学科となったわけですね。それもだんだん今では変わってきておりますね。

三〇年いる間に、いろいろと研究の傾向が変わる、特に学生の好みが変わるということが見られました。ドラマで取り上げられたり、あるいは紛争があったりしますと、関わりのある領域に学生の関心が集まるな

ど、そういうことも経験しました。そうは言っても、学生全体の雰囲気は割合おとなしい感じを私は受けておりました。「俺が俺が」といったことがあまり強くない、割合穏やかな気質の学生が多かったように感じております。

その他に、通信教育、あるいは第二部であった時代も含めて、また大学院も含めて、職業の傍ら勉強を続けているという方々が、史学科の歴史の中にはおられて、そういう方々が非常に努力をされて、業績を上げられているというのを時々拝見しました。そういうのに比べると、現在の、勉強だけに専念できる状況を持っている学生がもう少し頑張ってほしいと思ったこともありました。最近では学生諸君の経済状況も非常に困難を伴っていると伺っておりますけれども、まだまだ頑張れるのではないかとというふうに思います。

そういう中で史学科として、例えばタクラマカン沙漠の实地踏査などというのを地理学科と協力しておこなったり、あるいは日本史の分野ですと各地に赴いて生の資料を発掘するというようなことをおこなう、あるいはその報告書を作る、また考古学的な発掘を手がけるといふようなことがあって、なかなか盛んであるなと私は横目に見ておりました。

そういうことは史学科の一つの柱である実証史学と言えますか、これの一つの表われであるというふう

思っております。実証史学というのは、だいたい史学の主流となっていると言えは言えるわけですね。ですから、法政大学の史学科に限定することではないのですけれども、少なくともそういう流れの中に史学科がある、と。

そして、この実証史学というものの一つの特徴は、やはり空理空論に走らない、地に足のついた研究を大事にしていることだと、そういうふうに乗っかっております。これは今後とも史学科の伝統の中で受け継いでいただきたいことです。

あれやこれや話すとキリがないのですが、最後にお話しておきたいのは、史学科が、日本史・東洋史・西洋史を超えてと言いますか、そういうことに限らず、とらわれず、国際化ということを大いに進めるようになってきたというふうに、私は感じているということです。その国際化というのは、これは研究が要求することでもあります。けれども、同時に人々の交流、留学生なり教員の海外研究なりというものがありませんが、そういうことをも含めて国際化というのがこれから進むであろう、と。そのための色々な努力がなされている、と。そういう中で、海外に友人を見つける、友人を作るということがある。これは非常に大事なことでして、例えば、あそここの国のあの地域には私の親しい人がいる、そういうところに爆弾なんか落とせな

いっていう気持ちになるわけですね。そういう国際化という一面が大事であるうと思っております。

最後になりますが、私は教員である間に色々な役割をそれなりに果たしたのですけれども、実はそのためには、このような場所でのうのはちよつと場違いかもしれないませんが、職員の方々の支えというものが非常に大きかったと思っております。大学というのは、教員と学生だけがいれば成り立つというものではなくて、その支えとして職員の働きというのが非常に大きいので、これからぜひお願いをしたい。また、教員も学生もそういう方々への感謝の気持ちがこれから大いに続くように願っております。

まとめませんが、以上で私の話といたします。

奥田

山名先生、どうもありがとうございました。

今のお話の中でもタクラマカン沙漠の踏査や、そして今では当たり前ですけれども古文書の調査、それから考古学の発掘など、史学科は非常に目覚ましい活動をされていると思います。

そして最後に、教員から縁の下の力持ちである職員の方さんへの感謝という、非常に大切なメッセージもありがとうございました。

それでは、佐藤先生、よろしく願います

○佐藤典人「地理学」と法政大学文学部地理学科

佐藤 ただいまご紹介にあずかりました、前・地理学科教

員であった佐藤典人です。

パワーポイントを使いながら話を進めたいと思います。私はこのシンポジウムの対象者として、本学関係者や在校生、卒業生、それに加えて明日に法政大学の門を潜ると期待される入学志望者などを念頭に入れて話したいと思います。ただし、勘違いや記憶違いがあるかもしれませんので、その辺はご容赦願います。



佐藤典人

さて、ここに私が掲げた標題は前後逆ではないのかとお感じの方がいるかもしれません。つまり倒置というご指摘です。でも私なりの意図のもとにかように記しました。これから私は、次の(1)～(3)の三つの柱建て話を進めたいと思います。

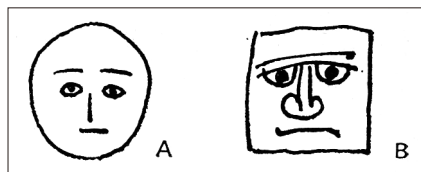
(1) 地理「学」とは？

巷間、「チリも積もればヤマとなる」などと言われますけれども、この「チリ」と「地理」は当然ながら違います。地理学科の学生が就職の面談に行きますと、間々「地理学科生は何を学んでいるの？」と面接者に問われるようです。これは面談する側に、中学校、ないし高等学校の「社会科・地理」の印象が払拭されていない証ではないかと私は受容しています。つまり地名を覚えるとか、何処で何がどれだけ収穫されるのかなど、まさに地名・物産的な地理のイメージが強くて、どうしても暗記科目の印象から脱却できないままの面接者から発せられる質問ではないでしょうか？ ただし、二〇二二年度から高等学校で「地理総合」が必修化されましたので履修の仕方が変わってきます。これが「地学基礎」とともに起爆剤になる事を切望しているのですか？

さて「地理」を表わす英語の【geo + graphy】は、この英字の通り、土地に関して記述するというのが元々の意味であります。けれども、これだと平滑的・

静態的・受動的な記載になりがちです。そのため「なぜ、どうして」という率直な疑問などに、客観的・理論的に説明できるかどうか甚だ心もたなくなります。その点から「科学」であると口にするにはおこがましいかも知れません。ところが欧米で「地理学を学んでいます」と話すと一目置かれまして、「とても重要な学問を学んでいますね」というように返答されます。即ち「地理学とは地表近傍で生起する時間・空間的な分布現象を対象に据え、科学的に追究する学問」であって、決して「地名・物産地理」というように揶揄されるような内容ではありません。曲がりなりにも「科学」の一角を占める「地理学」では、「なぜ、どうして」と言う問いかけに対して客観的・理論的に説述できなければなりません。

皆さんの周囲にいらつしやる小さいお子さんが「あなたのお父さんやお母さんの顔を描いてください」と言われると、下の図（岡山俊雄…一九七六による）の左にあるようなAの顔を恐らく書くでしょう。周りの大人は「そうですね」と否定はしないもののニコニコと笑いつつ黙認するでしょう。ところが、その子が幼

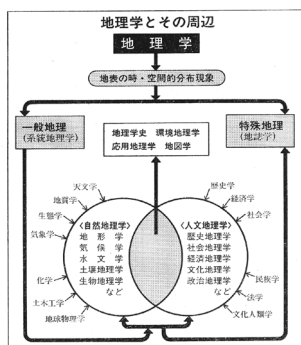


稚園から段々と年齢が進んで小学校に入る手前ぐらいになりますと、右のBのような絵を描くようになります。左側のAと右側のBで何が違うかと言えばAは人間の顔だったら遍く備わっている部位を描いていますから間違いはありません。けれどもどんな顔形で、どういう特徴のある顔つきなのか分かりません。それに対してBになりますと、非常に四角張った顔で目がギョロツとして、まるで仁王様みたいな顔だと、徐々にその対象の輪郭・容貌が第三者にも分かってきます。このような目の付け方は、実は時間・空間的な分布現象を研究の対象とする「地理学」の見方や着眼の仕方に類似しています。つまり左側のAは共通・普遍的な事柄に着目し、右側のそれは個性・特異性に注目しています。このどちらとも間違いいとは言えません。

実は地理学ではこの左側の方の普通名詞的な意味合いが強い分野を「一般地理学」と呼ぶのに対して、右側の個性・特異性の部分に目をつけるのは「地誌学」と申します。それゆえ、一つの学問の中にこのように二つの見方・分野が並立しており、これが「地理学の二元性：dualism of geography」と言われます。従ってこの実相がカリキュラムや教員配置に反映されるのが真つ当でありましょう。

では、両者はどのような関係なのでしょうか？ 実は個性・特異性を掌握するには尺度となる標準的・平

均的な一般性が分らないと比較できません。その点



理学を、右側に特殊地理（地誌学）を示しています。この図のように一般地理学は自然地理と人文地理に大別され、そこに地誌学が重層するような形で描画しています。

冒頭、標題を倒置させたのは、このような地理学の特質に対して法政大学文学部地理学科は如何に対応したのかという構図ゆえであります。結果として芳しいことに、特定分野に偏在せず均衡を維持した点に大きな意義を有しています。この図に示したように、関連する周辺諸科学を加味すれば、地理学の対象はとも間口が広いです。そのため学問分野の類型化でも「複合領域」の範疇かと類推されますし、今流の言葉では「文・理融合」、ないしは「学際的な科学」、「総合的な科学」と称されるでしょう。これこそ「地理学」が西

から、両方とも相互に密接な関係にあります。上の図（佐藤典人・一九八六による）は、私が某大学受験雑誌に地理学の内容を紹介した模式図であります。この図では左側に一般地

欧で、別名「諸科学の母」と言及される所以であり、まさに万学の根幹に位置する学問だと容認される理由でもあります。

今日の地球環境などはこのような幅広いスタンス・構えで応対しなければ、なかなか解決の難しい問題を内包しています。我々人間の活動や生活の舞台であるこの地球において、人類誕生以降それを支えて来たのはこの惑星・地球のシステムであるゆえ、地球科学や地理学が基礎に置かれてしかるべきでしょう。その上に物理や化学、歴史や政治・経済などの構築が順当でしょう。しかし、残念ながら中学校や高等学校において、これまでそのような学習体系が必ずしも明確に確立されておられません。つまり、私としては学ぶべき順序が逆ではないかと思えます。「木を見て森を見ず」の戒めのような危うい状況さえ想定されます。この観点から、前述した「地理総合」の必修化でこれがどのように変容するのか、強い眼差しを携えて注視したいと思えます。

(2)法政大学文学部地理学科の歩んできた道

当地理学科は、一九三七年四月に開設された高等師範部の地理・歴史科に淵源があります。その師範部長・野口保市郎は奇しくも歴史地理学（人文地理学分野）の大家でありました。そこで野口は地理学科の構成等を時の陸軍士官学校教員の秋岡武次郎（地図学分野）

後に本学に赴任。当時は兼任・兼務が可能）に依頼しました。学則変更に伴う科目の一覧表などを手元で対照しますと、この秋岡は東大の多田文男（自然地理学分野。後に本学に赴任）とともに、高等師範部・地理科の科目や教員配置を検討しました。

加えて第一期生は、教員免許の課程認可を得るために文部省の検定試験を受験する必要に迫られ、大変な重荷を背負っていました。この一期生一五名全員を受験・合格させねばならないという責務のもと、これを担当した井上修次と岡山俊雄の両先生は講義を終えてからも、一五名を自宅に呼んで刻苦勉強を重ね、どうにか無事に一同揃って検定試験に合格し、地理学科に「社会科」の教員免許が付与されるに至りました。

その後、学制改革で旧制大学から新制大学に移り、先程まで他の学科の先生方が述べられたように、一九四七年四月に地理・歴史学科を二部に設けました。この時、新たに加わったのが、気候学の浅井辰郎と陸水・海洋学の田中館秀三（翌年着任）であります。さらに一九四九年四月に第二部地理学科と第二部史学科に分かれました。歩みを回顧すると、ここが大きな岐路でありました。つまり自然科学的な色合いを包摂する「地理学」が文学部内で単独の学科を創設し、かつカリキュラム上で自然地理・人文地理の双方の均衡を考慮しつつ配した点が重要な一面であります。

その後、「法政大学地理学会」が一九五〇年に設立し、通信教育部にも地理学科が開設（一九五三年）され、同年に大学院も設置された経緯などは、先刻来、他の学科の諸先生方が言及されたことであります。わけても通信教育部に地理学科を設けているのは法政大学のみで、その特質を発揮してこれまで有能な人材を輩出してきました。

一九六一年度から地理学科は昼の第一部文学部に移行します。この頃から専任教員七名で学科運営を賄ってきました。地理学科はこの昼間部への移行を契機とし、多田（学科主任）らは足掛け三年を要して、文部省へ「理科」教員資格の認可申請を折衝し続け、一九六三年度にその取得を実現させました。これに伴って、学科で実験系科目の充実を図ったのは当然であります。今にして想起すれば、昼間部移行のこの時機を逃さず認可申請を敢行した先達の慧眼と力量の凄さに敬服せざるを得ません。因みに、他私大で同様に文学部地理学科を構えている大学ながら、「理科」の教員免許取得が付与されている大学は有りません。今後、この利点・強みをさらにどう実効的に活かすかは、これからの学科教員の手腕の見せ所と期待されます。

また学術的に特筆すべきは一九七〇年と一九七二年の「ユーゴスラヴィアの局地風『ボラ』の海外学術調査」であります。これは私の恩師の一人でもあった吉

野正敏が主導し、多大な成果をあげられました。本学の『文学部紀要』にも特集を二回（一七号と一九号）組んでおります。この時の「ユーゴ研究所」の延長上に、現在のボアソナード・タワー（二二階）に在る「地理学文献センター」が名称を変えつつも位置付けられます。かくてこの「地理学文献センター」は、気候学の学術調査に端を発している関係から、それまでの「気候談話会」と併合して、微力ながら『Japanese Progress in Climatology』なる欧文の二次刊行物（科研費の出版助成を受けて）を内外に発信し、その寄贈交換文献をこのセンターに受け入れて教育・研究に供与してきました。

二〇〇〇年にボアソナード・タワーが建てられ、大学院の修士課程がこの時期に昼間に移りまして二年制になりました。さらに教養部の改組に伴って三名の先生方が移籍して学科に加わり、計一〇名の体制になりました。この前後に当時の世相を反映して、国立大学の独法化が図られる傍ら、「地域、国際、環境」という語句が時流的な鍵となりました。本学の地理学科でどう対処するかが議論の俎上に載ったものの、我が地理学科は、結論として「地理学」科の看板掲揚の継続を果断に下しました。だが同時に「地理学」への動機付けが、高校カリキュラムとの統一性から不透明であり、これが一つの壁でもありました。かくして、こ

の点で本学の付属高校との連携を模索するべきでしょう。これが大まかな今日までの法政大学文学部地理学科の足跡です。

(3) 近未来に予想される思慮事項

既述した地理学科設置の経緯に関する適正な理解と併せて、今後、文学部を構成する一つの学科として何を思惟してしかるべきか、私見ながら申し述べさせて頂きます。

◆本学の地理学科は「地理学」の学問的な特性を礎にした不偏なカリキュラムとともにバランスの取れた教員配置の組織になっています。この実績を学科教員はしっかり頭に刻んで欲しいものです。先述したように、文学部地理学科ながら単独で独自の学科開設に至らない大学もあります。ましてや「理科」の教員免許も取得可能という点は他の私立大学の文学部地理学科には有りません。極めて貴重なこの点に関して、学内外へ発信を強化することが不可欠でしょう。と言うのも、学科に入学した学生から「物理や化学はちょっと尻込みしてしまうけれど、同じ理系ながら、地球科学や生物には応分の興味があった」との声をよく耳にするからです。よって正に私の言う「1.5」、つまり、文系と理系の重複分野に関心を有している学生を受け入れる器が必要だと痛感します。この存在意義を真摯に熟考するべきでしょう。しかるに、時の風潮に流され

て、短慮・拙速的に判断するのは、得てして的確性・妥当性を欠く場合があります。ゆえに透徹した先見性を学科教員に補備して欲しいものと希求します。

◆近年、「少子化」と文科省の導入した「ゆとりある教育」の世代が、大学に入学しているかと思えます。理由は不明確ながら結果的に「指示待ち人間」、または自力飛行不能な「グライダー人間」とちやかされる学生が増えていると仄聞しています。そこでは教員側が不断の熱意を堅持することが今まで以上に問われ、教育技術の工夫・向上が急務となるでしょう。加えて、先に触れた「地名・物産地理」に対して、現場の高校教員は「大学入試でその類いが出題されるので止むを得ない」と反駁します。ならば入試の作問で短答・即答形式や暗記偏重の作問は回避するべきでしょう。入試作題は外向けの情報開示なので、定例事業として専門化し全力を傾注するべきです。

◆大学修了の関門である卒業論文の必修化が、果たして「ゆとりある教育」世代の学生にとって有意義なのか、最近の状況から危ぶまれます。大学院教育との連携を視野に入れ、単位数を勘案した選択制導入に一考の余地があるかと思えます。なお、釈迦に説法ですが、教育指導の場では、教員も学生も適度の競争・緊張・刺激が必要でしょう。勿論、この度が過ぎるとストレスになりますが、それらの欠如はお互いに弛

緩した態様を招きます。これは決して相互に望ましい状態を招来しません。人と人との相対は、ある意味で常に真剣勝負なのですから……。

◆大学という高等教育機関の本質は何なのか？ という点への理解を構成教員が共有せねばならないでしょう。単に「研究」のみで事足りる訳ではありません。要は「教育」が本務で、学生の「悟性」を磨くのが要諦です。研究に専念したいならば「〇×研究所」に属するべきゆえ、高等教育機関の大学では学生教育が使命なのです。

◆将来的に大学教員には「教育」と「研究」の分業化を図ることが要請されるかと私は予見します。今後、少子化に伴う学生の質がどのように変遷するか不明ながら、場合によってはこれまでに以上に教育に力を注がねばならないでしょう。そうなりますと、大学で「二足の草鞋を履く」ことに忙殺されかねません。その傍らで、それを口実に言い訳になる余地さえ醸成されます。このような中途半端は大学、教員の双方にとって好ましい状況とは言えません。そのため一定期間、バーター的に教育と研究の各々に専従させ、専念させる期間を設ける制度が要望されるのではないのでしょうか？

◆少子化に絡んで学生の多様化がより一層、促進されねばならないでしょう。昨今、東南アジア等から学生として学びに来日します。それに対し、外部任せの

日本語教育ではなくて、大学自前で日本語教育と専門教育を段階的に遂行する有機的な仕組みの確立が求められるかと愚考します。その一方で、世の動向に関連し、二十歳前後に入学者を特定せず、誰でも常時、自由により学ぶる時勢が強まり、大学間の単位互換性もさらに見直され、最終の卒業時に一定の検証を課す方式に変質するかも知れません。

◆学問体系が従来通りで十分なのか否かとともに、これが文学部に対してどう波及するのも思案事項でしょう。学問分野によっては単一学問で処しきれず、非常に錯綜とした社会的事象に因應されないために、大学は、学部、ないし学科の再編成・再設計という変革に迫られるかも知れません。実は二〇数年前に全学的な教学改革の場で私は他に先駆けて「地球学部」の新設を唱えたものの、一笑に付されました。だがつい最近、某大学でこの「地球学部」が創設されました。このように学部や学科の改組などに着手せざるを得ない世情との対峙は間もないかと愚見として申し上げます。

ともあれ、法政大学文学部地理学科は理系分野と文系分野をバランスよく保持する伝統のもとに、カリキュラムと教員をそれに即応して配備している点に特長があります。これへの賢慮を失することなく固持するべきかと思えます。何事においても「過ぎたるは猶

及ばざるが如し」ですので、この辺のバランスの継続に努めて頂きたいと熱望して、私の拙い話を終わりにします。ご清聴、ありがとうございました。

奥田

佐藤先生、ありがとうございました。

地理学科が理科系の要素が非常に強いというのは当然のことで、前からいろいろなところで聞いているのですけれども、そもそも文理融合型の学科として、なぜ今あるのかということの学問的な説明と、法政大学の歴史も踏まえて説明していただいたところは大変よく了解できました。そして、最後は将来の発展形としての新しい学部構想ということにも触れられて大変刺激的なお話だったと思います。

それでは最後に、心理学科の吉村先生お願いいたします。

○吉村浩一 私たちの心理学科がかかえる固有の事情

吉村

心理学科の吉村浩一と申します。

この壇上には、学科の形成順に並んでいるわけですが、心理学科は六番目で一番新米の学科です。いつも教授会でもなんでも最後になるのですが、他の学科の先生方は歴史があるので、何人かおられる候補者の中



吉村浩一

から選ばれてここに來ておられます。しかし、私も心理学科では私が心理学プロパーでは初めての定年退職者です。しかも、つい先ほど、名誉教授の証書をいただいたばかりという状態ですので、大変引け目を感じながらここに座っております。

与えられた課題としましては、各学科の過去・現在・未来という、未来まで語れということで、それぞれ学科の先生方が語っておりますが、私自身は未来というのは、私どもがしゃべるのはおこがましくて、現役の中堅、若手の先生方こそが考えるべきことと思っております。それでも、こういうタイトルをいた

だきましたので、私なりに心理学科の未来に関しても、お話ししたいと思います。

未来というのは突如パツと現れるわけではなくて、過去と現在を背負ってあるわけなので、私どもの心理学科がどういふ過去と現在を背負って未来を考えなければいけないかということに関して、ここで二つほど話をさせていただきます。

まず一つ目です。二〇〇三年に心理学科が誕生しました。今年が二〇年目ということになりますが、その二〇〇三年という年は文科省の大学行政におきまして画期的な年でした。大学で新しい学科や学部を設置するにあたって、それまでは「認可制」、要するに審査があつて、その審査に通らなければいけなかった。その審査というのは内部でやるのではなくて、学外の先生方が審査委員という形で來られて面接をし、十分にその資格があるかが問われます。教員の配置とかもありますけれども、敷地面積とか教育研究上必要な図書とかがクリアされて、新しい学科が初めて設立される。しかし二〇〇三年あたりを境にして「届出制」に変わり、それぞれの大学で最低限の条件さえあれば内部審査でよしということになり、新しい学科なりの設置を届け出ればよいという、そういう方針に大転換した年であります。心理学科ができた年は、その転換期で、どちらかを選択できるということだったようです。現

役の先生が今、年誌を書いておられますが、その時には僕はまだ赴任する前だったんで直接には関わっていませんが、そのどちらのシステムで行くかということが選択できるという状態だったらしくて、それで当然のことながら届出制という形をとりました。これはもちろん作りやすいという意味ではものすごくありがたいことでした。

けれども、典型的には国立大学の場合がわかりやすい例なのですが、文学部の中にあつて心理学が特別広いスペースを占有するというのに対しては、その合理的説明っていうのが必ずしもないんですね。もちろん他学科が理解してくれて譲ってくれたらいいのだけれども、そうでなかったら競争になるわけです。その時に、設置審というものがあつて、心理学はこれだけのものがあるんだということを外部から言われることによって、それがなければ認可されないんだという、そういう状態があれば、心理学が不当にと言いますか、広い面積とか様々な器具とかいうものを揃えられるというわけです。

私どもの心理学科の場合には届出制であつたことはありがたく、法政大学が都心の一等地で広い面積が取れないという状況下で、それまで戦後何回か心理学科を作ろうとしたときに挫折した大きな原因の一つだったのだと思います。その届出制をクリアできないとい

うことがあつたのではないかなと思っております。これは、私の勝手な理解なんですけれども。それで、届出制で二〇〇三年にうまくできた。これは誕生できたという意味では喜ぶべきことなのだけれども、ある面ではちょっと貧弱なんです。心理学を我々が背負って運営し、将来を考えていかなければいけないという、そういう課題を背負ってしまうことにもなったわけです。

そういうことから考えると、ちょうど学科ができてから三年後に大学院に心理学専攻を作った時には、ここにおられる堀江先生がちょうど担当理事でいらっしやり、堀江先生との間での交渉で進めさせていただいて頭の下がる思いでしたが、その時はすでに完全に届出制というシステムになっていたものですから、私どもも学外の審査委員の先生と一切交渉したことはないわけです。この六学科の中で心理学だけがそういうシステムで生まれたわけです。それが一つ、現在と将来を考えていく上での枠組みになっていくんだらう、と思います。

面積、特に施設の面積については、三年後に大学院ができた時にスペースがだいぶ広がりました。おそらく認可制であれば、大学院の心理学専攻ができたあたりぐらいの施設というものが学部創設時に求められていたのでしょう。そのようなことを、私もその頃は現

役だったものですから、思っておりました。そうしたハンディについては、将来やはり考えていくべきだろうと思います。

二つ目は、実学と虚学という問題を考えるべきだと思います。

心理学はものすごく実学的な面を持っているわけです。臨床心理学というものが象徴的・代表的で、世の中の役に立つ学問であるということなのですが、これも幸か不幸か、法政大学の場合は多摩の現代福祉学部が臨床心理学を担当してくれているので、私どもの市ヶ谷の文学部心理学科はそれほど、そうした実学的と言いますか、応用的な面を重視しなくてもいいというような、ある意味で好条件があるわけですが——学生にとって、それが幸か不幸かわからない——、そういう状況にあると思います。

虚学というのは虚しい学問と書くわけですが、その言葉通りを読むとネガティブな言葉ですね。役に立たない学問ということなのだけれども、少し言い方を変えたと応用に対して基礎ですね、今すぐに役に立たないけれども、基礎的な力をつけていくというふうな、そういう意味で私どもの文学部の心理学科というのは、その虚の部分、基礎の部分を結構重視して進めてきました。

ただ、ここでちょっと僕も自ら反省すべきことなの

ですが、我々現在のスタッフのほとんどが、自分たちが受けてきた心理学教育というのは、研究者を目指すという立場で教育を受けてきました。そうすると心理学の基礎的な部分や能力というものが、実は研究者を目指す私たち今の教員にとっては実学でした。要するに、研究者になって役に立つ、まさに実学だったわけです。

しかし、九五%を占める研究者にならない卒業生たちにとって、そのスタンスで虚学的なものの、基礎的なものを重視したままでいいのか、と。これは、将来について現役の中堅の先生が考えるべきだと先に言ったり、僕も答えは持っておりません。私自身は考える材料としてそういうことが必要ではないかと思っています。

以上、ちょっと駆け足になりましたけれども、二点、私の思っていることをお話させていただきました。

奥田

吉村先生、ありがとうございました。

牧野先生から吉村先生までのお話の中で、全体として眺めたいと思います。

百年前の法文学部に、文学科と哲学科ができて、そこから数えて百年目だということになります。そして例えば堀江先生がおっしゃったように、文学部の危機という点では、やはり日中戦争・太平洋戦争、そして



奥田和夫

学園紛争等々で、文学部に——これは文学部だけではないかもしれませんが——学問における、非常に危機の時代があり、それは法政も免れなかったということになります。

その後、学生自身とどのように向き合うか、あるいは学生たちがどのように育ってくれたかというようなお話も含めて、今後教育機関としての大学がどのように進んでいくべきかというお話もいくつかありました。モザイク的な並べ方になるかもしれませんが、この百年の間の法政大学の歩みや、その歴史の中の一コマ二コマ、そしてここは考え直さなければいけない

のではないかと思うという点や、ここは誇るべき点があるというお話も含めて、お話を聞けたと思います。

いろいろと問題が提起され、何を中心にしてお話しただくかということを考えなければいけないんですけれども……。先ほど佐藤先生もおっしゃったように、大学というのはもちろん研究教育機関ではあるのですけども、研究と教育という二つの重要な仕事をどのように運営していくかというのは、確かにこれだけ複雑な社会になり、そして教育がまったく細分化しているというところで考えますと、非常に難しいところがあると思います。

そこで、この大学における教育という点で、先生方で意見のやり取りをしていただけならと思うのですが、いかがでしょうか。

○総括——大学における教育のありかた

佐藤

周知のように、大学は知識を詰め込む場ではないです。勿論、知識は無いよりは備わっていた方が好ましいけれども、所詮、物知りは百科事典には叶いません。肝要なのは、知識を如何にして知恵へ転換しうるか、かつ如何にして「悟性」を行使できる人間への成長を促すのか、その最終鍛錬の場が大学だと、私は個人的に考えています。

そのためには、今後、学生は勿論のこと、教員も、組織体としての大学も、意識をそれ相応に変換しなければならぬかもしれません。

『思考が変われば意識が変わる。意識が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる。運命が変われば人生が変わる。』これ即ち、人間単体で考えれば、究極的に意識・思考の転換から始動して人生が変わることに連動すると唱える、ヒンズー教の教えであります。

この辺をやはり個人としても、組織体としても、今後、再確認しなければならないのではないのかなと感じたものですから、付加的に申させていただきますました。

堀江

ずいぶん大雑把な言い方ですが、中世のヨーロッパの大学の学部は四学部でした。ゲーテの『ファウスト』の中に、ファウストが「哲学も、法学も、医学も、そして、よいいな神学までも」研究したが、馬鹿げたことであつた云々という一節があります。つまり、四学部で運営されていました。古代ギリシャにアリストテレスの『詩学』はありますが、文学はまだ正式な学問・研究領域として顔をだしていませんでした。

かつて哲学は百学の王といわれましたが、そういう意味で、文学一般は新参者だといえます。日本におい

て現在流通している文学の概念は、明治時代にはいった一八八〇年代の後半に Literature の翻訳語として確立されます。坪内逍遙、二葉亭四迷、森鷗外などの小説や評論などでその内容が明確になったといえます。ただし、日本の明治・大正期に「文学部」という学部名称をつけたのは、右の新たな近代文学概念に依らないでしょう。古代から江戸期まで続いた経史、詩文、修辞学、論理学、史学などを包摂した文学概念が一般的に機能していたといえるのではないかと思います。古代から『万葉集』『源氏物語』『平家物語』などすぐれた膨大な世界文学的な作品がありますが、文学概念として流通しなかったといえます。

現在文学部の名称について考え直そうとしますと、時代的・世界的な視野のひろがりの中で教育的・学問的あり方を考えていく必要があります。また、本学には現在一五学部あり、人文系・社会系・理系などのあり方をきちんと把握し、その中の独自の学的位置と活用可能な他領域の教学成果を織りこんでいかねばならないでしょう。その上で、学生諸君の要求、時代的・社会的・世界的な要求の中でその時に最も必要不可欠な教学体制を組むことができ、それに相応しい名称を与えることになります。

本学の大学院・学部・学科が世界から評価されるためには、少子化の問題、生涯学習の問題などを視野に

牧野

いれつつ、本質的に高等教育機関として、社会や世界に開かれた柔軟なあり方において、一定の社会的役割を果たしていくにはどのようなあらねばならないか、常に検証し続けなければなりません。現役の教職員や学生、卒業生、本学関係者などとともに、きちんと将来構想を練り上げ続けていきたいものです。

時間も限られているので、結論的な話だけを申し上げます。

私の考えでは、今日の発表の前提的な部分になりますけれども、知の共同体という表現で言いましたように、大学の構成員はまず学生です。そして教職員。この三者が一体になった形の緩やかな知の共同体的なものを作り上げていく、これがまず最初に申し上げたいことです。

その際に、もうひとつ大事なこととして、今の非常に厳しい世界ランキングからいって、日本の大学がほとんど評価されていない現実があります。それは、評価のしかたにも問題がありますが、今は省略します。

一言申し上げますと、学問というのは本来、インターナショナルであり、かつトランスナショナルな性格を持っているわけです。この点を適切におさえながら、今の学問、そして教育、研究の成果をフィードバックしながら、学者あるいは教育者のあり方を有機的に働

かせながら、学生たちからも学ぶということを私たちは常にやっているわけですから、そういう営みの中で大学というもの、特に今の私立の大学、法政規模の大学の持続可能性を可能な限り追求すべきだと思います。最後に一言だけ付け加えて、私からのコメントを終わります。二〇年以上前に、私は総合人文学部という構想を打ち出して、文学部のどなたからも賛成していただけなかったのですが、今、同じ発想でやれるかという、できないと思っています。そのぐらいこの二〇年間で大きな変化がありました。そういう大学が直面している変化の必要性と、いい意味で変えずに守らなければならぬ学問や教育のあり方があるはずですが、具体的には申しませんが、そういうものを法政大学は時間がかかっても見つけ出していくことが必要です。こうした努力がないとおそらく次の文学部の百年はないだろうと思っています。私からは以上でございす。

吉村

先生方のおっしゃっておられることは、僕の話した言い方によると、大学は専門学校ではないのだから、技術とか知識だけを教えても一〇年経ったらもう役立たなくなるよ、もっと深い基礎的なもの、あるいは虚学と僕は申しましたけれども、そういうものを十分重視すべきだろうというお考えで、僕自身もそれに賛成

です。ただ、学生に納得してもらった上でそれをしなければならぬ。教師のひとりよがりです。それが大事なんだという形で言っても、学生にはそう簡単には通じないと思うのです。

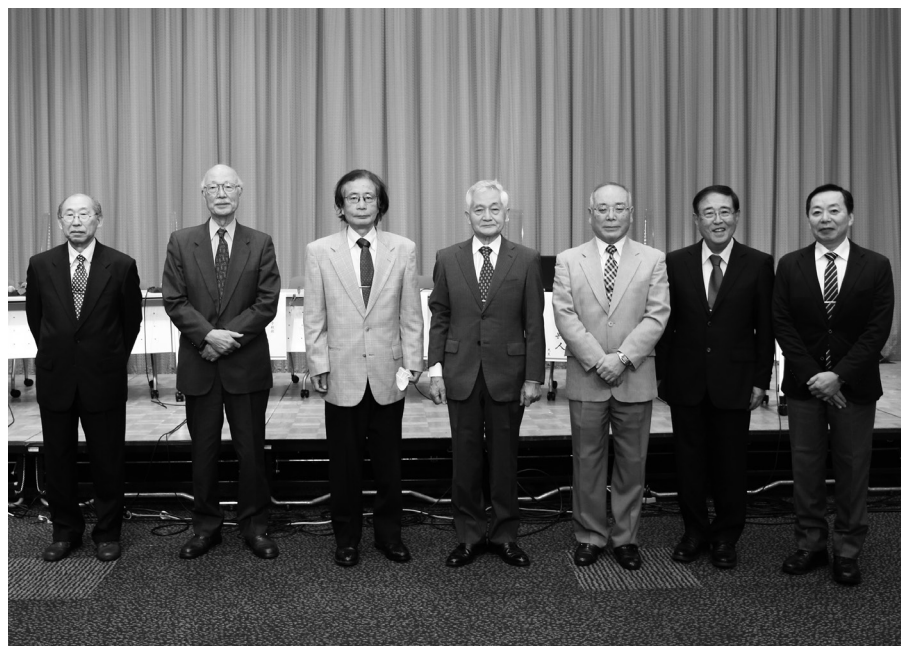
やはり、今の世の中はどんどん変わっていく、現実の知識とか知恵とか、そういうものを欲しているところに、将来をもうちょっと考えた深いものを学ぶべきという言い方をしても、そう簡単には納得されないと思うので、そこを納得してもらわなければ、学生は真剣に学ばないだろうという印象を持っています。

奥田

それでは時間が来ましたので、シンポジウムを終了したいと思います。

大学も大学だけであるのではなくて、社会そして世界と何らかの形でつながっていますので、いろいろな課題は全部、大学も共有せざるを得ないのですけれども、その中で大学も一人の人間と同じように成長していけるものと思います。今後とも法政大学文学部を応援支援のほどよろしくお願いいたします。

これを以てシンポジウムを終了いたします。ありがとうございました。



学部・学科の歩み

・記述にあたり、『法政大学八十年史』（法政大学、一九六一、八）『法政大学百年史』（法政大学百年史編纂委員会、一九八〇、一二）『法政大学と戦後五〇年』（法政大学戦後五〇年史編纂委員会、二〇〇四、三）を基本的な参考文献として参照した。その他の参考文献は、適宜注記した。

・本編の現行学科部分の執筆には、文学部各学科所属の現任教員（二〇二二年度現在）があたった。それ以外の執筆者は左の通りである。

【文学部】坂本勝（日本文学科）

【教育学科・心理コース】小野純平（現代福祉学部臨床心理学科）

【教育学科・教育コース】児美川孝一郎（キャリアデザイン学部）

文学部

一 法政大学の発

法政大学の歴史は、一八八〇（明治一三）年の東京法学社の設立に遡る。東京法学社は代言局と護法局からなり、翌明治一四年に護法局が独立して東京法学校となる。開校当時、講師は四名、授業は毎日午後三時から五時までであった。

一八八一（明治一四）年、法学社から独立した東京法学校が設立され、講師にフランス法学者ボアソナード博士を招いた。翌八二年、東京法学校は私立法律専門学校として認可される。時は自由民権運動が大きな高揚をみせた時代で、近代法制度の整備が本格化しはじめた時代である。ボアソナード博士の薫陶を受けた若い法学者たちを中心に、人間の自由や権利をおもな教育理念に据えて本格的な大学史を歩み始めた。

一八八六（明治一九）年、フランス語勉学と日本、フランス法学の教授を目的に仏学会が設立される。仏学会はその後設立の目的に沿って、その一部を東京仏学校と改称し、一八八九（明治二二）年東京法学校と合併して、財団法人和仏法律学校と改称する。なお、仏学会はその後も独自の活動を続け、一九〇九（明治四二）年、神戸日仏協会を合併して日仏協会と改称し、一九二四（大正一三）年に設立された日仏会館とともに今日に至っている。

和仏法律学校は邦語法律科、仏語法律科、普通科を設置し、当初は神田小川町の校舎で授業を

おこなったが、一八九〇（明治二三）年、麹町区富士見町に約三一五坪の校地を購入し、以後約三〇年におよぶ「九段上校舎」の時代が始まった。同地は現在の高層の衆議院議員宿舎の隣地にあたる。

和仏法律学校は一九〇三（明治三六）年の専門学校令により和仏法律学校法政大学と改称する。「法政」の名については、後年野上豊一郎が「梅先生は政治科を作ったことをたいへん自慢していたから、法律の法と政治の政を一緒にしたのではあるまいか」と語っている。

二 大学令による法政大学の誕生

一九一九（大正八）年の大学令により、翌大正九年、財団法人和仏法律学校は大学の名称を「法政大学」として新たな出発を迎えた。当時の文部大臣に提出した「設立願」にはつぎのように記されている。

一 大学ノ名称 法政大学

二 学部ノ種類及名称

法学部 法律学科 政治学科

経済学部 経済学科 商業学科

続いて、各学部に研究科と予科を設置することが記され、各学部学科の学生数については、法学部六百人（内訳は、法律学科三百人、政治学科三百人）、経済学部九百人（内訳は、経済学科

四五〇人、商業学科四五〇人）、大学予科千二百人（内訳は、法学部予科四八〇人、経済学部予科七二〇人）である。各学部の教員数は、法学部十九人、経済学部三五人（内一六人は法学部と重複）、予科三〇人とある。一九二〇（大正九）年五月に文部省に提出した予科教員の中には、後に総長となる英文学者で能楽研究者の野上豊一郎、哲学者の安倍能成など、その後の文学部を担う夏目漱石門下の人びとが名を連ねている。さらに作家の森田草平、詩人の新城和一、作家でフランス文学者の豊島與志雄、哲学者の和辻哲郎などが講師・教授陣に加わり、文学部設立への機運が高まっていった。

一九二二（大正一一）年四月に、従来の法学部は法文学部に改組され、新たに文学科と哲学科が設けられた。一九二三年、文学科、哲学科の開講準備が進められ、文学科、哲学科の主任教授を任命された安倍能成は、その年発行された『法政』第一号に「文学科哲学科に就て」と題する一文を載せ、その中でつぎのように述べている。

私立大学が官立大学のおこほれを頂くのを光栄としたり、世間で知名な大家の名を多数に列して零細の時間を持たせ、それで学校の威容を誇る様な時代はもう過ぎた。幸に法政大学は多くの私立大学の中で此の点に於て最も地味であり、最も真面目であることは喜ばしい。私は当分の間文科の方の主任を託せられたが、どうかこの学校の方針を助けて、教授諸君や学生諸君と共に、本当の意味での文科の充実を少しでも期したい。

また以下のようにも述べている。

文科の学生は現在四十余人位であるが、個性が発達すると同時にひねくれても居て、中々一

致の行動が些細なことにも取れにくい。(中略)個性の特色は益々發揮して行きたいが、それと同時に、出来れば此等の特色ある個性の諧調によつて、一つの全体的な空氣も出来て欲しい。こんな意味で教師と学生と遠くからにらめっこをし合ったり、冷笑し合ったりしないで、直接に膝を交えてぶつつかり合つて見たい。

安倍のこうした思いはその後の法政大学文学部の校風や学生氣質の中に形を変えながらも生き続けているように思う。

法文学部への改組以降、学会の設立も進んだ。一九二五(大正一四)年五月に英文学会、同年九月に独文学会、一〇月に仏文学会が創立され、翌一九二六年一月には国文学会、哲学会、社会学会が発足し、一九二七年一月には心理学会が発足する。

大正末年から昭和にかけて、質量ともに充実した教授、講師が着任する。一九二四(大正二三)年、心理学の城戸幡太郎、社会学の松本潤一郎が教授として着任する。翌二五年には社会学の藤田喜作、教育学の石川謙が文学部講師として着任する。その前年にはドイツ文学の片山敏彦、文化史の林達夫、二六年に英文学の名原廣三郎、心理学の三井透などが予科に迎えられ、その後文学部に出講するようになる。同年、社会学の藏内数太、心理学の留岡清男が講師として着任、翌二七年五月に三木清、翌年四月に谷川徹三が哲学科教授として着任する。同年には国文学の和田萬吉、フランス文学の辰野隆、心理学の益田惟茂、西洋古典文学の田中美知太郎、日本史の川上多助などが出講するようになる。こうして当時の法政文科(文学科、哲学科)は、夏目漱石門下の知識人を中心に、自由で清新な学風を築いていった。

しかし時代は徐々にこうした自由な学問や文化を抑圧する動きを強めていく。一九三〇（昭和五）年三木清が共産党シンパとして検挙される。三木清はその後釈放され、谷川徹三、豊島與志雄らの教授陣と哲学科卒業生による復帰運動がなされるが、文部省は三木の復職を認めることはなかった。

この頃、学内外での活動も盛んにおこなわれた。昭和四年に法政大学児童研究所が設けられ、五才から一八才までの児童や少年に関する知能の発達研究や児童相談などをおこなった。この活動は学生も参加する実習教育としての意義を持ち、機関誌として『心理学研究』を発行した。

一九三一（昭和六）年、哲学会は岩波書店から谷川徹三編集による『哲学年誌』を発行し、歴史、社会、人間、芸術など、幅広い問題を扱った。

『英文学誌』創刊号は一九三一（昭和七）年、翌三三年には森田草平、名原廣三郎、龍口直太郎らの教授たちと小野健人、村山英太郎らの卒業生がジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』を共同で翻訳出版する（岩波文庫で五巻分冊の四巻まで。第五巻は三年後刊行）。

また『国文学誌要』『法政文学』（季刊）の発行は三三年、当時の国文学研究の主流であった文献学派や文芸学派に対して、歴史社会学派の研究を掲載して当時の国文学界に独自の存在意義を示した。

独逸文学会、仏蘭西文学会編集による雑誌『黒潮』の創刊は昭和七年七月、学術論文の他、学生、卒業生の評論や創作も多く掲載された。

三 「法政騒動」と戦時下の文学部改組

このように積極的な学問研究の動きの一方で、一九三三（昭和八）年、いわゆる「法政騒動」が起きる。この学内騒動は文学部教授森田草平らが学長問題、財政再建、人事問題などをめぐって、理事、学監、予科長を兼任する野上豊一郎の退職を要求し、それに対し野上を支持する予科教授陣が対峙して大学の危機に発展する大きな事件となった。騒動は、野上の追放、八名の教授陣の解職、四七名の教授の辞職という事態に至り、その後、森田も文学部教授を辞任し、あらたに総長に就任した小山松吉は辞職した予科教員を順次復職させ、野上も一九四一（昭和一六）年に教授に復職するなどによって一応の決着をみたが、その背景には大学の財政難のみならず、出身者を教師として採用すべきだとするいわゆる法政ナシヨナリズム的な空気の拡大などもあり、複雑な問題がからんでいたという。また、騒動終結後四三年一〇月には陸軍大臣荒木貞夫が本学顧問に就任し、大学全体においても徐々に戦時色が色濃くなっていた。

こうした中でも昭和初期の法政文科（文学部）は活発な研究活動、文化・社会活動により一種の「黄金時代」を迎えていく。ただその一方で学生数は他の大学の文学部同様に伸び悩んだ。開設当初は四〇名程度だったが、一九二六（大正一五）年には一三〇名、一九三〇（昭和五）年には二三〇名と増加したが、戦時色が強まった一九四〇（昭和一五）年には一六〇名に減少する。こうしたこともあって文学部は大学経営の上で問題視され、改組や縮小の対象とされたことも

あった。また戸坂潤がいわゆる「唯物論研究会事件」（一九三八年）により検挙されるなど、言論統制はより強化され、戦時色はいっそう濃くなっていった。

一九三九（昭和一四）年四月には、学部一年生から軍事教練が必修となり、専門部には「新東亜建設」「大陸経営」の要望に沿う人材育成を目的に「大陸部」が新設され、大川周明が部長に就任する。

そうした中で文学部は「文芸学科」と「文政学科」に改組された。「文芸学科」はそれまでの文学部の学問の伝統を継承しつつ、国文、英文、独文、仏文の各専攻を残した。「文政学科」は従来の哲学科にあたるもので、倫理学専攻と心理学専攻に分かれ、教育、文化政策を念頭にしつつ、哲学、倫理学、心理学、教育学の各分野を研究する構成としたが、社会に出てすぐに役立つ人材育成を目指すという戦時中の要請に応じていく方向を持ち、地政学、植民政策などの科目が設置されていた。加えて、文部省への届け出によれば、一週一二時間の軍事教練もおこなうことになっていた。そうした困難な状況の中でも、各専攻は、時流に迎合することなく、自由で批判的な学風を維持しようと努めた。

この時期、新たな教授、講師が就任する。文芸科関係では、国文学専攻で、一九三九（昭和一四）年、片岡良一、藤村作が辞任し、永積安明が講師となる。西尾実、長澤規矩也が高等師範部に異動し、文学部を兼務する。四〇年には岡本千太郎、四二年には重友毅と前年卒業した小田切秀雄が講師となる。

英文学専攻では、一九四〇（昭和一五）年、加藤猛夫が講師となり、本多顕彰が予科から移籍

する。仏文学専攻では、新城和一、中島健蔵が退職し、本学卒業生の蛭原徳夫が講師となる。独文学専攻では、高橋健二、荒木茂雄などが講師に加わる。

文政科関係では、哲学専攻で、哲学史やインド哲学を担当した矢吹慶輝が死去、樺俊雄が退職し、佐藤信衛が講師に就任する。また、本学出身の池島重信、榊田啓三郎、長谷川鉦平が加わる。社会学専攻（教育学専攻の後身）では、森東吾が高等師範に移籍して文学部を兼務する。心理学専攻では、奥田三郎が就任し、新たに教育学専攻の宗像誠也、宮原誠一が就任する。

こうした改革の中での特徴の一つとして、教育学関係が充実したこと、夜間の高等師範部との人事交流が進み、一九三七（昭和一二）年に大学を拠点に設立された「教育科学研究会」などを中心に大学における研究と現職教育の結合が強調されていく。三八年に「初等教育研究座談会」が本学教員を助言者として開催され、三九、四〇年の「教育科学協議会」は本学を会場として開かれた。この時期、高等師範部が充実し、文学部進学者数も増加した。

このように困難な中でも文学部は自由で開放的な学風を維持するために努力を重ねた。一九四一（昭和一六）年七月、雑誌『文濤』が文芸学会により創刊され、小田切秀雄をはじめ、教授、卒業生、学生の論文、評論、創作などが掲載された。この雑誌は四三年七月の第三号まで発行されるが、後に廃刊に追い込まれる。そうした中でやはり戦時下の状況は次第に悪化し、一九四一年一二月より「繰り上げ卒業」がはじまる。

一九四二（昭和一七）年頃には、大学の軍隊化が強まり、軍事教練に加えて勤労動員が激化する。四三年一二月には「学徒出陣」により多くの学生が戦場に出ていった。また多くの教授や卒

業生が治安維持法により検挙された。たとえば「教育科学研究会事件」で四三年十一月に宮原誠一、四四年六月に城戸、留岡教授が検挙され、城戸は大学を解職された。その年の夏には小田切秀雄、一月には小原元、一二月には近藤忠義が検挙され、文学部は壊滅的打撃を受け、一九四五（昭和二〇）年四月からは一年間の授業停止に入った。

しかしそうした時代の動きの中でも、学問研究への意欲はなお命脈を保ち、一九四二年の夏に国文学会は二週間の奈良、京都の自転車による文学旅行をおこなう。文政学科では有志が農漁村の臨時保育所支援のため現地研究をおこなっている。また「学徒出陣」により出征することになった学生も、希望すれば九月から集中学習を受けることができた。また、一九三三（昭和八）年の学制改革により選科が設置され、女子の聴講生、三四年より女子学生の入学が許可されており、この時期にも女子学生がかなり残っていた。

四 戦後の再建

一九四五（昭和二〇）年八月一五日、日本はポツダム宣言を受諾し連合国に降伏する。敗戦直後の校庭には焼け残った第三校舎（図書館・講堂、のちの第一校舎）、第四校舎（六角校舎）、校友会館などが点在する荒涼としたものだった。

この校舎に復員した学生、徴用や勤労動員から解放された学生たちが徐々に戻ってきたのは、その年の九月末から一〇月はじめのことだった。ただ大学は彼らを迎える状況にはなかった。そ

の状況を打開したのは学生たちの自主的な行動であった。竹内総長追放と授業再開を求めた運動は、GHQが軍国主義、超国家主義教育禁止の指令を出した一〇月末頃から、予科生を中心に組織的に展開された。

一九四六（昭和二一）年二月竹内総長の辞任が実現し、野上豊一郎文学部長が学長（四七年三月に総長）に就任する。大学の戦時体制の解体と再建がはじまり、学生たちの自主的な研究会や読書会活動もはじまる。文学部学生が多く参加していた社会科学研究会、文芸研究会、心理学研究会など、後に文化連盟発足（四七年九月）の中心となる団体が活動をはじめている。新学長野上豊一郎のもとで新たな文学部が徐々に胎動していった。

哲学専攻では、谷川徹三、金子武蔵、出隆、下村寅太郎、林達夫に加えて、高等師範部長・図書館長の井本健作が出講し、矢内原伊作たちが講師に加わった。

国文学専攻は、戦争末期にもっとも大きな弾圧を受けたが、近藤忠義、片岡良一、長澤規矩也らが復帰し、小田切秀雄、小原元、正木信一などの若い研究者たちが活気に満ちた研究教育活動をはじめた。

英文学専攻は本多顕彰が復帰し、アメリカ文学の山屋三郎が専任となり、入江直祐、工藤好美らが出講する。

心理学、教育学関係では、予科の乾孝教授、井原法洞講師を中心に自主的な研究を継続した。また仏文、独文専攻の復員学生は、英文学専攻学生とともに授業を受けた。

一九四六（昭和二一）年九月に全学自治会が結成され、一〇月には法政大学新聞も復刊される。

十一月には第一回の大学祭も開催された。

この時期に文学部再編成が進み、文学部は従来の法文学部の分科から、独立した法政大学文学部となった。

一九四七（昭和二二）年四月、文学部は哲学科・国文学科・英文学科の三学科体制で独立し再出発する。第二部（夜間）には、国文学科・英文学科・地理歴史学科が開設された。昼夜の学科は一つの教授会を構成し、教員は昼夜の授業担当を共通して担当した。文学部の夜間部開設は、全国初の試みとして注目された。この新たな体制の下、一九四八年、戦前は曖昧であった教授会規程が整備され、それまで野上総長が兼務していた学部長に谷川徹三が就任した。

また、その前年に設置された通信教育部に、文学部は日本文学科と史学科を開設した。その際、従来の国文科は日本文学科へと名称変更をした。通信教育部には、一九五〇（昭和二五）年、教職課程が設置され、五六年に地理学科が開設された。

一九四九（昭和二四）年四月、新学制への転換を迎え、文学部は、第一文学部（哲学科・日本文学科・英文学科）、第二文学部（日本文学科・英文学科・史学科・地理学科）を設置する。この新体制への移行に伴い、従来の予科は教養部となり、一・二年次生の一般教育科目を担当し、学部は三・四年次生の専門教育科目を担当することになった。

一九五〇（昭和三五）年二月二三日、文学部を創設時から担って来た野上総長が急逝し、六月、大内兵衛が新総長に就任した。

この頃、戦後の世界、アジア情勢が急激に変化する。一九五〇年六月、朝鮮戦争が勃発し、世

界は東西冷戦構造を強めていく。そうした中で、アメリカの反共政策は日本の教育界にも及び、アメリカ民間教育局教育顧問のイールズが、新潟大学での講演を皮切りに、大学から共產主義者を追放するいわゆる「イールズ声明」を出す。法政大学においても、一九四九（昭和二四）年秋、図書館講堂で開かれた法政大学七〇周年記念式典で演説をする。この記念式典では一九四五年獄死した戸坂潤と三木清を追悼する講演会が開催されていた。

そうした中で、学生や教授たちは各地で「イールズ声明」反対、「レッドパージ」反対の運動を展開する。本学においても、学生たちによる試験ボイコット闘争がおこなわれ、文学部では哲学科、日本文学科を中心に、九月二六日、試験を阻止した。大学はこの闘争に対し厳罰主義で臨み、文学部学生の中から除籍処分一名、無期停学処分二名が決定された。しかし、文学部教員の中にはこの学生たちの運動を支持する人々も多かった。

また一九五二（昭和二七）年、「血のメーデー」事件で死去した哲学科学生の学生葬に際しては、大学が取りやめを決める中で、学生葬に参加して弔意を示す教員も存在した。

こうした戦後の大きな時代の動きの中で、文学部は、五二年四月「教育学専攻者の養成」と教職専門科目の履修のため、第二文学部に教育学科を増設。学科の編成は、戦前の文政学科、高等師範部の伝統が生かされ、教育学、心理学を中心におこなわれた。

同年四月、「野上記念法政大学能楽研究所」が設立される。同研究所は野上の総長就任後、文学部内に設けた能楽研究所を拡充して独立の研究所とし、一九五五（昭和三〇）年五月、規定を改め文学部付置となった。その後独立して、本年二〇二二（令和四）年には創立七〇周年を迎え

た。

一九五四（昭和二九）年三月『法政大学文学部紀要』を創刊する。第一号は史学科が編集、以後、日本文学科、英文学科、地理学科、哲学科、教育学科と、学科ごとの編集とし、一九六〇（昭和三五）年に六学科特集が一巡し、その後、学部共同で編集する現在の形に移行した。発刊当初、各学科ごとの編集となったのは、文学部の学問、学科の持つ独立性によるものと思われるが、創刊号の冒頭において谷川文学部長は以下の言葉を発刊の辞の最後に記している。この言葉は今日の文学部の在り方にもつながるものであろう。

もともと法政大学文学部は、大正の末年野上豊一郎、安倍能成、和辻哲郎の諸氏を中心として出発して以来、自由闊達な学風をもって知られて来たが、爾来三十有余年、各方面に幾多の俊秀を輩出しつつ、その伝統を今日まで受継いで来た。願はくばこの紀要においてもその特色を十分に發揮せられんことを。学問と真理とへの共通の愛は、研究の方法や結果におけるあらゆる相違を越えて、われわれをKollegeとして堅く結びつけてゆくであらう。

一九六〇年代は戦後日本の歴史において大きな変化が生じた時代である。一九五〇年代半ば頃から始まった戦後の経済成長は、大学生の在り方にも大きな変化をもたらし、大学進学志向はそれまでの学問志向、職業準備志向を残しつつも、青春謳歌的な志向を持った大衆社会的傾向をより強くしていった。

また文学部全体の在り方も、従来とは異なるさまざまな問題を抱えて変化の時代を迎えた。その一つは大学の規模拡大と学生数の増加にみることができる。たとえば戦後のこの時期の文学部

の卒業生数をみると、一九四六年は第一部五一名、第二部九四名（計百四十五名）だったが、一九五五年には第一部二三名、第二部一五〇名（計三八六名）一九六五年には第一部四九六名、第二部一〇四名（計六〇〇名）に増加した。

こうした中で、学生の大学に対する要望も多様となり、「資格取得」に対する要望も強くなっていった。文学部ではそうした要望も踏まえて「教職課程」の講義と並行して、図書館司書、学校図書館司書教諭、社会教育主事、博物館学芸員の資格取得科目の設置をおこない「資格課程」を開講した。この課程は全学の学生を対象として開設され、卒業生、聴講生も多く受講した。

五 「大学紛争」の激化

こうした社会的意義を実現しようとする教育志向とともに、この時期は文学部教授会を含めた大学関係者の社会的政治的活動も盛んであった。「警職法改正」阻止や「安保反対」の運動などに積極的に参加した時期でもあった。また、学生の間でも教職員とともにさまざまな政治的社会的な問題をめぐって活発な運動が展開されてきた。しかし、一九六〇年代後半からは、学生同士の間でさまざまな対立が生まれ、学生間の暴力事件などが頻繁に起きるなど、戦後の学生運動にも大きな変化が生じた時代でもあった。

一九六八（昭和四三）年、いわゆる「大学紛争」はますます激化し、文学部も大きな影響を受けた。自治会間の対立の激化をはじめとして、通常の授業実施が困難な状況となり、外部の力に

依存せずに問題を解決すべく教員の徹夜待機などもおこなわれた。四月には大学が強制捜査を受け、学内の部分的占拠が行われる。七月より全学封鎖がおこなわれ、翌年一月二日には学生活動家間の集団衝突により文学部第二部の二年生が重傷を負う事件が発生する。幸い一命をとりとめることはできたが混乱は続いた。十一月末によりやく授業は再開されたが、七〇年代に入っても混乱はなお続いた。

一九七〇（昭和四五）年八月、法政大学「六角校舎」（第二校舎）内で、東京教育大生が殺害される事件が発生する。いわゆる「内ゲバ」によるリンチ殺害事件が本校内部でおこなわれるという衝撃的な事件である。法政大学全学において緊急教授会が開催され、「六角校舎」の取り壊しを含めた学内整備のため、一月下旬まで授業は休止された。その後も八〇、九〇年代と長く学内での混乱は続いたが、一九九九年に、それまで大学が文学部自治会に代わって学生から自治会費を徴収していた文学部学生自治会費の代理徴収を停止し、いわゆる「学生運動」と大学、文学部とは明確な一線を設けることとなった。以後「文学部自治会」は任意団体となり、大学、文学部が正式に認定した学生自治会はなくなった。ただそうした大きな動きの中でも、「学生運動」は市ヶ谷キャンパスにおいてさまざまに展開され、二〇〇六（平成一八）年三月、学内外の集団がキャンパスに不法侵入し、二九名が検挙されるという事件が起こった。その中に、文学部に籍を置く学生が三名おり、事件に到る経緯を踏まえて、文学部教授会はこの三名の退学処分を決定した。

また、一九七〇年以降表面化した問題の一つに「助手問題」がある。一九七一（昭和四六）年

三月をもって任期満了により職を解かれた哲学科助手が、その措置を不服として地位保全の訴訟を起こしたことに始まる。裁判は翌年三月に和解したがその波紋は大きく、教授会、各学科は助手制度の在り方について検討をおこない、以来、文学部ではいわゆる研究助手を採用しない方針で今日に至っている。

そうした中で、学部改革も少しずつ進んだ。一九六一（昭和三六）年四月、史学科と地理学科が第一部に移行し、夜間部の学生募集は停止した。

一九六九（昭和四四）年四月、教育学科は教育学・心理学の二コースに分かれる。心理学科の創設は戦後の学生運動の中でも取り上げられ、早くから論議された。哲学科には心理学の専門科目が開講されてきたが、単独の学科創立には、「校地」の条件など多くの困難があり、まずは「コース」制として教育学科の中に設置された。

また地域との連携も進み、一九八三（昭和五八）年六・七月には千代田区教育委員会との共催で、千代田区民大学講座「近代への架橋―文学と歴史を考える楽しみ―」を開催した。一九九三（平成五）年五・六月には同じく千代田区教育委員会との共催で、千代田区民大学講座「哲学と人生」を開催した。

六 大学院の本格的始動

大学院はすでに戦前にも設置されており、大学令による一九二〇（大正九）年の法政大学認可

時の法政大学学則は「第一章 総則」の第二条で「本大学ハ研究科、学部及予科ヲ以テ構成ス／研究科ハ学術ノ蘊奥ヲ研究ス……」と記している。三年後の二三年に改正された学則には「大学院」として記述がある。文科でも大学院生がかなり早い時期に出て、学会などで活躍したり助手になったりした記録が残っている。ただ大学院における教育と研究が本格化するのには、一九五一（昭和二六）年四月に開校された新制大学院からである。同年開講の人文科学研究科には哲学専攻、日本文学専攻、英文学専攻が設置され、一九五二年には国史学専攻（五四年に日本史学専攻に改称）、一九五三年には地理学専攻が開設される。また一九五五年、哲学、日文、英文、日本史、地理学専攻の博士後期課程が開設され、一九七八（昭和五三）年には『大学院紀要』が刊行される。二〇〇三年には心理学専攻が設置される。

二〇〇二（平成一四）年に文科省21世紀プログラムに「日本発信の国際日本学の構築」、文科省私立大学学術研究高度化推進事業に「国際日本学の総合的研究」が同時採択され、研究機関としての国際日本学研究所が設立される。翌年にはその教育機関として国際日本学インスティテュートが開設され、人文科学専攻を横断する形で、各専攻にとらわれない学際的教育研究機関として多くの留学生らを迎えて今日に至っている。

七 市ヶ谷キャンパス再開発

一九八〇年代は市ヶ谷キャンパスの大規模な再開発が進んだ時代である。以下、その間の整備

改修状況を略記する。

一九八〇（昭和五五）年、八〇年館完成。

一九八四（昭和五九）年、多摩キャンパス竣工。経済学部、社会学部が市ヶ谷から移転。

一九九二（平成四）年、大学院棟（九二年館）竣工。

一九九五（平成七）年、五三年館解体。

二〇〇〇（平成一二）年、ボアソナード・タワー竣工。

二〇〇四（平成一六）年、学生会館解体。

二〇〇七（平成一九）年、学生会館の跡地を中心に外濠校舎を建設。二〇〇六年に購入した嘉悦学園女子中学・高等学校の敷地と校舎を合わせて、富士見校舎、外濠校舎が一続きになる。サークル活動や授業教室などの新たな環境が整えられる。

二〇一六（平成二八）年、富士見ゲート竣工。

二〇一九（平成三一）年、大内山校舎竣工。

八 心理学科新設から今日まで

こうした市ヶ谷キャンパス再開発の中で、文学部改革の大きな成果として、心理学科が二〇〇三（平成一五）年に開設されたことがあげられる。これは第二部教育学科の発展的な改組再編に伴うもので、長年にわたって望まれ、新設を目指してきたことが、ようやく具体的な成果となっ

て実現した。

また二〇〇二年は文学部創立八〇周年にあたり、文学部はこれを記念して「二一世紀の知とこころと人間」をテーマにシンポジウムを開催した。報告者は勝又浩（文学部日本文学科教授）、ジョン・M・ブロウカリング（文学部英文文学科助教授）、金山喜昭（文学部教育学科助教授）、吉村浩一（明星大学人文学部教授）の三氏、司会は牧野英二（文学部哲学科教授）が担当した。テーマは激動する世界の中で人文科学が直面する課題、そして人文科学はどのような未来を展望しうるか、といった大きな問題を問うている。テーマに即して多様な問題が提起され、シンポジウムは法政大学文学部と人文科学の伝統と新たな創造への契機を示して展開された。その成果は『文学部紀要』四八号に掲載されている。

二〇一二（平成二四）年の文学部九〇周年においては、「文学部で培う社会人力」というテーマであらたにシンポジウムを開催した。シンポジウムは二部構成で、第一部は「いかに社会人力を養うか」をテーマに、藤村博之（法政大学大学院イノベーション・マネジメント研究科教授）、山田ブーニー（文章表現・コミュニケーションインストラクター）、山田和人（同志社大学文学部国文学科教授）の三氏が報告者となった。第二部は「法政での実践」をテーマに川崎貴子（文学部英文文学科准教授）、福田由紀（文学部心理学科教授）、小林ふみ子（文学部日本文学科准教授）ほか、学科の卒業生たちが参加しておこなわれた。その意図と目的は、「今日、大学生の就職難が社会問題となる中で、大学に問われているのは、学生に社会人として必要となる力を身につけさせられるか否かです。ともすると実用的ではない教育・研究をする学部とみられがちな文学部

において、それを可能にし得ることをきちんと社会に訴えていくことがこれからの文学部にとって重要なことと考え、このようなシンポジウムを企画した次第です。」という宮川雅（文学部長）の言葉に明確に述べられている。社会の中で文学部が果たすべきこと、果たしうることを、文学部として考え提起する実践的な内容である。こうした問題は、文学部が果たすべき学問的使命とは何か、という学部開設以来の大きな問題とともに、今後の文学部が担うべき課題を投げかけるものであった。その成果は『文学部紀要』六六号に掲載されている。

文学部と受験生を結ぶ『文学部案内』の刊行も、こうした問題意識の上に一九九七年に始まる。その第一号には「卒業生に聞く」との企画で、日本文学科卒業生の小島奈津子（フジテレビアナウンサー）と池田雄一（『早稲田文学』編集者）両氏の対談（司会は後藤篤子史学科教授）を掲載している。対談の見出しには「優等生でなくても入れる大学！ 自由な校風が魅力です」とある。以後、『文学部案内』は改訂を重ねながら、教員、受験生、学生をつなぐ役割を担って今日に至っている。

また二〇〇一（平成一三）年には、文学部卒業生、教職員の努力によって文学部同窓会が設立された。『法政大学文学部同窓会報』の発行をはじめとして卒業生の新たなつながりを生み出していく同窓会の設立は、これからの文学部にとって大切な歴史の一ページとなった。

この間、二〇一一（平成二三）年には東日本大震災が発生し、法政大学全学において学位授与式、入学式が中止されるという事態を経験する。

二〇二〇（令和二）年からの新型コロナウイルス感染症の拡大は、法政大学だけでなく、日本

全国の社会に大きな影響を与えた。大学の授業はオンライン中心となり、学生と教員、学生相互の顔が見えない状況の中でどのような教育がありうるか、これまでに経験のない困難な状況の中で、大学教育の在り方全体が問われている。幸い、二〇二二年度には多くの授業が教室における対面授業を実施することができるようになっている。しかし、この三年間に経験したことは、大学や社会の新たなありかたを含めてさまざまな問題を投げかけており、文学部だけでなく、大学全体の問題として、未来への展望をいかに切り開いていくかが問われている。そうした自覚のもとで、新たな文学部の百年へと進みは始めている。

なお本項目の執筆に際しては、以下の文献も参照した。

『法政大学1880—2000 そのあゆみと展望』（二〇〇〇年九月、法政大学大学史資料委員会・法政大学図書館百周年記念事業委員会）

（坂本 勝）

【哲学科】

一 草創期

法政大学の哲学科は、新大学令で発足した法学部の中に一九二二（大正一一）年に創設された文学部（法学部と併せて法文学部）に、文学科と並んで設置された。つまり、ここに成立した法文学部では、法律学科と政治学科とを一括した通称法学部、文学科と哲学科とを併せた通称文学部が存在した。それぞれの学部は、法科主任、文科主任がおかれ、教授会も別々に運営され、独自性をもっていた（法学部と文学部が独立学部になったのは大戦後のことである）。また、法政大学には一九二〇（大正九）年から予科が設けられており、二一年には、東京帝国大学でカント哲学研究を中心に哲学界をリードしていた桑木巖翼の弟子であるとともに、夏目漱石門下でもある安倍能成が予科教授となり、同じく漱石門下の和辻哲郎が二二年に学部講師となっている。なお、当時は大正デモクラシーの時代であり、自由の精神が文学部および哲学科の創設に多大な影響を与えている。

一九二二（大正一一）年に法文学部の文学科と哲学科が設けられるにあたって、両学科の主任教授（二年後から文学部長が通称となり、三一年に呼称変更となる）に安倍能成が就任した。哲学科の陣容（雑誌『法政』第一号、一九二三年七月発行に掲載）には和辻教授はもちろん、ギリシア哲学研究の出隆講師も名を連ねている。なお、哲学科では哲学、倫理学、心理学の各主攻が

設けられ、哲学で安倍、倫理学で和辻が就任した。ちなみに、発足間もない二三年の文学部の学生は四〇余人で、「哲学科の学生はわずかに一名、これに聴講生が三名」（『法政大学八十年史』による）であった。

安倍主任教授は一九二四（大正一三）年四月に京城帝国大学に転出し、その後を和辻哲郎が継いだのだが、和辻もまた同年一二月に退職して、京都帝国大学に移った（和辻は一九三五（昭和一〇）年より四〇年まで講師として再び法政大学の教壇に立った）。これは創設直後の最初の危機であったが、安倍、和辻のあとには、二四年に現象学の山内得立、文化史の林達夫が講師として迎えられた。二五年に伊東吉之助、矢崎美盛（二六年に教授）そして二六年には大室貞一郎、河野与一（教授）が補充された。かくして最初の危機は乗り切った。

一九二四年はカント生誕二〇〇年にあたり、岩波書店から同年四月に発行された『思想 カント記念号』（第三〇号）に法政大学文学部の公告が掲載された。そこに和辻、安倍と並んで、心理学、倫理学史、倫理学演習担当の高橋穰や、認識論、論理学担当の山内得立、古代中世哲学担当の石原謙らが紹介されている。

なお、後に哲学科教授となる池島重信（二九年卒）は、学部主催の「文芸思潮講演会」（毎月開催）の聴講がきっかけとなって、他の私大予科終了後に法政に転校した。その後、この講演会は戦時下にあっても、工夫をこらして長く続けられた。また、法政大学の哲学会が一九二六（昭和元）年十一月に創立している。

二 大戦前の黄金時代

はやくも一九二七（昭和二）年三月に河野与一は東北帝国大学へ、矢崎美盛は九州帝国大学へ転出した。そこへ同年に、『パスカルに於ける人間の研究』などで著名であった三木清が哲学専攻主任として、その翌年に三木と京都帝国大学同窓の谷川徹三が哲学科教授に着任する。二八年にはインド哲学の矢吹慶輝、ギリシア哲学の田中美知太郎が講師となる。

ところが一九三〇（昭和五）年五月に、マルクス主義哲学を喧伝していた三木清が日本共産党に資金を提供したとの嫌疑で検挙され、七月に治安維持法違反で起訴され、一月初旬まで未決監に拘留された。この間、三木の代講は谷川が務めたが、有罪判決（ただし執行猶予）の後に三木は公式には教職を退くが、谷川の代講として講義を続けることとなった。翌年に科学論・イデオロギー論で著名な戸坂潤が講師として迎えられて三二年に教授となる。三三年には、特殊研究に金子武蔵、東洋哲学史に津田左右吉、美術史に板垣鷹穂が講師陣に加わっている。このように、とりわけ京大の西田幾多郎、田邊元、波多野精一らに学んだ、山内、林（達夫）をはじめ、三木、谷川、田中、戸坂といった新進気鋭の第一線哲学者が迎えられた点で、京都学派の色彩が強くなった。なお、三木清が釈放された後には、谷川徹三、仏文学者の豊島与志雄らの教授が中心となって教授会が三木の復職を決議した。これとは別に哲学科卒業生、学生らは、自由主義研究会（豊島会長、一九三三（昭和八）年の京大「滝川事件」の抵抗運動の中で結成）の総会の席上で復職決

議を行い、法政大学新聞もこれを支援した。さらに学外からは、本学の教授、卒業生が多く参加していた「学芸自由同盟」の応援、京都帝国大学の西田幾多郎教授による文部省幹旋も行われた。この運動は、三四年まで続けられたが、文部省は復職を許可しなかった。

一九二九（昭和四）年五月一六日、六月一五日、七月六日に、朝日講堂で公開された文学部主催の講演会では、哲学専攻（主攻）からは谷川が「芸術としての哲学、哲学としての芸術」、三木が「観念形態論」という演題で講演し、好評を博した。三〇年九月には、東京日日新聞「学界新秋」で「法政文科」が紹介され、教授・講師の人物評や、「澆刺とした若さ」で「学界をリードせんとする概のある」学風の紹介がなされた。これをもとに翌三一年に出版された大塚虎雄著『学界異聞』（先進社）では、「各大学文科物語」の冒頭に「法政大学文学部」が二七頁にわたって紹介されており、哲学専攻にかんしては三木清や谷川徹三について頁を割いて詳しく語られている。⁽¹⁾

一九三一（昭和六）年に法政大学哲学会は『哲学年誌』を岩波書店から発行した。本誌は谷川徹三が編集し、三木、戸坂、板垣らの他に、哲学科を卒業して間もない池島重信や、鶴谷研三郎（三二年卒、後に本学教授）も執筆し、好評であった。三二年六月二日には哲学会主催で西田幾多郎を迎えて春期特別講演会を開催した。千名を収容しうる第二講堂は満員の聴衆によって埋められ、学外聴講者を断るほどだったという。さらに西田の講演会は翌三三年九月に「行為の世界」というテーマで隔日三回にわたって催され、これも多数の人が聴講できないほどであった。

一九三三（昭和八）年十一月に予科を中心にいわゆる「法政騒動」が始まり、騒動は翌年一月



哲学会春期特別講演会（1932年）出講の西田幾多郎博士を囲む茶話会 中央が西田、向かって右隣が野上豊一郎、左隣が松本潤一郎、左側奥から谷川徹三、三木清、立っているのが池島重信（写真は兵庫県たつの市の霞城館所蔵）

にまで至った。⁽²⁾ この騒動は「学生たちのストライキや、予科教員の大多数である四十七、八人の総辞職などがあり、新聞などでも連日大きく取扱った⁽³⁾。こうしたなか一月末には学期末試験をとともかく実施し、一挙に三〇余名の教授・講師が新たに就任することで、三月末には騒動の一応の決着をみた。

ちなみに、この騒動に应じて田中美知太郎は予科に辞表を提出し、一九三四年までドイツ語講師を務めて、予科を解職された（ただし文学部講師は継続した⁽⁴⁾）。戸坂潤はこの騒動で、予科教授一同とともに予科を辞職したが、三四年八月には「思想不穩のかど」で文学部教授も解職となった⁽⁵⁾。戸坂は以後教壇に立つことはなかったが、戸坂が三枝博音や服部之総らと三二年に創設した唯物論研究会には、法政の教授、学生が多く参加し、学内には唯研会員を中心とする「二水会」という団体も存在した。その後一九三八年に戸坂はいわゆる

「唯物論研究会事件」によって検挙された。（戸坂は四四年に懲役三年の刑が確定、四五年八月九日に獄死した。別に三木清は四五年、治安維持法違反の被疑者高倉テルをかくまったとして、収監されて九月二六日に獄死した。）

なお、一九三五（昭和一〇）年から文学科、哲学科に限り女子学生の入学が許可された（すでに一九三二年から聴講生としての女子学生の入学は認められていたが⁶）。女子専門学校卒業がその入学資格であった。

三 戦時下

文学部経営が厳しいなか、その打開策として一九三七（昭和一二）年に開設された法政大学文化講座には、佐藤信衛（哲学史概論）の名前が見られる。この文化講座は盛況を呈したが、一年継続して経営的には不首尾に終わった。三八年一月、文学科を国文学科、英吉利文学科、独逸文学科、仏蘭西文学科とし、哲学科を哲学科、心理学科、社会学科とすることが協議され、専攻という呼称が学科となった。

文学部の学生数の減少に伴う経営合理化の波のなかで、日中戦争下の文化政策にも対応して、文学部は一九四〇（昭和一五）年度から文芸学科と文政学科に改組された。文政学科は、従来の哲学科にあたるもので、倫理学専攻と心理学専攻とに分かれ、哲学、倫理学、心理学、教育学の専門分野も研究しうるとされた。一九四一年にはかつて「法政騒動」で退職した野上豊一郎（三

八年に文学部名誉教授）が文学部長を委ねられた。この年の四月には文政学科に五六名の新入生が迎えられた。

一九三九（昭和一四）年七月に、哲学史、印度哲学を担当した矢吹慶輝が死去し、四〇年に佐藤信衛が講師に就任した。大戦下にあつて哲学科出身者たち、池島重信が四一年に、その翌四二年に予科から移籍した榊田啓三郎が、さらにその翌四三年に長谷川鉉平が講師となった。野上部長の下での文芸学科・文政学科共通科目担当者（四二年）には、谷川徹三（哲学概論、文化政策）、田中美知太郎（哲学史）、池島重信（新聞学・芸術工学）、佐藤信衛（科学史）、松本潤一郎（社会学概論）、林達夫（西洋倫理、同演習）らの名前が見られる。文芸学科はさらに国文学、英文学、独文学、仏文学の各専攻に、文政学科は倫理学と心理学の各専攻に分かれていた。なお、三九年四月、学部一年生から軍事教練が必修となり、両学科とも週一二時間の軍事教練を行ったことが文部省へ届け出られている。そして戦禍が厳しくなるなか、四五年には全面的な授業停止に至る。この間の一九四一（昭和一六）年七月に『文濠』が文芸学会から創刊され、第三号の執筆者には福田定良（本名は瀬川行有、四〇年哲学科卒）の名前もある。これは年三回（定価六〇銭）の刊行であつたが、四三年には紙不足等で廃刊となった。

四 戦後復興期

一九四六（昭和二一）年二月に野上文学部長が学長（四七年三月総長）に就任した。同年七月

一六日から二〇日まで、矢内原伊作の世話で「一〇人足らずの法政大学哲学科の学生」が北軽井沢の田辺元から哲学の講義を受けた。⁷⁾同年一二月以来、文学部は法文学部の分科であることをやめて、法政大学文学部として独立し、四七年四月に哲学科、国文学科、英文学科の三科で再出発した。哲学科は谷川徹三教授が中心になり、NHKの「読書案内」の司会者をしていた池島重信が二月に教授として復帰し学長秘書となる。その他に、金子武蔵、出隆、下村寅太郎、林達夫らの大家が加わり、高等師範部長、図書館長の井本健作教授も出講し、新進気鋭の矢内原伊作が講師となった。また社会学の松本潤一郎、喜多野清一、森東吾も専門部・予科から出講し、瀬川行有（福田定良）が講師に迎えられた。四八年には谷川が文学部長となり、民族学の石田英一郎、キルケゴール研究者で、三木清、田中美知太郎らに教えを受け、後に岩波書店の三木清全集の編集にもあたった榊田啓三郎（予科教授）が哲学科教授となり、社会学の斎田隆、文化史の佐々木昌義（成蹊大学教授）などの校友が講師に加わり、ゲシュタルト心理学の千輪浩、新聞学の瓜生忠夫なども出講した。この頃、戦前から活躍した出隆、林達夫、留岡清男、波多野完治、喜多野清一、森東吾などが退き、他大学に転出した。

一九四八（昭和二三）年五月には、それまで野上総長が兼務していた文学部長に谷川徹三が就任し、第二文学部長も兼務した。四九年四月の新学期への転換とともに昼夜二部制となり、第一文学部が引き続き哲学科、日本文学科、英文学科の三学科となった。この後、谷川学部長は五八年三月まで一一年間、学部長の職に留まることとなる。谷川は学部長在任中の五〇年に、戸坂潤の蔵書（戸坂潤文庫一九二三冊）、五七年に、三木清の蔵書（三木清文庫八九九四冊）を榊田啓

三郎教授らの協力で購入し、その後、和辻哲郎の蔵書（和辻哲郎文庫五一三二冊）の購入についても尽力した。

一九四九（昭和二四）年秋には法政大学七〇周年記念の行事の一つとして、学生自治会が主催した「三木、戸坂追悼講演会」が開催された。当時学生たちは、機会あるごとに「三木・戸坂の伝統を守れ」という叫びを上げており、会は成功であった。会では谷川、本多、榊田、乾の各教授と、羽仁五郎、古在由重らの四時間にわたる講演と、別室での三木・戸坂両氏の原稿、著作、獄中通信、愛用品などの展示も行われた。それと並んで、連合国軍最高司令官総司令部民間情報教育局（CIE）教育顧問のW・C・イールズ博士が、図書館講堂で開催された法政大学七〇周年記念式典の祝辞で、反共教育政策に沿って進歩的教授の追放（レッドパージ）を語った。これを機に、法政大学では「試験ボイコット闘争」が設定され、文学部では九月二六日に哲学科、日本文学科を中心に試験が阻止された。

一九五〇（昭和二五）年に研究助手制度が設けられ、哲学科では長谷川克彦が研究助手に採用された。その一方で、五〇年に矢内原伊作が、五一年に榊田啓三郎、石田英一郎が、それぞれ他大学の教授として転出し、退職または兼任となった。これと連動して、五一年に佐藤信衛、瀬川行有が教授となり、五二年に斎田隆が専任講師（六五年助教授、六八年教授）になった。また、五一年以降、社会心理学に第一教養部の乾孝教授が出講し、文化史に山本新が加わり、古典語に呉茂一講師が再び出講するようになった。なお、戦時中に予科長を務め、予科を中心に倫理を担当するなどし、戦後に監事として野上學長を支えた井本健作が、五四年に定年退職し、名誉教授

に推挙された（六四年に他界した）。

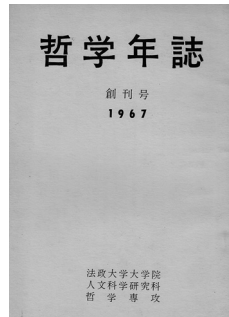
戦後の哲学科では心理学の専門科目が開講されてきた。心理学科開設が目標とされたが、「校地」が文部省基準に満たず、実質的な推進の道を取り、一九六七年に臨床心理学専攻の上山碩専任講師（七一年助教授、七七年教授）が哲学科に増員された。そして六九年に教育学科に「心理学コース」が設けられ、上山碩助教授は七三年に哲学科より心理学コースへ移籍した。

一九五二（昭和二七）年五月一日にデモ隊と警察部隊とが衝突したいわゆる「血のメーデー事件」で、哲学科三年の近藤巨士が死去した。これが戦後の学生運動で初の死者となった。この年に哲学会は、石田英一郎、池島重信らを中心に、ラルフ・リントン（Ralph Linton）編の『世界危機に於ける人間科学』（実業之日本社）の共同翻訳を行った。

一九五三（昭和二八）年に谷川徹三が、コペンハーゲンで開催された、世界連邦のための世界運動大会に出席し、さらに五六年にはアジア連帯文化使節団の団長としてインドその他のアジア諸国を文化交流のために訪れた。五七年には池島重信（通信教育事務局長）がカナダで開催された国際通信教育会議に出席した。なお、本学の海外留学制度が確立され、五七年には瀬川行有教授が一年間ドイツに留学した。

その後のなみに、一九五九（昭和三四）年（五月一日現在）の文学部の講座と担当教員のなかには、谷川徹三（哲学特殊講義、哲学演習、芸術学）、佐藤信衛（科学概論、哲学演習、哲学特殊講義）、池島重信（倫理学、社会思想史、西洋哲学史）、瀬川行有（哲学概論、宗教学、哲学（教職）、西洋哲学史）の名前があり、また、文学部兼任教授として榊田啓三郎の名前もある。

一九五一（昭和二六）年には大学院修士課程、五五年には博士課程が開設され、他専攻と並んで哲学専攻が人文科学研究科の下で設置された。ちなみに五九年度の大学院教員は、谷川徹三教授、池島重信教授、佐藤信衛教授に加えて、石田英一郎兼任教授、榊田啓三郎兼任教授であった。遅れて一九六七年には哲学専攻から『哲学年誌』が創刊され、池島重信教授が創刊のことばを寄せ、大久保哲郎、久保田信之（後に学習院女子大学教授）、側瀬昇らが寄稿している。



『哲学年誌』創刊号

なお、谷川、池島両教授が長く学内行政面に携わることによって、学科内の負担が、瀬川、佐藤、斎田の諸教授や、兼任の榊田教授に重くなっていた。一九六六年四月、前年に総長を辞任した谷川教授が退職し、名誉教授に推挙された。

ところで、戦後哲学科の卒業生数は、一九五一（昭和二六）年度に五名であったのが、五六年度に一〇名となり、その後概して増加し続け（六二年度には一七名に急減したが翌年度三一名に回復）、六九年度に八二名となり、ほぼこの水準で七七年に至り、七八年から百名を越えることになる。

一九六八（昭和四三）年に「大学紛争」が激化しはじめた。この年の四月に、当時理事であった池島重信教授が学部長に就任した。六九年四月に大学の部分的封鎖と占拠が始まり、学内が騒然としてきた時に、池島学部長が病氣になり、三井嘉都夫教授会主任が学部長代理となって難局にあたった。

大学紛争のなか、一九六九（昭和四四）年四月、哲学科には分析哲学の齊藤哲郎助教授（七一

年教授）が補充され、七〇年三月に池島重信教授（名誉教授となり、九一年逝去）と、瀬川行有教授（二〇〇二年逝去）が退職し、矢内原伊作が教授に復帰することとなった。

一九七一（昭和四六）年には哲学科のいわゆる「助手問題」が起きた。これは、同年三月に「任期満了」により「職を解」かれた哲学科助手が、「任期満了」を不服として、大学に対して「地位保全仮処分申請」の訴訟を起こしたにかかわる一連の事件である。この裁判は、七二年三月末に和解に至ったが、波紋は大きかった。同助手は大学紛争のなか、訴訟以前にも、「労学共闘」と称する少数集団とともに七〇年度期末試験妨害などをしていたが、四月に新学期に入ると、文学部講義妨害その他の「実力闘争」を始め、これは裁判進行中の秋以降の授業にかけても継続された。この「助手問題」以降に哲学科をはじめ文学部では研究助手を採用しない方針となった。七二年三月には、定年延長中の佐藤信衛教授が退職して名誉教授となった（八九年逝去）。

五 大学紛争からの再建期

一九七〇（昭和四五）年に矢内原伊作教授が復職すると、斎田隆主任教授、梶田啓三郎兼任教授らとともに、まず教育課程の大幅改訂を行い、選択科目を増加させた。そして七二年に「助手問題」が解決すると、主任に矢内原教授があたり、西洋哲学史などで知られる山崎正一をはじめとする著名な講師陣を招いた。七三年四月にカント哲学研究の浜田義文（濱田義文）、ギリシア哲学、西洋古典語の加来彰俊の両教授を迎え、翌七四年四月に山崎正一を教授として迎え、充実

した態勢を整えることができた。山崎教授は、七五年には日本哲学会の大会を法政大学で開催し、七六年一月から七七年五月まで日本哲学会委員長を務め、さらに七七年四月から七八年三月まで文学部長を務めた。なお、八〇年四月から八一年一月には矢内原伊作教授が学部長を務めた。

一九八〇（昭和五五）年には八〇年館が完成し、研究環境が向上した。この年の哲学科の教授陣は、学部長の矢内原伊作、斎田隆、斉藤哲郎、浜田義文、加来彰俊、山崎正一であった。八二年四月には学部長に加来教授が就任、八三年四月には浜田教授が大学院議長に就任（八五年三月まで）した。八四年三月に加来教授が理事に選出され、五月より常務理事を務めた（常務理事は八六年九月で辞し、理事を八七年四月末まで務めた）。なお、浜田教授は八五年五月から八八年三月まで法政大学図書館長を務めた。

一九八一（昭和五六）年一月二四日に私学会館で「法政哲学会」創立総会が、五七名の会員を集めて開催された。⁽⁸⁾これは過去に存在した哲学会が、事実上活動を停止しており、規約の紛失等によりその性格づけも不明となっていたため、新たな規約のもとに「法政哲学会」として再出発をしたものである。法政哲学会会長には山崎正一教授が就任した。また、同年一月二二日に、法政哲学会と法政大学国際交流センターの共催により、カント研究者として世界的に著名なF・カウルバッハ（西ドイツ、ミュンスター大学名誉教授）の特別講演会が開催された。⁽⁹⁾講演会の司会には浜田義文教授があたった。

一九八一（昭和五六）年三月に斎田隆教授（二〇〇九年逝去）、八三年三月に山崎正一教授（九七年逝去）が退職し、大学院の人文科学研究科哲学専攻を母体として六七年以降刊行されている

『哲学年誌』の第一五号は「山崎正一先生退職記念特輯号」としている。八三年四月には、デカルト研究の湯川佳一郎教授を第二教養部から招聘、また同時にカント研究の牧野英二専任講師を補充した。八九年三月に矢内原伊作教授が定年退職となり、『哲学年誌』第二〇号を「矢内原伊作教授退職記念号」としている。また同年三月に斉藤哲郎教授が退職をしている（二〇一八年逝去）。八九年度には矢内原教授が名誉教授に推挙され、同年八月一六日に矢内原名誉教授が逝去した。そして、九三年三月に浜田義文教授、加来彰俊教授が定年退職を迎えた（浜田名誉教授は二〇〇四年逝去、加来名誉教授は二〇一七年逝去）。『哲学年誌』第二一号では「斉藤哲郎教授退職記念」が特集され、また同号では「追悼・矢内原伊作先生」も掲載された。そして第二三号では九〇年二月に亡くなった「榊田啓三郎先生を偲んで」が掲載され、第二四号には「浜田義文・加来彰俊教授退職記念」の特集が組まれている。なお、定年退職後に浜田義文名誉教授は日本カント協会会長を務めた。

一九八九（平成元）年四月にドイツ哲学の星野勉助教授（九二年教授）、フランス哲学の安孫子信講師（九二年助教授、九六年教授）、九三年四月にドイツ哲学の菅沢龍文専任講師（九六年助教授、二〇〇二年教授）、九四年四月に英米哲学の中釜浩一専任講師（九七年助教授、二〇〇三年教授）、九五年四月に古代ギリシャ哲学の奥田和夫専任講師（九八年助教授、二〇〇三年教授）が哲学科に迎えられた。なお、九〇年五月から九三年四月の三年間、湯川佳一郎教授が法政大学理事を務めている。また、九五年四月から九七年三月にかけて牧野英二教授が文学部長を務めた。そして、九七年四月から九九年三月まで星野勉教授は法政大学学生部長を務め、さらに、九八年

七月から二〇〇〇年三月まで牧野英二教授は法政大学教学改革本部会議議長を務めた。

一九九〇（平成二）年一〇月二〇・二一日の日本倫理学会第四一回大会の開催校を浜田義文教授が引き受け、同大会を法政大学六二年館で開催した。九三年には千代田区教育委員会との共催で千代田区民講座が「哲学と人生」という統一テーマのもとに五八年館八五八番教室で行われ、加来彰俊名誉教授、牧野英二教授・星野勉教授・安孫子信助教授・湯川佳一郎教授・浜田義文名誉教授が講師を務めた。なお、九六年度在外研究でイギリスに滞在した星野勉教授は、法政大学ロンドン分室長を務めた。そして九八年三月には湯川佳一郎教授が定年退職となる（二〇〇八年逝去）。これについては、同年三月に「湯川佳一郎教授退職記念号」として『哲学年誌』第二九号が刊行された。九九年四月には法政大学とベルリン・フンボルト大学との間の交換研究員制度により、同制度を用いた前年夏の菅沢龍文助教授の訪独に応じて、フランクフルト学派の哲学者で著名なH・シュネーデルバッハが法政大学に來日し、講演を行った。

六 ミレニアム新世紀の刷新

二〇〇三（平成一五）年三月に法政大学第一、第二教養部が改組され、新たに設置された学部に属していない教養部教員の既存学部への分属が始まった。これにより、〇三年四月に哲学科では新たに次の六名の教員が加わった。すなわち、近・現代ドイツ哲学（とりわけフランクフルト学派や一八世紀ドイツ思想が専門）の笠原賢介教授、近代ドイツ哲学（とりわけヘーゲル哲学や



哲学科主催・公開シンポジウム（2005年）「新たな生の哲学のために～ニーチェ徹底討議」（スカイホール）

ニーチェ哲学が専門）の山口誠一教授、フランス哲学（とりわけバタイユの哲学研究が中心で、ゴシック建築、シュールレアリズム研究に及ぶ専門）の酒井健教授、法哲学を中心に幅広い研究に携わった竹本健教授、数理論理学（とりわけ証明論が専門）の安東祐希助教授（〇五年教授）、そして日本文学・思想（とりわけ芥川龍之介などのアフォリズム文学・思想が専門）のD・ハイデンライヒ教授が加わり、哲学科の専門科目の多様化が進んだ。

哲学科に入学したのに、哲学科の科目が思うようにとれないという従来からの学生からの不満に対応して、専門科目の学習年次を早め、その一方で初年次教育も推し進める、という方向でカリキュラム改革が進んだ。当初は初年次教育として「基礎文献講読ゼミ」を星野勉教授と安孫子信教授が担当し、その後にこれは哲学科生向き「基礎ゼミ」に変わった。また、多様な哲学が学べる「哲学特講」科目の履修可能年次が三年次以上であったのを二年次以上に引き下げた。さらにセメスター制度の導入に伴い、「哲学特講」科目も年間科目からセメスター科目に変えることにより、担当教員が倍増し、科目内容の多様化が進んだ。

二〇〇五（平成一七）年一〇月二日に公開シンポジウム「新たな生の哲学のために～ニーチェ徹底討議」をBT・

スカイホールで開催、山口誠一教授、笠原賢介教授、酒井健教授がパネラーとなり、牧野英二教授がパネラーと司会を兼ねた。また、一八年六月一八日には公開シンポジウム「プラトンと現代」をゲート棟G四〇一教室で開催、内藤淳哲学科主任の開会挨拶の下、奥田和夫教授、中釜浩一教授、星野勉教授、笠原賢介教授、山口誠一教授、酒井健教授、牧野英二教授が登壇した。

二〇〇〇（平成一二）年以降も大学の要職を務める哲学科教員が相次いだ。安孫子信教授は、〇一年四月から〇三年三月まで文学部長を務め、さらに〇六年四月から〇八年三月まで、法政大学全学自己点検評価委員会委員長を務め、〇八年四月から一四年三月まで、法政大学国際日本学研究所所長を務めた。星野勉教授は〇三年四月から〇五年三月まで法政大学文学部長を務め、また〇四年一二月から〇八年三月まで法政大学国際日本学研究所所長を務め、さらに〇八年四月一一年三月まで法政大学常務理事を務めた。牧野英二教授は〇八年四月から一〇年三月まで法政大学個人情報保護委員会委員長を務めた。〇九年四月から一一年三月まで中釜浩一教授、一五年四月から一七年三月まで奥田和夫教授が文学部長を務めた。さらに奥田和夫教授は〇九年二月から一〇年三月まで「明日の法政を創る」審議会委員として「学部教育の充実化（学士力の質保証）」作業部会座長を務めた。また、中釜浩一教授は一四年一〇月から一七年三月まで教育開発支援機構長を務め、全学的な成績の標準化（現在の一二段階評価）および一〇〇分授業の実現をとりまとめた。安東祐希教授は〇五年四月から〇八年三月に学生部長を務め、二一年四月から文学部長となり現在に至る（任期二三年三月まで）。

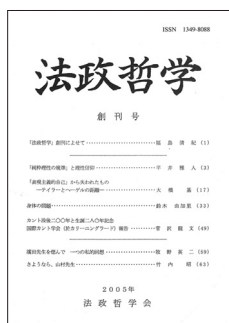
二〇〇九（平成三一）年二月には哲学科生のフランス・アルザス研修が安孫子信教授のゼミを

中心に始まり、一一年二月まで三年間菅沢龍文教授が協力した。その後一一年度からは二月のアルザス研修を伴う「国際哲学特講」科目が安孫子教授の手で始められ、毎年二月にアルザス研修が続けられたが、コロナ禍では現地研修はできずオンライン研修により実施、現在に至る。なお、安孫子信教授は、EUエラスムス・ムンドゥス「ユーロワイロソフィー」法政プログラム実施責任者として、〇九年四月から一七年三月まで、法政大学大学院人文科学研究科・哲学専攻で同プログラムを実施した。

全国学会での哲学科教員の活躍も著しく、牧野英二教授は、日本デイルタイ協会会長を二〇〇三（平成一五）年六月から一〇年一月まで務め、〇七年四月から一二年三月まで日本カント協会会長を務めた。星野勉教授は日本イギリス哲学会会長を〇八年四月から一〇年三月まで務めた。安孫子信教授は、一九年九月から二二年八月まで日仏哲学会会長を務めた。山口誠一教授は、〇六年九月から〇八年九月に新プラトン主義協会会長、一二年四月から一七年三月に日本ヘーゲル学会代表理事を務めた。

教員人事では教員年齢の若返りが求められた。二〇一三（平成二五）年三月に竹本健教授が退職したのに応じて、一三年四月に法哲学・進化倫理学を専門とする内藤淳准教授（一八年教授）が着任した。また、一九年三月に牧野英二教授と星野勉教授が揃って定年退職となったので、一九年四月に日本思想および京都学派哲学が専門の西塚俊太専任講師（二二年准教授）と、現代ドイツ哲学（とりわけハイデガー哲学が専門）の君嶋泰明専任講師（二二年准教授）が着任した。さらに続いて二二年三月に安孫子信教授と笠原賢介教授が定年退職となったので、二二年四月に

フランス哲学（とりわけデカルト哲学が専門）の佐藤真人准教授と、ドイツ哲学（とりわけフランクフルト学派とキルケゴール哲学が専門）の吉田敬介専任講師が着任した。これらの人事により、哲学科の教員の若返りが実現するとともに、若きエネルギーに溢れた学科に変貌しつつある。哲学科学生入学定員については、一九七六（昭和五一）年度から臨時定員増で二〇名増（定員一〇〇名）となっていた定員枠が九九年度になくなって八〇名となり、二〇〇三（平成一四）年度の心理学学科創設にあたっては、哲学科から一〇名の定員を拠出し、一三年度から七名加わり七名が続いていた。そこに二一年度から留学生用外枠二名が加わり、現在七九名である。



『法政哲学』創刊号

大学院では、大学院人文科学研究科哲学専攻で院生が主体となつて一九六七（昭和四二）年以来刊行が続いていた『哲学年誌』であるが、課程博士号をとるのが一般化するなか、編集に時間をとれる院生がいなくなり、二〇一六〜一八年度号が刊行されず、一九年度の第四八号をもつて終刊となった。その一方で、法政哲学会で一九八二年から発行されてきた「法政哲学学会会報」が二〇〇五（平成一七）年三月から冊子化して『法政哲学』となり、ここに哲学科教授退職記念の最終講義が特別寄稿として掲載される運びとなった（第一六号に牧野英二教授、星野勉教授、第一八号に安孫子信教授、笠原賢介教授の最終講義が掲載されている）。

ところで、一九七〇（昭和四五）年以降に、哲学科以外の法政大学専任教員として活躍している、文学部・哲学科出身者および大学院・哲学専攻出身者は、大まかな研究対象を添えて記すと、

次のとおりである。（なお「定年退職」および「名誉教授」の記載については、判明した場合のみ記した。）

長谷川克彦（フランス哲学、第二教養部名誉教授、九六年三月定年退職、二〇〇六年逝去）

原田 熙史（美学、第二教養部教授、〇一年三月定年退職）

城戸 朋子（音楽社会学、社会学部名誉教授、〇六年三月定年退職）

竹内 昭（カント哲学や西田哲学、論理学、法学部名誉教授、一一年三月定年退職）

後藤 浩子（イギリス社会思想史、経済学部教授）

森村 修（フッサール現象学および応用倫理学、国際文化学部教授）

さらに同様に、一九七〇（昭和四五）年以降に他大学や高専、研究機関の専任研究者として活躍している文学部・哲学科出身者および大学院・哲学専攻出身者を列举すると次のようになる。

伊藤 友信（日本思想、芝浦工業大学名誉教授、九六年三月定年退職、〇七年逝去）

廣田 繁（日本思想、芝浦工業大学名誉教授、二〇〇〇年三月定年退職、二一年逝去）

村松仙太郎（文化形態学、いわき明星大学名誉教授、九三年三月定年退職、故人）

久保田信之（教育学や社会学、学習院女子大学教授、〇七年三月定年退職）

吉田 妙子（旧姓…塚原）日本語研究、台湾・国立政治大学教授、一五年退職）

- 進本 眞文（ホワイトヘッド哲学、九州共立大学助教授、一三年三月退職）
- 松山 壽一（カント哲学・シェリング哲学、大阪学院大学名誉教授、一九年三月定年退職）
- 福島 清紀（ライプニッツ哲学、富山国際大学教授、一六年逝去）
- 荻間 寅男（近代イギリス哲学、東洋学園大学教授）
- 石川 伊織（ヘーゲル哲学、新潟県立大学教授、二二年三月定年退職）
- 木村 博（ヘーゲルおよびフイヒテ哲学、甲南大学教授、二二年三月退職）
- 大東 俊一（ベルクソン哲学および日本の伝統文化論、人間総合科学大学教授、一六年逝去）
- 福井 雅彦（ブーバー哲学・生命倫理、愛知医科大学教授）
- 澤田 直（フランス現代思想、立教大学教授）
- 加藤 久典（イスラム研究、中央大学教授）
- 大藪 敏宏（ヘーゲル哲学、富山国際大学教授）
- 小野原雅夫（カント哲学、福島大学教授）
- 小林亜津子（ヘーゲル哲学および医療倫理学、北里大学教授）
- 片山 善博（ヘーゲル哲学、日本福祉大学教授）
- 鈴木 覚（ヘーゲル哲学、長岡高専教授）
- 弓山 達也（宗教社会学、東京工業大学教授）
- 山本 英輔（ハイデガー哲学、金沢大学教授）
- 堀 肇（フーコー哲学、東京福祉大学准教授）

鈴木 裕輔（清沢満之や石橋湛山、名城大学准教授）

齋藤 元紀（ハイデガー哲学、高千穂大学教授）

大森 一三（カント哲学・教育哲学、東京学芸大学特任准教授）

戸谷 洋志（ハンス・ヨナス哲学、関西外国語大学准教授）

小暮 さき（生政治、ベルギー Asbirta（社会教育実践研究センター）研究員）

小井沼広嗣（ヘーゲル哲学、岐阜聖徳学園大学専任講師）

郭 珺（現代政治哲学、上海大学東京校専任講師）

注

（1）『学界異聞』については、宮島光志富山大学教授から情報提供を受けた。国会図書館デジタルライブラリーで閲覧複写可能。

（2）田中美知太郎『時代と私』（新装版）文藝春秋、一九八四年、二六四頁

（3）同右、同頁

（4）同右、二五一、二六八頁

（5）『戸坂潤全集』第五巻、勁草書房、四九九頁（略年譜）

（6）この女子学生中、仏文科の片岡美智は三九年卒業後、同年六月にフランス政府給費留学生に選ばれた。

（7）矢内原伊作「田辺先生の思い出」『田辺元 思想と回想』武内義範、辻村公一、武藤一雄 編、筑摩書房、一九九一年、三二七～三一八頁）

(8) 『法政哲学会会報』第一号、法政哲学会発行、一九八二年四月、一頁（奥田和夫教授のメモにより、創立総会の日付は修正した。）

(9) 同右、四頁

（菅沢 龍文）

【日本文学科】

一― 法文学部時代（一九四五）

・国文学主攻の創成

日本文学科は、法文学部創立とほぼ同時期に開設され、以来哲学科・英文学科とともに法大文学部の中核的存在を担ってきた。

一九二二（大正一一）年、それ以前の法学部を改組して法文学部が創立された際、文学科と哲学科が設置された。当時からこの二学科を一般に〈文学部〉と称したといわれており、本稿でもそれに倣う。このうち文学科は当初英文学・独文学・仏文学の三つの主攻（専攻）に分かれており、のちの日本文学科である国文学主攻がそれらに加え開設されたのは二年後の一九二四年九月であった。文学部主任は安倍能成が二年、次いで和辻哲郎が務めたが、和辻も二四年には退職し、後任に小山龍之輔（古代文学、二二年教授）が就任、創成期の文学部と国文学主攻の基礎を固めた。

一九二三年の文学科には、〈必修科目〉として「文学概論」「哲学概論」「言語学」「音韻学」「美学」「詩学」「小説研究」「戯曲研究」「西洋古典文学研究」「国文学」「文芸思潮史」「批評史」、それに英独仏の各文学・語学・演習、「文学特殊研究」が置かれ、〈選択科目〉として「古典語」「歴史哲学」「文化史」「美術史」「教授法」などが開かれていた。翌年の国文学主攻開設以後は、「国

文学研究法」「国文学史」「国語学」「国文法」「国文学特殊研究」「国文学演習」「文化史」「支那文学」「支那思想史」「仏教概説」「外国語学」「文学概論」「言語学」「美学」「西洋哲学史概説」「教授法」「教育学」が国文学主攻の必修科目となり、当初から現在の日本文学・漢文学・言語学を柱とするカリキュラムが組まれていたことが分かる。

このカリキュラムは、昭和に入って若干の変更を経つつ（例えば、一九三一（昭和六）年には「仏教概説」がなくなり、「東洋哲学（印度）」「東洋哲学（支那）」が追加される、三三年には「国文学研究法」の廃止、「西洋哲学史概説」の選択科目への移行など）も、昭和一〇年代半ばまではほぼ維持されてきた。その間、後述するような「黄金時代」を形作る教授陣を擁し、特に古典文学において、時代を画する新しい研究方法論を樹立し、発展させようとした功績は、特筆に値する。それが、戦時体制の強化によって、徐々に後退、衰退していったことは、歴史のやむない流れとはいえ、後世に記憶されてしかるべき、忘れてはならない経験である。

創成期の文学科には漱石門下の野上豊一郎、安倍能成、豊島與志雄、森田米松（草平）、和辻哲郎らが教鞭をとっていたことはよく知られているが、先述のように安倍・和辻は早い段階で他大学へ移り、また豊島・野上・森田は予科教授兼任であり、内田榮造（百閒）は予科教授だった。（後のいわゆる《法政騒動》には、この学部と予科の対立という側面が多分に含まれていたが、これについては学部史その他に譲る。）彼らはみな国文学主攻の教員ではなかったが、能楽研究者としても著名である野上をはじめ、文学科創成に多大な影響を与えた人々であると同時に、当時は学科を超えた講義の受講が常態であったこともあり、ここに記した。というのも、彼らや出

隆・田部重治・新城和一らが築いた「自由主義的な潮流」や、「大正デモクラシーの思想・文化上の一翼として、ジャーナリズムを通して広い大衆の知的生活に結びつこうとした」文学科のありようが、国文学主攻の生成基盤にあったことが明らかだからである。と同時に、騒動において一方の主役である森田米松側に立った小山龍之輔が三三年に専任を辞職するなど、国文学主攻に与えた影響も大きかった。

・戦前の『黄金時代』——〈歴史社会学派〉の活躍

一九三〇（昭和五）年代の国文学主攻では、藤村作・和田萬吉・土屋文明・西尾実らが兼任講師として教鞭をとっていた。専任教授としては、その藤村・和田が呼んだとされる近藤忠義（近世文学、三四年教授）・片岡良一（近代文学、三四年教授、一旦離れて四六年再任）が加わり、所謂『戦前の黄金時代』を築いた。近藤と片岡は、前任校を思想問題で辞めて、法政に迎えられたが、いうまでもなく三三（昭和八）年は小林多喜二の虐殺とそれを契機として社会主義・共産主義陣営が総転向を余儀なくされた年である。こうした時代の悪流の中で、彼らを迎え入れたのが、法政の法文学部であった。

国文学主攻における『黄金時代』の内実を知るには、いわゆる〈歴史社会学派〉としての活動を見ることが肝要である。

一九三四（昭和九）年、国文学者岡崎義恵が主唱した〈日本文芸学〉の樹立という国文学研究のあり方に対して、近藤忠義・石山徹郎らによって主導される〈歴史社会学〉的方法が提示され、

両者の対立と論争が明治以降の国文学研究に新しい視野を開くこととなった。両者はともに、国文学における伝統的な文献学的・書誌学的国文学研究（文学作品に対する外部的なアプローチ）およびそれへの反動として登場した鑑賞主義（文学作品の内容を印象批評的に鑑賞する態度）を批判しつつも、その方法論において、著しい違いがあった。

詳述するゆとりはないが、岡崎は文芸を文芸たらしめる「文芸性」の探求こそが文学研究の中心的意義であり、それは日本民族に特有な美の様式と呼ぶべきものであるとし、科学としての文芸学を提唱した（岡崎『日本文芸学』一九三五）。けれども、民族に特有な美の様式²という言葉方からもわかるように、そこには主観性を脱し切れていない面があった。これに対して、岡崎より早く文学における法則性の解明を科学的にめざす〈文芸学〉の樹立を提唱していた石山徹郎『文芸学概説』（一九二九）、文学を歴史的現象として扱い、作家・作品の歴史的な意味を考えることに〈文芸学〉の意義を見いだした風巻景次郎「日本文芸学の発生」（一九三一）らの思想を継承する形で、文学作品を歴史的・社会的なパースペクティヴの中に位置づけようとする〈歴史社会学派〉を形成したのが、近藤忠義・熊谷孝（当時助手）ら法政国文学主攻の研究者たちと、その周辺にいた石山や永積安明（中世文学、三九年兼任講師）らであった。この活動は、鑑賞主義的な立場をとっていた小山龍之輔が作ったそれまでの学風を、客観的・科学的なものに改革することを意味していたといえる。

〈歴史社会学派〉は、マルクス主義的な史的唯物論の方法論を根幹として、日本古典の歴史的意義を追究し、非社会的な国文学研究に対して内在的な批判を行い、かつそれが戦争やファシズム

への学問的な抵抗にも繋がっていった。文芸評論家でのちに教授となる小田切秀雄は次のように述べている。

この派は、文学史をとらえるにあたつて一般に歴史的社会的な視野が必要だというだけでなく、文学の独自な成立・発展における社会的・階級的なものの大きな役割と、そこからの作品の形式・内容上の被制約性をはっきり見定めることの必要を主張した。プロレタリア文学運動とそのマルクス主義文学観とが、いくらか遅れてようやく国文学の世界をゆすぶりはじめたわけである。⁽³⁾

その具体的な展開は、法政大学国文学会発行の『国文学誌要』において開始された。一九三六（昭和一一）年七月発行の第四巻第二号の目次を見ると、近藤の「国文学と鑑賞主義」、熊谷の「資料主義・鑑賞主義・その他」——最近発表された二、三の作品論に関連して——、「鈴木福五郎の「気風」の問題」——三都の「気風」とそれらを規定する歴史的・社会的条件について——」など、鑑賞主義批判と歴史・社会的なアプローチへの萌芽が見られ、その後記には、学派の形成を謳っている。⁽⁴⁾



近藤忠義

当時の講義内容が具体的にどのようなものであったかは、現在詳らかにはわからないが、以上のようなありようから察するに、外在的な文献学や訓詁注釈、主観的な鑑賞主義を脱し、文学研究を唯物史観に基づいた科学的な学問として確立しようとする立場から講義が行われており、それが戦後にまで続く国文学主攻Ⅱ日本文学科の基盤を作ったと考えられる。現在もある初年次の必修科目が「日本文学概論」であるのも、この流れのうちにある。

・抵抗と挫折の時代

ところが、『国文学誌要』はその次の第四卷第三号を以て、刊行停止を余儀なくされた。費用の不足、若手研究者の徴兵、国家政策としての大学における文学系学部（縮小案など）の縮小案などが、刊行の継続を阻んだのである。こうした事態を受けて、近藤・石山・永積が中心となって創刊したのが、『文藝復興』という雑誌である。これは一九三七（昭和一二）年六月に創刊、以後ひと月に一号のペースで同年一〇月までに計五号を発刊して、事実上終刊した。いわば、大学とは関与しない形で、〈歴史社会学派〉の主張や国文学研究の今後の道筋を探索するための足場を作らんとするための試みであった。創刊号では論争相手の岡崎義恵をも寄稿者に迎え、文芸学論争特集の観を呈する編集になっており、石山・永積・鈴木（福五郎）らが〈歴史社会学派〉としての論陣を張っている。それ以外にも、藤村作「同人諸君に寄す」をはじめ、佐山済・熊谷孝・谷川徹三ら法政関係者が時評や随筆を寄せている。本誌はそれ以降も、高木市之助や風巻景次郎・久松潜一・能勢朝次・渋川驍といった研究者、堀辰雄・田宮虎彦・中野重治・村山知義ら作家たち、近藤や片

岡をはじめ重友毅・猪野謙二・乾孝・三枝博音・羽仁新五・宇和川匠助・辻一喜など、後に教員となる人々を含めた法政ゆかりの執筆陣を擁し、軍国主義的な戦争色が日本中を席卷する直前の、自由主義的な文学的抵抗の砦となったのである。

国家総動員法が施行された一九三八（昭和一三）年、前年から取りざたされていた文部省（大臣は荒木貞夫大将）の文学部縮小案に抵抗するために、夜間を利用した「法政大学文化講座」が開かれる。これは四月から翌三月までの一年間、二講座ないし三講座を開設するというもので、文学に関連する講座には、近藤忠義「日本文芸史」阿部六郎「文芸形態論」林達夫「文芸批評史」の他、「文芸時評A文芸・思想」を青木（井本）健作が、「日本作家作品研究」の講師に島崎藤村・芹沢光治良・舟橋聖一ら作家たち、洪川驍・中島健蔵・平田禿木・福田清人・除村吉太郎ら評論家たちなどが当たり、聴講者が殺到して教室に入りきらないという活況を呈した。これが、戦前の文学部における最後の華であったといえよう。

というのも、三八年九月に森巻吉が文学部長になった途端、一一月から文学科内に置かれていたそれまでの各主攻を英吉利文学科・独逸文学科・仏蘭西文学科・国文学科へと改組する事が協議され（翌年四月改組）、三九年三月には、予科生に対して来年度の文学部学生募集停止が伝えられたのである。さらに、戦時体制・国家総動員体制がより強固に求められた一九四〇（昭和一五）年四月より、各文学科・哲学科・心理学科・社会学科が〈文芸学科〉と〈文政学科〉に改組され、英独仏国文学各学科の独自性は失われた。文芸学科の基礎科目には「憲法」「日本思想史」「科学史」「社会史」などが「文芸史」「文芸学」「言語学概論」などと共に置かれ、さらに「文化

政策」「教練」が加えられた。専攻（専門）科目は「国語学」「国文学」「国文学演習」「外国語学」「外国文学」「外国文学演習」となり、国家総動員体制下における文学教育の狭隘化が進んだといえる。

文芸学科では改組の前年に片岡良一・藤村作が辞任していたが、四〇年以降、重友毅（近世文学、五六年教授）や小田切秀雄（五四年教授）が講師となる。

また、四一年には近藤を編集人として雑誌『文濠』が文芸学会から発刊され、論文・評論・創作などを広く教員・卒業生・学生から募り、小田切はもとより瀬川行有（筆名福田定良、のち哲学科教授）・小原元（現代文学、六二年教授）・正木信一（五六年兼任講師）などの卒業生が稿を寄せたが、四四年、第四号（この号のみ予科の雑誌「木月」との合併号）を最後に廃刊に追い込まれた。雑誌の発刊こそが文学の灯を消さないことだという近藤の強い意志が、最後の抵抗の形をとって現れたといえるが、その近藤は四一年十二月、同年に相次いで検挙された小田切や小原に続いて治安維持法違反被疑で検挙され、翌年の敗戦を迎えるのである。

一―二 日本文学科時代

・国文学科から『日本文学科』へ

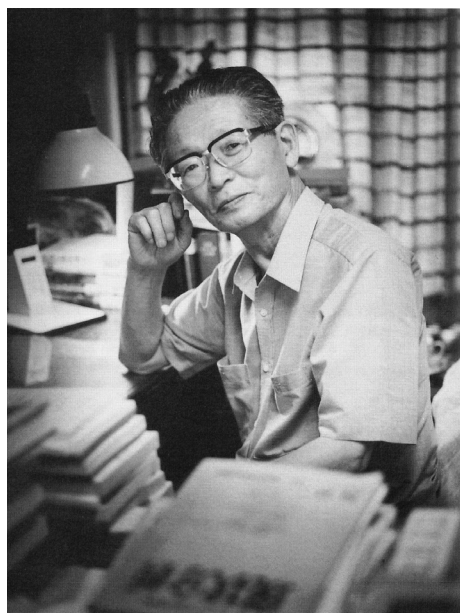
法文学部国文学科は、終戦後ただちに現在の日本文学科となったわけではなかった。

一九四六（昭和二一）年四月、文芸学科・文政学科を改組して国文学科・英文学科・哲学科と

し、ついで翌四十七年に文学部が独立、ここから現在に続く戦後の体制が始まる。同年、旧専門部・高等師範部を吸収する形で第二部（三か年・夜間）が設置された。

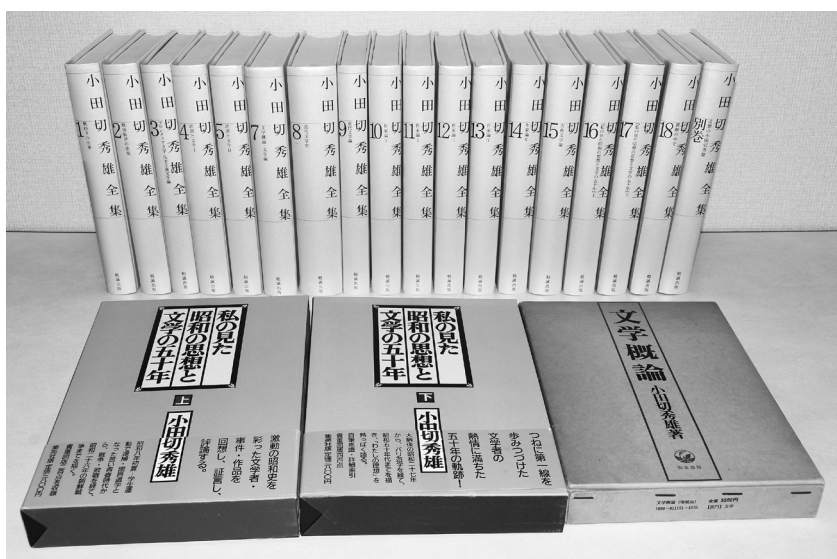
戦前から教鞭をとっていた近藤・片岡に加えて、四七年一〇月に小田切秀雄が専任として、広末保（近世文学、第一教養部教授を経て六七年日文科教授）が予科から大学部講師として、四九年長澤規矩也（中国文学、四〇年高等師範部教授、三三年から文学部兼任）が国文科教授に就任した。また前述の永積安明、西郷信綱（古代文学）ら、〈歴史社会学派〉に所縁の若手研究者が講師として招かれた。これらの優れた若手研究者が、戦後の国文学（日本文学）科を牽引していく動力となった。

当時小田切は前年から『文学時評』発刊に携わり、文学者の戦争責任追及の急先鋒であったが、同時に日本文学研究者の自主的・統一的な糾合団体を目指して発足した日本文学協会（四六年創立。会長藤村作、常任理事に永積安明ら、理事に近藤忠義・本多顕彰ら、評議員に猪野謙二・井本健作らといった具合に、法政関係者が設立に大きく関わった）にも、近藤らの口利きで関わっていた。東京帝国大学の主任教授を長



小田切秀雄

く務め、戦前から国文学界に大きな力を持っていた藤村は、戦時中には英語教育廃止論などを唱えていた保守派の学者で、左翼陣営からは「戦犯的人物」とも見做されており、彼が会長を務める団体に協力する小田切を批判する声もあった。藤村の日本文学協会長就任の背景には、藤村が戦前戦中にわたって片岡や近藤を庇護してきた（近藤は藤村の女婿でもあった）ことや、近藤らがいまだ少数にすぎなかった（歴史社会学派）の活動の拠点を、研究者全体の組織のなかに求めようとしたことなどがあった。当時戦後文学の牙城となった『近代文学』同人にして日共系の『新日本文学』にも関わっていた小田切は、研究よりも文芸評論の方に軸足を置くつもりであったため、協会とはやや距離を置く関係であったと認識していたが、やがて研究者としての仕事の捨てがたさや生活を保証されながらの評論活動への魅力も相まって、専任教員と



小田切秀雄著作

なることを決めたのである。

ともあれ、小田切の着任は、戦後の日本文学科の発展に、大きく寄与することとなった。まず、一九四八（昭和二三）年以降、国文学科は主に小田切の主張により日本文学科に名称を変更する。これは、先述のような、国学からの流れを汲み、文献学・書誌学的方法を伝統的に担い、さらに戦争下において御用学問として機能してきたといった、〈国文学〉という名称がまとうイメージへの忌避もさることながら、一国の文学として閉じた形で日本文学を捉えるのではなく、世界文学のパスpekティヴで〈日本文学〉を捉えるという認識からの変更であったといえる。四八年の科目一覧を見ると、そのことがよく理解されよう。一部を摘録する。

日本文芸学概論

西尾実

日本文芸史

近藤忠義

日本文芸作家特殊研究（古代）

西郷信綱

同（中世）

永積安明

同（近世） 白井吉見

同（近代）

片岡良一

日本言語学概論

寺川喜四男

日本言語史

湯沢幸吉郎

日本文法論

岩淵悦太郎

といった具合である。これらの科目は、例えば「日本文芸作家特殊研究」がのちに「日本文芸特殊研究」「日本文芸作家研究」に分かれるなど微細な名称変更を加えながら、今日（二〇二二年現在）「日本文芸研究特講」として引き継がれている。

・拡充の五〇年代と紛争の七〇年代

朝鮮戦争が勃発した一九五〇（昭和二五）年には、アメリカ占領軍による反共政策が強化される中、レッド・パージ反対、イールズ声明反対を唱える学生たちが、九月に入って試験ボイコット闘争に踏み切るが、大学当局はこれに厳罰主義で対応、除籍や無期停学の処分が文学部生に下された。これによりさらに闘争が激化するなか、教員による学生擁護の動きが現れるが、文学部でその中心となったのは、哲学科と日本文学科だった。学生の処分に対して、教員によって出された反対声明の中に、当時病床にあった小田切の「二教師として」、次いで近藤ら日文科有志教員たちによる「私たちはかく考える」があり、レッド・パージ反対運動を支持した。こうした教員による動きは、いうまでもなく戦前戦中の、思想・学問の自由が剝奪された〈冬の時代〉をくぐってきた苦難の経験から必然的に導かれたものであって、処分学生が試験阻止闘争に関わったか否かが大学として問題とされたとき、文学部教授会（文学部長は谷川徹三）はかつての弾圧下での近藤らの学問と教育を守り続けた姿勢が今回の声明においても一貫していると評価し、何ら非難に値しないとの結論を下した。

五二年の「血のメーデー事件」、破壊活動防止法反対運動、五四年の第五福竜丸事件など、世情を騒がせる事象が続く中、文学部は谷川学部長のもとで拡充の時期を迎える。

健康を害した近藤を支えて、長澤・片岡らの教授陣とともに熱心な学生指導と教育研究活動を推進したのは、小田切をはじめ重友毅、古田擴（国語科教育法、五〇年教授）、小原元らであった。五〇年四月には、のちに専任として長く日本文学科を牽引し続けた益田勝実（古代文学・民俗学、

六七年教授）が兼任講師として着任した。五六年には講師として表章（能楽、六六年教授）が着任、五八年にはかつて講師だった岡本千万太郎（言語学）が教授として復帰、五九年助手として卒業生の阪下圭八（古代文学、のち東京経済大学教授）と杉本圭三郎（中世文学、七一年教授）が採用された。兼任講師には猪野謙二、柴田武、大野晋などが名を連ね、教授陣の層を厚くした。一方で、片岡良一は五七年三月に逝去し、六二年には西尾実が名誉教授となるなど、世代の交代が見られ始めるのもこの頃である。

五〇年代は国際的な交流も盛んにおこなわれ、五五年にインドで開かれたアジア諸国会議に出席した近藤忠義は、五九年以降モスクワ大学、レニングラード大学、チェコスロバキアのプラハ大学などに招聘され、日本文学を講じ、小原元もこの流れを汲んで六三年、モスクワ大学東洋語学部門で半年間にわたり日本文学の講義を



近藤忠義・広末保・益田勝実著作

行った。五五年にはまた、当時学部生であった島本昌一（近世文学、のち法政大学第二高等学校教諭、日本文学科兼任講師としても長く教鞭をとった）が世界青年平和友好祭のワルシャワ大学における国際文学ゼミナールに出席している。さらに五七年には、谷川・小田切の起草になる「原水爆実験禁止」声明を全国の大学ならびに世界の五四大学に送り、国際的に存在感を示した。

そして、国文学会が戦前期に著名な学術誌であった『國文学誌要』を、現在に続く『日本文学誌要』と改題して復刊したのも、五七年のことであったが、これについてはのちにやや詳しく述べる。

一九六〇（昭和三五）年代に入ると第一次ベビーブームの影響で入学志願者数も増えてゆき、定員増加に伴う若手教員の採用と活躍によつてさらなる充実の時代を迎えた。古田・重友・岡本が六五年以降相次いで定年退職を迎え、文字通り日本文学科の中心を担ってきた近藤も六七年に定年となったが、一方で六三年には杉本圭三郎が専任講師、西田勝（近現代文学、七三年教授）が兼任講師、六六年には益田勝実が助教授としてそれぞれ着任、翌年広末保の第一教養部からの移籍、六八年外間守善（沖縄文学）が教授として迎ええられるなど、これ以降二十数年にわたる「戦後の黄金時代」とも呼ぶべき時期を支えた陣営が整っていった。この間六五年には、小田切が総長代行を務めた。また能楽研究所では田中允の退職に伴い、研究助手だった西野春雄が七一年より所員および日文科専任講師として採用された（八二年教授）。

一方でこのころから、大学は厳しい苦難の時代を迎える。いうまでもなく、六〇年代末から七〇年代初めにかけての、いわゆる大学紛争が全国的に捲き起こったためである。

もとより、先のレッド・ページ反対闘争においてもそうであったように、それまでも法政文学部は学生の自治と自由な政治・言論活動を支援する方針をとってきたのであり、五八年の「警職法改正」阻止運動や六〇年の「安保反対」運動などにおいても学生たちとともに若手教員を中心に積極的に活動していた。

けれども、七〇年安保改定を控えて紛争が激化しつつあった六八年以降、学生自治会間の対立が深まり、六九（昭和四四）年七月には、十一月までの全学封鎖に至り、教職員はその対応で寧ろ日ない日々を送らねばならなかった。強権によらない理性的・自主的な対応をつねに前提とした文学部教授会は、封鎖解除を目指しての会議や学内外の学生との折衝・集会などに忙殺された。教員たちはこれと並行して政府の方針に対する反対運動、カリキュラム改革、学内外の「自主講座」への参加、臨時の講義・演習などにも尽力し、それが学生との対話における信頼感と説得力を支えたといえる。

同年一月下旬、文学部長に就任した益田勝実が、補佐役の外間守善らとともに、補習や定期試験、入試などを不安定な学内状況下で実施することに努めた（翌年三月まで）。翌年一月には学生生活家間の集団衝突事件が起こり、益田執行部は重傷を負った学生の救命に奔走し、一命をとりとめるといったこともあった。

安保改定に加えて、日大・東大・京大などで相次いで起こった大学組織の在り方そのものに対する闘争が頂点を迎えた七〇年代初頭、六九年から日文科助手となった勝又浩（近現代文学・文芸評論、当時は大学院博士課程在籍、のち大正大学教授を経て、九二年教授）は、旧弊で不合理

な助手制度を廃止するべく、哲学科助手などとともに文学部助手共闘を開始した。七一年五月、哲学科助手が「任期満了」で職を解かれ、これを不服として大学相手に訴訟を起こすという事態が起こり、このことを重く見た日本文学科は勝又らの要求を受け入れ、いち早く助手制度を停止のちに文学部全体で廃止された。現在は研究助手ではなく、事務職員としての助手を置いている。

・安定の八〇年代と改革の九〇年代

一九七〇（昭和四五）年以降、カリキュラム改革、履修要綱改訂、ガイダンス改善などを次々と実施した文学部は、徐々に体制を立て直し、再整備を強化していくことになる。

七一年には西田勝が専任助教授となり、七六年佐川誠義（言語学、八三年教授）が、七八年には小原元の逝去（七五年四月）に伴う後任として小田切ゼミ出身の堀江拓充（筆名立石伯、近現代文学・文芸評論、八四年教授）が、七九年には安藤信廣（中国文学、八七年教授、九四年東京女子大学に移籍）が専任講師として着任し、戦後の黄金時代を支える若手研究者として以後の日文科の牽引力となった。また七六年和光大学に移っていた近藤忠義が他界、七五年には広末保が研究・執筆に専念するため専任教授を退職（以後兼任として在籍）するなど、世代交代が進んでいた。

一九八〇（昭和五五）年に、図書館棟を含む八〇年館が竣工し、日本文学科教員の多くはここに研究室を与えられ、現在に至っている。全学では多摩移転が日程に上り始め、これに反対する学生のストライキなどの対応に追われることにもなった。

八一年松田修（近世文学）が教授に就任したが、八六年には小田切秀雄が、八八年には定年延長を固辞した益田勝実が退職した。益田の後任として九〇年に天野紀代子（中古文学、九五年教授）が専任教員として着任したが、天野は益田ゼミの出身者で、片岡―小田切、小田切―堀江に次いで、卒業生が師の後任に就くという戦後の日本文学科の一種の「伝統」が定着し始めたことを示している。それぞれの努力・研鑽はいうまでもないが、同時にそれは教授陣の教育水準の高さを示すものに他ならない。というのも、続く九二年にはやはり小田切ゼミ出身の勝又浩、九三年には広末ゼミ出身の日暮聖（九九年教授）、九四年には阪下圭八ゼミ出身の坂本勝（上代文学、〇一年教授）らが次々と母校で専任教員となったことに鑑みてそういうるのである。この他、九五年間宮厚司（言語学、〇三年教授）が助教授に、九八年には黒田真美子（中国文学、〇四年教授）が助教授、小秋元段（中世文学、〇九年教授）が専任講師として着任している。

一九九〇年代はこのように、若手教員の着任が相次いだが、逸してはならないのが、戦後最も大きなカリキュラム改革といえる、九四年から始まった三コース制の導入である。それまで、各時代の日本文学および漢文学と言語学を中心に開かれていたゼミナールに、創作を志す学生のための文芸創作ゼミナールを加え、併せて文学コース・言語コース・文芸コースの三コースを設置、学生が希望のコースを選択できるように教育環境を整えたのである。これにともない、それまで三、四年次であったゼミの履修年次を、二年生からに変更し、早い段階で学生が専門科目の核となるゼミナールに参加できるようにしたことも、大きな改革だった。またこの時それぞれのコースに必修の科目を設けたが、以降の必修科目は左の通りである。

《全員必修》

日本文芸学概論・日本言語学概論・日本文芸史Ⅰ（古典）

《文学コース必修》

日本文芸史Ⅱ（近現代）・文学概論

《言語コース必修》

日本文法論・日本言語史

《文芸コース必修》

文章表現論・日本文学史

文芸コースでは、九六年に着任した本学経済学部中退の芥川賞作家・笠原淳（一九八三年、第九〇回）が教授として、詩人の高橋順子、小田切ゼミの卒業生で文芸評論家の小笠原賢二、編集者の根本昌夫などが兼任講師として文芸ゼミナールを担当した。なお、小笠原は〇三年、専任教授就任が決まっていたが、採用の際の健康診断で重度の肺癌が発覚し、〇四年一〇月に逝去した。日本文学科にとって、大きな痛手であった。

・次代へ向けて——二〇〇〇年代以降

二〇〇二（平成一四）年度をもつて教養部が廃止となり、第一教養部から千野明日香（中国語・中国文学、〇一年教授）・阿部真弓（中古・中世文学、一一年教授）が、第二教養部から堀江ゼミ出身の藤村耕治（近現代文学、一一年教授）が日本文学科に移籍した。また第二部（夜間部）の廃止に伴って、日本文学科では〇三年度から昼夜開講制をとった。昼間主・夜間主の学生を募集し、どちらに属しても同様のカリキュラムが履修できるようにしたため、それまでは二部には設置されていなかった文芸コースにも夜間主学生のためのゼミ（夜ゼミ）が置かれた。現在、言語コースと文芸コース、一部の文学コースに昼ゼミと夜ゼミが開講されているのはこのときの名

残である。ただし、「夜間主」という呼称がゼロ年代の学生に馴染まず、翌〇四年からは「フレックスA・B」と名称を変更した。このフレックス制も〇七年をもって廃止となり、現在の形態となったが、五限以降の夜時間帯にも全員必修科目の「日本文学概論」「日本語学概論」「日本文芸史Ⅰ」は毎年、各コースの必修科目は隔年で開講するほか、「メディアと社会」や特講など各種の科目を設置し続けるなど、学生の多様なニーズに応えるカリキュラムが組まれている。

〇二年、堀江拓充が常務理事に就任、以後二期六年にわたって大学運営に携わった。

〇六年からは新たな必修科目として、初年次に受講する「大学での国語力」を開講した。大学生として必要な読解力・調査力・表現力の基礎を学生が身につけることを目的とした少人数クラス授業で、よりきめの細かい指導を可能にした。

また、〇三年に大学院に開設された国際日本学



前列左より阿部・小林・尾谷・坂本・間宮・佐藤・小秋元
後列左よりネルソン・王・加藤・藤村・中丸・田中・伊海・遠藤

インスティテュートとの連動で、〇四年ステイヴン・ネルソン（日本音楽史）が教授に就任した。〇五年には作家の中沢けいが教授に、〇六年には笠原淳の後任として文芸評論家の田中和生が専任講師（一五年教授）に就任、文芸コースの新たな歴史が開かれることになった。

以降、〇八年に加藤昌嘉（中古文学、一二年教授）、〇九年に西野ゼミ出身の伊海孝充（能楽、一七年教授）、一〇年に尾谷昌則（言語学、一四年教授）、一一年にキャリアデザイン学部から移籍した小林ふみ子（近世文学、一四年教授）、一二年に中丸宣明教授（近代文学）がそれぞれ前任者の後任として着任、一挙に世代交代が進むとともに、この新世代を中心に、大学を取り巻く様々な状況の変化に対応すべく、制度やカリキュラムの改革を進めていった。一方で、佐川誠義が在職中の〇八年に病気で亡くなった。

二〇一五（平成二七）年から通信教育部を担当する学科に0.5枠の教員増が認められた際、日本文学科では若手研究者を助教として迎える方針を採ることとし、一五年に山田夏樹（一六年）、一八年に村山龍（二〇年）、二二年に佐藤未央子がそれぞれ助教（いずれも近現代文学）として着任した。なお、村山は二〇年四月、COVID-19によって命を奪われた。前途有望な若手研究者の突然の死は、学科に大きな衝撃と悲しみを与えた。

一六年、小田切・広末の教えを受けた田中優子（近世文学、九一年第一教養部教授、のち社会学部教授）が日文科出身者として初の総長に就任、六年間にわたって法政大学の舵を取り、その社会的評価を高めた。

一七年には黒田ゼミ出身の遠藤星希（中国文学、二〇年准教授）が、一九年には王安（中国語・

言語学、准教授）が着任した。また、二一年からは小秋元段が常務理事に就任、現在に至っている。

二 国文学会と『日本文学誌要』

法政大学国文学会は、小山龍之輔が一九二五（大正一四）年に学部長就任以降次々と創立された各専攻の学会の一つとして、翌年一月に誕生した。その機関誌の創刊は六年後の一九三二（昭和七）年七月、当初は『法政大学国文学会報』という名であったが、翌三三年一月発行の第四号から『国文学誌要』を名乗ることとなった。なお『会報』創刊号は「会則・学会報告・学会名簿」などが中心で、第三号（三三・八）から研究論文主体となる（第二号は散逸）。ここから学術誌としての性格を持つようになったことから、誌名を変更したのであろう。『会報』に記載されていた学会彙報は『国文学誌要』の付録として併載されるようになった。

これに先駆けて三三年三月に発行された『日本文学の再認識』（国文学研究室編）には代表として小山の名が挙げられており、巻末には「国文学会成立過程」が記されている。

『国文学誌要』の執筆者は小山をはじめ近藤忠義、宇和川匠助、熊谷孝、鈴木福五郎、岩淵悦太郎、長澤規矩也、西尾実、辻一喜などが名を連ねている。三四年第六号からは「国文学会編集部編、代表・近藤忠義」とクレジットされており、同年一〇月の第七号からは『会報』を分離させ、研究学術誌としての性格を明確に強めていった。ここに近藤の意志が働いているのは明瞭であり、

『國文学誌要』は近藤の主導と努力の下に発展していったのである。後に『日本文学原論』（三七・二、刊行時は藤村作名義）としてまとめられる近藤の主要な論文は、この雑誌に掲載されたものであった。

先にも述べたように、『國文学誌要』は通算一五号目となる一九三六（昭和一一）年十一月発行の第四卷第三号を以て、刊行停止を余儀なくされた。その後これも前述の通り近藤を中心とした『文濠』発刊などの努力が戦時下で続けられたが、時局の悪化はこれをも押しつぶした。『國文学誌要』を前身とする『日本文学誌要』が創刊されるのは、戦後十二年目の一九五七（昭和三二）年一二月であった。「復刊の言葉」では、「旧「誌要」が、いわゆる満州事変の直後から、対中国侵略が全面的な日中戦争拡大に至るまでの、あの暗澹たる転換期に、黙黙として果たしてきた業績はまことに大きいと言わね



誌要・法政文芸・作家特殊研究冊子

ばならぬ」として、『国文学誌要』およびその休刊後の国文学会の活動を「孤軍奮闘のもたらした量り知れぬ巨大な成果」と概括している。そして、「戦後の十年を賭けて、新たな段階でわれわれの学的方法と研究体制とを漸く拓きえた今、それらをもっておびただしい数の学生を結集、統一するとともに、卒業生との学問的なつながりを一段と強化し、さらに学外諸学会・諸機関および研究者との交流・協力を促進する」ための「もっとも重要な仕事のひととして」の「誌要」の復刊を位置付けている。⁽⁵⁾ 復刊第二号は「片岡良一教授追悼号」(五九・三)、七号は「近藤忠義教授還暦記念号」(六一・一二)、一四号は古田擴退職に伴う小特集(六六・三)、一六号では国文学会創立四〇周年記念特集(六六・一一)などを組み、七〇年三月、二二号を刊行したのち、七〇年安保闘争に重なる大学紛争の嵐の中で、休刊を余儀なくされた。休刊前の二号の編集・発行に力を尽くしたのは、勝又浩だった。勝又によれば、「デモやストライキ、ロックアウトの続くなかで、しかしこういう時にこそという思いから、ほとんど独断で、ただし大学院生仲間に手伝ってもらいながら誌要を何とか二冊発行した。誌要は当時、創刊以来の年一冊の刊行だったから、これが私の助手としての義務責任だと考えたのである。」⁽⁶⁾ 大学内外の騒然とした状況は、国文学会の活動を不可能にしたのだが、先述のように研究助手の制度が廃止され、その中心的な担い手を失ったこともまた、その一因であった。

『日本文学誌要』が復活したのは一九八〇年の二三号であったが、厳密にはその以前、七四年に臨刊号が出されている。これは七三年に日本文学科学生委員会が企画・主催した第二回文学講座の講演記録集で、小田切秀雄をはじめ柄谷行人・真継伸彦・黒井千次・後藤明生・長田弘・北川

透・森川達也といった錚々たる作家・詩人・評論家による講座（講演）を掲載したものだ。

復刊第一号の二三号は近藤忠義・小原元追悼特集を組んでいる。これ以降ほぼ年に二冊（年によって三冊）を定期的に刊行し始める。西尾実・重友毅の追悼記（二四号、八一年）、長澤規矩也の追悼号（二五号、八一年）小田切秀雄退職記念特別号（三六号、八七年）をはじめ、退職記念号や追悼号を編むのが通例となった。

また、二五号から連続四回の企画として、国文学会の歴史を記録として残しておくべく、小田切へのインタビュー、卒業生による座談会「法政大学国文学会の足跡」（「草創期のころ」）「日本文学科の戦後」 「昭和三〇年代の活動」注（1）参照）を掲載、空白を埋める試みがなされた。このように、八〇年代以降国文学会は年一回の大会・総会と年二回の『日本文学誌要』の発行を主な活動として、再び旺盛さを取り戻したのである。

二〇〇五（平成一七）年には文芸コース発足一〇年を期に、優秀な卒業制作の発表の場として文芸誌『法政文芸』を創刊、年一回発行している。（二一四頁参照）

この他に、特別企画として一六（平成二八）年に小田切秀雄生誕百年（主催は小田切秀雄研究会）、一八年益田勝実、一九年広末保生誕百年を記念した講演・シンポジウムの会が開催され、盛況であった。また、一六年からは教職に就いている卒業生の教科研究や情報交換、親睦の場として、年に一回の会合を持つ「教員のつどい」も発足させるなど、国文学会の活動は順調にその歴史を刻んでいる。

三 大学院と通信教育部

大学史資料によれば、戦前にも大学院が存在していたことが知れるが、正確な事実是不明である。そのため、ここでは戦後の新制大学院に記述を限定せざるを得ない。

法政大学大学院に人文科学研究科が設置されたのは、新制大学院発足と同じ一九五一（昭和二六）年で、日本文学専攻（修士課程）もこの時開設された。次いで五五年には博士後期課程が開設、後進研究者を育成する環境が整えられた。修士課程には「日本文学」 「日本文芸批評史」 「日本（古代・中世・近世・近代）文芸原典研究」 ならびに同演習、「国語学史」 「国語学特殊演習」 「中国文学」 が、博士課程には各時代の「特殊講義」「特講演習」のほか「能楽論」などが開講された。以後科目の改廃はあったが、現在に至るまで基本的な枠組みは変わっていない。

一九七三（昭和四八）年には、修士生でも投稿できる研究誌『日本文学論叢』を創刊し、以降年刊の論文発表の場として機能している。これは、主に博士後期課程の学生のための研究誌『大学院紀要』が発行されるようになった七八年に先駆けて、学生たちの要望から生まれたものだった。

二〇〇三（平成一五）年、人文科学研究科に国際日本学インスティテュートが開設され、日本文学・日本語学にとどまらない、より幅広い領域を研究する日文専攻生を受け入れている。

〇七年には能楽研究者育成プログラム（能楽研究所と合同）、一年には文芸創作プログラム

がそれぞれ開設され、より専門性に特化した教育研究環境が整えられていった。文芸創作プログラムにおいては、第一線で活躍する現役の作家を単年度で招き、創作や批評を行う「作家特殊研究」を開講し、年一冊作家の名を冠した冊子を刊行している。（二一四頁参照）

日本文学専攻は、先に挙げたような各時代の文学・言語・芸能を中心に、文芸批評、沖縄文学、女性文学、国語教育等、関連科目を幅広く設置し、時代のニーズに対応するべく改革を進めてきた。近年では中国人をはじめとする留学生も増加し、国際化が進んでいる。

通信教育部は、戦後間もない一九四七（昭和二二）年七月に法学部のみ設置されたが、日本文学科が開設されたのは、翌年一〇月であり、五〇年には学校教育法に基づく正規の大学として正式な認可を得た。通学部とほぼ同様の授業科目・カリキュラムを持ち、夏と冬のスクーリングをはじめ多くの専任教員が担当している。

二〇一二（平成二四）年、通学部の三コース制導入にやや遅れて、文学・言語・芸能の三コースを設置し、教育の幅を広げるとともに、通学部の夜間帯授業を開放して、学生の学びの機会を増やすことにも努力している。

通学部生とは異なり、通教生は入学と同時に国文学会会員となるわけではないが、優秀な卒業論文は通学部生と同様『日本文学誌要』に掲載される。近年では卒業後大学院に進み、研究者の道を志す学生も見られるようになっており、今後も勤労学生の学びや生涯教育の重要な場として機能していくことが期待される。

四 主な出身作家

国文科・日本文学科は、研究者のみならず、多くの著名人を輩出してきた。ここでは、主な出身作家について略述する。

椋鳩十（一九〇五・一九八七、本名久保田彦穂、長野県生れ）は、在学中の一九二六（大正一五）年処女詩集『駿馬』を自費出版、三〇（昭和五）年、国文科を卒業した。鹿児島に移り住み、教員生活を送る傍ら、自由奔放に暮らす山の民（山窩）を描いた小説を発表、後には代表作「大造じいさんとがん」「片耳の大鹿」など日本における本格的な動物文学のジャンルを切り開いた。

倉光俊夫（一九〇八・一九八五、東京都生れ）は国文学会の設立に尽力した一人で、一九三三（昭和八）年国文科卒業。朝日新聞記者、松竹演劇部・映画部を経て、四三年「連絡員」で第十六回芥川賞を受賞した。『冷べたい水の村』『売られていぐ村』など農民文学といえる作品を執筆するほか、高橋竹山を取り上げた『津軽三味線高橋竹山・その人と芸の底を流れるもの』などの評伝もものした。

石川利光（一九一四・二〇〇一、大分県生れ）は早稲田大学に入るが近藤忠義に誘われて法大に転学し、一九四〇（昭和一五）年国文科卒業。出版社九州書院社長であった五一年「春の草」で第二十五回芥川賞を受賞した。宮中研三名義で官能小説も多く発表した。

飯嶋和一（一九五二・山形県生れ）は一九七七（昭和五二）年日本文学科卒業で、外間ゼミ

出身。教員生活をしながら小説を執筆、八三年マタギを描いた「プロミスト・ランド」で小説現代新人賞、八八年ボクサーの挫折と再生を描く「汝、ふたたび故郷へ帰れず」で文藝賞、以降権力に屈しない庶民を主な主人公とした歴史小説を書く。二〇〇〇年「始祖鳥記」で中山義秀文学賞、〇八年「出星前夜」で大佛次郎賞、一六年「狗賓童子の島」で司馬遼太郎賞、一八年「星夜航行」で舟橋聖一文学賞を受賞するなど、非常に高い評価を得ている。

藤沢周（一九五九・新潟県生れ）は一九八四（昭和五九）年卒業。「図書新聞」の編集者を務める傍ら小説を執筆、一九九三（平成五）年「ゾーンを左に曲がれ」（のちに「死亡遊戯」と改題）でデビューした。九八年「ブエノスアイレス午前零時」で第百十九回芥川賞を受賞し、以後コンスタントに作品を発表している。二〇〇四（平成一六）年より法政大学経済学部教授



桐鳩十・倉持俊夫・藤沢周著作

となり、一九年に作家業に専念するため退職するまで後進の育成に努めた。二三年『世阿弥最後の花』（二一年刊）で加賀乙彦推奨特別文学賞を受賞。飯嶋和一同に、今後一層の活躍が期待される。

また、近年若い世代の作家、詩人や歌人の活躍も目立ってきている。

小林埜堦（一九九〇・）は二〇一二年に中退。一三（平成二五）年処女詩集『でらしね』を上梓した詩作者。『でらしね』は斯界に大きな衝撃を与え、中原中也賞、鮎川信夫賞の候補とされるなど、高い評価を受けた。二〇二一（令和三）年刊の『小松川叙景』は翌二二年第三十三回富田碎花賞を受賞、最も注目される詩人のひとりである。

櫻井朋子（一九九二・埼玉県生れ）は文芸コースを一六年に卒業。一七年の東京歌壇（『東京新聞』東直子選）年間賞を受け、二〇二一年歌集『ねむりたりない』を上梓した。

大学院日本文学専攻では「黙って喰え」で二〇一二年第四十四回新潮新人賞を受賞した門脇大祐、「逃げ水は街の血潮」で二〇一九年第二百二十四回文学界新人賞を受賞した奥野沙世子がおり、また二二年現在在学中の山崎修平は二〇年に刊行した第二詩集『ダンスする食う寝る』で第三十一回歷程新鋭賞を受賞、二二年には初の小説『テーゲベックのきれいな香り』を上梓するなど、それぞれに精力的な仕事を続けている。

このほか、文芸コースや大学院文芸創作プログラム出身の作家も複数輩出しており、いずれも今後の活躍が期待される。

(1) 『日本文学誌要』二六号（一九八二、七）所載の座談会「草創期のころ」（出席者・藤田初巳、鈴木和雄、小野田伊市、聞き手・安藤信廣、堀江拓充）に依る。もとより他学科の講義は単位にはならなかったが、みな熱心に受講したという。

(2) 小田切秀雄『私の見た昭和の思想と文学の五十年 上』（集英社、一九八八年）一三六頁

(3) 同右 一四三頁

(4) 『國文学誌要』及び後繼の『文芸復興』全五巻の解題・総目次・関連年表等が、〇九年七月に歴史社会学派研究会『歴史社会学派研究資料編』にまとめられている。この研究会は、二〇〇六年度から三年間科学研究費の助成を受けて、当時の文学コースの教員八名（坂本・天野・杉本・小秋元・日暮・勝又・堀江、代表は藤村）を中心に、他学部教員や兼任教員などによって運営された。

(5) 『日本文学誌要』復刊第一号（一九五七、一二）三頁

(6) 勝又浩『日本文学誌要』の歴史、その一齣『日本文学誌要』100号記念特別号（二〇一九、七）二二三頁

（藤村 耕治）

【英文学科】

一 法文学部時代（一九三二～一九四七）

・英吉利文学主攻の創成

一九二二（大正一一）年四月、法政大学の中で法学部が法文学部に改組されて文学科と哲学科が設置された。予科あるいは教養学部ではなくて専門教育組織としての英文学科の前身は、このときに文学科内に創設された英吉利文学主攻にある。この法文学部開設に際して松室致総長のもと人事に全面的にあたったのは、一九〇九年以来法政大学講師を務めていた野上豊一郎（一八八三―一九五〇）であり、よく知られているように、野上は東京帝国大学文科大学英文科（文学科英吉利文学）で夏目漱石に習い、漱石門下生を中心に教員を法政に集めた。

一九二二年の法文学部改組に際して英吉利文学主攻の専任教員（ないし予科と法文学部の「兼任」教員）として編成された中心は、野上の紹介で一九二〇年に予科教授となっていた漱石門下の小説家の森田草平（本名は森田米松、一八八一―一九四九）、ふたつ年下の野上自身、そしていわゆる「木曜会」参加の門下生ではないが東京帝大英文科で一緒だった田部重治（一八八四―一九七二）だった（森田は一九〇六年七月卒業、田部（旧姓南日）と野上は一九〇八年七月卒業、漱石は〇七年二月に教職を辞して朝日新聞社に入社した）。田部は一九四一年まで専任職を務め、もともと縁のあった東洋大学の教授となった戦後も法政の兼任講師となり、また一九二六年一〇

月に創立された法政大学英文学会の初代会長を務めて戦後は名誉会長に就くなど、長く法政と関係をもった。亡くなる前年に病床で口述筆記によってのこした「英文科創設の思い出——創設五十周年に際して——」は、「大学時代の友人の野上豊一郎君から、今度法政大学で文学部を創設することになり、教授としては、主として漱石に教えを受けた人たちを選び、漱石の思想を旗印として新しい学風を打ち出したいと思うのだが、君もその一人として来てくれないか、と言ってきた」ことを語り、一九二二年発足時の「英文科」の教員構成について記している。

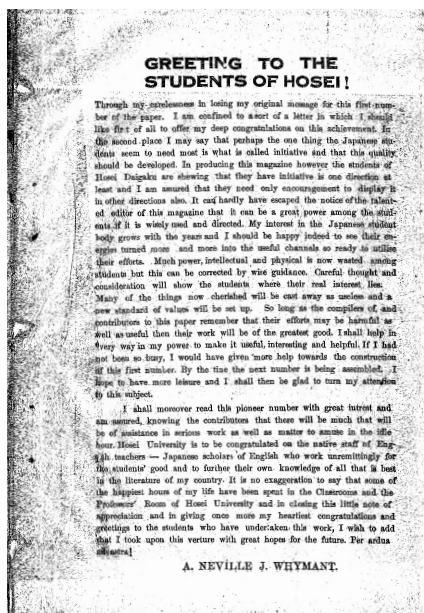
英文科のわれわれ三人は、みな英文学畑だったので、それぞれ担当の範囲を協定することにし、野上君は劇、森田君は小説、私は主として小説、評論、エッセイ、序でに文学概論、欧州文芸史をも受持つことになった。語学の方では講師とし上条辰蔵君に頼んだところ、承諾してくれ、他に「ホ」ワイマン「ト」という英国人にも来てもらうことにし、こうして法政の英文科は発足したのである。『法政大学英文学会会報』第八号（英文学科創設五十周年記念特集）（一九七二）二頁

法政でいうところの「兼担」がどのような組織所属の意識や認識のもとでおこなわれたのか不明なところがあるのだが、一九二二年の大学の認可申請書には「兼務」について書かれ、また、一九二三年七月の法政大学校友会による『法政』創刊号には「学部消息」欄に「文学部」の講座と教員が記載されたなかで、英文関係は四名（『英語学・文芸史』Ⅱ専任講師「教授」の誤りか）田部重治、「英文学」Ⅱ教授 ホワイマント、「英文学」Ⅱ教授 野上豊一郎、「文学概論・英文学」Ⅱ教授 森田米松）、そして独文の関口存男ら三名は肩書きを「予科教授」としているので、野

上や森田はあるいは予科の授業数のほうが多かったかもしれないが、はじめから文科の専任教授として位置づけられたようだ。

上條「上条」辰蔵は外語出身で東京商科大学教授だったが英吉利文学主攻発足の二年目から講師となり、晩年に専任になったようだ。ホワイマント (A. Neville Whyman, 1894-1964?) は東洋文学・東洋思想を研究していたオックスフォード出の英国人であった。³⁾

発足時の学科の理念がいかなるものであったか、ありえたか、は想像の域を出ない。ただ、当時の日本の英文科は実用語学という考え方には染まっておらず、いっぽう外国の知識を得るには文献を読むための英語、ドイツ語、フランス語が必要であるという諒解が一般にあったとしても、おそらく英文科内においては作品講読を中心としたあるしゆの教養主義があつたのだらうと想像される。具体的にどういことが教えられ どういことが専門課程三箇年の決算としてまとめられたのかは、十年後に創刊される『英文学誌』にうかがわれる。以下、時代の様子を反映したものとして『英文学誌』を中心に記述してみたい。



ホワイマントが法政大学学生会の雑誌『法政』創刊号(1923年7月)に寄せた英文

・法政大学英文学会と『英文学誌』

『英文学誌』の「学内動静」の記事には講義内容が紹介されている。第一号（一九三二年一月）では、田部重治「Pater's Appreciations」（演習）「Palgrave: Golden Treasury」（演習）（二年）「Strong: A Short Story of English Literature」[世紀末のウォルター・ペイターの随筆集、かつてよく読まれた英詩選集、アーチボルド・ストロングの四〇〇ページほどの英文学史第二版（一九二二）]、野上豊一郎「G. B. Shaw as a Dramatist」[西洋古典文学]、森田米松「Stevenson: The Dynamiter」（演習）、上條辰蔵「英語学」（三年）、名原廣三郎「英語学」（二年）、石黒魯平「発音学」「言語学」A. F. Thomas「Shakespeare: Hamlet」（一学期）「Galsworthy: Plays」（一学期）「Shaw: Plays」（一学期）「Hardy: Shorter stories」（一学期）が並んでいる。第二号（一九三二年七月）では、田部は同じ題目、野上「Shakespearean Tragedies」、森田「Galsworthy: Strife」（演習）、上條と名原は同じ「英語学」、呉茂一「西洋古典文学」、石黒「発音学」「言語学」、トマス「Modern Writers」「Katherine Mansfield's short stories」といった内容である。

大正時代に遡って記録を見ると、一九二四年一二月の学則改正認可申請（『法政大学文学史資料集』第四集、二〇九―一一頁）によれば、「英吉利文学主攻」必修科目として一四科目、「英吉利文学」「英吉利文学演習」「英吉利語学及文法」「文学概論」「文学各論」「西洋古典文学」「欧州文芸史」「発音学」「言語学」「国文学史」「美学」「西洋哲学史概説」「教授法」「教育学」であるが、これらの多くは他の主攻と共通する必修科目であり、一九二五年の「法政大学学則変更認可申請」（大正二四年五月）において、英吉利文学科（独逸文学科・仏蘭西文学科）という名称に代わっ



創刊号 (『第一巻第一號』)



第2号 (『第一巻第二號』)



第3号 (『第三號』)



第4号 (『第三號』)



第5号 (『第四號』)



復刊第1号

ており、英吉利文学科の必修科目は「英吉利文学」「英吉利文学演習」「英吉利語学及文法」の三科目(ただし三年間にわたって毎週教授時数四)、他は英独仏三学科共通の必修科目として示されている。また、英吉利文学科と英文学科の表記が併用されているところがある。こうして、昭和の初年ごろには『英文学誌』に記されたような科目名称が使われたようである。

『英文学誌』創刊号の五本の論文記事の執筆者は、森田草平「脚色上の模範」、田部重治「ペーターに就て」、眞鍋五郎「メレデスの女性」、野上豊一郎「Bernard Shaw 書目」、名原廣三郎「James

Joyce の Shakespeare」だった。眞鍋五郎は一九二六年卒の文科英吉利文学主攻第一期生で、二九年度から予科や経済学部 of 英語の講師をしていた。名原(一八八四—一九六八)は予科教授であったが、法文学部を一九二六年から兼任していた。第2号は、森田草平「近頃会心の作——“The Good Companions”を紹介す」「イギリスのジョン・B・ブリーストリーの一八九二九年の小説で三〇年に舞台化されていた」、田部と名原は第一号の続き(二号にわたって掲載された名原の論文は日本英文学会の『英文学研究』一二巻一号に掲載したもの)の拡大であると付記されている」、小田切米作「ブ

ラウニングの恋文の中から」、田代三千稔「散文芸術の将来に就いて」、姉崎正見「J. L. Lowes 著『The Road to Xanadu』解題」、村山英太郎「Humorous Expression の研究方法について（試論）」。小田切と田代は予科で教えていたが、英文学会に寄稿していたことがわかる。姉崎正見は一九二八年卒第三期生で、のちにアイルランド作家のシングの岩波文庫訳を出しているが、著名な宗教学者で東大図書館館長として関東大震災からの復興にあたった姉崎正治（一八七三—一九四九）の長男で、自身も東京大学図書館の司書になった人。村山英太郎は一九二九年卒で、当時助手、三三年から予科で教え、戦後は明治大学の教授となった人。さらに第三号に前年の卒業論文をもとにして「John Galsworthy の社会劇」を書いた大熊隆三はそのとき大学院一年生であったが、のちに村山英太郎を継いで助手となり、さらに戦後は第二教養部の教授となった。戦後の助手制度とはむろん異なるが、大学院生が助手となり英文学会の仕事を任される、という流れが戦前にあったことがうかがわれる。

『英文学誌』第2号の巻末には「昭和七年度英文科卒業論文題目」が掲載されている。この年の古い卒業生名簿を見ると二九名であるが、三〇本の卒業論文があり、その内訳は、小説はジェイン・オースティン 一、ディケンズ 二、シャーロット・ブロンテ 一、ジョージ・エリオット 二、トマス・ハーディー 四、ステイヴンソン 一、ヘンリー・ジェイムズ 一、O・ヘンリー 一、D・H・ローレンス 二、ジョン・ゴールズワージー 三、演劇はシェイクスピア 一、オーガスタ・グレゴリー 一、オニール 一、詩はジェイムズ・トムソン 一、トマス・グレイ 一、ブレイク 一、コールリッジ 一、ワーズワース 一、キーツ 一、その他にオスカー・

ワイルド 一、ウィリアム・モリス 一、ダンテ・ガブリエル・ロセッティ 一といった拡がり
を、イギリス文学が多いがアメリカ文学も含めて、見せている。九〇年も前だから、イギリスの
小説家ゴールズワージー（一八六七—一九三三）もアメリカの劇作家ユー・ジーン・オニール（一
八八八—一九五三）もアイルランドの劇作家レイディー・グレゴリー（一八五二—一九三二）も
存命だったし、ロレンス（一八八五—一九三〇）やハーディー（一八四〇—一九二八）も没後ま
もないころであり、同時代作家への意識の高さもうかがわれる。

それにしてももっぱら文学であり、英語学や発音学や言語学は文学研究の基礎として位置づけ
られていたと推測される。（とくに「英語学」は文法や作文を内容とし、講師も文学の素養が高
い人が多かったようである。）

教育内容と成果とは別に、教員の研究や仕事が学生に与えた影響を忖度するならば、ひとつに
は森田や野上が作家であり、また世界文学的な広がりを見せる翻訳にかかわったことがあげられ
る。たとえば野上の『マリ・バシユキルツェフの日記』や森田のイプセン『野鴨』、ドストエフ
スキー『悪霊』、ボッカチオ『デカメロン』などは英訳からのいわば重訳的翻訳だが、ふたりと
も世界文学全集の企画に積極的に関わっており、『デカメロン』の森田訳の解説も書いた名訳者
として知られる平田禿木が法政騒動のちに英文科に加わるのも、もともと田部重治と親交が
あったこともあるが、そういう翻訳の方面でのつながりがあったと考えられる。

もうひとつ、法政の英文関係の教員が中心となつてなされた訳業として、ちょうど一九二二年
に原著が刊行されていたジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』の翻訳（岩波文庫で五巻分冊、

一九三二年、第五卷のみ（一九三五年）があった。これの第一巻と第二巻の書評が『英文学誌』第二号の「寄贈書紹介」欄に書かれている。

◎『ユリシーズ』（一）・（二）

森田草平・名原廣三郎・龍口直太郎・小野健人・安藤一郎・村山英太郎共譯（岩波書店、¥040）

此譯を讀んで感ずることは譯者其人をよく得たと云ふことである。全く此の難解なる原作を斯くまでにしあげるとは容易なことではない。恐らくは翻譯を通じて原作を窺はんとする人に取つても、又原作と對照して通讀せんとする人に取つても、最も安全に推賞することの出来るものであらう。

森田を筆頭に名を連ねている六人のうち、名原と龍口は戦前法政の予科の講師、小野健人は法政の独文卒でドイツ語の関口存男の最初の書生となり月刊誌『新英米文学』を編集した人で、要するに外語卒で龍口に誘われた安藤一郎を除く訳者たちは「ユリシーズ・グループ」と称されることになる法政の關係者だった。そして名前は挙がっていないが同様に労力を注ぎ込んだのが独文の藤田栄（一九〇一—一九二）一九二九年法文学部卒、一九三三年独文科講師、戦後一九五八年に第二教養部教授）だった。

・法政騒動とその後

野上が研究していたアイルランドのバーナード・ショー（一八五六—一九五〇）が一九三三年



諷刺とした「法政文科」を紹介した東京
日日新聞「学界新秋」昭和5年9月19日

『法政大学百年史』449頁⁽⁴⁾

の春に来日し、一年前の第一号につづく「Bernard Shaw 書目」を、「以上皆解説を付けるつもりであったが多忙のため間に合わず……」としながら書いた野上は、詩人のヨネ・ノグチとともに案内役としてシヨ一の観能に同席し、その折のシヨ一の質問から有名な論考「能の幽霊」（「幽霊の舞台的表现——能の幽霊についての考察」）を書くことになる。これが三月のことだが、同じ三月に、森田に推されて予科ドイツ語主任となっていた関口存男が内田栄造（百閒）の担当授業をすべてとりあげる提案をする事件が起こり、いわゆる法政騒動が顕在化していった。やはり森田の強引な推挙によりユリシーズ・グループの卒業生藤田栄を独文科講師にとることで紛糾するものこの年のはじめである。九月には、前年に予科教授会をつくる運動をしていた名原廣三郎

がアンチ野上の経済学部平貞蔵と共に解囑され、秋から冬にかけては学生もまきこんだ騒ぎになる。さらに一二月末日には野上に対して理事・学監・予科長を解囑し、そして教授を休職とする処分が発令された（授業ボイコットなど学生運動を誘発した藤田栄、眞鍋五郎、村山英太郎の三講師に対しても、藤田については予文学部講師、他の二人については予

科講師の依願解嘱が一二月二七日付で発令される。森田草平も責任をとるべく辞表を提出していたはずなのだが——そして野上は森田の辞表を条件として自ら辞表を提出していたのだが——留保されたまま処分されなかった（名原や眞鍋や村山が復職した一九三四年の九月に先立って、森田は辞意を改めて表明し大学を去った——書類上は休職扱いで正式な解嘱は翌年）。第一号の編集後記に「学校事務のため多忙をきはめて居られるにかかはらず」と書かれていた野上は、一九三一年の松村致学長の死後、それまでの予科長職に加えて理事と学監を兼ねていた。松村時代の多額の借金による財政的危機、学長ポスト空席、隣接地購入、教員処分などさまざまな問題が、帝大卒尊重の「官僚」主義への反発（それと同時に卒業生冷遇への批判）そして（校友）理事たちの政治的迷惑や学生の愛校心をはらみながら、すべて「野上体制」の責任に帰され、野上に対する辞任要求の運動が一九三三年の秋から冬にかけて噴出してしまった。

騒動における対立の象徴的主役が野上と森田であり、英語教員が多く関わってもいたのだから、とりわけ英文科と英文学会にとっては非常事態であつただろう。少なくとも当初は年二回以上の刊行が計画されていたらしい『英文学誌』は三号で一時停止してしまった。それでも二年半後の一九三六（昭和一一）年六月、装いをあらためた『英文学誌』が刊行された。それまでの三冊は、『英語青年』ふうの二段組み横書きで、表紙に図版と目次を印刷したパンフレット形式だったが、本文を縦組みにし、しかし絵のない表紙はアラビア数字以外は右から左に読ませる横書きの形式で、岩波文庫などもそうだったとはいえ、かえて時代をさかのぼるような違和感を覚える。英語論文を含む二本の卒業論文、講師を続けていた龍口直太郎や四月まで助手だった大熊隆三の論

文など、計七本、本文一五六頁、広告五頁といふかなりの分量である。

巻末には上下二段三頁の中に、「卒業生諸氏に」（田部重治）、「研究室便り」（大熊隆三）、「学内消息」、「研究室近況」、「編輯後記」（鈴木賢治——研究室を辞す大熊に代わった助手）と短い文章が並んでいる。「学内消息」には、「二十余名の新入学生諸君を迎へた我々の英文科は、例年になく清新な空氣に満ちてゐる。最近特に著しい傾向と見られるのは、予科出身の諸君のみではなく、我々の学園以外からも、新しく入学される篤学の士が次第に増加して来た点である」と述べられている。「本年度の教授内容」として、田部重治教授＝講義 英文學史、講義 文學概論、演習 Shakespeare: Tempest、演習 W. Pater: The Renaissance、平田禿木教授＝講読 C. Lamb: Essa[ys] of Elia、演習 Shakespeare: Othello、特殊講義 英文學の諸問題、上條辰藏講師 英語學及び英作文、名原廣三郎講師 英語學及び英作文、A. F. Thomas 講師 英文學特殊講義、と並んでいる。「研究室便り」「研究室近況」として、新版の NED（OEDの旧称）を二年前の四月に研究室に備へたこと、中止していた講演会を六月下旬に開催することが決まり準備中であること、また、「卒業生名簿の調整を企」ていたので同期卒業の人の住所を研究室まで知らせてもらいたいことが書かれている。六月二〇日にこの第四号は発行され、同日「英文學講演会」が催されており、プログラムは眞鍋五郎「開会の辞」、岡本成蹊「バイロンの方法」（岡本成蹊（一九〇五—八八）は戦後第二教養部から文学部に移籍し、英文学会の中心的存在となるが、このときは予科教授であつた）、吉武好孝「英国文芸批評の諸問題」、田部重治「ペーターの印象主義」、平田禿木「大学と英文学」であつたことが別の記録に残っている。

その大久保博による「法政大学英文学会の歩み」の記録は、戦前の記述としてはそのあとは「十六年十二月？ 英文学会会長田部重治教授法大を退職。」のみで、戦後は一九四八年と四九年のエドマンド・ブランドンの講義と講演、そして一九五〇年一月一日の「英文学会再建。第一回総会」（戦後に学長・総長として学園民主化に力を注いだ野上豊一郎がこの年の二月に急逝し、日本英文学会会長豊田実による講演「野上豊一郎教授への追慕」がおこなわれている）、五一年一月の「会員名簿」発行、五二年二月の『法政大学英文学会々報』第一号発行など、一九五八年の『英文学誌』復刊への道筋が記録されている。

ただ、記録に落ちているのは戦前のもう一冊の『英文学誌』の刊行である。第四号のあと二年七カ月が経った一九三九（昭和一四）年一月二九日、第五号が発行されている。オスカー・ワイルドとジョン・ダンを論じた二本の卒業論文の他に、助手が忙しかったためか「編輯後記」も書いている山村幸吉（一九二八年卒、三三年より予科講師）による H. A. Beers, *A History of English Romanticism* の序文の翻訳「ロマンティズム」、そして名原廣三郎による「A・ウェストの『ユリシイズ』論」の計四本、広告なしで六七頁だった。論文以外に「学内消息」や「研究室近況」などの記事はなく、奥付の頁に記された編集後記は「こうした学内に於ける英文学発表機関の本体は、英文科教授でも卒業生でもなく、寧ろ学生が中心になってこそ、澁刺清新ものが生れやしないかと思ひます。今後は学生にリードして貰ひたいと考へて居ります。」と書き記して閉じている。

しかし、学生数は減っていた。一九三九（昭和一四）年というのは、四月から週一二時間の軍

事教練が必修となり、大川周明を部長とする「大陸部」が新設されるなど、大学が戦時体制へと整備されていった年である。法政騒動を機に力を得た卒業生竹内賀久治が学務担当常務理事になった一九三七年に経営合理化のために文学部縮小案が提示されていたのが、国文・英文・独文・仏文の専攻を包含する「文芸学科」（そして従来の哲学科は倫理学専攻と心理学専攻に分かれて「文政学科」の設置という改組に結着する。（なお、文学部縮小案に抵抗するために夜間に開かれた「法政大学文化講座」に平田禿木は名を連ねていた。）この文学部改革の前後は、その影響に加え深刻さを増す戦時情勢のなか、教員の異動が多く、英文関係では、一九三九年四月上條辰蔵が死去して加藤猛夫講師にかわり、文芸学科と文政学科の改組がなされた四〇年に本多顕彰が予科から移籍（翌年教授）、四一年二月野上豊一郎が復帰するが（『百年史』四六三頁。しかし文学部長としてであり、英文で教えたかどうか不明）、同月田部重治が退職、一九四二年二月平田喜一（禿木）が退職。また、学長（一九四二年）、総長（一九四三年）になった竹内賀久治戦時体制下で、語学教師は冷遇されていき、一九四四年一月には名原廣三郎や関口存男など長く予科・文科で功績のあった人たちが学校整備のためという理由で解嘱されている。学生数も少なくなり、一九四二年に文芸学科英文学専攻を卒業した学生数は『法政大学英文学会会員名簿』によれば七名だった。ダン論を書いた浅羽徳三が卒業した一九三八年は二七名いたが（すなわち、第四号で「二十余名の新入学生を迎えた」と書かれていた一九三五年入学者）、ワイルド論を書いた藤枝高士が卒業した一九三七年は九名、一九三九年は五名、一九四〇年は七名、一九四一年は六名であった。このころの卒業生名簿を見ていて唯一ホツとする思いがするのは、女性がごく

少数いることで、名簿で判断する限り、英文科の最初の女子卒業生は一九三八（昭和一三）年かその前年に出ている。

五〇周年記念会報に「漱石と法政」という一文（三一―四頁）を寄せた本多顕彰名誉教授は文芸科英文専攻の頃のことを回顧している。

校友の熱心な援助によって、文科は、やせた姿、文芸科として存続を許され、「漱石文化が花を咲かせる法政」ルネサンスどころではなくなった。私が英文専攻（英文科ではない）の講義三単位を持たされたのはこの時である。英文専攻は露の命で、風が一吹き吹いたら、はかなくなってしまったであろう。今の盛大を思うと夢のようである。

山宮允の「回想」（英文学会『会報』第二号、一九五四年）によれば一九四二年頃専任は本多一人で、講師としては山宮のみが担当したようだ。

一九四六年の二月、辞任した竹内賀久治総長のあとに野上豊一郎文学部長が学長に就任（翌年総長）して戦後の大学の再建が始められた。英文学科では本多顕彰が早くに復帰し、四月には本多が呼んだアメリカ文学の山屋三郎が予科教授として加わった（四八年文学部教授）。野上豊一郎は法文学部専任教員として「文学概論」（四六、四七年）と「西洋文学史」（四七年のみ）の二科目を担当した。

二 再編と再建の時代（一九四七～一九七二）

一九四七年三月二四日に法文学部は法学部（法律科・政経科）と文学部（国文学科・英文学科・哲学科）とに改組された。四月、哲学科・国文学科・英文学科の三学科体制で独立・再出発した文学部は、同時に旧制専門部と高等師範部を吸収して夜間の第二部に国文学科・英文学科・地理歴史学科を開設した。教員組織としては、教養部は第一部と第二部で異なったが、やがて専門学部は英文学科の場合同じ専任教員が第一部と第二部を教える体制が、第二部英文学科が二世紀初めに募集停止となり数年後に廃止されるまで長く続いた。

一九四七年、戦前教えていた山宮允（戦後の法政大学英文学会の最初の会長）が文部省囑託の第二部兼任講師として復帰し、四九年に文学部教授となる。一九四八年からは前島儀一郎（英語学）、平井豊一（予科教授）、錦織重正（付属一高主事）、高原栄（英語科教育法、五一年一月に専任助教授、のち教育学科に移籍）などが出講した（『法政大学と戦後五〇年』四四〇頁）。一九四八年七月の野上総長名の学生数報告によると、文学部定員一学年三学科六〇名のうち英文学科は二〇名（在学生実数の全学年総数は八四名）、第二部は国文学科と同じ一学年六〇名ただし在学生「一、二年」総数は一一三名）となっている（『法政大学と戦後五〇年資料篇三』三三一—三二頁）

一九四九年四月法政大学は新制大学に転換されて再発足した。昼夜二部制において英文学科は

第一部三学科、第二部四学科のひとつとして引き続き存在した。このとき従来の予科は教養部となったが、戦後まもなく法政に戻った岡本成蹊（昭和五年卒、一九三四―四一、四六法政大学講師、四七教授）が第二教養部から文学部へ移籍するのは一九五七（昭和三二）年のことだった。同じく（はじめは専門部教授として文学部の英語を兼任担当していた）桂田利吉が一九五九年に移籍してきた。

新制の大学院が法政に設置され正式に発足するのは一九五一年度からである。人文科学研究科に哲学専攻、日本文学専攻と並んで英文学専攻が入学者五名を受け入れてスタートした。設置科目は「英文学思潮研究第一」「英文学思潮研究第二」「米文学思潮研究」「英米文学特殊研究第一」「英米文学特殊研究第二」「英米語学特殊研究」「演習第一」「演習第二」「演習第三」「演習第四」が修士課程に設置され、博士課程には「英文学特殊研究Ⅰ」「英文学特殊研究Ⅱ」「英文学特殊講義」「英文学特講演習」「英文学特研演習」という科目名称が与えられている。教員組織としては本多顕彰と山屋三郎の他に山宮允が名誉教授として、また兼任講師として前島儀一郎と加藤猛夫（一九三九年四月に上條辰蔵が死去したときに交替した講師）と大和資雄が教えた。

一九五一年から五三年頃の学部の方の専任教員の顔をみると、本多（「英文学概論」、（五一年度）「英文学作品作家研究」、「英文学演習」、山屋（「英文学史」、「米文学史」、「英文学作品作家研究」、山宮（「英文学概論」、（五三年度）「英文学史」、「思潮研究」、「英文学演習」、助教授高原栄（「英語科教育法」）の他に、原一郎教授（「英文学史」「批評論研究（英文学批評史）」「英文学作品作家研究」「英文学演習」が英文学科に属している。兼任・兼担としては江実「言語学

概論」、大西雅雄「英語学概論」、「音声学」、平井豊一「英文学」／「英文法概論」（五二年度）、デルレー・アランデル「英文学史」、大和資雄「英文学作品作家研究」、加藤猛夫「英文学概論」などがいた。

編集兼発行者を岡本成蹊として一九五八年二月一五日に発行された『英文學誌』は「復刊／第1号」と銘打ち、一九三九年の第五号以来二〇年近い時間を空けて刊行された。巻頭言「研究方法について」で本多は「卒業論文などを読んで気付くこと」として「思いつきで書いた文章がかなりある」と批判し、「若い人たちの中に、一書を読んで一文を成すという風が流行している」がそれは研究ではない、「ある作家の一つの作品は、織物のある部分のごときものであって、その部分を構成している糸は、横にも縦にも伸びて、他の作品、または、作品を生んだ環境、および、作家を生んだ伝統とつながっている」、だから「広く読んで、小さくまとめることが大切」なのだ、と述べている。そんなふうには、新批評的なアプローチよりも、伝統的な批評——簡単に言えば作家を全体として捉えようとする——を基本的には重視する風が英文学科の文学研究（あるいは教員たち）にはあったようだ。

創刊号には学部（第一部）学生数名による共同研究「心理主義小説研究」が全体一一〇ページの三分の一近いスペースにわたって掲載されている。復刊三号までは学部生の投稿があったのが、第四号以降少なくなってしまうが、少なくとも中期的な理由のひとつは一九六〇年に学部生による雑誌『The Wheel』が創刊されたことだったろう。『法政大学百年史』は「一九五〇年代に入ると学会・文化活動が活発になってきた。戦前文学部の一つの特徴であったこの種「の」活動は、

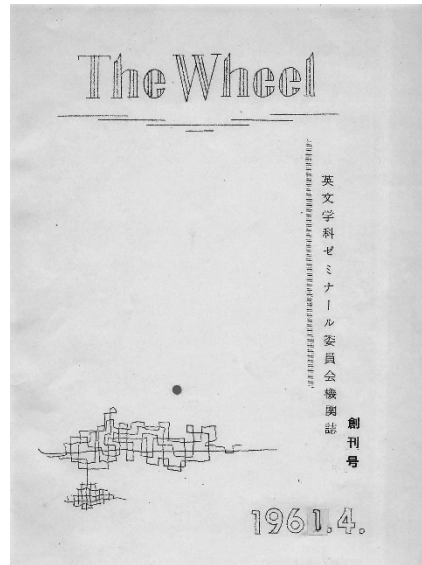
学生が主体となって企画運営し、教授会、学会が協力する傾向が強まり「……」と記し、英文学科に関しては次のように記録している。

英文学会は、二七年（一九五二）にまず「会報」を復刊し（三六年七号で一時休刊、四六年八号を出し、今日まで続いている）、続いて三三年（一九五八）「英文学誌」復刊第一号を発行した。「……」このほか、院生による「テオリア」（四五年創刊、五四年一〇号）や、学生による英字紙（The Hosei Times（三二年創刊）などがある。また、英文学会は、公開講義、研究会が活発で、四七年（一九七二）の創設五〇周年頃までに主なものでも一〇数回開催してきた。二三年（一九四八）文化使節で来日したエドマンド・ブランデン（Edmund Blunden）が、特別講義を三週間にわたって行なっており、その後、二四年、三〇年にも同氏の講演、講義が行なわれている（文学部は特例をもって同氏を名誉教授に推挙した。一九七四年一月二〇日死去）。その他、二八年に「エマースン（R. W. Emerson）生誕百五十年記念講演会」、三〇年「ホイットマン（W. Whitman）の『草の葉』百年祭」など講演会、研究会が公開されてきた。（四八〇頁）

いいに記録されていない『The Wheel』は第一文学部の英文学科ゼミナル委員会の機関誌であった。現在機関誌『SMILE』を発行している英文学科生の組織リンクス（Links）は英文学会ゼミナル協議会を組織変更したものとされているが、その淵源はこの一九六〇年に創設された英文学科ゼミナル委員会にあったと考えられる。新学期の四月一〇日に刊行された創刊号は、巻末の「編集手帳」で「今迄の纏まりのない英文学科の縦の連絡を緊密にし、サークル活動を活発

にする目的で、ゼミナール準備委員会が発足したのは「この年の一月であったこと、同時に四つのサークル——一、二年生読書会、英文学研究会、社会問題研究会、米文学研究会——が生まれたことを告げ、「万を越える学生を擁する大学の建物が林立し、大学教育が頓にマス・プロ化している現在、人間形成の場として、サークル活動の意義は高く評価されてい」と語り、「英文学科ゼミナール委員会は、英文学科に在籍する全学生によって構成されることになります」と宣言している。英文学研究会はブロンテ姉妹の研究を前年度はおこない「全国ゼミ京都大会」に質問校として参加したこと（「1960年度全日本学生文学ゼミナール イギリス文学分科会」）、そして今年の東京大会ではE・M・フォースターの発表を担当することを「サークル便り」で報告するが、「ゼミナール」の意味はどうやら自校における授業科目としてのゼミではなく、全国的な学生のゼミ組織に集約される団体であった（すなわち、学生運動が激化して分裂する前の「全学連」の文化活動のひとつとして全日本学生文学ゼミナールがあり、そこに連なる意識があった）。自治的な組織ではあるが、本多顕彰は「機関誌刊行を祝して」という巻頭言を寄せて機関誌を持つことの大切さを説き、また京都でおこなわれた文ゼミには教員の小谷洋一と大久保博が同行している。

全国ゼミだけでなく、学内での「サークル」活動が呼びかけられ、既に三月に始動していた社会問題研究会はHarold Raski著、大内兵衛・大内節子訳『岐路に立つ現代』（法政大学出版局、五〇〇円）の講読を春休み中にもかかわらず常時十名も出席しておこなったことが報告され、米文学研究会は、ヘミングウェイの短篇集*Men Without Women*をペンギン版で読もうと思うが



それに先立って代表的なアメリカ短篇書を集めた『現代アメリカ短篇集Ⅰ』（研究社、一〇〇円）を読む読書会を四月から始めることを「サークル便り」に記している。「一、二年生読書会」について責任者の四年女子学生は「『読める』ということ」と題して次のように語る。

英米文学研究の先行条件として、感受性、分析、総合の能力とともに、欠くことのできないのが語学力——『読める』ということ

とです。これら4つの条件のうち語学力は、自らの学習によって獲得できることは十分知っていますが、語学的な障害を意識しないで『読める』ようになるにはかなりの努力のいることは、だれもが痛感していることでしょう。1、2年の間に、せいぜい読解力を身につけたいものです。／この読書会では、量を多く読むことを主な目的とします。原書に取組む自信を、互に養い合いたいと思います。週一回顔を合わせ、できるだけ多く読むつもり。予習は各自必ずしていただくこと。逐語訳するものではありませんから、むしろ楽しいものです。できることから1年間で長編を1冊読了してしまおうではありませんか。／……／原文で1つの作品を読みあげるということは、予想外に大きな自信をつけてくれるもの、できるだけ多くの方が参加して下さるよう、希望します。なお、何曜日の何時からと言うことは、皆の都合で決めた

いと思います。

こういう呼びかけに応じた者がどのくらいのかわからない。それでも、一九七一年の第一〇号は岡本成蹊、桂田利吉、野村行信、小谷洋一らが巻頭に文章を寄せ、第一部研究論文は米文学研究会の報告を含む一一本の論文と阿部知二の講演内容の紹介、第二部創作に短歌・俳句・詩・短篇小説など一二人の学生の作品、そして第三部ゼミナール委員会一〇周年特集として活動経過やエッセイが載り、さらに英文学・英語関係のサークルとして「英米文学研究会」「英語研究会」「C・L・S」「英会話クラブ」「実用英語研究会」「アルビオン・ソサエティ」「英国文化研究」「ノオサンブリア」「英米文学研究」が自己紹介をおこなっていて、一七六頁という大部の冊子になっている。一九七二年三月発行の第一一号（確認される最終号）の「発刊にあたって」において英文科ゼミナール委員長は「ここ三年来、残念なことに大学が正常に運営されたためではない。現在もお封鎖の状態である。」と文章を始めている。六〇年代から七〇年代初めまでの激動の中、とりわけ学生たち自身が自主的に研究・創作活動をおこなおうとしていたことは特筆されてよい。（なお、第二部英文学科では、二部英米文学研究会が（のちには英文研O B会が中心となって）一九五三年より『Helm』（一九七四「一〇号」、一九六八年からは『Helm Alumni』が並存）を機関誌とする読書会を続けている。）

さかのぼって創刊号には前年一九六〇年度の卒業論文が「昭和35年度英文学科卒業論文題目」として記録されている。八一名の論文を作家別に多い順に並べてみると、ヘミングウェイ 六、ロレンス 五、ハーディー 五、ワイルド 四、シェイクスピア 四、オーウェル 三、ディケ

ンズ 三、フォークナー 三、コールドウエル 三、ドライサー 三、モーム 三、ポー 二、E・ブロンテ 二、C・ブロンテ 二、マーク・トウェイン 二、フォースター 二、グレアム・グリーン 二、スタインベック 二、メルヴィル 二、キャザー 二、ハクスリー、ウエルズ、イエイツ、ワーズワース、T・S・エリオット、アン・ポーター、マードック、ステイーヴン・クレイン、ジョージ・エリオット、ホーソーン、マッカーズ、オースティン、フィッツジェラルド、サローヤンが各一、他に「現代米文学の背景」「文学とコミュニケーション」「アメリカの文芸復興について」で、すべて英米文学であった。

会話や作文はもちろんのこと、時代的には外国人講師による「英文タイプ」という科目も英文学科では開かれていたが、やはり戦前同様に文学が中心で、その周辺に英語に関係する科目がさまざまにあったのが六〇年代までの英文学科の特徴だっただろう。それが学科の中核的なカリキュラム編成として変わっていくのは七〇年代になってからだだったと言える。

一九六〇年代後半の日本は英文科が新たにさかんに増設され、(外国語学部)英語科と呼ばれるものもつくられ、教育と研究についての議論がおこなわれた時代だった。

また一方戦後はアメリカ文学への関心が高まり、英文学研究から独立したアメリカ文学研究が地域地域に学会・研究会組織をつくりながら存立していった(その発端は学生や若い研究者たちによる読書会活動であったとされる)。一九六二年に全国組織として成立した日本アメリカ文学会の初代会長は山屋三郎になった。

三 改編の時代（一九七二～一九九七）

一九六〇年代の文学部教授会は、一九六〇年から六二年一〇月まで英文学科の本多顕彰が学部長を務め、つづけて（本多が病気のため小田切秀雄が学部長代理となつて一〇月辞任ののち）六二年から六八年三月まで岡田尚助教授が文学部長となった。学科の負担が重くなつたこともあつて六五年に第二教養部から岡田尚助教授が移籍した（六八年教授）。時代はいわゆる学生運動・大学紛争の季節に入ろうとしていたが、戦後の英語ブームと大学のマスプロ化の波の中で、いかに英語・英文学教育をおこなうかということに腐心する必要が生じつつあつた。ところが定年延長を辞して本多が名誉教授となつた六六年の九月には山屋の病気が重くなり、休職になる事態が生じた（療養生活を送り復帰することなく六九年三月退職）。このため六七年に第二教養部からジャパン・タイムズ社に勤務経験をもつ三浦徳広専任講師が移籍して補充された。しかし六七年一月、名誉教授として大学院の演習を担当していた山宮允が死去し、六八年には桂田利吉教授が定年延長となつて、世代交替にも苦心が続けられた（『百年史』四八八頁）。七〇年三月には英語学の岡田尚教授が退職し、後任に第二教養部から英詩・演劇の小谷洋一助教授（七四年教授）が移籍、さらにミルトン研究者の野村行信教授がイギリス文学の分野で就任した。

小谷、野村が文学部に着任した七〇年の英文学科専任教員は彼らを入れて五名しかいなかったわけだが、学生数は文学部内で最も多く、一学年二〇〇名を超える年度が続いていた（定員は日

本文学科より少なかったのにである）。一九七一（昭和四六）年度の第一部英文学科志願者数二二二・入学者数二二〇、七二年度志願者数二六六・入学者数二六六、第二部はそれぞれ三二八・一〇二、五二六・九六だった。また一九七一年度の在学生の数（カッコ内は女子で内数）を記すと、第一部一年二一九（八五）、二年二〇九（九二）、三年二四八（八〇）、四年二二二（八一）、合計八九八（三三八）——文学部五学科全体は二八二四（九〇五）——だった。第二部は一年一〇一（四五）、二年七八（二七）、三年八一（二〇）、四年六七（二二）、合計三三七（二一四）（『法政大学年誌』）。第一部で女子学生が男子より恒常的に多くなるのは八〇年代以降のことである。

一九六九年以来文学部カリキュラム委員会は、文学部改革に具体的提案を重ねてきたが、一九七二年には「改革委員会」が設置された。いっぽう岡本学部長退任数年後の学部長会議において英文学科の問題がとりあげられ、文学部長が刷新を迫られたと記録されている。

・英語学・言語学教員の採用と文学・演劇教員の採用

兼任講師として一九六三年から「英会話」と「作文」などを教えていたフレッド・H・ザバツテロ（Fred H. Zavattero）が専任教授となったのが一九七一年で、ザバツテロは英文学の授業も担当した。ネイティヴの専任教員が採用されるのは戦後の文学部では初めてだった。

さらに、文学を主軸として運営されてきた英文学科に、英語学そして言語学を専門とする教員が加わるという新機軸が一九七〇年代初めに起こった。まず羽田陽子専任講師が一九七三年に着任した（七六年助教授、八二年教授）。文学部で最初の女性専任教員だった。羽田は宮部菊男な

どに学んだフィロロジーの人だった。そして、翌七四年にはアメリカの言語学を学び『英語学と言語学』（三省堂、一九七二）を著わしていた三宅鴻教授が加わり、言語系の研究者が専任として増強された。

これと並行して、演劇を含む英米文学の領域でも、七三年に黒川欣映、七六年に村上淑郎の両教授が第一教養部より移籍した。黒川は自分の劇団を持つアメリカ演劇の専門家で、村上はシェイクスピアを中心とする英国古典演劇の専門家だった。

七〇年代から九〇年代までのあらためられたカリキュラムの特徴は、「シェイクスピア講読」を三年次（のちに二年次）の必修科目としてクラス授業としたこと、「文学」の演習（「語学」「文学」という分類と共に「ゼミ」という呼称が一九八五年の「英文科ゼミナール委員会」による『NOT YET』——『The Wheel』休刊後一〇余年を経て大学院生の呼びかけでつくられた——創刊準備号には使われている「なお、八六年の創刊号で「法政大学英文科ゼミナール協議会」の呼称が用いられている」として「英米文学演習」（第一部は一七、第二部は八―一〇）が、そして「語学」の演習として「英語学演習」（第一部は三、第二部は一―二）と並んで「英語演習（作文）」「英語演習（会話）」「英語演習（時事英語）」（また、一時的だが「英語演習（応用音声学）」などもあった）が、いずれも「ゼミ」として大別されたことだ（選択必修C群にまとめられていた）。これらは一九九七年のカリキュラム改革によって、実践的な英語の演習と、卒業論文に直結する文学・英語学の専門領域の演習に分けられることになる。

世代交代とカリキュラム改編が進む中で、一九七九年に評論家としても活躍していた荒正人が

急逝し、一九八〇年泉谷治教授（一八世紀英国小説）が第一教養部より移籍した。一九八一年にザバットロが死去して、後任に榊田啓介教授（マーク・トウェインを中心とするアメリカ小説）が第一教養部より移籍し着任した。一九八〇年の英文学科専任教員の顔ぶれ——野村行信（英詩）、フレッド・H・ザバットロ（英語・英文学）、三浦徳広（米詩）、黒川欣映（アメリカ演劇）、小谷洋一（シェイクスピア・英詩）、三宅鴻（英語学（linguistics））、村上淑郎（シェイクスピア）、泉谷治（イギリス小説）、羽田陽子（英語学（philology））の九名。「英語学演習」を担当したもうひとりとは女性語の社会言語学的研究などをおこなった吉田正治兼任講師で、多数開講されていた「英米文学演習」は第一教養部の教員に第二部英文学科の担当を依頼するケースも含め、兼任、兼担、専任が多様な作家・領域をカバーできるように努めた。

増員一名が認められて一九八八年に宮川雅専任講師（アメリカ文学 九一年助教授、九七年教授）が着任し、大綱化の流れの中で一年次に設置されていた「英米文学概論」などを担当した。二年目には大学院も担当したが、英文学科では原則的に着任二年目から大学院科目も担当することが合意された。一九八七年に客員助教授となっていたピータ・エヴァンズ（Peter Evans）が、一九九〇年に野村行信の後任として専任助教授として着任した。

村上が立教大学に移籍することになり、その後任として一九九四年に結城英雄教授（ジョイスを専門とするアイルランド文学・英文学）が着任した。同じ年に椎名美智専任講師（英語学・社会言語学、文体論）も着任し、文学と言語の双方に新しい風が入った。一九九六年には石川潔専任講師（理論言語学（統語論・意味論）、のち実験系の心理言語学）が着任して言語学分野が広がりを見せた。

九〇年代は、学科内でコース制が考えだされた時期で、実践英語系を中に入れることも試行されたが、文学（英文学・米文学）と語学（英語学・言語学）の二つのゆるやかなコースという諒解が次第に形成されていった。

四 変革の時代（一九九七～二〇二二）

・一九九七年度のカリキュラム改革

一九九〇年代前半の時点で英文学科では卒業論文を除くとただひとつの必修科目であった「シェイクスピア講読」（第一部・二部ともにクラス授業として二年次に置かれていた）が、選択必修科目の一つとなった。従来の「英語演習（作文）」「英語演習（会話）」などを「英語表現演習（Writing）」「英語表現演習（Speaking）」に名称変更するとともに、選択必修CからBへ移行させ、従来の選択必修Bの科目群「英米文学講義Ⅰ」「英米文学講義Ⅱ」「英文法論」「英語・英米文学特殊講義」などを、選択必修Aに移して「英語史」「英文学史」「米文学史」「英語学概論」などとまとめた。こうして必ずしも内容による区分ではなくて選択上の分類としてA・Bに分かれていた〈講義〉的な科目をひとつにまとめてAに、卒業論文につながる〈ゼミ〉的な科目をCに、プラクティカルな英語科目を表現演習としてBにまとめてわかりやすくした。

そんななか、一九九九年四月に小谷洋一が新学期の教壇で倒れて急逝した。また九九年度をもって退職予定だった三浦徳広からは、後任は学科の将来を考え、分野（アメリカ詩）の継承はこだ

わらないでほしいとの意向が伝えられていた。結果として、二〇〇〇年四月に理論言語学（音韻論・第二言語習得）の川崎貴子専任講師（〇四年准教授）と英米演劇のネイティヴ教員ジョン・M・プロウカリング准教授（Jon M. Brokering）（〇三年教授）を採用した。

・所属ゼミ制度の導入

二〇〇三年から〇四年にかけてはいくつかの変化がもたらされた。一つは、二〇〇二年度をもって教養部が廃止となり、英文学科では、第一教養部から秋葉雄二（英語・アメリカ文学）、利根川真紀（英語・アメリカ文学）、島弘之（英語・英米現代詩）、竹内章（ドイツ語・オーストリアの文学）、日中鎮朗（ドイツ語・ドイツ文学・比較文学）の五人の教授が移籍した。英文学科における英語の意味づけも含め、外国語教育や比較文化の視座など、その後の学科内でのさまざまな（良い意味での）議論の契機となるできごとだった。また、存続を望んでいた二部英文学科の募集停止が正式に執行され、なお数年は卒業論文も含めて在学生のケアをおこなうことになる。はいえ、大学院と学部を担当コマについて協議する必要がある。

もうひとつの変革は、二〇〇四年の所属ゼミ制度導入だった。八〇年代から九〇年代の学生が多い時期には、新学期に演習の授業の履修を求めて選抜試験に学生が移動を繰り返すという事態が生じていた。優秀な学生は複数の選抜授業——ときに英語学と英米文学両方——に参加を許可され、それはそれで有益だっただろうが、望んでもいくつも落とされてしまう学生もいたわけだ。そこで、二年次の二月に三年次からの参加ゼミ（所属ゼミ）の希望を出して、書類による選考・

調整をおこなうこととした。学生は所属ゼミ担当教員と卒業論文の指導担当として選べることになる。(昭和初年と一九六〇年の文学に寄った卒論リストを示したが、現在の卒業論文は内容・分野ともに簡単に説明的にまとめられないくらいの広がりを見せており、毎年英文学科学生の機関誌『SMILE』に、優秀論文数篇と共に卒業論文題目一覧が記録されている。)

それと同時期に、かつて第一部で一七(第二部で一〇)開設されていた「英米文学演習」であったが、実質七に縮小し、代わりに「英語学演習」と「言語学演習」を二つずつ開設することとした。(さらに、二〇〇八年採用のネイティヴ教員ブライアン・ウィスナー専任講師(Brian Wisner)(〇八年准教授、一一年教授)の専門に鑑み「英語教育学演習」を加え、さらにその後「Seminar in Cross-cultural Studies」そして「言語習得論演習」も加わったのが現在の「ゼミ」の履修要項上のリストとなっている。)

二〇〇五年一〇月から〇九年まで武田将明専任講師(〇九年准教授)が泉谷治の後任として文学・イギリス小説を教え、英文学科独自の留学制度スタディー・アプロードの開始にも結城や宮川と一緒に力を注いだ。二〇〇八年には前述のウィスナー(第二言語習得、英語教育学)と同時に、羽田陽子の後任として英語学・歴史言語学の大沢ふよう教授が着任した。

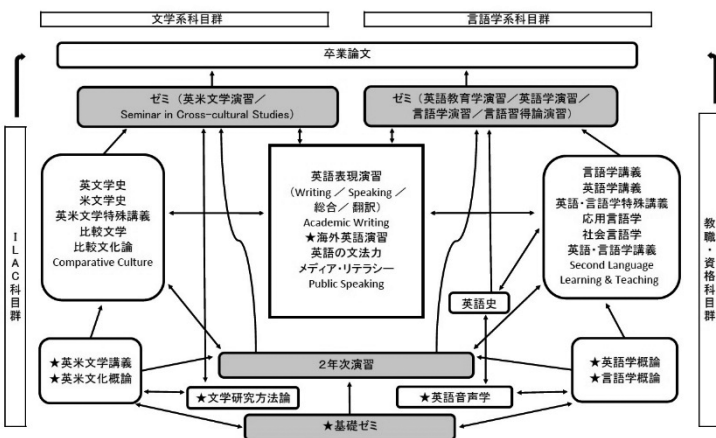
さらに二〇一〇年にはドイツ語の竹内章の後任として山下敦教授が、二〇一二年には英文学の武田将明の後任として丹治愛教授、アメリカ文学の秋葉雄二の後任として小林久美子専任講師(一五年准教授)が着任した。二〇一四年には、島弘之の後任として英文学・児童文学の山崎暁子准教授が着任した(二二年教授)。しかし一四年の新学期にジョン・ブロウカリングが病死し、

その後任として助教制度を用いてネイティヴ・スピーカーの能力を持つ教員を採用することを模索し、二〇一六年からは小島尚人を、二〇一七年からは韓沛君をそれぞれ三年間助教として採用した。二〇一九年には同年三月をもって定年退職した結城英雄の後任としてアメリカ文学の小島尚人専任講師（二三年准教授）を採用し、新たな助教として田中裕希（イギリス文学・英米現代詩）を採用、同時に英語教育の中田達也准教授を採用した。二〇二一年には英語学・英語史の福元広二教授を、同年ドイツ語・ドイツ文化の柳橋大輔専任講師を、また、助教制度の利用を終えて田中裕希を専任講師として採用した。そして二〇二二年に言語学（第二言語習得、英語教育研究）の近藤隆子専任講師を新たに採用した。

創立一〇〇年までのこの一〇年間、在職中の病没、出身校への移籍、〇・五枠の助教の採用、など、さまざまな事情がかさなつて、人事を平均年一回おこなうという状況が続いている。困憊状況ともいえるが、積極的に自己評価するならば、人事のたびごとに、語学と文学、第一表と第二表の区別を越えて、よりよい学科とするにはどうすればよいかの話し合いがおこなわれ続けていることは英文学科の将来にとっておおいに意味のあることだと考えたい。

〇〇年代後半以来、大学教育改革を推進する文部科学省の指導により、ディプロマ、アドミッシヨン、カリキュラムについての「三つのポリシー」など作文もおこなってきたけれども、現在の英文学科のありようは、つぎのインターネットのホームページ上の一般向けの「学科紹介」文章に簡潔に表わされている（そして、そこに書かれた科目が複雑に融合しているさまはカリキュラム・ツリーに図像化されている）。

英文学科 カリキュラム・ツリー



英語もある。けれど、それだけじゃない。幅の広さが英文学科の最大の特徴です。実用英語系の授業では、英語の技を磨きます。英語学系の授業では英語（および言語）を人文科学的、社会科学的に研究します。文学系の授業では、文学作品（小説、詩、映画など）の解釈を通じて批判的思考力を培ったり、人生を考えたりすることにもなるでしょう。言語学系の授業では、誰もが持っている言語の知識を自然科学的に分析することになります。

この文章自体、積み重ねられた気配が残っているけれども、創設百年を経た今、(さまざまな解釈や批評や思想に開かれていることがますます自覚されていった)文学研究と(さまざまな学際的広がりを示していった)語学——英語学・言語学——とを、積極的に「専門的に」併存させようと試みてきたわれわれが共通して持っているのは、言葉の力の感覚(それは言霊といっ

(1) 『The Hosei』(学友会『法政』) 4 (一九二七)の巻末に「法政大学英文学会記事——創立のいきどろ——」を書いた三年生の御崎善彦は次のように報告している。コールリッジの詩の講義をおえた「田部先生は私達をよばれました。そして『英文学会を作っては……』と云ふお話のあったのが、五月の十一日でした。晴れた火曜日です。三年の人々は大変力を入れ、野上先生にも色々ご配慮を煩はしなどして、会則立案に努力しました。草案が出来たのが六月になってからです。『学生自身がやって行かねば……』と先生方は毎日仰言られました。『……』十月九日、さ、やか乍らも発会式を挙げたのでした。ご多忙にも拘らず態々御貴臨下さいました本会顧問野上豊一郎先生、田部重治先生、森田草平先生に厚く御礼申し上げます。勿論吾が英文学会の将来は多端なるべきこと、思ひますが“Rome was not built in a day.”の一句を以て、この第一回の記録を了へます。『……』(一五、一〇、二〇、)御崎生」

(2) 「一九二二年の法政大学学生定員および専任教員兼任教員割合変更に関する認可申請」(『大学史資料集』第四集、一五五―一五八頁)は「今般本大学学部編成之変更及ヒ学生定員ノ変更ニ伴ヒ標記ノ件左記ノ通変更致度候条御認可被成下度此段申請候也」という、文部大臣宛の1月18日付の文書を含んでいるが、法文学部の文学科の専任教員は10、兼任教員は5(計15)、哲学科は専任教員8、兼任教員5(計13)「法文学部全体では専任教員35、兼任教員20、計55になる」と記し、備考欄には、「1 法文学部専任教員中十五名ハ予科及ヒ経済学部ヨリ兼務／経済学部専任教員中十名ハ法文学部ヨリ兼務／予科専任教員中五名ハ学部ヨリ兼務」などと玉突き的な記述がある。

(3) 法政大学の資料は上條を講師としているが(たとえば『百年史』四六三頁)、山川喜久雄「英語——一橋

英語百年の歩み」は、「昭和一四年二月九日、法政大学に在職中に腦溢血で逝去した。行年五八であった」と記す（『一橋大学創立百年記念 一橋大学学問史』「一九八二年」一一〇五頁）。上條は一九三三（昭和八）年九月に東京商科大学（のちの一橋大学）を退職しているの、おそらくその後のいずれかの時点から法政の専任となったのではないかと推測される。戦後一九六四年の『法政大学英文学会会員名簿』も「旧教授」として田部、野上、森田、平田、上條の五人を並べている。田部は『英語青年』連載の「英文学界そぞろ歩き」の第一一回「上条辰蔵と平田禿木の死」（一九六八年五月号）でも英文科発足時からのメンバーとして上條を扱っている。また、ホワイマントは予科でも教えた若い専任外国人教員ではなかったかと思われるが、彼の後、マクニール（一九二五—二六）、タイサリッジ（二八—三〇）、トーマス（三一—三七）、ベイカー（一九三九）が外国人講師として「英文学演習」を担当した記録がある。

（４）この連載記事は、翌年に大塚虎雄著『学界異聞』（先進社）の「附録 各大学文科物語」に入れられた。「英文学の野上豊一郎教授は予科の科長さんで、学校幹部の一人。白川と号して、夫人の野上弥生子女子と仲よく文壇に籍をおいてゐることも周知の通り。趣味で始めた能楽の研究も、今では坂本雪鳥氏などの向ふを張って、堂に入りかけてゐる。森田米松教授は、森田草平といった方が、わかりがよい。文学的な、やはらかい調子の訳と、細かい点にコセつかないところが、学生達から、よろこばれてゐる。」（二七〇—七一頁）などと軽い調子で書かれているが、二人を文科英文学主攻の代表としてとりあげているところが目を引く。（森田はもっぱら訳読式の授業だったとの伝聞的証言があるが、それは森田に限らず、漱石が『文学論』でI・A・リチャーズに先んじて示唆したような、社会学や心理学の視点をとりいれた方法論が弟子たちによって大学の場で実践されたとは思われない。）

（宮川 雅）

【史学科】

一 草創期（一九三七～一九六五）

文学部史学科は、一九三七（昭和一二）年、法政大学の高等師範部（一九二五（大正一四）年に高等師範科として発足、のち三二（昭和七）年に高等師範部となる）に開講された歴史地理学科の伝統を引き継ぐものである。その後、四七（昭和二二）年、旧学制の専門部や高等師範部などを解体して学部へ吸収し第二部（夜間部）を新設することになった折、文学部の第二部に地理歴史学科（歴史専攻）が創設された。これが史学科の新たな出発であり、文学部史学科としての歴史はここに始まるといえよう。手堅い研究姿勢によりながら、実証的でアカデミックな学風をつくりあげていくことが創立以来の史学科の伝統となつてゐる（『法政史学』四〇号、八八年、一～二頁）。

史学科創設時の専任は四七年には竹内直良のみであつたが、徐々にその数を増し、五〇年代半ばには五名の専任と、外部の著名な研究者を兼任として、史学科としての陣容を整えた。まず四七年には、周藤吉之（中国宋代経済史）が教授として就任し、翌四八年には丸山忠綱（加役方人足寄場や壘田永世私財法の研究で知られ、六九年大学紛争の最中に文学部長に就任、専任）と和田久徳（東南アジア史を専門とし歴代宝案の研究でも知られる、四八年専任、四九年兼任）が教授として、岩生成一（海外交渉史・南海貿易史、六三年専任教授）と中村英勝（イギリス議政

治史）が講師として就任した（『百年史』四六八～四六九頁、『法政史学』四〇号一（二頁）。この年の一〇月には通信教育部に文学部史学科が設置されている。四九年には新学制への転換により第二文学部として地理歴史学科は史学科と地理学科に分かれた。この折、藤井甚太郎（明治維新研究、専任）を講師に、関野雄（草創期の中国考古学研究を主導）を助教授に迎えた。五二年には板沢武雄（蘭学研究、専任）が教授に就任し、和田の退任に伴い翌五三年には河原正博（南海史・宋代史、専任）が第一教養部から移籍し、小西四郎（幕末史）も講師に就任した。また五〇年には研究助手制度が制定され、史学科には芥川龍男（戦国時代西国大名研究）が採用され、五八年には安岡昭男（明治維新外交史研究）が研究助手に採用された（『百年史』四七六頁）。以後、研究助手には片桐一男（蘭学史研究、六一～六四年）、丹治健蔵（近世交通史研究、六四～六七年）、森睦彦（書誌学、六七～六八年）が就任したが、六八年三月末をもって助手の採用は終了した。六一（昭和三六）年に、史学科は第二文学部から第一文学部に移行、同時に夜間の募集を停止した。

五〇（昭和二五）年には、学内の学会や文化活動が活発となり、史学科でも法政大学史学会を設立した。史学の研究を目的としながら教員と在校生・卒業生が一体となり相互の向上と親睦を図ることが目的であった。それ以後学術雑誌として『法政大学史学会会報』を発行してきたが、五三（昭和二八）年の第六号からは『法政史学』と名を改め、九九年からは年二冊を刊行し、二〇二二年秋には九八号にいたった（図1）。一三年の秋には一〇〇号を迎える。『法政史学』の掲載内容は、研究論文・研究ノート・研究動向に加え、毎年の史学会の大会報告要旨や史学科・大

学院消息、修士論文・卒業論文題目などであり、学内外の学術交流の場として重要な役割を果たしてきた。法政大学史学会大会は、史学会の発足以降毎年開催（当初は春・秋二回開催していたが、○九年以降は年一回開催）され、研究活動の活性化がはかられてきた（『百年史』四八二頁、『法政史学』四〇号一～二頁）。史学会大会では史跡見学会も開催（第一回の史学会開催以降）され、毎年多くの学生が教員とともに史跡を散策している。このほか、五四（昭和二九）年には『法政大学文学部紀要』が創刊されたが、その第一号は史学の特集であった（図2、『百年史』四七九頁）。

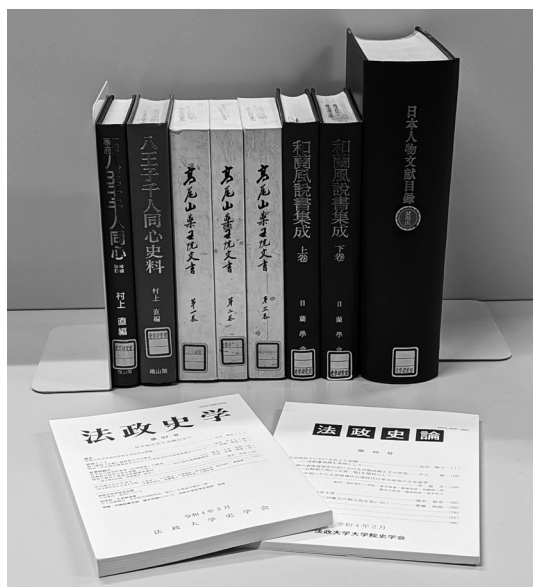


図1 初期の出版物（一部）と現在の雑誌

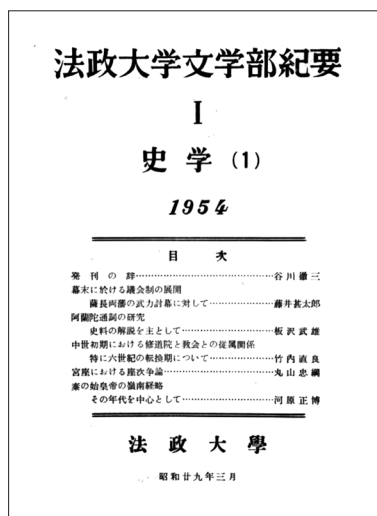


図2 『法政大学文学部紀要』創刊号の史学科特集 (HOSEI ミュージアム提供)

二 第一次世代交代と繚乱期（一九六五～一九九九）

一九六七年には板沢の死去にともない、六二年より川村短期大学助教授の安岡が専任講師として再び史学科に赴任した（六八年助教授、七一年教授、『百年史』四八八頁）。その後、安岡は日本近代史研究を牽引するとともに法政大学沖縄文化研究所長（八四年～八六年、八九年再任（九二年）も兼任している。七一年は、丸山の死去と岩生の退任をうけ、史学科にとって転換点となった年でもある。岩生の後任には、江戸時代の政治史、特に代官の研究で知られる村上直が助教授に就任（七三年教授、七八～七九年学部長・能楽研究所長、八一年～八五年通信教育部長）した。七三年には中世都市・商業史、特に中世武士団の研究で知られる豊田武が教授に就任した。豊田は研究室の充実に取り組むとともに、各専攻分野別のゼミナール中心の拡充をはかるなど、史学科のカリキュラム改革などを熱心に進めた。日本考古学・古代史・中世史・近世史・近代史・現代史・東洋史・西洋史の各演習を中心に組み立てたゼミナールの形態はこの時期に整備されたといえる（『法政史学』四〇号二五三頁）。そして、七四年には日本考古学の分野で活躍していた伊藤玄三が助教授に就任（七九年教授、九七年学部長）し、七六年には竹内の退任にともないロシア近代史で知られる倉持俊一が教授に就任（八四～八五年学部長）、八〇年には豊田の退任（同年三月急逝）にともない中世荘園史を専門とする中野榮夫が助教授に就任（八五年教授、九一～九二年学生部長、九八～九九年学部長、二〇〇二年～〇四年国際日本学研究所所長）した（『百

年史』四九六頁）。その後、八三年には中国清国初期の社会経済史を専門とする山名弘史が専任講師に（八五年助教授、九七年教授）、八九年には帝政後期のローマ史を専門とする後藤篤子が助教授に就任（九九年教授、〇五～〇六年FD推進センター初代センター長、〇七～〇八年学部長）した。今日振り返ると隔世の感があるが、史学科で初どころか、文学部全体で二人目の女性専任教員であった。なお、それまで大学院が日本史学専攻のみであったこともあり、西洋史・東洋史の専任教員は各一名であったが、以後、西洋史分野は二名体制となった。九八年には倉持の退任にともない、同様にロシア近現代史を専門とする加納格が助教授に就任（〇二年教授）した。九六年には村上の退任にともない、江戸時代自治文化史を専門とする澤登寛聡が専任講師に就任（九八年助教授、〇三年教授）し、九八年には安岡の退任にともない、日本近代史を専門とする長井純市が専任講師に就任（九九年助教授、一〇年教授）した。

この頃の史学科の研究室は、村上・安岡研究室が八〇年館（現在の図書館・研究室棟）にあった以外、外濠校舎と八〇年館の間で現在広場となつていところにあつた第一校舎に入つていた。それ以前の史学研究室は第Ⅱ・五八年館の二階にあつたが、八〇（昭和五五）年に新図書館・研究棟が完成したことから、翌八一（昭和五六）年に、考古学研究室とともに第一校舎に移転したのである。戦前より図書館（当初は講堂）として使用されていたこの校舎は、建築家でのちに法政大学第一工業高等学校の校長となつた山下啓次郎（ジャズピアニスト山下洋輔の祖父）の設計により二七年に（当時第三校舎として）建てられたものである。山下は司法省に所屬して、重要文化財となつている旧奈良監獄など、近代の著名な監獄建築を設計したことで知られており、第

一校舎も空襲にも耐えた極めて堅牢な建物であった。建物は入って両側に階段があり、四階に上ると廊下は奥に向かって丁字になっており、右手が史学の共同研究室、左手が博物館学研究室で、中央の廊下を奥に入ると正面の突き当りが伊藤の考古学研究室であった。この四階は図書館時代に閲覧室として使われていたところで、五階まで吹き抜けとなっているアリーナ式構造であり、考古学研究室は五階の回廊まで書籍や遺物が積まれていた。考古学研究室の手前は小さな広場となっており、それを囲むように伊藤研究室に向かって右手には中野研究室、左手には山名研究室と倉持・後藤研究室（当時は二名の教員で一つの研究室をシェアすることは珍しくなかった）が配されており、考古学研究室のさらに奥は史学科の書庫となっていた。史学の共同研究室では各ゼミの授業や史学科関連の会合などが開かれており、この第一校舎の四階が史学科の研究・教育発展の場となっていた。史学研究室には、七〇（昭和四五）年以降、専任の研究助手はおかれず、大学院生が交代で助手の事務を引き継いでいる。考古学研究室には後述する法政大学百周年記念事業実施のために嘱託研究助手がおかれ、星野達雄（八一〜八三年）、佐々木彰（八三〜八四年）、阿部朝衛（八四〜八六年）が就任した（『法政史学』四〇号二五九頁）。嘱託研究助手は八六年で終了した。

この時期には、大学院（当時は日本史専攻のみ）の研究環境が充実したことから、教員と卒業生や大学院生を中心として学部生もこれに加わり、共同で研究活動を盛んに展開し多くの成果が発表された（『法政史学』四〇号二五七〜二五八頁）。

七四年には、岩生が監修し史学研究室が編纂した『日本人物文献目録』（平凡社）が刊行され、

学会から注目された(図1)。このほか、岩生監修による共同研究の成果として『京都御役所向大概覚書』(清文堂)、および日蘭学会・法政蘭学研究会の共編による『和蘭風説書集成』上・下(吉川弘文館)が刊行された(図1)。

日本近世の地域研究も活発で、村上を中心とする日本近世史研究会の卒業生・大学院生・学部生の成果として、『八王子千人同心史料』(七五年、雄山閣、図1)、『江戸幕府千人同心史料』(八二年、文献出版)、『幕藩制社会の展開と関東』(八六年、吉川弘文館)が刊行された。

八六年には、法政大学多摩図書館地方資料室の事業の一環として村上を団長に高尾山薬王院文書調査団が組織された。その調査団には安岡・山本弘文(経済学部教授)をはじめ段木一行(のち文学部教育学科教授)・馬場憲一(のち現代福祉学部教授)兼任講師のほか大学院生などが加わり、翌年にはその成果として『高尾山薬王院文書』(図1)が刊行された。近世文書研究会もその調査研究の成果として『埼玉県北本市吉田真士家文書史料集』(八七年)を刊行している。

法政大学は八〇(昭和五五)年に百周年を迎えたが、その百周年記念事業の一つとして史学科では伊藤を中心とする福島県双葉郡浪江町にある本屋敷古墳群の調査(八二年から実施、図3)



図3 本屋敷古墳群の調査

が行われ、八五年には『本屋敷古墳群の研究』（法政大学）が刊行された。また伊藤は、多摩キャンパスの開発に先立つ多摩校地遺跡調査団の中心を担い、その成果は『法政大学多摩校地遺跡群Ⅰ・A地区』『法政大学多摩校地遺跡群Ⅱ・G地区』（八六年）、『法政大学多摩校地遺跡群Ⅲ・C・R地区』（八八年）、『法政大学多摩校地遺跡群Ⅳ・E・D・B地区』（九一年）に結実している。法政大学に寄贈された考古学資料については図版目録として整理し『法政大学所蔵伊藤鉄夫・陽夫考古学資料目録Ⅰ』（九〇年）、『同Ⅱ』（九六年）として刊行している。

このほか、九一年・九二年の二年にわたる日中合同・法政大学タクラマカン沙漠調査（『法政史学』四五号、九三年、一二二～一二六頁、『法政大学タクラマカン沙漠調査概要報告書』九三年、図4）、『沙漠・水・人間——日中合同法政大学タクラマカン沙漠調査報告書——』（九五年）にも教員・学生が参加している。この時期、地方自治体等と連携した調査や自治体史編纂も行われた。福島県会津田島寺前遺跡（七六～七七七年調査、『会津田島寺前遺跡』九二年）、北九州市高津尾遺跡（八七年調査、『高津尾遺跡17区発掘調査報告書』一九九三年）などが発掘調査の主たるもので、自治体史としては茨城県結城郡千



図4 タクラマカン沙漠調査隊（HOSEI ミュージアム提供）

代川村（『村史 千代川村生活史 第五卷 前近代通史』〇一年ほか）、茨城県総和町（『総和町史 通史編 原始・古代・中世』〇五年ほか）などを挙げるができる。

安岡も対外関係の研究に力を入れており、板沢の研究を継承して前述の『和蘭風説書集成』の刊行に携わっている。安岡は幕末から明治にかけての日本の領土問題研究の路線上で沖繩研究に力をいれ、法政大学百周年記念事業の久米島調査委員会委員として現地調査を実施し、『沖繩久米島の総合的研究』（八四年、弘文堂）を刊行した。さらに『沖繩久高島調査報告書』（八五年、法政大学沖繩文化研究所）の編纂にも参画している。このほか、『近現代史用語事典』（九二年、新人物往来社）をはじめとする日本近現代史に関係する数多くの辞典の執筆編纂を手がけており、それには多くの院生も参画していた。

内部の雑誌や会報については、『法政大学史学会通信』のほか、村上を中心とした『日本近世史研究会報』や中野を中心とした『日本中世史ゼミ報』なども刊行された。伊藤を中心とした法政大学考古学会の学術誌『法政考古学』の刊行も始まった。八〇年代には学部生たちも史学科学生学会を形成し、独自に学習・研究活動を展開していた。その活動は一度途切れたものの、倉持の尽力もあって、学外から和田春樹、弓削達など著名な研究者を招いて講演会を実施するなど、活発な活動を再開した。しかし、学生の関心の多様化もあってか八〇年代末になると入会者減少に悩まされ、九〇年には倉持に会費の代理徴収を止めたいと相談があり、活動停止のやむなきに至った。

八七（昭和六二）年は、三七（昭和一二）年に高等師範部に歴史地理学科が開講されてから五

○年の節目にあたり、史学科と地理学科が合同で「創立五十周年記念事業」が実施され、『法政大学史学科・地理学科の半世紀』（沿革史）と『法政大学・史学地理学卒業生名簿』が作成された。前者は、第一章「地形図にみる法政大学周辺の変化」、第二章「史学科・地理学科のあゆみ」、第三章「新制大学院の発足」という三つの章からなり、博士論文・修士論文・卒業論文題目一覧を添付するなど、史学科前半期の教育・研究のあり様を垣間見るには不可欠な刊行物となっている。記念式典は同年一月二日に赤坂プリンスホテル別館ロイヤルホールで開催され、史学科より関野が「絵の中の視線」と題する講演を行った（『法政史学』四〇号二五八―二五九頁）。

また、七〇年安保の時期に史学科を中心として学生運動が展開されたことはあまりにも有名である。当時史学科の学生であった大道寺将司と片岡利明が法政大学Ｌクラス闘争委員会を結成し、哲学科や日本文学科の学生もこれに参加し、一時は百数十名にも膨れ上がったといわれるが、七〇年安保闘争の終結とともに運動は収束していった。

三 ボアソナード・タワー（BT）での活動と第二世代交代期（二〇〇〇～現在）

二〇〇〇年に市ヶ谷キャンパスのシンボルである地上二七階地下四階建てのボアソナード・タワーが完成すると史学科の研究室や演習室・書庫はその一五階に入ることになった。

〇二年には中野が中心となって推進した「日本発信の国際日本学の構築」（文部科学省二一世紀COEプログラム）と「国際日本学の総合的研究」（文部科学省私立大学学術研究高度化推進

事業（学術フロンティア部門）とが同時に採択され、それとともに現在まで続く「国際日本学研究所」も設立された。

○三年には第一教養部の解体にともない日本古代史で北方史や社会経済史、比較律令学などを専門とする小口雅史（一四年）二〇年国際日本学研究所所長）、東洋史で中国国民革命を専門とする栃木利夫、西洋史で古代ギリシア史を専門とする中村純（九七）九八年第一教養部長、一（一四年法政大学常務理事）の三教授が史学科に移籍した。○七年には○五年の中野の退任にともない、中世天皇制を専門とする河内祥輔が教授に就任した。これにより史学科の専任教員の陣容は日本史五名、西洋史三名、東洋史二名に拡張されることになる。

○四年には伊藤の退任にともない、関東の弥生土器を専門とする小倉淳二が専任講師に就任（二年准教授、一八年教授）した。なお、八〇年代から九〇年代にかけて活況を呈した学生参画の考古学発掘調査は、その後の社会情勢の変化や諸般の事情により、伊藤退任後は行われていない。澤登は村上の史料調査を引き継ぐとともに、院生も参画した『北区史』『新島村史』『富士吉田市史』などの自治体史の編纂事業を進めた。このほか、澤登を基軸にした積極的な江戸史料の研究と整理作業については、乾物屋として知られる「にんべん」の古文書を纏めた『江戸日本橋商人の記録―（にんべん）伊勢屋高津伊兵衛家の古文書』（勉強出版）として二〇年に刊行されるにいった。

近代史の資料研究も長井を中心に学生が参画し、数年にわたり法政大学大原社会問題研究所蔵の『棚橋小虎（大正期の労働運動家）日記』について研究を進め、その成果が大原社会問題研

究所より刊行されている。なお、安岡在任中に院生と研究していた田中光顕（土佐藩出身の政治家）の書簡（法政大学図書館に寄贈）については、長井がこれを引き継ぎ活字化している（『法政大学文学部紀要』五五～六六号、〇六～一三年）。

史学科では六二年の板沢退任を受け、その蔵書を一括購入（ただし一部は寄贈）した。購入時から五〇年あまり経過したことから、〇七年に資料の全貌把握が学内通達により求められ、確認調査が開始された。そして、一二年から整理作業が実施され、一三年には史学会の特別企画準備積立金による事業として設定され、数年にわたり整理作業が行われた（『法政史学』八一号、一四年、九一～九九頁）。

一〇年を迎える頃は第二期ともいえる世代交代期にあたる。東洋史では〇九年の栃木利夫の退任にともない、一〇年に中国古代史を専門とする齋藤勝が専任講師に就任（一五年准教授、一五～一六年市ヶ谷学生センター長、一七年～現在まで学生センター長）し、一三年には山名の退任にともない中国の都城考古学を専門とする塩沢裕仁が准教授に就任（一六年教授）した。これにともない東洋史専攻は文献史料と物質資料という全国的にも珍しい二つのゼミ体制となった。日本史では、一三年に河内の退任にともない中世仏教史を専門とする大塚紀弘が専任講師に就任（二〇年准教授）した。なお、一一年から文学部で通信教育課程を持つ三学科（日本文学科、史学科、地理学科）には専任教員枠が〇・五名増やされ任期付教員を採用できるようになったが、史学科ではなかなか利用できずにいた。一五年、闘病生活が続く澤登を助けるべく、近世都市史を専門とする松本剣志郎が助教として採用された。松本は一八年には澤登の退任にともない専任講師に

就任した（二〇年准教授）。また、二二一年には長井の退任にともない、日本近代政治史を専門とする内藤一成が准教授に就任している。西洋史では、一九年には加納の退任にともないフランス近世史・都市史を専門とする高澤紀恵が教授に就任し、二〇年には中村の退任にともないイギリス近・現代史を専門とする大澤広晃が准教授に就任した。このほか、東洋史では前述の任期付教員枠を利用して、一八年にカンボジア史を専門とする北川香子が准教授（一九年退任）に、二一年には東アジアの水運と交流を専門とする宇都宮美生が准教授に就任した。ゼミは基本的に専任教員が担当しているが、日本現代史ゼミについては島海靖（八四～〇四年）、差波亜紀子（〇四～二二年）、柏木一朗（二二年～現在）の各兼任講師が担当してきた。

第一校舎時代の史学科書庫は暗くて狭いスペースに書籍がぎっしりと詰め込まれ、利用しにくいことこの上なかったが、BT一五階の史学科共同書庫は電動書架とコピー機が設置されて使いやすい、学生・院生の利用に供することを第一義として蔵書も拡充されてきた。史学科の兼任講師を務めたこともある弓削達が〇六年に亡くなり、翌年その蔵書の寄贈をご遺族から打診された折には、当時の図書館長であった前川裕（国際文化学部教授）の尽力もあって貴重な洋書等を多摩図書館に引き受けてもらったが、史学科共同書庫にも和書を中心にずいぶん寄贈図書をいたしていた。

現在史学科ではグローバル教育を進めており、塩沢を中心にユネスコ世界文化遺産研究所である龍門石窟研究院と少林寺、大学・研究機関としては上海の復旦大学文物与博物館系との研究提携を行っている。日東西のゼミを問わず毎年複数名の学生が海外の提携校に留学しているほか、

東洋史のゼミでは課外学習として上海復旦大学や龍門石窟研究院の協力のもと海外研修も行われている。

通信教育部の史学科設立についてはすでに触れたが、その教育は学部専任を基軸に展開され、学部と歩調を合わせて歩んできた。通信教育では、教科書に基づいた教育が基礎となるが、『地方史学』（村上直・馬場憲一著）、『日本仏教史』（笠原一男・小栗純子著）、『海外交渉史』（永積洋子著）、『南海史』（河原正博著）、『東洋美術史』（林良一著）、『アメリカ史』（清水博著）、『西洋哲学史』（長谷川克彦著）などに基づき（図5）、学部とは異なった通信教育独特の科目も設けられていた。現在でもこれらの教科書は使用されているが、その他の科目については市販の指定本を用いた教育を行っている。社会人学生の学問に対する熱意は旺盛で、昨今では通信教育課程を卒業後に大学院に進学する学生も増えている。

大学院の史学専攻は、五二年に人文科学研究科に国史学専攻として修士課程が開設されたことに始まり、五四年には日本史学専攻に改称、五五年には博士課程を開設し、多くの研究者を輩出してきた。二〇一一年からは新たに東洋史



図5 通信教育部史学科教科書(通信教育部提供)

分野と西洋史分野を加え史学専攻に改称した。日本史学専攻修士課程は夜間開講の三年制という全国でも珍しい形で開設され、学位取得を目指す現役の高校教員や社会人に好評であった。二〇〇〇年以降は昼夜開講の二年制となっているが、社会人院生が多いのは往時の伝統ゆえであろう。現在でも長期履修制度により従来と同様三年制の選択も可能である。開設当初は五三年館（大学院専用棟）で行われていた大学院の授業は、九二年の九二年館（大学院棟）竣工後は同館を中心にしながらボアソナード・タワーでも行われている。この他、現在ではアーキビスト養成講座なども開設している。五〇年以降の法政史学会研究大会の開催とともに、大学院ではその年以降、月例研究会を開催しており、現在までに四一九回を数える。六〇年代から七〇年代にかけては、院生・院修了生を中心とした封建社会研究会が活発に研究活動を展開し、社会的な評価を高めていった。また、七四（昭和四九）年より専攻に所属する院生の研究発表の場として『法政史論』を毎年刊行（図1、現在四九号、以前は本学「学生研究補助金」、現在では「特色ある教育研究プログラム実施補助金」による）するなど、研究水準の確保に努めている。

大学院史学専攻では、研究者、高度職業人、さらに歴史に深い関心を有する高度教養人などを輩出し、その修了生は、大学・高等学校・中学校の教員、博物館の学芸員、資料館・文書館の専門職員（アーキビスト）、図書館の司書、都道府県史・市町村史の編纂員、文化財保護事業の専門職員など諸分野で活躍している。

【地理学科】

一 ルーツ

法政大学文学部地理学科のルーツは、「大正一四（一九二五）年四月、専門部第二部に中等学校教員養成のために増設された高等師範科が、昭和七（一九三二）年に専門部から独立した」（『法政大学史学科・地理学科の半世紀』（一九八七）、以下『半世紀』と表記する）法政大学高等師範部にある。この高等師範部に一九三七（昭和一二）年、歴史・地理科が増設された。二〇二二年は、この年から数えて八五年目に当たる。

法政大学高等師範部は、第二次世界大戦後の一九四七（昭和二二）年に解体して学部へ吸収され、文学部第二部（夜間部）に、地理学科が新設された（旧制地理学科）。一九六一（昭和三八）年には史学科とともに昼間部課程に移行し（新制地理学科）、現在に至っている。なおこの当時の教員スタッフは、秋岡武次郎（地図学）、多田文男（自然地理学、兼任）、岡山俊雄（地形学、兼任）、浅井辰郎（気候学）、小川徹（文化・社会地理学）の各教授、三井嘉都夫（陸水学）、鴨澤巖（経済地理学）の各助教授、渡辺一夫専任講師（経済地理学）、市瀬由自研究助手（地形学）という豪華な構成であった。専任と兼任が入り混じっているとはいえ、この時点ですでに日本でも有数の規模を誇る地理学科であったといえる。

また一九四七（昭和二二）年に設置された通信教育部にも、一九五五（昭和三〇）年に文学部

地理学科が開設され、現在でもなお日本で唯一の通信教育部地理学科として数多くの学生が勉学に励んでいる。さらに一九五三（昭和二八）年には法政大学大学院人文科学研究科に地理学専攻修士課程（夜間部、三年制）が増設され、一九五五（昭和三〇）年には同博士課程も増設された。因みに、大学院での最初の博士号授与者は、一九七〇（昭和四五）年三月の二名、三井嘉都夫（一九四三年度高等師範部卒、一九四九年度旧制文学部地理学科第一回卒、題目…人為による河床の変遷に関する地理学的研究）と浅井辰郎（当時本学専任教授、題目…ヤマセの水平・垂直分布に関する研究）であった。また修士課程が夜間部であった時代には、現職の中学校および高等学校教員が数多く在籍していた。

一九五〇（昭和二五）年一月に、高等師範部及び新旧地理学科卒業生を主体とする「法政大学地理学会」の創立総会が開かれ、機関誌『法政地理』を発刊、大学紛争等の影響で一九六九年以降一時活動を中断したものの^②一九八三年から再び活動を開始し、一九八五年には『法政地理』が復刊（第一三号）され現在に至っている。

二 地理学科という空間

一九八〇（昭和五五）年代当初、市ヶ谷キャンパスの文学部地理学科関連施設は各所に分散して存在していた。学科の事務室は旧第Ⅱ・五八年館二階にあった教員研究室の一つを転用したもので、学科の図書室も兼ねており、ここで二人の実験助手兼事務員が勤務していた。この事務室

は、授業のため本学を訪れる兼任講師の控室でもあり、また月に一度程度の学科会議の場でもあった。教員研究室は同じ旧第Ⅱ・五八年館に二カ所と真新しい八〇年館に一室、いずれも二名の相部屋だった。その他にも、五八年館の西側に教室とも物置ともつかない部屋が一つと、旧第一校舎と呼ばれた元図書館（現在の外濠校舎の北端に位置するあたりにあった）の五階に学科の旧蔵書を収めた空間が一つ（ユーゴ研と称されていた）……と記していると際限がないが、要するに地理学科としての空間は、キャンパス各所に分散して存在し、学科としての統一された空間ではなかったのである。一九九二（平成四）年、外濠の北側、市谷田町に新しい大学院棟（九二年館）が新設されるまでは、第Ⅱ・五八年館に隣接してあった旧大学院棟に地理学専攻の大学院生がたむろする空間があったが、新大学院棟建設後は大学院生たちもそこに移った。大学院生にとっては、事務室からも八〇年館の図書館からも距離的に遠くなったのだった。

こうしてあちこちに分散していた地理学科関連の諸施設配置は、二〇〇〇（平成一二）年四月に完成した高層ビル校舎・ボアソナードタワー（BT）の供用開始により大きく変わった。BTは基本的に、一三階までの低層階部に少人数のゼミ教室、一四階以上の高層階部に教員研究室及び大学付置研究所等が配置される構成になっているが、このBTの一二階と一三階に、地理学科関係の施設が集積されたのである。具体的には、一二階と一三階西側に二つの実験実習室が設けられ、ここが多くの地理学科開設科目の授業や実験・実習の場となった。また一二階に地理学科事務室（兼図書館）と、貴重文献を収容する地理学文献センターが置かれ、後者には学生の図書利用が可能なスペースも設けられた。両階には合わせて六室の教員研究室も設けられたが、学科

の全教員研究室が集中する形にはなっておらず、現在でも二名の教員が八〇年館に研究室を持っている。

三 スタッフ

旧制地理学科から新制地理学科への移行等に際し、重要な役割を果たした教員スタッフ個々についての詳細は、『法政大学百年史』、『半世紀』、『法政大学と戦後五〇年』といった他著に譲る。この時期の文学部地理学科の特徴をあげるなら、一つは秋岡武次郎をはじめとする地図学・地図史の高名な専門家が一堂に会したことである。どのような経緯でそうした研究者の集積が実現したのかについてはつまびらかにしないが、この学統は高等師範部時代から受け継がれ、山口恵一郎、清水靖夫といった俊秀を輩出することにつながった。二つに、自然地理学関係での旧資源調査研究所との関係である。同研究所は一九四一（昭和一六）年文部省（当時）の外郭団体として設立され、大戦後も一九七〇（昭和三五）年まで民間の研究所（文部省が運営資金を支援）として活動した研究機関で、五部門の一つに地理部門があり、そこに在籍していた多田文男を初めてする自然地理学研究者の多くが法政大学地理学科に教員として加わり、地道な現地調査を重んじる伝統を学科にもたらしした。それら関係者の中には人文地理学研究者もいた。そして三つに、地理学科が一九五四（昭和二九）年の経済地理学会創設に貢献した中堅・若手の活躍の場となったことである。同学会は、第二次大戦期の日本の地理学のあり方を反省し、社会科学としての地理

学の革新を目指したもので、法政大学地理学科はこうしたラディカルな運動の中心的役割を果たすことになる。このような法政大学文学部地理学科の特質は、一九六〇～七〇年代に定着したといつてよいであろう。例えば七〇年代半ばには、人文地理学関係のスタッフ四人全員が経済地理学の専門家という時期も見られた⁽³⁾。

一九六五（昭和四〇）年当時、「教員の平均年齢の最も低い学科⁽⁴⁾」という評価を受けた地理学科も、時を経ればスタッフの入れ替わりの時期を迎えることになる。一九八〇年代のスタッフの変動は、八二年に仙台市での学会出席中に急逝した大貫俊教授の後任として一九八四（昭和五九）年四月⁽⁵⁾、中俣均専任講師（文化地理学、一九八七年助教授、一九九三年教授）が加わったのみであったが、このころから人文地理学も経済地理学一辺倒のスタッフ構成ではなくなっていく。

昭和から平成に入ると、地理学科の骨格形成を担ってきた名物教員たちの退職が相次いだ。まず、長きにわたって地理学科の象徴的存在であった三井嘉都夫教授が一九九二（平成四）年三月をもって定年退職。二年後の九四（平成六）年三月に鴨澤巖教授も定年を迎えた。しかし両巨頭の後任補充人事は学科内での議論がまとまらず、「臨定（臨時学生定員増）の延長申請に関連して教員の欠員を早急に補充しなくてはならなくなった⁽⁶⁾」が、「地理学科専任人事を学科内で決めることができないため、学部長が強権を発して人事権を学科からいわば剝奪し、その人事選考を進める⁽⁷⁾」という事態が生じた。同書には、これは「異例なことであり、学科の意思尊重が基本であることを確認するが、あつてはならぬ処理方法であろう⁽⁸⁾」との評言がみられるが、それが何を対象としてなされた評言なのか、またどう「あつてはならぬ」のかは必ずしも明瞭ではない。

地理学科が採用の努力を怠ったわけでもない。地理学科では早くから新任教員採用の公募を実施してきた。資料1は一九八三（昭和五八）年の『地理学評論』（日本地理学会の機関誌）に掲載されたその実例である。はっきりと確認したわけではないが、文学部内においても初めての教員採用公募だったと仄聞したことがある。しかし九〇年代当初のこの時期、公募も試みられたものの学科内の意見が対立して紛糾し、結果として前記のような事態を招いたのだった。明らかに、学科内に公募の成立を阻もうとする勢力が見られたのである。これがもたらした事態は、二十年後に負の帰結となつて顕われることになった。

一九九六（平成八）年四月から三井教授の後任として小寺浩二（海洋陸水学）、鴨澤教授の後任として片岡義晴（農業地理学）の両氏がともに専任講師として採用された（ともに二〇〇八年四月より准教授）。また一九九六（平成八）年三月に渡辺一夫教授が定年退職。この時も後任の補充が長引いたが、一九九九（平成一一）年三月の市瀬由自教授の定年退職後、同年四月に渡邊教授の後任として埼玉大学から山本茂（工業地理学・地域開発）、市瀬教授の後任として駒澤大

資料 法政大学文学部地理学科の公募要領

教官公募について

法政大学文学部長から下記のとおり、教官公募（地理学担当）の通知がありましたのでお知らせいたします。くわしくは法政大学にお問い合わせ下さい。

（専門分野）：文化地理学領域、環境地理学領域、地図学領域のいずれか、（職名・人員）：教授、助教授、講師のいずれか1名（専任）、（採用予定日）：昭和59年4月1日、（応募資格）：大学院修士課程修了、またはこれと同等以上の能力があると認められる者、（応募書類）：(1)履歴書（写真貼付、連絡先・電話番号明記のこと）、(2)業績一覧表（学部卒業論文、修士論文を含む）、(3)主要論文2編以内の現物、別刷またはコピー（未発表の論文も可）、（応募締切日）：昭和58年10月15日（必着）

（応募書類提出先、問い合わせ先）：

〒102 東京都千代田区富士見 2-17-1

法政大学学部事務課文学部係気付

法政大学文学部長宛

TEL 03-264-9324（大塚）

（「地理学担当教員公募書類」と朱記のこと、郵送の場合には書留にすること）

出典：地理学評論 56 - 9 (1983 年) p.656

学から漆原和子（土壌地理学・自然地理学）の両教授を迎えた。漆原教授はかつて一九七一年から三年間研究助手を務めており、二三年ぶりの母校復帰であった。

二〇〇三（平成一五）年四月からは、第一教養部廃止に伴う教員分属として、米家志乃布准教授（歴史地理学・北方史）、中島弘一教授（分析化学）、吉田智准教授（原子核物理学）がスタッフに加わった（米家、吉田両氏は二〇〇七年四月より教授）。これで地理学科の教員は合計一〇名と大所帯になり、教員の専攻分野もより幅広く多様な姿となった。地理学を専門としない中島、吉田両教授であるが、地理学科学生とは教職課程科目の担当者としての交流があり、地理学科の専門科目は担当しないものの、多くの学科業務を精力的に分担している。

さらに二〇〇六（平成一八）年三月をもって、ちょうど三〇年間勤務した山口不二雄教授が退職。後任として二〇〇八年四月より金城学院大学から伊藤達也教授（経済地理学・資源環境研究）が就任した。この人事の時から、地理学科の新規採用人事は再び公募によることとなり、以降は例外なく公募制によって行なわれてきている。

二〇一〇（平成二二）年三月をもって山本教授が定年退職。後任として京都大学から小原文明准教授（都市地理学・都市開発論）が就任、さらに二〇一三（平成二五）年三月、漆原教授が定年を迎え退職。同年四月より前奈英明教授（変動地形学・第四紀学）がスタッフに加わった。また、学生・院生時代から始まって教員としても法政大学一筋に過ごしてきた生き字引的存在である佐藤典人教授が二〇一七（平成二九）年三月をもって定年退職。後任には同年四月より、東京都勤務であった山口隆子准教授（気候学・生気象学）が就任した。なお、二〇一三（平成二五）

年度中に新しく助教（任期付き・0・5枠）一名が認められて、二〇一四年度より富田啓介助教（現愛知学院大学、自然地理学・生態学・環境学）が二年間、二〇一七年度より羽佐田紘大助教（現奈良大学・地形学・GIS・自然地理学）が五年間就任し、二〇二二（令和四）年度からは宇津川喬子助教（自然地理学・堆積学）が務めている。さらに、二〇二一（令和三）年三月に片岡准教授が定年を迎えて退職。後任として二〇二二（令和四）年四月、宮城教育大学より佐々木達准教授（経済地理学・農業地理学）を迎えた。地理学科スタッフは総勢一名となったわけである。

なお、二〇〇三（平成一五）年に大学院において、人文科学研究科を含む三研究科（他は政治学研究科と社会学研究科）をまたぐ形で国際日本学インスティテュート（修士課程）が設立され、翌年には博士課程も開設された。大学院地理学専攻も設立当初からこのインスティテュートに参画し、初めは一名、同インスティテュートが二〇一〇（平成二二）年度から人文科学研究科内に移管された後には、主に人文地理学専攻の教員複数名が、学生の指導に携わっている。開設当初は日本人学生と外国人留学生とが併存していたが、次第に外国人留学生の比率が増し、近年ではこのインスティテュートから博士（地理学）の学位を取得する外国人学生も出現し、地理学科の国際性増進に貢献してきている。

四 イベント

法政大学ではこれまで、地理学に関わる全国規模の学会大会が何度も開かれてきた。それは、

キャンパスが都心部にあって数多くの専任スタッフを抱えているマンモス大学のいわば責務のうなものである。

一九八七（昭和六二）年四月一日～四日、日本地理学会春季大会が、新設間もない多摩校地の経済学部棟を会場として開催された。記録によれば、日本地理学会の大会が法政大学で開催されるのは、一九五七（昭和三二）年六月、一九六八（昭和四三）年四月に続いて三度目のことであった。^⑨大会は、実行委員長…三井嘉都夫（文学部、以下所属の記載のない者はいずれも文学部）、総務…鴨澤巖、山口不二雄、中俣均、会計…東郷正美（社会学部）、会場…山本健児（経済学部）、山口不二雄、受付…渡辺一夫、懇親会…西川大二郎（第一教養部）というスタッフのもとで行なわれ、法政大学の地理学関係教員を総動員して運営された。多摩校地という新しい空間ができたために可能となった大会であり、都心からの交通や宿泊の便などのため参加者数の減少が懸念されたが、真新しい校舎であることや、各種部会の開催にも問題なく対処できる教室等のキャパシティの大きさが評価されてか、盛会であった。日本地理学会の大会では、研究発表の概要を事前に提出し、それを「予稿集」という冊子として印刷配布するのが慣例であったが、集まった原稿にはまだ手書きのものが相当数見られた時代である。

日本地理学会の大会は、二一世紀になつてからも二〇一〇（平成二二）年三月二六日～二九日に法政大学で実施されたが、この時も市ヶ谷キャンパスの外濠校舎落成を記念するような形で、懇親会（BT二六階スカイホール）を除く各種研究発表およびシンポジウムが外濠校舎で行なわれた。この時の実行委員会の構成は、大会委員長…山本茂、総務…佐藤典人、東郷正美（社

会学部)、受付・広報・漆原和子、森田喬(デザイン工学部)、会場・中俣均、片岡義晴、小寺浩二、伊藤達也、米家志乃布、近藤章夫(経済学部)、吉成直樹(沖縄文化研究所)、懇親会・伊藤達也、井上奉生(人間環境学部)、巡検・米家志乃布という布陣であった。

一九八七年の大会は、会員による一般発表と、個別テーマに関する小規模な研究委員会、それにエクスカーションからなるものだったが、二〇一〇年大会時には、一般発表だけでなく九種のシンポジウムと多数のポスター発表およびエクスカーションが行なわれ、学術的な意味の深化とその変貌ぶりを実感させる大会であった。

また、先に法政大学文学部地理学科が経済地理学の橋頭保の一つとなったと述べたが、そのことを端的に表すように、法政大学はしばしば経済地理学会大会の舞台ともなった。その年次とシンポジウムのテーマは、一九五九年(後進地域の諸問題)、一九六四年(都市の経済地理学的諸問題)、一九七八年(経済地理学の方法論をめぐって)、そして二〇〇三年(新時代における経済地理学の方法論をめぐって)である。特に二〇〇三(平成一五)年大会は、経済地理学会第五〇回記念大会として盛大に行なわれた。¹⁰⁾

この他、一九八一(昭和五六)年九月には、日本陸水学会創立五〇周年記念大会(大会委員長・三井嘉都夫)が、そして二〇一八(平成三〇)年には、地理学者が数多く参加した日本島嶼学会第二〇回記念大会(大会実行委員長・中俣均)も開催された。後者については、市ヶ谷キャンパスの地の利があつたことだったが、これまで就任した七名の歴代学会会長のうち三名が地理学者であり、一般会員の中にも数多くの地理学者が加わっている。

五 刊行物

地理学科にゆかりのある刊行物としては、以下のものがあげられる。まず学科教員の研究活動収めるものとして一九五四（昭和二九）年創刊の『法政大学文学部紀要』があり、二〇二二年時点で八四号となっている。

また文学部地理学科を主体とする「法政大学地理学会」が一九五〇（昭和二五）年三月に設立され、同年六月に機関誌『法政地理』第一号が発刊された。ガリ版刷りだったといわれる。前記したように、一九七〇年代から八〇年代初めに『法政地理』は一時期休刊したが、一九八五（昭和六〇）年に第一三号が復刊され、以後毎年刊行を続けてきており、現時点での最新刊は二〇二二年三月刊行の第五四号である。同誌には、復刊当初から、学会大会の記念講演や学会員及び学科教員の論説、また大学院生の論考や学生の卒業論文優秀作を掲載してきた。加えて、節目の年には学会を回顧する記録が掲載され、例を挙げると一九九八（平成一〇）年三月の「地理学科創立六〇周年に寄せて」などの記事（第二七号）、二〇〇二（平成一四）年三月の「法政大学地理学会五〇年の歩み」（第三三号）、二〇〇八（平成二〇）年三月の「法政大学文学部地理学科創立七〇周年によせて」（第四〇号）、二〇一八（平成三〇）年三月の「機関誌『法政地理』五〇号の歩み」と「法政大学文学部地理学科創八〇周年によせて」（第五〇号）がある。さらに二〇二二（令和三）年二月には、『法政大学地理学会創立七〇周年記念論文集』（法政大学地理学会）が会員に

よる論考二六編を集めて発刊された。なお、同書には末尾に「法政大学地理学会 活動の記録」と題された年表が付されている。これによると法政大学地理学会の設立総会が開かれたのは一九四九（昭和二四）年一月一九日（木）と記されていて、前記の記述とは日にちが異なっている。

一方、一九五三（昭和二八）年に創設された法政大学大学院人文科学研究所地理学専攻では、一九七二年から『法政大学地理学集報』という雑誌を刊行し、それは一九九〇年度の第一九号まで続いたが、一九九四年度からは新しく『法政大学大学院地理研究』を発刊し、こちらは二〇二三年三月発行の第三〇号が最新号となる。

六 カリキュラムなど

地理学科のカリキュラムは、他大学の地理学科と基本的に大きく異なるというわけではなかった。しかし、たとえば自然地理学でも人文地理学でも、地誌学に関連する授業が比較的多いとか、「社会経済地理学」といった名称に表われているように社会科学としての地理学を標榜する科目名が用いられてきたことなど、いくつかユニークなカリキュラム設定がなされてきた面もあった。ここでは、他大学の地理学科にも共通する野外実習科目について述べておきたい。

法政大学文学部地理学科では、必修の野外調査実習科目を「現地研究」と呼んでいる。学生はこの科目を卒業までに二単位分、つまり少なくとも二回は履修することになっている。こうした実習を、日本の地理学界では通常「巡検」と称してきたが、この呼称は明治期の行政官による地

方視察のような、いわゆる「上から目線」の行為を彷彿とさせると考えての科目名称だったと仄聞している。この科目名は現在も受け継がれており、おそらく他大学の地理学科では例を見ないユニークなものであるといえよう。そこには、具体的な自然環境のありようを虚心に観察計測するとか、市井で生き生きと暮らしている人々の生き方などを謙虚に学ぼうとする姿勢が見て取れる。「現地研究」は通常二泊三日で行なわれ、各教員が自身の専門分野や関心や経験を踏まえて計画を立て、参加学生を募集し実行する。学科としてはこうした実習科目を年間二―四本（各教員あたり二本程度）ほど用意してきた。この多様さは、法政大学地理学科の明らかな特徴として誇れるものである。

経緯があつて、この「現地研究」について暗黙の了解となつていた具体的な実習計画作成を、二〇一五（平成二七）年度に学科の「内規」として整備明文化し、さらなる改訂を経て今日に至っている。最大の改訂点は、海外での「現地研究」を可能としたことで、これまですでに二つの「現地研究」が海外（今のところアジア地域に限られているが）で実施された。新型コロナウイルスのパンデミックにより、地理学にとつての必須課程であるフィールドワーク自体が現在は困難な状況であり、コロナ以前に果たして今後も戻るかさえ危ぶまれている。またかつてこの科目は地域調査実習のトレーニング的な役割を有し、学生の卒業論文制作の準備段階という性格も持っていたが、インフォーマントの豊富な人生経験を聞きそれを理解し咀嚼する学生の能力は明らかに変質あるいは減退してきており、現在では多様な世界への入り口をまず実感し認識するという基本的な姿勢を涵養するとの意義が大きくなつてしていると感ずる。とはいえ、差し当たり地理学科

の最も特徴的な科目であることは現在でも疑いはない。

もう一つ指摘しておくべきは、高等師範時代からの遺産として、地理学科では社会科あるいは地理歴史のみならず、理科の免許取得もできるということであろう。このことについては、初期の学生たちの猛烈な勉強努力によって教員免許授与の基盤が形成されたことが、種々の誇らしい逸話として長く語られてきた。実際に、本学科を卒業後、高校で生物を教えている学生の事例なども聞き知っている。とはいえ、教員免許を取得して教員となることを志望する学生の数は、近年明らかに減少してきている。二〇二二年から高校での地理履修が再び必修化された、つまり教員志望者の需要増加が見込まれるのではという朗報はあるものの、教職科目の取得単位が卒業要件単位ではないことなどもあって、教員志望者に係る負担は大きく、教員志望学生の増加は現実にはなかなか見込みにくいのが実情である。むしろ地理学の主要科目の設置にエネルギーを割くべきではないかとの意見も、最近では聞かれ始めている。

注

(1) 『法政大学地理学会 創立70周年記念論文集』(二〇二二)(以下『記念論文集』と表記する) 二九一頁の年表による。なお同書には法政大学地理学会設立を「1950年3月」(二頁)としており、これを踏襲する文献もいくつか存在するが、本稿では同年1月説をとる。

(2) 『記念論文集』二九二頁。

(3) 大学院の科目も担当していた第一教養部の西川大二郎教授を加えると、五名にのぼった。

(4) 『法政大学百年史』四八八頁。

(5) 『法政大学と戦後五〇年』四六二頁では「八五年度」となっているが、これは誤りで「八四年度が」正しい。

(6) (7) 『法政大学と戦後五〇年』四六九頁。

(8) 『地理学評論』五六・九(一九八三)六五六頁。「教官」は本来「教員」が正しい。

(9) 『日本地理学会予稿集 三一』(一九八七)春季学術大会プログラム 二〇七頁。

(10) 『経済地理学会50年史』(二〇〇三) 九八頁。

【文献】

・ 日本地理学会編(一九七五)『日本地理学会五十年史』(古今書院)

・ 史学科・地理学科創立五十周年記念会編(一九八七)『法政大学史学科地理学科の半世紀』(史学科・地理学科創立五十周年記念会)

・ 法政大学地理学会編(二〇二二)『法政大学地理学会創立70周年記念論文集』(法政大学地理学会)

・ 法政大学文学部地理学教室(二〇二二)『地理学科の葉』(非売品)

(中俣 均)

【心理学科】

一 法政大学に心理学科ができるまで

『法政大学八十年史』の第一編、学部・大学院における「新学部設置問題の紛糾」の章に「またもや文学部悲願の心理関係学科構想は葬られた。」とある。文学部としては何度も心理学科設置の準備をしたが、叶えられなかったことが読み取れる。しかし高度成長期を脱して社会的状況も大きく変化する中、受験人口が減少し、法政大学の二部（夜間部）の受験倍率も低下の一途をたどったことから、社会のニーズに合わせた一部（昼間部）の新学科設置を望む機運が急速に高まっていった。そんな中、文学部教授会での発議から大学での正式な承認を経て、二〇〇一（平成一三）年四月文学部心理学科の設置準備委員会が正式に発足した。

二 心理学科の誕生

設置準備委員会委員長は文学部長の安孫子信、準備委員がすでに文学部二部に設置されていた教育学科心理コース所属の福田由紀（顔写真一）と二〇〇一（平成一三）年四月に新任で採用された高橋敏治（顔写真二）、渡辺弥生（顔写真三）（二〇〇一（平成一三）年十月に赴任）の三名で計四名の委員会であった。

心理学科の設置は、当時の清成忠男法政大学総長（一九九六（平成八）年～二〇〇五（平成一七）年）の指揮のもと、新学部新学科設置準備室の支援を受けながら進められた。清成総長時代には最終的に国際文化学部、人間環境学部、情報科学部、現代福祉学部、文学部心理学科、キャリアデザイン学部が新しく設置されている。

文学部心理学科の設置準備委員会ですべての問題になった点は、心理学科は昼間部に設置されることが決まっていたものの、一から新しい学科を作り出す認可申請事項なのか、二部（夜間）の心理コースを基盤に届出で設置が可能な改組転換なのかという点だった。これは文部科学省への事前相談を経て届出（改組転換）により設置することが出来た。次に問題になった点は、設置の趣旨・目的を明確にすることだった。すでに二〇〇〇（平成一二）年に多摩キャンパスに現代福祉学部が出来ており、その中の臨床心理のコースとの差別化を図る必要があったためである。文学部教授会での議論などを踏まえ、認知心理学と発達心理学をカリキュラムの二本柱として、臨床に主眼を置かず基礎から応用部分を教育の中心に据えることを文学部心理学科の設置の趣旨と



一 福田 由紀



二 高橋 敏治



三 渡辺 弥生

した(資料一開設時の心理学科パンフレットー二つの科目群)。

当時は、多くの大学で臨床系心理の学部学科の新設が大ブームとなっていたが、ある意味その流れにのらず心理学の基本をしっかりと身につけて学んでもらうことを目指した。そのうえで臨床系の学びを希望する学生のために、多摩の大学院への進学に際し、一般入試の他に学内入試を設けて

サポートすることとした。それでもう一つ最後に残った問題は、新学科の教員数の確定であった。教育学科の教員で教育学科の教育コースと心理コースで二つのコースの掛け持ちなどがあり、教員数の決定に時間がかかった。この問題を解決した上で、公募を行い吉村浩一(顔写真四)、藤田哲也(顔写真五)、田嶋圭一(顔写真六)の三名の採用を決定した。二〇〇三(平成一五)年四月の心理学科開設時にはこの三名と前述の福田、高橋、渡辺の三名、第一教養部から分属された体育の教員富田公博(顔写真七)、荻部俊二(顔写真八)の二名を合わせて八名で発足した。

心理学科の入学定員は、二部の教育学科心理コースの入学定員に加え、文学部の各学科から人数を拠出してもらい、六〇名とした。二〇〇三(平成一五)年四月一期生となる心理学科の学生が入学してきたのと同時にすでに二〇〇二(平成一四)年に募集停止をしていた教育学科心理コ



資料一 開設時の心理学科パンフレットー二つの科目群

スの学生を中心に、両学科の相互交流を目的としてピアカウンセリングを行う心理学科ピアサポーター制度を導入し、一年生のオリエンテーション・カリキュラムの組み方・勉強会（統計など）を上級生が下級生に教える形やスポーツ大会を開催して学科全体の親睦を図る形が徐々に出来上がっていった。このピアサポーター制度は現在、類似したものが全学的にも導入されている。

心理学科設立当初から、教員の自主的な指導のもとで勉強会が始動し現在まで継続している。一つは、心理学科公務員勉強会（SOP: Study of Psychology）は、福田と有志によって設立され、その後、後述の越智が担当になった。学部生のみでなく大学院生も参加して、学生同士、あるいは教員を交えて盛んなときには毎週、勉強会を行ってきた。その結果として参加者からは国家公務員総合職（人間科学）、法務省専門職、警視庁および各県警科学捜査研究所、家庭裁判所調査官、



八 菊部 俊二



四 吉村 浩一



五 藤田 哲也



六 田嶋 圭一



七 富田 公博

警視庁心理職、地方公務員上級（心理職）などの合格者がほぼ毎年でている。そしてもう一つが英語勉強会（通称TJE: TajimaとEnglishから文字を取って学生が付けたニックネーム）である。在外経験の長い田嶋がモデレーターとなり、有志の学部生・大学院生がほぼ毎週自主的に集まって英語力に磨きをかけている。およそ二〇〇四（平成一六）年から現在までは毎年開催しており、学生の大学院受験や英語スキル向上を支援している。

三 人文科学研究科心理学専攻の誕生と法政大学心理学会の開設

二〇〇七（平成一九）年三月、文学部心理学科の一期生を初めての卒業生として送り出した。卒業に際しては、原則として卒論の審査は学会の発表会形式とし、発表と質疑応答を受ける公開方式で実施した。卒論発表会には四年生だけでなく、三年生以下も参加可能とし、最終的な完成版を見せることで、下級生の次年度以降の卒論作成の準備を促すねらいもあった。

この二年前の二〇〇四（平成一六）年には法政大学大学院人文科学研究科心理学専攻の設置準備委員会（委員長吉村浩一、委員は高橋敏治、渡辺弥生）が設けられている。そして二〇〇六（平成一八）年四月大学院人文科学研究科心理学専攻が開設され、心理学専攻の一期生が入学した。この心理学専攻（博士前期課程と後期課程同時開講）のため新たに二名の教員（島宗理（顔写真九）、越智啓太（顔写真十））を迎えている。

文学部心理学科と人文科学研究科心理学専攻の課程がそろったところで、法政大学心理学会を

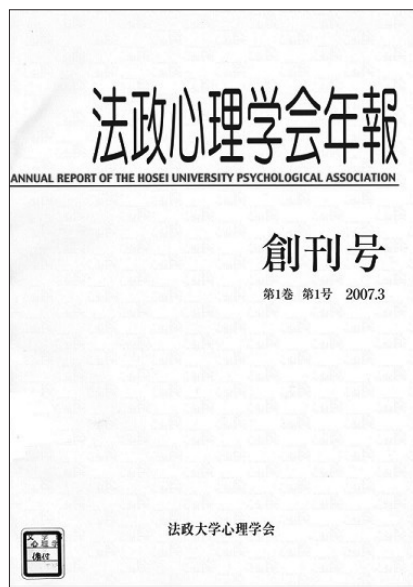
設けた。第一回の開催を記念し、日本心理学会の辻敬一郎会長に講演をお願いした。「心理学における大学院教育の現状と課題―専門実務者養成をめぐる―」の演題で、まさに心理関係の学科の新設に沸く大学の現状を踏まえての時機を得た講演であった。続いて教育学科心理コースを卒業した五名の卒業生から心理学を学ぶ学生たちへの将来設計の一助として心理関係の大学院進学・心理学を生かした就職・精神保健福祉士の資格取得後の現状などを座談会形式で講演してもらった。この学会については、文学部教育学科心理コース・文学部心理学科・人文科学研究科心理学専攻などの卒業生と教員（退職者を含む）を構成員として原則年一回の講演会や総会を開くことが決められた。同時に年度末の二〇〇七（平成一九）年三月に、法政心理学会年報として会報を出版した。法



九 島宗理



十 越智 啓太



資料二 法政心理学会年報創刊号表紙

政大学心理学会での講演内容や大学院生の紹介、学科専攻の活動記録などを掲載しており、学部生と大学院生、そして教員で構成される編集委員会により原則年一回出版している（資料二 法政心理学会年報創刊号表紙）。

二〇〇七（平成一九）年一月七日（水）～九日（金）の期間、全国規模の学術集会として第一四回日本時間生物学会（大会長 高橋敏治）と日本睡眠学会第三三回学術大会（大会長 大井田隆）が合同開催の形で東京・京王プラザホテルにて開催された。

二〇一〇（平成二二）年、法政心理のイメージキャラクター「サイコちゃん」が法政大学心理学会で学生からデザインを募集し、総会で決定し誕生した（資料三 法政心理のイメージキャラクター「サイコちゃん」）。法政大学文学部心理学科・心理学専攻の公式行事にはマスコットのな存在として登場してきている。



資料三 法政心理のイメージキャラクター「サイコちゃん」

四 文学部心理学科と大学院人文科学研究科心理学専攻の誕生後の略歴

二〇〇八（平成二〇）年、人文科学研究科心理学専攻教員によって心理学の基礎的な研究をもとに、その成果を社会に還元できるよう、エビデンスベースのライフスキル教育プログラムを体系的に開発し提供することを目的に、大学院特定課題研究所として法政大学大学院ライフスキル

教育研究所（所長渡辺弥生）が設置された。この研究所には心理学専攻の専任教員だけでなく、他学部の教員や他大学等で活動する卒業生が特任研究員として活動している（<http://www.hosei-shinri.jp/psychology/isei.php>）。

この年にさらに法政心理ネットを開設した（担当島宗理）。ここから法政の心理学の特徴やイベント、卒業・修了後の進路、よくある質問（Q & A）、学科・専攻の知っておくべきルール、学生支援・キャリア支援、大学院と大学院入試、ライフスキル教育研究所、法政大学心理学会と法政心理学会年報等々の情報を外部に発信している（<http://www.hosei-shinri.jp/psychology/>）。

二〇〇九（平成二一）年四月に多摩キャンパスにスポーツ健康学部が開設され、それに伴い文学部心理学科から荻部 俊二がスポーツ健康学部に移籍し、二〇一〇（平成二二）年四月より荒井弘和（顔写真一）が心理学科専任教員として着任した。二〇一〇（平成二二）年夏には、ピアサポーターと荒井教員の尽力により教員と学生（学部生・大学院生）が参加して第一回法政大学心理学科スポーツ大会を開催した。以降、新型コロナ禍の流行時を除き、毎年夏休みに親睦を図ってきた。

二〇一一（平成二三）年から学部生の大学院授業受講が可能になった。二〇一一（平成二三）年三月一日、東日本大震災が起きた際には、法政心理ネットにより学生の安否確認を大学の連絡網に先駆けて実施し、約一カ月遅れて始まった新学期にも様々な連絡ができた。そしてこの年から法政心理ネットにTwitter アカウント（@hosei_psy）を開設した。

また、心理学関係の動向に鑑み、大学の全学的な研究倫理規程（二〇一五（平成二七）年四月

一日制定）に先駆けて、二〇一一（平成二三）年三月から法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会が試験的に始動し、二〇一二（平成二四）年四月から本格的に活動開始となった。以降は、学部生の卒論、大学院生の修論・博論、そして教員の研究も委員会での承認が不可欠となっている。また、毎年問題点については改定を重ねてきている。

二〇一一（平成二三）年三月で富田公博が退職し（二〇一二（平成二四）年四月一日名誉教授）、二〇一一年四月から新たに林容市（写真一二）が心理学科に着任した。



一一 荒井 弘和



一二 林 容市

二〇一三（平成二五）年は、日本教育心理学会第五回総会（大会長 渡辺弥生）の開催校となり、法政大学市ヶ谷キャンパス（外濠校舎）で八月一七日（土）～一九日（月）の期間に開催され、前述の「サイコちゃん」が大活躍した。法政カラーである紺とオレンジのポロシャツの胸に「サイコちゃん」をあしらった総会エンブレム（資料四）をつけた服装で、学部生・大学院生のスタッフが活躍した。懇親会は、神楽坂のフランス料理店を貸し切り、余興に神田明神の奉納太鼓（将門太鼓）が披露され、大成功のうちに終了した。



一三 竹島 康博

文学部心理学科や大学院人文科学研究科心理学専攻にいろいろな研究機器が設置されてきた点も重要である。科学研究費補助金や私立大学研究費助成金、実験実習費等の予算により脳波やポリグラフ検査に用いる生理心理機器、脳を測定するNIRS (Near Infrared Spectroscopy)、動作や運動機能を三次元で解析するモーションキャプチャの機器、ヒトの眼球運動を測定するアイカメラなどがそろえられた。特に、NIRSについては二〇一四(平成二六)年から二〇二〇(令和二)年までNIRS研究会(責任者 福田由紀)が開催され、二〇二一(令和三)年からは「心理学特殊講義Ⅲ」として運営されている。

二〇一六(平成二八)年の法政大学心理学会は、五月一日(日)一二時～一五時に十周年大同窓会として四谷のスクワール麹町で開催され、二八〇名の参加を得た。同窓生が何ヵ月も前から同期の連絡網を使って準備してくれたおかげである。

二〇二二(令和四)年三月には、心理学科創設期から学科・大学院の設立に貢献した吉村浩一が定年で退職し(二〇二二(令和四)年四月一日名誉教授)、二〇二二(令和四)年四月からは竹島康博(顔写真二三)が着任した。



資料四 日本教育心理学会
第五五回総会のエンブレム
(デザインは山田慧美による)

五 活躍する心理学科の卒業生

文学部心理学科は完成してからまだ日は浅いが、以下のように多くの卒業生が社会で活躍している。

スポーツ関係としては二〇一四（平成二六）年度卒業（林ゼミ）の湊諒（シマノレーシング）、二〇一四（平成二六）年度卒業（荒井ゼミ）の中山榛奈（旧姓：上原、女子レスリング）、二〇二一（令和三）年度卒業の伊藤俊之（田〇）栃木日光アイスパックス）がいる。また漫画家として、荒井ゼミの二〇一一（平成二三）年度卒業の御池慧（ペンネーム）、福田ゼミの二〇一八（平成三〇）年度卒業の桂実（ペンネーム）がいる。あと二〇一一（平成二三）年度卒業（渡辺ゼミ）のパーソルイノベーション株式会社／TECH PLAY Company 責任者である武藤竜耶がいる。彼は法政大学の文学部共通科目「キャリア形成」の講師を長年務めてくれた。

六 今後の問題点

二〇二二（令和四）年で文学部心理学科が開設されてちょうど二〇年になる。現在の文学部心理学科の置かれている状況を俯瞰しながら簡単に問題点や課題をまとめておく。これは心理学科だけのことでなく法政大学全体に関わる問題でもあるが、学部統合や集約化の問題があり、

その中でいかに新しい心理学科を作り出していくかという視点は長期的に必要であろう。特に市ヶ谷・多摩・小金井というキャンパスの地理的な問題において、新型コロナウイルス禍で示された「技術の進歩などにより垣根が格段に低くなっているようにも思える。その点からも心理学関係部門の有機的な結合が重要になってくるであろう」。

この問題とも関係するが、二〇一七（平成二九）年に施行された「公認心理師法」の制度にはとりあえず文学部心理学科はのらないことを決めたが、現在まで受験倍率は落ち込むことなく維持できている。しかし、これは公認心理師が国家資格でありつつも現時点ではまだ報酬や就職先確保の点で不透明な部分のあることが関係していると思われる。今のところ実現はまだまだ先であろうが、制度的な問題が解決され、医師・看護師などと同じように公認心理師の資格を取得する意義が明確になってくると、臨床との関係における今の心理学科のスタンスの維持については見直しが必要になるかもしれない。

また文学部心理学科の科目群の柱は認知系と発達系を標榜しているが、心理学をとりまく経済・工学・医療などの近接領域の目覚ましい発展により、カリキュラム体系の見直しが近い将来必要となる可能性もある。

このほかにも様々な問題、課題があり、それぞれに取り組みながら前に進むのは決して簡単なことではない。しかし、この二〇年間、努力を積み重ねて文学部心理学科を支えて来た教員の潜在的な力で、新しい心理学の道も必ず切り開かれていくと私は信じている。

（高橋 敏治）

七 心理学科カリキュラムの変遷

この項では、二〇〇三（平成一五）年の心理学科設立当時から二〇二二（令和四）年までの、心理学科のカリキュラムの概要について述べる。心理学科の卒業生が以降の文章を読む際には、改定されたカリキュラムが適用されるのは、その新カリキュラムが導入された年度に入学した新入生からであり、同年度に既に二年生以上で在籍していた学生は一つ前の旧カリキュラムが卒業するまで適用されることに留意した上で、自分がどのカリキュラムに従って法政心理で学んだのかを振り返っていただければ幸いである。

まず概要であるが、心理学科のカリキュラムは、二〇〇三（平成一五）年の学科新設時のものから始まり、二〇〇七（平成一九）年と二〇一二（平成二四）年に二回、カリキュラムの改定を行っている。その間にも、科目の新設や名称変更などは行っているが、ここではカリキュラムの改定を中心に説明することにした。卒業に必要な総単位数はいずれのカリキュラムにおいても一三二単位のままであり、変更されていない。また、そのうち市ヶ谷基礎科目あるいはHAC科目で四四単位以上が、八八単位以上が学科の専門科目として必要であるという大枠も変わっていない。以下では心理学科の専門科目に関するカリキュラムについてのみ、取り上げることとする。設立時から二〇二二（令和四）年の現在まで、カリキュラム上の「必修科目」として明記されているのは卒業論文の八単位のみである。文学部においては全学科で卒業論文が必修で八単位に

設定されていることに準じている。学科の専門科目としては「必修科目」の他に「学科基礎科目（三二単位以上）」と「展開科目（二八単位以上）」、「自由科目（八単位以上）」の三つの科目カテゴリが設定されていることも、いずれの時期のカリキュラムにおいても共通であり、各カテゴリで卒業に必要なとなっている単位数（前述のカッコ内）も不変である。すなわち、カリキュラムの改定は、各科目カテゴリ（たとえば展開科目）内において、学生に対する教育効果を高めることを目的とした、細やかかつ現実的な配慮を目的としたものであるといえよう。以下、カテゴリごとに詳細を述べる。

「学科基礎科目」は学生が卒業論文に取り組むのに必要となる基礎的なスキル系の科目（心理統計や実験・質問紙等の研究法の基礎）と、学科に所属する専任教員が担当する、各心理学分野の入門的な概論科目とで構成されている。卒業に必要なのは三二単位であるが、学科設置当初のカリキュラムにおいては三六単位分の科目ラインナップが母数になっており、かなり制約の強い選択必修科目カテゴリになっている（二・三期目のカリキュラムでは四〇単位分の科目が母数）。これは「教員側としては、できれば学科基礎科目の単位はすべて修得してもらいたい」という意図を反映しているが、必修科目にしていないのは、これらの科目のうち一つでも単位を取れないことが即、卒業できない（留年する）ことにつながることを多少なりとも緩和するという理由である。心理学のスキル系科目のみならず、専任教員の担当する概論も履修を促しているのは、三年次から配属される卒論ゼミ科目を選択する際に、幅広い心理学分野の内容を一通り知った上で、本当に自分が追究したい領域を選んでもらいたいからである。ちなみに二〇〇七（平成一九）年

の二期目のカリキュラムから学科基礎科目の母数が四単位分増えたのは、その前年度に着任した島宗・越智の担当する入門的な概論科目を同カテゴリに追加したためである。

次に「展開科目」である。この科目カテゴリは、演習Ⅰ・演習Ⅱ・研究法という名称の演習系の科目と、学科基礎科目に比べてより応用的な内容を扱う認知系・発達系の講義科目を中心に構成されている。これらのうち、特に説明を必要とするのが演習系科目の変遷である。学科設立当初は、演習Ⅰは二年次、演習Ⅱは三年次、研究法は四年次配当であり、それぞれの科目を当時の専任教員のうち卒業論文を指導していた六名が担当した。当時の演習Ⅰは、卒業論文研究に取り組む前段階の研究法の基礎を固めることを目的として、文献の読み方やゼミ発表の仕方などを半期で扱った。六名の専任教員が前期・後期に三名ずつ分かれ開講し、学生は各学期で二単位ずつの計四単位を修得可能になっていた。この設立当初のカリキュラムの時点で既に、演習Ⅰについては教員側がクラス分けを行い、学生が履修できる演習Ⅰクラスは指定されていた（つまり、学生が好きな教員の演習Ⅰを選ぶことはできなかった）。そのため、大まかな教育目標は科目間で統一されており、どの演習Ⅰを受講しても得られる知識や技能には違いがない、という説明を行っていた。設立当初のカリキュラムにおいては演習Ⅱ（三年次配当）から希望するゼミを選択することとしていたが、卒業に必要な演習Ⅱの単位は二単位以上八単位以下となっており、学生によっては三年次に異なる教員が担当する複数の演習Ⅱを履修することもあった。その一方で半期二単位分のみ履修する学生もあり、たとえば三年の前期に演習Ⅱを履修した場合には、後期には何もゼミを履修しない状態で、四年次から改めて研究法（四年次配当）を履修するという形になるこ

とが多く、教員からすれば継続的かつ一貫性のある研究指導を行いにくい状態にあった。四年次の研究法Ⅰ（前期）とⅡ（後期）は卒業論文への取り組みを支援することになった。前述の演習原則として同じ教員が担当する研究法を前・後期通じて履修することになっていた。前述の演習Ⅱのカリキュラム上の位置づけは、二〇一二（平成二四）年からの三期目のカリキュラムにおいて大きく改変された。三期目のカリキュラムからは、演習Ⅱは二年次配当科目になり、内容も要因計画法を学ぶ実験演習になった。二年次には学科基礎科目の心理学測定法Ⅰ・Ⅱで質問紙法を一通り学べるようになっていたのとバランスを取る形で、実験による研究計画を立案し、実際にデータを取って分析し、発表した上で論文形式で研究成果をまとめるという内容になった。この三期目のカリキュラム改定では、演習Ⅰ・Ⅱともに卒業に必要な単位は二単位のみとなり、いずれも教員側が二年生対象にクラス割りを行い、二年生は予め指定されたクラスで前期に演習Ⅰ、後期に演習Ⅱをそれぞれ履修することになった。また、その改定に伴い、研究法の科目は三・四年次配当になり、その二年間の四セメスターで六単位以上八単位以下を修得することが卒業要件となった。ちなみに二年分八単位をそのまま必修に設定しなかったのは、海外の大学への留学や病気等のやむを得ない事情でいずれかの一セメスターの単位を修得できなかったとしても卒業に支障を来すことのないようにという配慮によるものであった。

さて、前述の研究法という卒業論文指導を主眼とした科目の変遷に関連して特筆すべきこととしては、この設立当初のカリキュラムのもとでは、卒論ゼミの定員を設定せず、学生は希望する教員のゼミに所属することが可能であったことが挙げられる。学生の視点で見れば、指導を受け

たい教員のゼミに必ず入れるのは魅力的に感じられるかもしれないが、指導する教員の側からすれば人数の偏りは教員の負担の偏りを意味するだけでなく、教員の努力では超えられないレベルで、指導の質の公平性が保てない状態が生じることは看過できず、二〇一二（平成二四）年の三期目のカリキュラムが適用される学生が三年次に進級した二〇一四（平成二六）年からは卒業論ゼミに定員（在籍する当該学年の学生数を開講する研究法のクラス数で均等割り、プラスマイナス一名の範囲内に設定する）を設け、事前に学生の希望を調査した上で人数調整を行うようにした。すなわち、学生は二年次の秋の時点で、三年次以降の研究法で指導を受けたい教員の希望調査に回答する必要がある、自分を取り組みたい卒業論文のテーマについてもある程度の絞り込みを行うことが求められるようになった。そのため、前述の学科基礎科目として各専任教員が開講している各分野の概論を早めに履修する必要性が増したといえる。ちなみに、卒業論文指導を担当する教員の数は、学科設立当初は六名、大学院心理学専攻が開設された二〇〇六年からは八名になっており、必ずしもカリキュラム改定が行われた年度の入学生の進級に連動しておらず、弾力的に調整を行っている。学科開設時に第一教養部から心理学科に移籍した富田・苅部は心理学科においては卒業論文を指導しなかったが、その後任の荒井・林は、着任したその年度から卒業論文指導を担当するようになり、二〇二二（令和四）年現在においては、サバティカル中の教員も含めれば十名の専任教員全員が卒業論文指導を担当している。

その他にカリキュラムに関連することとして触れておきたいことが二点ある。学科専門科目ではなく市ヶ谷基礎科目のうち〇（ゼロ）群科目として、二〇〇七（平成一九）年から基礎ゼミ・

Ⅱが心理学科一年生を対象に前・後期に開講された（担当 藤田哲也）。これはいわゆる初年次教育を行うための科目であり、科目の新設時にはスクラップ・アンド・ビルドが原則とされている中、当時の教学担当理事に交渉し、一年生二クラス分の計四コマを純増で開設することができた。もう一つは二〇一一（平成二三）年から、四年生に限定して大学院心理学専攻の修士課程の科目の一部を履修可能にしたことである。四年生にとっては卒業要件を満たす単位にはならないが、本学の心理学専攻修士課程に進学した場合には、十単位を上限として、申請すれば修士課程修了に必要な単位として認定されるという制度である。ただ、そもそも大学院に進学を希望する学生が多いわけではなく、この制度は十分に有効活用されているとはいえない。さらなる検討が必要である。

以上、心理学科のカリキュラムの変遷について触れてきたが、スポーツ・サイエンス・インスティテュート（SST）に所属する学生は、本籍が心理学科であつても別カリキュラムが適用されている（たとえば卒業論文は必修になっていない）ため、別途説明が必要である。また、本来は二部教育学科心理学コース（二〇〇二（平成一四）年に募集停止）のカリキュラムとの関係、たとえば心理学科と教育学科の在籍者が混在していた期間に、科目の読み替えを可能にするための工夫などにも言及すべきだったかもしれないが、紙幅の関係で割愛した。ご容赦願いたい。

（藤田 哲也）



心理学科教員集合写真（2022年11月23日撮影）

後列左から 田嶋圭一 林 容市 越智啓太 渡辺弥生 藤田哲也 島宗 理
前列左から 荒井弘和 高橋敏治 福田由紀 竹島康博

コラム

二〇〇六（平成一八）年度に一期生四九人が卒業してから二〇二一（令和三）年度までに、心理学科では九七四の卒業論文が提出された。次頁以降にその題目と副題に出現する単語をワードクラウドという手法で四年ごとに図示した。

どの時期でも「自己」と「感情」が最も多く使われた言葉であったことがわかる。「対人」、「友人」、「社会」などが次に多く使われている。自らの気持ちを見つめながら、他者や社会との関係に興味を持つ、心理学科生の特徴が浮き彫りになっている。

その他の言葉が多岐に渡っていると、法政心理の特徴である。それぞれが卒業論文研究を通して自分の興味や関心を掘り下げ、探究していた証といえるだろう。

法政心理ネットには卒業論文の題目を年度ごとにカラーで図示したワードクラウドを掲載した。興味がある方はぜひ一度ご覧いただきたい。

なお作図にはjanomeというテキスト分析のライブラリとWordCloudという作図のライブラリを使い、次の単語は除外した。「大学生・効果・要因・場面・傾向・課題」。

（島宗 理）

法政大学文学部心理学科卒業論文の題目二〇〇六～二〇二一

<https://bit.ly/3xh5NYk>



二〇〇六～二〇〇九年度



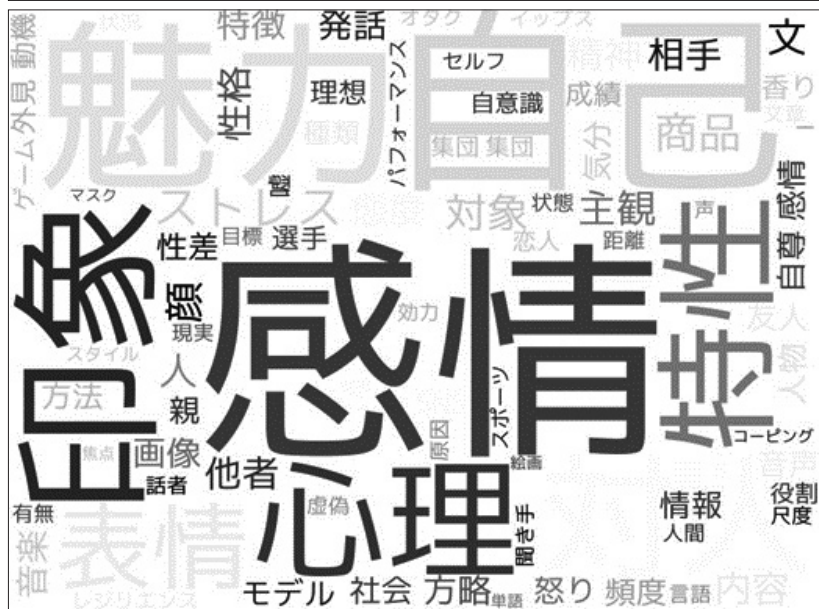
二〇一〇～二〇一三年度



二〇一四～二〇一七年度



二〇一八～二〇二二年度



【教育学科（心理学コース）】

一 戦前にはじまる法政大学の心理学教育

法政大学における本格的な心理学教育のはじまりは、一九二四（大正一三）年に遡る。法政大学は、戦前から心理学教育がはじまる数少ない大学の一つであり、東京帝国大学において我が国初の心理学実験室が開設され心理学教育が開始されて以来、国内で七番目の黎明期からの伝統校の一つである。これは、九州帝国大学心理学講座開設よりも一年早く、慶応大学よりも二年早い。

法政大学における心理学教育の本格的な導入は、東京帝国大学を修了した城戸幡太郎先生が文学部哲学科に心理学担当教員として着任したことにはじまる。城戸幡太郎先生は東京帝国大学文学部の副手をされていたとき、ライプツヒ大学に二年間留学され、心理学および教育科学を学ばれ、帰国後、法政大学文学部教授に着任された。先任の高橋穰教授が東北帝国大学に転任されるに際して、城戸先生を後任として推薦されたのである。一九二七（昭和二）年には、東京帝国大学の兼任講師もはじめられ、当時の学生には、依田新、波多野完治など、戦前戦後の日本の心理学を代表する心理学者が在籍し、城戸先生の薫陶を受けた。一九二九（昭和四）年には、幼児教育の科学的研究を行うため、法政大学内に児童研究所を設立する。学生を八王子の保育所で実習させるなど、研究のみならず幼児教育、幼児心理に関わる実践的な活動を行っていた。こうした研究・実践は、その後、我が国の幼児教育に大きな影響を与えた「保育問題研究会」の設立

へと発展する。これらの動きはさらに、教育の科学的研究を目指す「教育科学」の研究へと発展する。法政大学の心理学教育は、特に幼児・児童心理学および教育の分野において、我が国における先駆的な役割を果たしていた。

戦前戦後の一九三〇年代から一九四〇年代は、当時の時代背景の中で心理学全体が大きな荒波にさらされた時代である。一九四四（昭和一九）年、「教育科学研究会事件」において城戸教授ほか多くの文学部教員が検挙され、大学を解雇される。一九四五（昭和二〇）年一月には、文学部全体が一か年の授業停止に追い込まれる。こうした状況で、法政大学文学部の心理学教育は、一旦その歴史を閉じることとなる。

戦後の法政における心理学教育は主要な教授が戦争末期に大学を離れていたため、予科の乾孝教授を中心に自主的な学習からその復興がはじまった。乾教授は法政大学文学部の心理学教室において心理学を学ばれ、教員として予科において教鞭をとられていた。

二 戦後の心理学教育の復興と教育学科心理学コースの設置

戦前において大きく花開いた法政大学の心理学教育の復興は、心理学科の創設として、戦後の早い時期から検討されていた。一九五四（昭和二九）年には、学科開設を目標に、乾教授の具体的な計画案をもとに検討が進められたが、実現にはいたらず専門科目の増設に留まった。その後も拡充案が何度か論じられ、ようやく一九六六（昭和四一）年に、常任理事会の了承を得て、実

施が認められた。しかしながら、この頃すでに、大学の「校地」が文部省の学科増設の基準に満たない状況にあり、結果として心理学科の開設は見送られることとなった。それでもなお文学部教授会は、心理学科の開設を目指して奮闘し、実質的な推進を目指すため、一九六九（昭和四四）年、暫定措置として、二部教育学科に心理学コースを設けることが決定した。ここに、暫定的ではあるにせよ法政大学心理学教育の一応の復興がなされた。なお、文学部教育学科は一九五二年四月、本学における高等師範部の蓄積をもとに、文学部二部に開設された学科である。一九六七（昭和四二）年に、臨床心理学を専攻する上山碩専任講師が学科開設後の要員として哲学科に増員され（一九七三（昭和四八）年に教育学科心理学コースへ移籍）、一九七一（昭和四六）年には、社会心理学を専攻する小山睦央講師が専任講師として就任し、心理学コース設置の準備が整った。

一九七一（昭和四六）年の文学部履修要項には、心理学コース必修科目として、心理学概論（小山睦央講師）、実験心理学（乾孝兼担教授）、発達心理学（１）（２）（鈴木幹人教授）、臨床心理学（上山碩助教授（当時哲学科助教授））、心理学演習ⅠⅡ（西川好夫教授）、心理学測定法（鈴木幹人教授）が、両コース共通科目として教育心理学（門司三省教授）が掲載されている。

心理学コースは、この後、西川教授の後任として、一九七七（昭和五二）年に岡崎昇教授が就任、一九八四（昭和五九）年に鈴木幹人教授の後任として柴田博助教授（一九八九年教授昇格）、一九八七（昭和六二）年に長山恵一助教授（一九八二年教授昇格）、一九九六（平成八）年に末武康弘助教授、一九九七（平成九）年に小野純平専任講師（二〇〇〇年助教授昇格）、二〇〇〇（平成一二）年に福田由紀助教授、二〇〇一（平成十三）年に高橋敏治教授、渡辺弥生教授が着任し、

専任教員として教鞭をとった。

心理学コース設立後も心理学科の増設は引き続き検討がなされた。一九八二（昭和五七）年、新学部として総合文化学部（後に文化学部へと変更）を設置するとの発表があり、心理学関係学科の設置を目指す文学部は、その可能性について注視していたが、学部創設には至らなかった。その後も幾度か新学部設置と心理学関係学科の設置に向けて努力がなされたが実現しなかった。

三 熱気あふれる心理学コースの学び

心理学コースの学びは、学生たちの主体的な学びとそれを支える教員の熱意により、自由闊達な雰囲気と熱気あふれる学習がなされていた。法政大学教育学科心理学コースは、当時、夜間部で心理学を専門的に学ぶことができる数少ない課程であった。一九九〇年前後になると首都圏の国立大学に心理学を学ぶことができる夜間修士課程が開設されるが、この当時はまだ、看護師や理学療法士などの医療に従事しながら、夜間において心理学を学ぶことできる場はほとんどなかった。そのため、経済その他の理由により昼間部で学ぶことできない学生とともに、医療、福祉の施設で専門職として勤務しつつ学ぶ学生が在籍していた。

三時限目の終了は二一時四〇分と遅い時間であったが、授業終了後に教員を取り囲んで質問攻めに行ったり、それでは飽き足らずに、飲食店に場所を移して学生同士ディスカッションを続けることも少なくなかった。夏季休暇ともなると、心理学実験室にはかならず学生がおり、何が

しかの自主的な学習を行っていた。

当時、心理学実験室のとなりは、柴田博教授の研究室があり、実験室から直接研究室に出入りすることができた。この扉は常に開かれており、心理学実験室に來た学生は、教授に挨拶をしてから三々五々学習をはじめていた。

柴田教授は、心理学実験、心理学研究法Ⅱ、青年心理学などをご担当されていた。先生の研究室には、コンピュータが数台置かれており、希望者にはこのコンピュータを使って、先端的なデータ解析を教えてくださった。教授の研究室では、LinuxをOSとするコンピュータが稼働していたが、BASICなどの比較的学习しやすい言語で動くコンピュータもいくつか稼働しており、「因子分析」や「主成分分析」、「重回帰分析」といった多変量解析の統計技法を、プログラムの入力から一つ一つ丁寧に指導されていた。多変量解析技法を用いたデータ解析をもとに卒業論文を執筆することが難しい時代であったが、柴田教授の指導のもと、多くの学生が高度な統計に取り組んでいた。柴田教授の指導法は、熱心な学生の好奇心を十二分に満たすものであった。

岡崎昇教授もまた熱心に学生教育をなされた教員の一人である。岡崎教授は、来談者中心療法という一般にカウンセリングと呼ばれる心理療法の大家である。来談者中心療法は、カール・ロジャースが創始した心理療法であり、フロイトの精神分析療法と双璧をなす一大流派であるが、我が国における来談者中心療法の歴史は、ロジャースの弟子であるローガン・ファックス氏が、茨城キリスト教大学に赴任したことにはじまる。後にロジャース派の中心となる研究者・臨床家はこぞってローガン氏に教えを乞うため茨城キリスト教大学に集まるが、こうした研究者・臨床

家とローガン氏とを結びつけ、仲立ちしたのが、当時、ローガン氏の助手であった岡崎昇先生であった。近年、ロジャース派における岡崎昇教授の功績が再度評価されている。岡崎教授は、とても気さくな先生であった。先生がご担当されているカウンセリングの授業は、学生が最も楽しみにしている授業の一つであり、心理学の臨床というものにあこがれを持つ学生にとっては、一言も聞き逃すことができないほど貴重な講義であった。岡崎教授は、臨床家として茨城での病院臨床と本校での講義という多忙なスケジュールの中でも学生の切なる希望をかなえ、毎週、授業とは別に、カウンセリングに関するご著書の輪読会及び模擬カウンセリングの実習を行ってくださった。こうした学習会には、心理学コースの枠をこえて、法学部法律学科や文学部哲学科の学生も参加し、熱気にあふれる学習の場となっていた。誌面の都合上、熱意あふれる各教員の指導について十分に紹介することができないが、静かな中に時に情熱的に語りかける小山教授の社会心理学、有史以前からはじまる心の探求と科学としての心理学の成立を壮大な叙事詩として語る鈴木先生の心理学史、豊富な臨床経験からわかりやすく臨床を紐解く上山教授の臨床心理学・心理検査法など、それぞれの高度な専門性に裏打ちされた豊かな教育は、学生たちの心理学への渴望を十二分に満たすものであった。結果として、その後、心理学コースで学ぶ学生の中から、多数の心理専門職員、臨床家、そして大学教員、研究者を輩出した。

四 心理学コースから文学部心理学科及び現代福祉学部臨床心理学科へ

心理学科実現への動きが再び始まったのは、一九九七（平成九）年のことであった。この年の夏、多摩キャンパスに新たな学部を設置する構想が動き出す。多摩キャンパスには、経済学部、社会学部が設置されていたが、さらに、福祉関係の学部を設置するという構想である。背景には、当時、既存の学部の学生枠を削ることなく、純増が可能となる新学部設置は、看護および福祉系の学部に限られるという状況が関係していた。新学部構想を検討する委員会には、教育学科心理学コース専任教員の長山恵一教授が委員となっていた。この構想は、これまで幾度となく提案と廃案を繰り返してきた新学部設置構想の経験から、学内においてはその実現を疑問視する向きも多かった。しかしながら、新学部構想はそうした学内の雰囲気とは裏腹に順調に進み、二〇〇〇（平成一二）年四月、多摩キャンパスの第三の学部として、現代福祉学部が設置された。現代福祉学部は、福祉を中心としながらも、心理学、地域創成を含む三つの柱からなる総合学部として歩みをはじめた。教育学科心理学コースに在籍していた末武康弘助教授、小野純平助教授が、長山恵一教授とともに現代福祉学部設置準備委員として学部開設にかかわるとともに、学部が設立された二〇〇〇（平成一二）年に長山教授が、翌年の二〇〇一（平成一三）年には、末武助教授と小野助教授が文学部から現代福祉学部へと移籍した。現代福祉学部は設立当初、現代福祉学科の一学部一学科であったが、心理学関連科目のカリキュラムは、心理学を専門に学習したと認め

られる認定心理士資格基準を満たす十分な内容であった。二〇一〇（平成二二）年には、福祉コミュニティ学科及び臨床心理学科の二学科に再編がなされた。ここに、戦後の法政大学文学部の悲願であり、戦前に大きく花開いた法政心理学教育の復興を目指した心理学科の設置が実現することとなった。

さらに、文学部においても大きな動きがあった。全学的な二部廃止の動きとともに、二〇〇三年に一部に心理学科が設立され、心理学コース専任教員の高橋敏治教授、渡辺弥生教授、福田由紀助教授が移籍した。文学部心理学科は、臨床心理学を中心とする現代福祉学部とは異なり、認知心理学と発達心理学をカリキュラムの中心として、基礎から応用部分を教育の中心に据えたカリキュラムを構成した。法政大学は、認知心理学、発達心理学を中心に基礎心理学領域に強い文学部心理学科と臨床心理学領域に強い現代福祉学部臨床心理学科の二つの心理学科を有する、国内屈指の大学となった。

教育学科心理学コースは、教育学科の閉鎖とともにその役割を終え、二〇〇二年にその三〇年の歴史を閉じることとなった。しかしながら、戦前の城戸幡太郎教授を中心とした心理学教育の歴史と戦後の心理学コースを支えた諸先生方による教育の蓄積は、文学部心理学科及び現代福祉学部臨床心理学科に確実に受け継がれていると言える。

（小野 純平）

【教育学科（教育学コース）】

一 戦前における教育学研究と教育の展開

文学部に教育学科が設置されたのは、戦後の一九五二（昭和二七）年のことであるが、法政大学における教育学研究・教育の歴史は、戦前期にまで遡る。

契機となったのは、一九二四（大正一三）年、城戸幡太郎が文学部哲学科の教授として着任したことである。城戸は、東京帝国大学文学部の副手時代、ライプチヒ大学に二年間留学し、心理学と教育学を学んだ。その際の教育学とは、観念的・思弁的な、いわゆる「講壇教育学」ではなく、当時としては最先端の、諸学問の知を総合する実践的な「教育科学」であった。帰国後、文学部に着任した城戸は、心理学をはじめとする理論研究を基盤としつつも、保育、教育、福祉の現場に根ざし、理論と実践を往復する研究・教育を志向した。

そうした城戸の影響力は大きく、当時の法政大学には、石川謙、留岡清男、波多野完治といった、その当時の新進気鋭の研究者が出講していた。さらにその後、一九四〇（昭和一五）年には、宗像誠也、宮原誠一という、後に戦後教育学の中核を支えることになる碩学も集うことになった。一九二九（昭和四）年には、城戸を中心に「法政大学児童研究所」が設立された。研究所には、児童研究部、教育調査部、相談部が置かれ、学外の研究者や実践家、学生を含めた研究会が開催されていた。また、研究所は各種の発達・教育調査を実施し、学生に対する教育としては、小金

井学園、滝野川学園での障害児教育の実習、八王子郊外の季節託児所での実習など、幼児教育・児童教育にかかわる実践的活動を手がけていた。

さらに、児童研究所は、城戸、留岡らが一九三〇（昭和五）年より岩波書店『教育学講座』の企画・編集に参加したことを契機として、一九三三（昭和八）年には雑誌『教育』の実質的な編集拠点となった。そのことは、一九三七（昭和一二）年、日本における「教育学運動」をリードすることになる「教育学研究会」の創設を準備したのである。また、一九三六（昭和一一）年には、研究所内に「保育問題研究会」が発足しており、機関誌『保育問題研究』を発行した。

このように、法政大学児童研究所は、戦前・戦中の教育学運動の拠点となっていた。しかも、大学における研究と、保育、教育、福祉の現場との交流の中に、学生の学習と研究の場を整備しようとした試みは、当時の大学界においても、きわめて特徴的で先進的なことであった。

ところで、一九三〇年代を通じて、大学における教育学研究・教育と、当時、夜間に置かれていた高等師範部との交流が充実していた。城戸が高等師範部の部長を兼務したといった人事交流もあり、高等師範部から文学部に進学する学生も増加していた。こうした経緯を経て、法政大学における教育学研究・教育は、保育や児童教育の実践の現場との結びつきだけではなく、学校教育の教員養成や現職教員に対する教育とのつながりを強めていたのである。

戦時下においては、文学部でも多くの教授らが「治安維持法」違反の疑いで逮捕されていた。「教育学研究会事件」では、一九四三（昭和一八）年に講師であった宮原が、一九四四（昭和一九）年には、城戸、留岡が検挙された。城戸は大学を解職された。そして、一九四五（昭和二〇）年

四月からは、文学部全体が一年間の授業停止に追い込まれることにもなった。

こうした状況下、戦前の文学部における教育学研究・教育は、その展開をいったん停止させることを余儀なくされたのである。

二 戦後における教育学科の設置と研究・教育の展開

戦後、文学部は一九四七（昭和二二）年に新制文学部としての出発を果たす。しかし、教育学関係においては、主要な教授たちが戦争末期に大学を離れていたこともあり、学生たちは、予科の教授であった乾孝の指導を受けたり、民主主義科学者協会など学外の研究会に出席したりしていた。

その後、一九四九（昭和二四）年、「教員養成は大学で行う」という国の方針（教育職員免許法の改正）に基づいて、大学としては高等師範部を募集停止にした。しかし、実質的な教育の機能は、第二文学部の各学科に継承されていた。また、教職課程は一部、二部の昼夜に開講されることになり、一九四七（昭和二二）年に開設された通信教育部においても、同様に教職の課程が置かれた。さらに、新学制が開始されたばかりのこの時期、法政大学は第二部および通信教育部における教育を通じて、教員養成だけではなく、現職教員の免許切り替えにおいても、多大な社会的貢献を果たしていた。

こうした素地のもとに、一九五二（昭和二七）年には「教育学専攻者の養成」と教職専門科目

の実施運営のために、第二文学部に教育学科が増設された。学科の教育内容の編成は、戦前の文学部および高等師範部の伝統を踏まえて、教育学と心理学を中心とすることになった。その後、一九六九（昭和四四）年には、文学部教授会において教育学科に心理学コースを設けることが正式に決定され、以後は、教育学コース、心理学コースの二コース体制による研究・教育が行われることになった。

なお、法政大学としては一九六四（昭和三九）年、学生の間に資格取得への要望が高まってきたことを受けて、図書館司書、社会教育主事、博物館学芸員の資格課程を設置することを決めた。それぞれの資格課程の担当者も、教育学科に所属することになった。

教育学コースを中心に、教育学科のこれまでのスタッフを列記すると、一九六六（昭和四一）年までに着任していたのは、大場実治（教育社会学）、望月新八（数学科教育法）、高原栄（英語科教育法）、林田不二生（教育哲学）、國府種武（国語科教育法）、吉本正樹（教育実践学）、門司三省（教育心理学）、白井愼（教育方法学）である。全体に教科教育学や教育方法などを専攻する研究者が多いことがわかる。教員養成や現職教員の教育という点で、社会的な貢献を果たしていた設置当初の教育学科の実情を反映したものであろう。

その後、教育学科が募集停止に踏み切る二〇〇三（平成一五）年までに着任したのは、花香実（労働者教育）、古沢常雄（教育史）、太田卓（教育行政学）、佐貫浩（教育課程論）、乾彰夫（教育哲学）、高野良一（太田の後任、教育行財政学）、児美川孝一郎（乾の後任、教育哲学）、坂本旬（白井の後任、教育方法学）である。以前の布陣と比較すると、明らかに教員養成や教育実践

に寄ったのではなく、教育学のオーソドックスな専攻分野を反映した人的構成に変化している。背景には、時代の進展とともに、夜間開講の学科ではありつつも、働きながら学ぶ社会人の入学者が減少し、免許切り替えなど現職教員の教育ニーズも無くなっていたことがある。

なお、資格課程については、図書館司書課程には、一九六四（昭和三九）年に神本光吉、一九八二（昭和五七）年からは後任に小川徹が着任した。社会教育主事課程には、一九八八（昭和六三）年に笹川孝一が着任している。博物館学芸員課程には、一九七八（昭和五三）年に鶴田総一郎、一九八八（昭和六三）年からは後任に段木一行、さらに二〇〇二（平成一四）年には後任に金山喜昭が着任した。資格課程については、当初は兼任や兼任教員によって担われた時期もあったが、その後すべての課程に専任教員が配置されることになり、体制を充実させてきた。

三 教育学科（教育学コース）における研究・教育、学生の学び

教育学科における研究・教育の実際と、学生がどのような学習を展開してきたのかについては、法政大学教育学会によって発行された『教育学会誌』に詳しい。

『教育学会誌』は一九五八（昭和二三）年に創刊された。当初は必ずしも毎年刊行されたわけではなく、また一九七五（昭和五〇）年に第一〇号が発行されてから、一九八四（昭和五九）年に第十一号が出されるまでの間には、やや長い休刊の時期も続いていた。しかし、やはり発行を継続すべきであるという機運が高まる中で、その後は二〇〇六（平成一八）年の第三三号まで毎

年発行を続けて、終刊となった。教育学科が募集停止をしたのは、二〇〇三（平成一五）年であるが、それ以前に入学した学生が在籍している期間は、最後まで発行を続けたことになる。

『教育学会誌』には、巻頭言やエッセイ、その年度の研究・教育活動についての年誌的な記録も掲載されたが、誌面の大半を占めたのは、教員によって投稿された論文と、その年度に提出された卒業論文のうちの優秀作（＋指導教員によるコメント）であった。教育学コースに関連する論考を中心に紹介してみたい。

まず、教員による論文であるが、創刊号には、笹岡太一「教育費の研究」といった本格的な研究論文が掲載された。一九六三（昭和三八）年の第三号は「特集 へき地教育」を組んでおり、現地への訪問調査を踏まえた報告が見られる。一九七五（昭和五〇）年の第一〇号には、吉本正樹「朝鮮民主主義人民共和国の教育」が投稿され、歴史を感じさせる。

その後、一九八四（昭和五九）年の第一一号になると、佐貫浩「大学生の学習意欲の構造と学習主体の確立」、翌年の第二二号には、乾彰夫「青年期と現代」が掲載された。背景には教育をめぐる社会全体の関心の変化が伺われる。一九八六（昭和六一）年の第一三号には、法政大学大内兵衛記念公開講座として行われた「現代社会と教育改革——イギリスと日本」が掲載されている。また、一九九〇（平成二）年の第一七号になると、笹川孝一「『アジアからの花嫁問題』と日本の教育」が載るが、教育学研究の視野を広げようと模索していた当時の雰囲気을伝えている。論文ではないが、二〇〇二（平成一四）年の第三〇号は、「教育学科創立五〇周年記念シンポジウム」と称して「教育学科のこれまでとこれから」を特集した。その内容は、第一部「キャリ

アデザイン学部と文学部心理学科の発足」(笹川孝一、高橋敏治)、第二部「教育学科の歴史を振り返るなから」(白井愼、上山碩、小川徹、段木一行)、第三部「新しい展開へ」(柴田博、古沢常雄、佐貫浩、高野良一、児美川孝一郎、坂本旬、福田由紀、渡辺弥生、金山喜昭)、第四部「卒業生からのメッセージ」であった。シンポジウムの記録と寄稿によって構成された特集であるが、教育学科が募集停止をする直前、最後の年度のことであった。

次に、『教育学会誌』に掲載された学生の卒業論文を見ると、創刊号には、木村定司「問題解決学習と解決力評価への考察」、沢田弘「音楽教育の問題点とその改善」が掲載された。学校現場にきわめて近いテーマであるが、これらの執筆者の学生の肩書きには、勤務先の学校名が記載されている。発足時の教育学科の学生像や雰囲気伝えるものであろう。一九六七(昭和四二年)の第四号になると、小谷野省二「山びこ学校と現代について」、一九七四(昭和四九年)の第九号には、赤井義範「農村の社会教育集団」が掲載される。学生の関心が、学校現場に近い実践的なものから、しだいに広がっていったことがうかがえる。

時代が下って、一九八五(昭和六〇)年の第一二号には、坂本知子「障害児教育のあり方を考える」、翌々年の第一四号には、古賀哲夫「学校教育への父母・住民参加」、一九九一(平成三年)の第一八号には、染谷和義「頭髮校則と子どもの人権」第二〇号、翌々年の第二二号には、源嶋美佳「統合教育を考える」が掲載された。教育学研究のオーソドックスな研究テーマとともに、当時の「社会問題としての教育」がテーマとして選ばれていたことがわかる。

さらに、近年に近づく、二〇〇一(平成一三)年の第二八号に、斎藤由紀恵「社会・家庭に

形成される女性たち」翌々年の第三〇号には、朝倉智子「学校における『結婚教育』の必要性」が掲載される。現代的で、狭い意味での教育学にとどまらない特徴的なテーマ選択がなされていたことがうかがえる。

四 教育学科の募集停止からキャリアデザイン学部設置へ

一九九〇年代になると、法政大学でも新学部設置の構想を軸にしつつ、時代の変化とニーズに合致した教学改革を進めていこうとする機運が盛り上がり、その中には二部（夜間）の学部・学科の再編問題が含まれていた。第二文学部に置かれていた教育学科の新たな展開については、全学的な新学部設置の構想とも絡み、文学部内での学科再編の議論も行われたが、最終的には、教育学コースは市ヶ谷キャンパスに新設を予定していた学部に合流し、心理学コースは、一部は多摩キャンパスに新設された現代福祉学部へ、残りは文学部に新設予定の心理学科に移行することに落ち着いた。

教育学コースが移行する予定であった新学部は、当初「生涯学習学部（仮称）」として構想され、設置準備委員会には、教育学コースから笹川、児美川が参加した。その後、文部科学省への設置認可申請の過程において、新設学部の名称は「キャリアデザイン学部」に決定した。二〇〇三（平成一五）年以降、教育学コースのスタッフであった古沢、佐貫、笹川、高野、児美川、坂本、金山が新学部に移籍した。

こうして教育学科における教育学研究・教育の歴史は幕を閉じ、その実質は新学部に継承されることになった。キャリアデザイン学部は、教育学、心理学、経営学、経済学、社会学、人文学などを基盤とする学際的学部として、生涯にわたる個人のキャリア形成とその支援についての研究・教育を行うことを目的とする。それは広義に解すれば、戦前、城戸幡太郎がめざした「教育科学」、時代と社会の要請に応え、理論と実践を往還する総合的・実践的な学を現代に再興しようとしたものとも言えるだろう。

（児美川 孝一郎）

資料編

×在職中の死亡

[illegible]

【哲学科】

227

×在職中の死亡

[illegible]

229

2000																							勤務年度				備考			
77787980818283848586878889909192939495969798990001020304050607080910111213141516171819202122																							西暦							
平成																							令和					和暦		
52535455565758596061626312345678910111213141516171819202122232425262728293031234																							2019年5月より令和							
																							尾谷昌則							
																							小林ふみ子				2004～CD学部			
																							中丸宣明							
																							山田夏樹				助教			
																							遠藤星希							
																							村山龍				助教			
																							王安							
																							佐藤未央子				助教			

資料編

勤務年度	1900																																																				
西暦	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76
和暦	大正		昭和																																																		
	13	14	15	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
尾谷昌則																																																					
小林ふみ子																																																					
中丸宣明																																																					
山田夏樹																																																					
遠藤星希																																																					
村山龍																																																					
王安																																																					
佐藤未央子																																																					

×在職中の死亡

[illegible]

【英文学科】

[illegible]

2000																						勤務年度				備考																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
77787980818283848586878889909192939495969798990001020304050607080910111213141516171819202122																						西暦																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
平成																				令和		和暦																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
52535455565758596061626312345678910111213141516171819202122232425262728293031234																						2019年5月より令和																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		

資料編

勤務年度	1900
西暦	22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76
和暦	大正 昭和
	11 12 13 14 15 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51
島弘之	
利根川真紀	
日中鎮朗	
武田将明	
大沢ふよう	
B・ワイスナー	
山下敦	
丹治愛	
小林久美子	
山崎暁子	
小島尚人	
韓沛君	
田中裕希	
中田達也	
福元広二	
柳橋大輔	
近藤隆子	

×在職中の死亡

2000																															勤務年度	備 考									
84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	西暦		
平成																																						和暦	2019年5月より令和		
59	60	61	62	63	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	2	3	4	和暦		
																																							竹内直良	1943 法政着任	
																																								丸山忠綱	
																																								和田久徳	
																																								藤井甚太郎	
																																								板澤武雄	
																																								河原正博	1947～第一教養部
																																								岩生成一	
																																								安岡昭男	
																																								村上直	
																																								豊田武	
																																								伊藤玄三	
																																								倉持俊一	
																																								中野榮夫	
																																								山名弘史	
																																								後藤篤子	
																																								澤登寛聡	
																																								長井純一	
																																								加納格	
																																								栃木利夫	1978～第一教養部
																																								中村純	1985～第一教養部
																																								小口雅史	1996～第一教養部
																																								小倉淳一	
																																								河内祥輔	
																																								齋藤勝	
																																								塩沢裕仁	
																																								大塚紀弘	
																																								松本剣志郎	
																																								北川香子	
																																								高澤紀恵	
																																								大澤広晃	
																																								宇都宮美生	
																																								内藤一成	

237

×在職中の死亡

2000																																		勤務年度	備 考						
84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	西暦		
平成															令和																令和				和暦	2019年5月より令和					
59	60	61	62	63	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	2	3	4			
																																							阿部市五郎	1943 法政着任	
																																								野口保市郎	1947～第一教養部
																																								秋岡武次郎	1945～公職追放
																																								多田文男	
																																								岡山俊雄	
																																								新井浩	
																																								浅井辰郎	
																																								田中館秀三	
																																								三井嘉都夫	
																																								北田宏蔵	
																																								小川徹	
																																								鴨澤巖	
																																								渡辺一夫	
																																								市瀬由自	
																																								田淵洋	
																																								吉野正敏	
																																								大貫俊	
																																								上田茂春	
																																								佐藤典人	
																																								山口不二雄	
																																								中俣均	
																																								片岡義晴	
																																								小寺浩二	
																																								山本茂	
																																								漆原和子	
																																								中島弘一	1983～第一教養部
																																								吉田智	1997～第一教養部
																																								米家志乃布	1998～第一教養部
																																								伊藤達也	
																																								小原文明	
																																								前李英明	
																																								富田啓介	
																																								山口隆子	
																																								羽佐田祐大	
																																								佐々木達	
																																								宇津川喬子	

[illegible]

×在職中の死亡

										備 考
14	15	16	17	18	19	20	21	22		
					令和					
26	27	28	29	30	31	2	3	4	2019 年 5 月より令和	
									1985 ～第一教養部	
									1999 ～第一教養部スポーツ健康学部	
									2000 ～文学部教育学科	
									2001 ～文学部教育学科	
									2001 ～文学部教育学科	

【心理学科】

勤務年度	2000													
西暦	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13
和暦	平成													
	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
富田公博														
刈部俊二														
福田由紀														
高橋敏治														
渡辺弥生														
吉村浩一														
藤田哲也														
田嶋圭一														
島宗理														
越智啓太														
荒井弘和														
林容市														
竹島康博														

×在職中の死亡

											2000												勤務年度	備 考												
89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12			13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	西暦
平成																		令和				和暦														
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	2	3	4	2019年5月より令和		
																																			大場実治	
																																			望月新八	
																																			林田不二生	
																																			國府種武	
																																			鈴木幹人	
																																			吉本正樹	
																																			高原栄	英文学科より移籍
																																			門司三省	
																																			神本光吉	
																																			白井慎	
																																			西川好夫	
																																			花香実	
																																			小山睦央	
																																			上山碩	哲学科より移籍
																																			古沢常雄	
																																			岡崎昇	
																																			鶴田総一郎	
																																			太田卓	
																																			佐貫浩	キャリアデザイン学部へ
																																			小川徹	
																																			柴田博	
																																			乾彰夫	
																																			長山恵一	現代福祉学部へ
																																			段木一行	
																																			高野良一	キャリアデザイン学部へ
																																			笹川孝一	キャリアデザイン学部へ
																																			末武康弘	現代福祉学部へ
																																			児美川孝一郎	キャリアデザイン学部へ
																																			坂本旬	キャリアデザイン学部へ
																																			小野純平	現代福祉学部へ
																																			福田由紀	心理学科へ
																																			高橋敏治	心理学科へ

【教育学科】

勤務年度	1900																																				
西暦	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88
和暦	昭和																																				
	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
大場実治																																					
望月新八																																					
林田不二生																																					
國府種武																																					
鈴木幹人																																					
吉本正樹																																					
高原栄																																					
門司三省																																					
神本光吉																																					
白井愼																																					
西川好夫																																					
花香実																																					
小山睦央																																					
上山碩																																					
古沢常雄																																					
岡崎昇																																					
鶴田総一郎																																					
太田卓																																					
佐貫浩																																					
小川徹																																					
柴田博																																					
乾彰夫																																					
長山恵一																																					
段木一行																																					
高野良一																																					
笹川孝一																																					
末武康弘																																					
児美川孝一郎																																					
坂本旬																																					
小野純平																																					
福田由紀																																					
高橋敏治																																					
渡辺弥生																																					
金山喜昭																																					

歴代文学部長一覧

年度	文学部長
1922(大正11)	(1/4~) 文学科哲学科主任 安倍 能成
1923(大正12)	▼
1924(大正13)	(4/16~) 和辻 哲郎 (12/8~) 小山 龍之輔
1925(大正14)	
1926(大正15) (昭和元)	
1927(昭和2)	
1928(昭和3)	
1929(昭和4)	▼
1930(昭和5)	(1/13~) 松本 潤一郎
1931(昭和6)	文学部長 (4月~呼称変更) 松本 潤一郎
1932(昭和7)	
1933(昭和8)	
1934(昭和9)	
1935(昭和10)	
1936(昭和11)	▼
1937(昭和12)	(2/2~) 井本健作
1938(昭和13)	▼ (9/19~) 森荅吉
1939(昭和14)	▼ (7/15~) 城戸幡太郎
1940(昭和15)	▼ (2/28~) 野上豊一郎
1941(昭和16)	
1942(昭和17)	
1943(昭和18)	
1944(昭和19)	
1945(昭和20)	
1946(昭和21)	
1947(昭和22)	▼
1948(昭和23)	(5/1~) 第一文学部長 谷川 徹三
1949(昭和24)	(9/1~) 第二文学部長 石田 英一郎
1950(昭和25)	

年度	文学部長
1951(昭和26)	▼ (~8/31) (9/1~) 谷川 徹三
1952(昭和27)	
1953(昭和28)	
1954(昭和29)	
1955(昭和30)	▼
1956(昭和31)	
1957(昭和32)	▼
1958(昭和33)	重友 毅
1959(昭和34)	▼
1960(昭和35)	本多 顕彰
1961(昭和36)	
1962(昭和37)	▼ (~10/3) (10/4~) 岡本 成彦
1963(昭和38)	
1964(昭和39)	
1965(昭和40)	
1966(昭和41)	
1967(昭和42)	▼
1968(昭和43)	池島 重信
1969(昭和44)	▼ (~6/23) (6/24~11/26) 丸山 忠綱 (11/27~) 益田 勝実
1970(昭和45)	鴨澤 巖 ▼ (~9/30) (10/1~) 望月 新八
1971(昭和46)	▼
1972(昭和47)	林田 不二生
1973(昭和48)	三井 嘉都夫
1974(昭和49)	▼
1975(昭和50)	鈴木 幹人
1976(昭和51)	広末 保
1977(昭和52)	山崎 正一
1978(昭和53)	村上 直
1979(昭和54)	小谷 洋一
1980(昭和55)	矢内原 伊作
1981(昭和56)	▼ (~11/17) (11/18~) 加来 彰俊
1982(昭和57)	
1983(昭和58)	▼

年度	文学部長
1984(昭和59)	倉持 俊一
1985(昭和60)	▼
1986(昭和61)	表 章
1987(昭和62)	▼
1988(昭和63)	湯川 佳一郎
1989(平成 1)	▼
1990(平成 2)	堀江 拓充
1991(平成 3)	▼
1992(平成 4)	▼
1993(平成 5)	黒川 欣映
1994(平成 6)	▼
1995(平成 7)	牧野 英二
1996(平成 8)	▼
1997(平成 9)	伊藤 玄三
1998(平成10)	中野 榮夫
1999(平成11)	▼
2000(平成12)	堀江 拓充
2001(平成13)	安孫子 信
2002(平成14)	▼
2003(平成15)	星野 勉
2004(平成16)	▼
2005(平成17)	坂本 勝
2006(平成18)	▼
2007(平成19)	後藤 篤子
2008(平成20)	▼
2009(平成21)	中釜 浩一
2010(平成22)	▼
2011(平成23)	宮川 雅
2012(平成24)	▼
2013(平成25)	高橋 敏治
2014(平成26)	▼
2015(平成27)	奥田 和夫
2016(平成28)	▼
2017(平成29)	小秋元 段
2018(平成30)	
2019(平成31) (令和元)	▼
2020(令和2)	▼
2021(令和3)	安東 祐希
2022(令和4)	▼

西暦	和暦	哲	日文	英文	史	地理	心理	計
1949	昭 24	80	80	80				240
1950	昭 25	80	80	80				240
1951	昭 26	80	80	80				240
1952	昭 27	80	80	80				240
1953	昭 28	80	80	80				240
1954	昭 29	80	80	80				240
1955	昭 30	80	80	80				240
1956	昭 31	80	80	80				240
1957	昭 32	80	80	80				240
1958	昭 33	80	120	100				300
1959	昭 34	80	120	100				300
1960	昭 35	80	120	100				300
1961	昭 36	80	120	100	50	50		400
1962	昭 37	80	120	100	50	50		400
1963	昭 38	80	120	100	50	50		400
1964	昭 39	80	120	100	50	50		400
1965	昭 40	80	120	100	50	50		400
1966	昭 41	80	120	100	50	50		400
1967	昭 42	80	120	100	50	50		400
1968	昭 43	80	120	100	50	50		400
1969	昭 44	80	120	100	50	50		400
1970	昭 45	80	120	100	50	50		400
1971	昭 46	80	120	100	50	50		400
1972	昭 47	80	120	100	50	50		400
1973	昭 48	80	120	100	50	50		400
1974	昭 49	80	120	100	50	50		400
1975	昭 50	80	120	100	50	50		400
1976	昭 51	100	150	130	60	60		500
1977	昭 52	100	150	130	60	60		500
1978	昭 53	100	150	130	60	60		500
1979	昭 54	100	150	130	60	60		500
1980	昭 55	100	150	130	60	60		500
1981	昭 56	100	150	130	60	60		500
1982	昭 57	100	150	130	60	60		500
1983	昭 58	100	150	130	60	60		500
1984	昭 59	100	150	130	60	60		500
1985	昭 60	100	150	130	60	60		500
1986	昭 61	100	150	130	60	60		500

西暦	和暦	哲	日文	英文	史	地理	心理	計
1987	昭 62	100	160	130	90	90		570
1988	昭 63	100	160	130	90	90		570
1989	平 1	100	160	130	90	90		570
1990	平 2	100	160	130	90	90		570
1991	平 3	100	160	160	90	90		600
1992	平 4	100	160	160	90	90		600
1993	平 5	100	160	160	90	90		600
1994	平 6	100	160	160	90	90		600
1995	平 7	100	160	160	90	90		600
1996	平 8	100	160	160	90	90		600
1997	平 9	100	160	160	90	90		600
1998	平 10	100	160	160	90	90		600
1999	平 11	80	140	145	90	90		545
2000	平 12	80	139	142	90	90		541
2001	平 13	80	138	139	90	90		537
2002	平 14	80	137	136	90	90		533
2003	平 15	70	176	113	90	80	50	579
2004	平 16	70	175	120	100	90	60	615
2005	平 17	70	175	120	100	90	60	615
2006	平 18	70	175	120	100	90	60	615
2007	平 19	70	175	120	100	90	60	615
2008	平 20	70	170	115	100	90	60	605
2009	平 21	70	170	115	100	90	60	605
2010	平 22	70	170	115	100	90	60	605
2011	平 23	70	170	115	100	90	60	605
2012	平 24	70	170	115	100	90	60	605
2013	平 25	77	187	126	100	99	66	655
2014	平 26	77	187	126	100	99	66	655
2015	平 27	77	187	126	100	99	66	655
2016	平 28	77	187	126	100	99	66	655
2017	平 29	77	187	126	100	99	66	655
2018	平 30	77	187	126	100	99	66	655
2019	平 31	77	187	126	100	99	66	655
2020	令 2	77	187	126	100	99	66	655
2021	令 3	79	191	129	102	101	68	670
2022	令 4	79	191	129	102	101	68	670

(出典 2021 年度事務便覧―「学部入学定員の推移」)

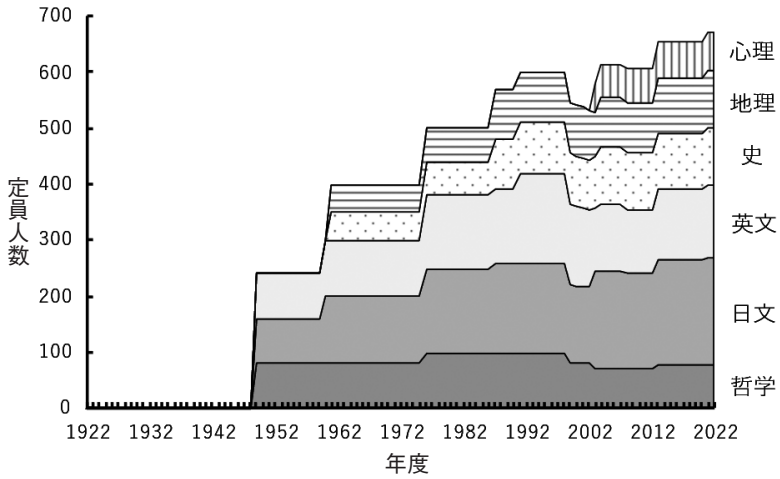
西暦	和暦	旧制	一部	二部	通信	計
1926	大 15	7				7
1927	昭 2	28				28
1928	昭 3	39				39
1929	昭 4	55				55
1930	昭 5	76				76
1931	昭 6	61				61
1932	昭 7	71				71
1933	昭 8	65				65
1934	昭 9	63				63
1935	昭 10	40				40
1936	昭 11	35				35
1937	昭 12	42				42
1938	昭 13	30				30
1939	昭 14	21				21
1940	昭 15	21				21
1941	昭 16	34				34
1942	昭 17	34				34
1943	昭 18	30				30
1944	昭 19	31				31
1945	昭 20	7				7
1946	昭 21	7				7
1947	昭 22	14				14
1948	昭 23	13				13
1949	昭 24	26				26
1950	昭 25	57	51	94		202
1951	昭 26	73	38	160		271
1952	昭 27		69	138	134	341
1953	昭 28		64	119	181	364
1954	昭 29		67	100	176	343
1955	昭 30		122	127	146	395
1956	昭 31		183	115	179	477
1957	昭 32		236	150	197	583
1958	昭 33		260	177	185	622
1959	昭 34		311	200	195	706
1960	昭 35		282	161	171	614
1961	昭 36		232	140	140	512
1962	昭 37		287	136	152	575
1963	昭 38		329	125	132	586

西暦	和暦	旧制	一部	二部	通信	計
1964	昭 39		496	104	131	731
1965	昭 40		553	166	123	842
1966	昭 41		529	168	116	813
1967	昭 42		561	165	123	849
1968	昭 43		591	181	114	886
1969	昭 44		659	190	96	945
1970	昭 45		714	183	125	1022
1971	昭 46		614	157	112	883
1972	昭 47		577	115	78	770
1973	昭 48		574	150	87	811
1974	昭 49		613	213	113	939
1975	昭 50		750	202	122	1074
1976	昭 51		658	196	104	958
1977	昭 52		775	214	109	1098
1978	昭 53		718	207	99	1024
1979	昭 54		676	205	101	982
1980	昭 55		675	251	100	1026
1981	昭 56		600	225	128	953
1982	昭 57		597	194	119	910
1983	昭 58		736	224	119	1079
1984	昭 59		601	237	142	980
1985	昭 60		626	269	140	1035
1986	昭 61		662	239	131	1032
1987	昭 62		682	241	129	1052
1988	昭 63		614	267	171	1052
1989	平 1		678	259	139	1076
1990	平 2		655	224	141	1020
1991	平 3		714	273	150	1137
1992	平 4		706	254	171	1131
1993	平 5		668	265	199	1132
1994	平 6		639	258	146	1043
1995	平 7		706	302	148	1156
1996	平 8		573	269	135	977
1997	平 9		641	257	151	1049
1998	平 10		646	199	142	987
1999	平 11		581	217	142	940
2000	平 12		651	149	105	905
2001	平 13		721	186	109	1016

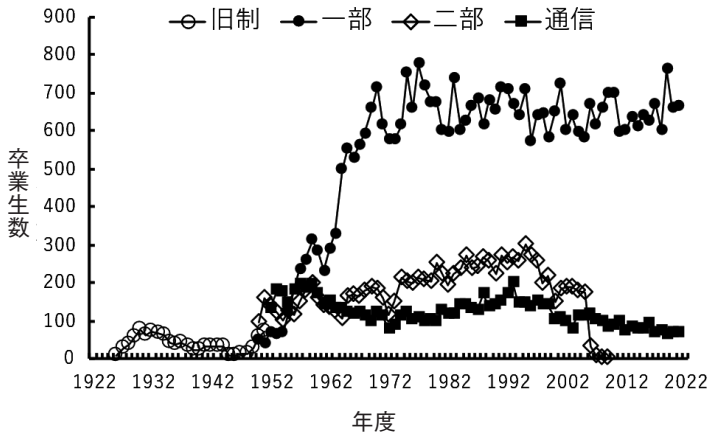
西暦	和暦	旧制	一部	二部	通信	計
2002	平 14		601	187	100	888
2003	平 15		639	189	79	907
2004	平 16		595	181	113	889
2005	平 17		583	175	115	873
2006	平 18		668	31	117	816
2007	平 19		616	10	104	730
2008	平 20		659	5	97	761
2009	平 21		700	1	84	785
2010	平 22		697		90	787
2011	平 23		597		96	693
2012	平 24		599		73	672
2013	平 25		635		83	718
2014	平 26		610		79	689
2015	平 27		641		81	722
2016	平 28		624		92	716
2017	平 29		671		68	739
2018	平 30		603		75	678
2019	平 31		760		64	824
2020	令 2		657		70	727
2021	令 3		664		71	735

(出典 2021 年度事務便覧―「卒業生数一覧」)

文学部定員の推移



文学部卒業生数の推移



文学部年表

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九二〇 大正 9	4・15 野上豊一郎、予科長に就任	4・15 大学令による財団法人法政大学認可、法学部・経済学部設置 8・21 専任教員採用申請許可（大学令による教育態勢を整備）	1・10 国際連盟成立、日本加盟 4・20 アントワープオリンピック開催
一九二一 大正 10	この年、独逸語会結成	4 第一校舎を麹町区富士見町四丁目に竣工し移転	10・3 友愛会、日本労働総同盟と改称
一九二二 大正 11	4 法学部を法文学部に編成変更、哲学科・文学科を開設	2 第二校舎完成	2・6 ワシントン条約・九か国条約調印
一九二三 大正 12	1・4 安倍能成、法文学部文学科哲学科主任に就任 この年、英語会結成		9・1 関東大震災
一九二四 大正 13	4・16 安倍能成、文学科哲学科主任を辞任、和辻哲郎就任 12・8 和辻哲郎、文学科哲学科主任を辞任、小山龍之輔就任 文学科に国文学主攻、哲学科に社会学主攻を開設		1・10 第二次護憲運動 1・25 シヤモニー（第一回）冬季オリンピック開催 5・4 バリオリンピック開催
一九二五 大正 14	10・9 独逸文学会結成 10・10 仏蘭西文学会結成	7 学部・予科・専門部学生の軍事教練のため、陸軍省現役将校三名を派遣	3・19 治安維持法成立 3・29 普通選挙法成立

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九二六 大正一五 昭和一	10・9 英文学会結成 11 国文学会・哲学会結成	10・28 法政大学学位規定認定	12・25 大正天皇崩御、昭和に改元
一九二七 昭和二	4・1 三木清、哲学科教授に就任	2・2 第三校舎（図書館・講堂、戦後の第一校舎）落成	3・15 金融恐慌始まる 5・28 第一次山東出兵
一九二八 昭和三		4・12 第四校舎（六角校舎、戦後の第二校舎）落成 5・1 高等師範科研究科開設（国語漢文科・英語科、就業年限一か年） 5・20 創立50周年記念式典挙行、記念学術講演会開催（5・21）	2・11 サンモリッツ冬季オリンピック開催 2・20 第一回普通選挙 5・17 アムステルダムオリンピック開催 6・29 治安維持法改正
一九二九 昭和四	9 心理学会、法政大学児童研究所開設、城戸幡太郎、所長就任	4・1 大学予科一学期制となる	10・24 NY株式大暴落、世界恐慌始まる
一九三〇 昭和五	6・14 国文学会講演会（読売新聞講堂） 7・7 三木清、文学部教授を辞任	1・30 高等師範科研究科を専修科と改称 2・7 校友会館（新館）竣工 6・4 背広着用禁止、角帽に統一	1・21 ロンドン海軍軍縮会議
一九三一 昭和六	1・13 松本潤一郎、文学部主任に就任 4 松本潤一郎、文学部長に就任 12 哲学会『哲学年誌』発行	4 学部主任制度を学部長制度に改正	9・18 満洲事変勃発
一九三二 昭和七	6・4 西田幾多郎、哲学講演会開催 7・1 独逸文学会・仏蘭西文学会『黒潮』創刊		2・4 レークプラシッド冬季オリンピック開催 3・1 満洲国建国宣言

一九三二 昭和7	11 法政大学日本精神史学会設立、 『日本精神史論集』（I）発行		5・15五・一五事件 7・30サンゼルスオリンピック開催
一九三三 昭和8	4・1 文学科・哲学科の学科課程の学 年制を単位制に改正 6・16 哲学科、京大滝川事件につき声 明書発表 9・25 西田幾多郎講演会「行為の世界」 開催（9・27、9・29、哲学研 究会主催） 11・19 英語会創立10周年記念祭 12・8 国文学会『国文学誌要』創刊 12・31 野上豊一郎、辞職	3・8 法政倶楽部発会式（校友・教職 員の親睦団体） 9 「法政騒動」起る	1・30 ドイツ、ヒットラー内閣成立 3・27 日本、国際連盟を脱退
一九三四 昭和9	4・8 文学科・哲学科、女子学生の入 学を許可（入学資格 女子専門 学校卒） 5・21 自由主義研究会大会開催（校友 会館）、三木清教授復職要請を 決議 5 哲学会、恒例の課外研究会を開 催、全学生に講座を開放 6・1 哲学科学生、三木清教授の復職 を学校当局に嘆願 8・1 戸坂潤、文学部講師を解職 10・14 森田米松（草平）、文学部教授 を辞任 11・1 法政文学会『法政文学』創刊	4 学生証を改正し、写真を貼付	

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九三五 昭和10	7 英語会、第二回日米学生会議に 弁士派遣（〇サンゼルス）		6・28フランス人民戦線結成
一九三六 昭和11	12・12法政文学振興会設立（文学部教 授・学生・卒業生の組織）、松 本潤一郎、会長に就任 この年、文芸学研究会結成		2・6ガルミッシュ・バルテンキルヘ ン冬季オリンピック開催 2・26二・二六事件 7・17スペイン内乱勃発 8・1ベルリンオリンピック開催 12・4西安事件
一九三七 昭和12	6 4 高等師範部に歴史地理科を開設 仏文学会、機関誌『条件』創刊	4 奨学資金給付制度制定（守屋奨 学資金）	7・7日中戦争始まる
一九三八 昭和13	2・2井本健作、文学部長に就任 4・15文学部「文化講座」開設（ 14・3・20） 7 野上豊一郎、「能——研究と発 見」で文学博士の学位取得 9・19森巻吉、文学部長に、井本健作、 予科長に就任		3・13ドイツ・オーストリア合併 4・1 国家総動員法公布 9・30英・仏・独・伊、ミュンヘン協 定
一九三九 昭和14	4・1法文学部文学科・哲学科を英吉 利文学科・独逸文学科・仏蘭西 文学科・国文学科・哲学科・心 理学科・社会学科に改組 4・27心理学会「優生学講座」開講 6・2仏文科女子卒業生片岡美智、フ ランス政府留学生に選出	1 興亜学会設立（中国大陸研究の 学生団体） 4 軍事教練必修となる	5・12ノモンハン事件起こる

一九四二 昭和17					
	12・7・28 野上豊一郎、文学部長に復帰 10文芸学会機関誌『文豪』創刊 緑の上げ卒業開始	12・14 文芸学会・文政学会結成	4・15 法政ジャーナリスト倶楽部結成、竹内賀久治、会長に、城戸幡太郎・中島忠之、副会長に就任	一九四〇 昭和15	4・1 法文学部英吉利文学科・独逸文学科・仏蘭西文学科・国文学科・哲学科・心理学科・社会学科を文芸学科・文政学科に改組
	9	1・22 東亜研究会「新東亜建設学術大講演会」開催 4 学年・学科別の襟章を制定 5・25 『法政大学校友名鑑』発行（付録「法政大学六十年史」） 川崎市木月に予科図書館落成	11・10 紀元二六〇〇年記念式典挙行	一九三九 昭和14	7・15 文学部長・高等師範部長森巻吉死去により城戸幡太郎就任 7・17 法文学部学生、興亜学生勤労報国隊員として渡満 7 文学部会結成 この年、文学部学生募集中止、学生の大半が転部、転部しない10名弱の学生のみ進学許可
10・30 学制発布七〇周年記念式典挙行	6・5 ミッドウェー海戦	4・13 日ソ中立条約調印 6・22 独ソ戦争 12・8 太平洋戦争勃発	9・27 日独伊三国同盟調印		7・1 東亜研究会設立、木村増太郎、会長に、城戸幡太郎、副会長に就任 9・1 第二次世界大戦始まる

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九四三 昭和18	1 倉光俊夫（日文卒）第一六回芥川賞受賞（連絡員） 2・1 文学部長野上豊一郎、学監に就任 2・24 高等師範部地理歴史科専修科開設	12・1 「在学徴集延期臨時特例」（勅令）による学徒出陣	9・8 伊、ムツソリー二失脚、無条件降伏
一九四四 昭和19	3・9 文学部長兼学監野上豊一郎、高等師範部長を兼任 7・11 城戸幡太郎、文学部教授を辞任		10・6・19 アリアナ沖海戦 10・24 レイテ沖海戦
一九四五 昭和20	4・9 授業停止（1か年） 文学部長兼学監野上豊一郎、第二中学校校長を兼任	5・25 空襲により富士見地区校舎の大半を焼失（5・26） 11・14 法政大学学生大会（戦後最初）、大学の民主化を要求して全学同盟休校を決議（11・16） 11・22	8・9 戸坂潤獄死 8・15 第二次世界大戦終わる 9・26 三木清獄死 10・24 国際連合成立
一九四六 昭和21	2・16 野上豊一郎、理事・学長に、半田秀一・井本健作、監事に就任 4・1 法文学部文芸学科・文政学科を改組し、国文学科・英文学科・哲学科とする。大学部・専門部女子の入学を許可（文学科・哲学科は34・4・8） 4・27 野上豊一郎、理事長に就任 法政文学会編『灯』発行	10・19 日本文学協会法政大学支部結成 11・3 戦後初の法政大学祭開催（11・9）	11・3 日本国憲法公布

一九四七 昭和22	3・19 野上豊一郎、総長に就任 3・24 法文学部を法学部（法律科・政経科）と文学部（国文学科・英文学科・哲学科）とに改組 4・1 文学部第二部設置（三か年、国文学科・英文学科・地理歴史学科、文学部の夜間部は全国初） 文学部「アメリカ思潮講座」開講 心理学研究会、コロンビア大学と提携して「表情の研究」の共同研究	1・28 通信教育部開設を決定 7・25 通信教育部設置	3・31 教育基本法・学校教育法公布、大学令廃止 4・1 「6・3制」小・中学校発足 4・7 労働基準法公布
一九四八 昭和23	4 国文学科を日本文学科に改称 5・1 野上豊一郎に代わり、谷川徹三、文学部長に就任 5・23 通信教育部長美濃部達吉死去により、総長野上豊一郎、部長兼任 10 通信教育部に文学部（日本文学科・史学科）開設 11・3 E・C・フンテン来学、英詩史を講義（11・15）	4 1 「法政大学通信教育部報」創刊 4 1 大学部 専門部授業料、二八〇〇円に値上げ 10・14 大学部・専門部授業料、六〇〇〇円に値上げ	1・30 サンモリッツ冬季オリンピック開催 4・1 新制高等学校発足 4・1 新制高等専門学校発足 6・23 昭和電工事件 7・29 ロンドンオリンピック開催 8・13 大韓民国樹立宣布式挙行 9・9 朝鮮民主主義人民共和国樹立 12・18 経済安定九原則発表
一九四九 昭和24	4・1 法学部・文学部・経済学部設置、新制大学として発足、文科系授業料を八四〇〇円とする（旧制は据置き）	4・1 学校教育法（大学）による財団法人法政大学設置認可 通信教育部、科目別履修生の募集開始	4・4 北大西洋条約調印 7・5 下山事件 7・15 三鷹事件 8・17 松川事件

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九四九 昭和24	9・1 石田栄一郎、第二文学部長に就任	9・1 第二学部制を実施、多田基、第二教養部長に就任 10・16 文科系旧制大学・専門部授業料を七二〇円とする 10・29 法政大学創立70周年記念式典挙行	10・1 中華人民共和国成立 10・7 ドイツ民主共和国成立
一九五〇 昭和25	1 法政大学地理学会設立 2・15 E・C・フランデン、本学名誉教授となる 2・18 史学科「史学科公開講演会」第一回開催（学生ホール講堂） 2・28 総長野上豊一郎大学葬（2・23死去、学生ホール） 3・14 通信教育部、学校教育法に基づき認可（法・文・経） 4・24 史学科「史学会」成立、第一回総会開催（嘉悦学園） 5・28 史学科「史学会第二回史蹟調査」（国分寺界限、以後、総会・例会・公開講演会・史蹟調査を毎年開催） 7・1 地理学会『法政地理』創刊 9・20 史学会『法政大学史学会会報』創刊（53・3・28第五号） 9・25 文学部日本文学科・哲学科および法学部学生、レッド・パージ反対試験ボイコット	4・1 工学部設置（富士見校舎内）法政大学短期大学部を木月に設置 10・3 通信教育部Tコース（無資格教員のための教職課程）を設置	6・25 朝鮮戦争勃発 7・28 レッド・パージ開始

一九五〇 昭和25	10・3 文学部小田切秀雄助教授、レッド・パージ反対運動に関するメッセージ「一教師として」を発表 10・15 文学部教授近藤忠義・西郷信綱ら数名が「私たちはかくまえる」を発表 10・16 レッド・パージ反対試験ボイコット運動責任者学生31名を除籍・停学処分、学生大会が開催され、初の学内デモ決行	12 レッド・パージ反対学生運動に関する声明書の責任をめぐり、総長と関係教授間で紛糾 教授懇談会創設 法政大学新制大学院、大学設置審議会により承認	
一九五一 昭和26	4・5 大学院修士課程設置（人文科学研究科、哲学専攻・日本文学専攻・英文学専攻） 6・20 文学部自治会学生大会の開催、学校当局により禁止 7 石川利光（日文卒）第二五回芥川賞受賞（「春の草」） 10・16 文学部に教職課程開設	2・12 文科系授業料を二二〇〇円とする 3・8 私立学校法の実施により財団法人を学校法人に改組	7・10 朝鮮休戦会談 9・8 対日講和条約調印、日米安全保障条約調印
一九五二 昭和27	4・1 大学院修士課程人文科学研究科に国史学専攻増設 文学部第二部教育学科開設 野上記念法政大学能楽研究所創設（井本健作、所長に就任） 5・24 メーデー事件犠牲者文学部学生近藤巨土の学生葬	4・1 社会学部を設置 奨学金制度を廃止、特待生制度を新設	2・14 オスロ冬季オリンピック開催 5・1 メーデー流血事件 7・19 ヘルシンキオリンピック開催 7・21 破壊活動防止法公布

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九五三 昭和28	1・20 法政文学会『法政文学』創刊 3・5 法政大学教員組合結成（法・文・教養部教授） 4・1 大学院修士課程人文科学研究科に地理学専攻増設 11・29 エマソン生誕150周年記念講演会（英文学会・英語英文学研究会主催） 12・28 『法政大学史学会会報』を『法政史学』と改題して発行	2・25 大学院校舎（53年館）竣工 文科系学部の入試科目改訂（外国語・国語必修）	7・27 朝鮮休戦協定調印 8・5 スト規制法成立
一九五四 昭和29	3・31 史学科『法政大学文学部紀要』第一号発行 4・1 大学院人文科学研究科国史学専攻を日本史学専攻に改称 7・3 ホーソン生誕150周年記念講演会（第一部英文学会、英語英文学研究会主催）	8・1 法政大学健康保険組合設立	3・1 ビキニ水爆実験で第五福竜丸被災 3・8 日米MSA協定調印 7・1 防衛庁、自衛隊発足
一九五五 昭和30	1・22 通信教育部に文学部地理学科増設 4・1 大学院博士課程を開設（人文科学研究科 哲学専攻・日本文学専攻・英文学専攻・地理学専攻・日本史学専攻）	2・25 55年館竣工	5・14 ワルシャワ条約調印 11・15 自由民主党結成
一九五六 昭和31	3 日本文学科『法政大学文学部紀要』第二号発行		1・26 コルティーナ・ダンペッツオ冬季オリンピック開催

一九五八 昭和33	2・25 英文学会『英文学誌』復刊 3・1 英文学科『法政大学文学部紀要』第三号発行 4・1 文学部定員変更 12・31 地理学科『法政大学文学部紀要』第四号発行	11・30 通信教育部創立10年記念式典挙行 4・1 各学部定員変更 5・15 58年館竣工 8・31 第II 58年館竣工 11・3 法政大学創立80年記念式典・58年館建設記念式を挙行	1・31 米、第一号人工衛星エクスプローラー打ち上げ成功 10・4 ソ連、最初の人工衛星スプートニク打ち上げ成功
一九五七 昭和32	12・1 『日本文学誌要』（旧『国文学誌要』）復刊		6・10 ストックホルムオリンピック開催（馬術競技） 11・22 メルボルンオリンピック開催（馬術競技以外） 12・18 日本、国際連合加盟
一九五六 昭和31	9 海外留学派遣制度発足（翌年度より実施、文学部教授瀬川行有留学） 11 英語研究会、英字新聞 The Iosel Times を創刊 12・1 能楽研究会創立10周年記念、全法政能楽大会を開催（矢来能楽堂）		
一九六〇 昭和35	12・25 哲学科『法政大学文学部紀要』第五号発行	4・1 経営学部を設置 6・15 安保反対法政大学全学抗議集会	1・29 新日米安保条約・行政協定に調印 2・18 スコーバレー冬季オリンピック開催 8・25 ローマオリンピック開催
一九五九 昭和34		1・1 新国民健康保険法・メートル法施行、EEC発足、キューバ革命	

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九六一 昭和36	3・1 教育学科『法政大学文学部紀要』第六号発行（以後、文学部で毎年1、2回発行） 4・1 文学部第一部史学科・地理学科開設、第二部史学科・地理学科募集停止	4・1 法政大学外国語専修講座開設 8・1 『法政大学八十年史』発行	4・19 ライシャワー米駐日大使着任
一九六二 昭和37	6・2 能楽研究所 世阿弥生誕六〇〇年記念展覧会開催（教職員食堂・会議室） 9・11 谷川徹三、総長代行に就任（38・2・11） この年、専任講師の教授会出席開始	4・1 法政大学奨学金給与制度・法政大学年金制度制定 4・1 富士見地区木造校舎（学生ホール、生物生理実験室、剣道場、教職員組合事務所）取り壊し 4・10 62年館竣工	10・22 キューバ危機
一九六三 昭和38	2・11 谷川徹三、総長に就任（40・8・20） この年、学科主任会議を設置		11・22 ケネディ米大統領暗殺
一九六四 昭和39	4・1 資格課程を開講（図書館司書・学校図書館司書教諭・社会教育主事・博物館学芸員）、全学の学生を対象とし、卒業生・聴講生も受講可能	3・31 工学部、小金井キャンパスに移転	1・29 インスブルック冬季オリンピック開催 10・10 東京オリピック開催
一九六五 昭和40	8・20 小田切秀雄、総長代行に就任（41・5・6）	4・11 創立85周年記念式典挙行	11・2・7 米、北ベトナム爆撃開始 11・10 中国文化大革命開始
一九六六 昭和41		10・1 大学住所表示の変更（富士見二丁目一七番一号）	5・30 米原子力潜水艦が横須賀に初入港 6・29 ビートルズ来日

一九六七 昭和42		8・1 通信教育部創立20周年記念「働きつつ、学びつつ」発行 10・8 校友会創立80周年記念式典（日通伊豆富士見ランド）	6・5 中東動乱開始
一九六八 昭和43	9・9 第一文学部自治会問題をめぐり民青系学生・労働者と中核派ほかの学生が衝突	1・15 エンタープライズ佐世保寄港阻止闘争との関連で、構内の一部で強制捜査 1・16 総長、「大学の重大な事態にあり学生諸君に訴える」を発表	1・19 エンタープライズ、佐世保入港 2・6 グルノーブル冬季オリンピック開催 6・26 小笠原復帰 10・12 メキシコシティオリンピック開催 12・10 三億円強奪事件
一九六九 昭和44	4・1 教育学科に心理学コースを設置 5・20 文学部教授会、「大学立法」に対する反対声明を発表 5・28 文学部学生大会 10・31 文学部教授会と学部自治会との「公開の執行部「団交」「学部集会」開催	5・20 大学、「大学立法」に対する反対声明を発表、以後、各学部教授会も声明発表 6・20 各学部学生大会で大学立法粉砕を掲げ、無期限バリケード・ストライキ突入を決議 6・23 本校、62年館、授業休講（11・20） 10・13 事務機構変更、学部事務課を新設 10・15 全共闘系学生によるフェヤモント事件（10・16） 10・23 総長「説明集会」開催（木月グランド、約七〇〇名参加） 11・20 授業再開、総長「授業全面再開に際して」を発表	7・21 米、アポロ11号人類初の月面踏査 8・3 大学運営臨時措置法案成立

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九七〇 昭和45	9 地理学科が日本学術会議の国際協力研究によってユーゴスラヴィアに局地風「ボラ」の研究調査隊を派遣	6・9 全学カリキュラム委員会発足 8・12 大学、全学生に対して当分の間すべての施設の夜10時以後の使用を禁止 9・1 学生諸団体に対して「三原則」を通知、53年館1、2階・東校舎の学生立入禁止を解除 10・14 本校地区鉄塙工事（11・23）、新館（旧校友会館）・六角校舎取り壊し（11・20） この年、総長の告示と学生諸団体の破壊行為多発	2・11 人工衛星「おおすみ」打ち上げ成功 3・14 大阪万国博覧会開催（9・13） 3・31 赤軍派学生、日航機より号乗っ取り 11・25 三島由紀夫、自衛隊市ヶ谷駐屯地に乱入し、割腹自殺
一九七一 昭和46	5 哲学科助手が大学に対して「地位保全仮処分申請」訴訟を起こす（助手問題）	4・1 他学部聴講制度実施開始 4・27 大学「新入生を迎えて」大学の基本方針について訴える」発表（以後毎年配布）	6・17 沖縄返還協定調印
一九七二 昭和47	7・1 沖縄文化研究所創設（総長中村哲、所長に、文学部教授外間守善、副所長に就任） 11・30 能楽研究所創立20周年記念「能の講演と映画の夕」開催（朝日講堂）		2・3 札幌冬季オリンピック開催 5・15 沖縄施政権返還、沖縄県発足 8・26 ミュンヘンオリンピック開催 9・29 日中共同声明発表調印
一九七三 昭和48	4・30 能楽研究所『能楽資料集成』創刊	6・19 本学構内・周辺路上での学生諸団体の大規模衝突事件、翌日より本校地区立入禁止（6・24）	5・1 ウォーターゲート事件 8・1 日米首脳会談、共同声明発表 第一次オイルショック起こる 12・12 日中貿易協定仮調印

一九七三 昭和48	10・31 能楽研究所『能楽研究』創刊	8・27 学生会館竣工 9・25 前期試験、妨害により延期。本校地区立入禁止（～9・27） 9・28 前期試験再開、妨害により再び中止、立入禁止（～9・29）	1・4 円大暴落
一九七五 昭和50		1・31 本校体育館竣工 6・17 爆発予告電話、外部学生集団62年館に侵入、暴力事件発生	7・20 沖縄海洋博覧会開催
一九七六 昭和51	4・6 能楽研究所、江島伊兵衛愛蔵の「鴻山文庫」を受贈	1・11 法政大学職員就業規則制定	2・4 ロッキード社の対日政治献金問題発覚、インスブルック冬季オリンピック開催 6・16 日豪友好協力基本条約調印 7・17 モントリオールオリンピック開催
一九七七 昭和52	10・28 能楽研究所創立25周年・鴻山文庫受贈記念能楽資料展開催（～10・30、霊友会釈迦殿小ホール）	1・17 学生集団、町田開発問題に関し「総長団交」を要求、後期試験妨害 1・20 本校地区立入禁止、後期試験延期（四年次生のみ試験実施） 7・26 教学問題委員会発足 9・4 第一回国際シンポジウム「原子核反応機構」開催（総長会議室・教職員ホール）	5・2 領海法・二〇〇カイリ漁業水域法成立

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九七七 昭和52		10・1 通信教育部30周年記念式典挙行 (赤坂プリンスホテル) 12・22 外国人客員教授規程制定	
一九七八 昭和53	11・7 ロンドン大学P・G・オニール 教授講演(文学部主催)	1・12 総長、町田移転問題に関連した 前年度の問題について大衆会見 (511番教室)	8・12 日中平和友好条約調印
一九七九 昭和54	6・27 大学、観世寿夫記念「法政大学 能楽賞」制定 7・14 文学部教授荒正人追悼講演会 (835番教室、英文学科主催) 12・6 第四回国際シンポジウム「世界 の中の能」開催(12・7、920 番教室・矢来能楽堂)	2・5 本校地区立入禁止(3・6)	1・13/14 大学共通第一次学力試験第 一回 5・3 英、初の女性首相サッチャー 6・28 東京サミット開催
一九八〇 昭和55		1・22 62年館で教職員の検問体制に より後期試験を実施(2・4) 6 大学創立百周年記念事業として 「法政大学フォン・シーボルト 研究会」設立 9・15 創立100周年記念式典・祝賀会 (東京プリンスホテル) 11・8 創立100周年記念役員・教職員物 故者慰霊祭(ホテル・ニュー オータニ) 12・1 『法政大学百年史』発行	2・13 レイクプラシッド冬季オリン ピック開催 4・12 米五輪委・モスクワ五輪ボイ cottを採択 7・19 モスクワオリンピック開催

一九八一 昭和56	7・19 史学科、法政大学百周年記念事業として福島県双葉郡浪江町の本屋敷古墳群の第一次発掘調査を実施（～8・23） この年、文学部教学改革委員会発足	3・31 80年館裏（旧武田邸跡）にアーネスト・サトウ記念碑建立 6・21 第一回「卒業生のつとめ」（ホームカミングデー、招待対象は一九四一年以前の卒業生）	5・21 仏大統領に社会党のミッテランが就任 6・29 中国共産党中全会で鄧小平が党軍事委主席に就任、文革全面否定の決議採択
一九八二 昭和57	7・20 史学科、法政大学百周年記念事業として福島県双葉郡浪江町の本屋敷古墳群の第二次発掘調査を実施（～9・15） 10・2 能楽研究所創立30周年記念能・狂言上演（玉生能楽堂） 10・11 第七回国際シンポジウム「沖縄文化の古層を考える」（～10・12、沖縄文化研究所主催、朝日放送ABC会館）	1・15 『法政大学報』創刊 7 フォン・シーボルト研究会「シーボルト研究」創刊 11・13 第一回留学生日本語スピーチコンテスト（833番教室）	4・2 フォークランド紛争勃発 6・29 ミン・クワン・タウ削減交渉（START）開始
一九八三 昭和58	6・1 「久米島の民家展」（沖縄文化研究所・武者英二研究室共催、～6・7、千代田火災ギャラリー） 8・1 史学科、法政大学百周年記念事業として福島県双葉郡浪江町の本屋敷古墳群の第三次発掘調査を実施（～9・5）	6・1 千代田区民大学講座「近代への架橋—文学と歴史を考える楽しみ—」（千代田区教育委員会との共催、～7・20 毎週水曜日、全8回、69年館会議室）	9・1 大韓航空機、サハリン沖でソ連軍機に追撃 10・12 東京地裁ロッキード事件丸紅ルート公判判決
一九八四 昭和59		1・17 後期試験、妨害のため一週間延期、市ヶ谷キャンパス、ロックアウト 3・15 多摩キャンパスに4・5・6・13・14号館竣工	2・8 サラエボ冬季オリンピック開催 3・18 グリコ・森永事件の始まり 7・28 ロサンゼルスオリンピック開催（ソ連圏15か国がボイコット、中国初参加）

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九八五 昭和60	3・31 法政大学百周年記念事業として 史学科考古学研究室編『本屋敷 古墳群の研究』発行 6・17 タイのタマサート大学日本研究 センター開所式、倉持俊一文学 部長出席	10・23 オーストラリア連邦政府高等教 育委員会特別委員リチャード・ S・ジョンソン、大学通信教育 事情視察のため来学 11・18 55・58・62年館で「学費値上 げ阻止全学実行委員会」により 全学フロア・スト	8・12 羽田発大阪行き日航ボーイング 747ジャンボ機が群馬県御巣鷹山 に墜落 9・22 ブラザ合意（以後、日本はバプ ル時代に）
一九八六 昭和61		1・9 学生14団体、バリケード・スト ライキ（～1・18） 1・20 市ヶ谷キャンパス、ロックアウ ト（～3・10） 10・17 第二回国際シンポジウム「シー ボルトと日本の近代化」（～ 10・19、第二教養部主催、多摩 百周年記念館）	4・1 男女雇用機会均等法施行 4・26 チェルノブイリ原子力発電所で 大規模事故 12 バブル景気（～平成3・2） この年、地価高騰、円高ドル安
一九八七 昭和62	10・17 沖縄文化研究所15周年記念・沖 縄学市民講座（10・24、10・ 31、多摩百周年記念館） 11・7 琉球古舞踊公演（多摩2号館） 11・21 史学科・地理学科創立50周年記 念式典（赤坂プリンスホテル）	4・2 チュニース大学ブルギバ言語研究 所モハメド・マムリー博士「マ グレブの作家たちの言語学的ジ レンマ」講演 10・23 通信教育部創設40周年記念祝賀 会（京王プラザホテル）	4・1 日本国有鉄道、日本専売公社が 分割・民営化 10・19 ブラックマンデー 11・29 大韓航空機がビルマ上空で行方 不明、金賢姫の身柄拘束
一九八八 昭和63	3・31 観世新九郎家文庫、服部康治よ り寄贈 4・1 「服部記念法政大学能楽振興基 金」（二五〇〇万円）設定、「催 花賞」設置	3・14 職員選定年制度制定	2・13 カルガリー冬季オリンピック開 催 4・10 瀬戸大橋、児島坂出ルート全面 開通、本州と四国が初めて陸続 きとなる

一九八八 昭和63	6・11第二三回国際シンポジウム「現代演劇としてのユージン・オニール」(6・12、文学部主催、69年館)	6・29全自協を中心に結成された全学ストライキ実行委員会、バリケード・ストライキ、55・58年館でのほとんどの授業中止	9・17ソウルオリンピック開催 9・19天皇の容態悪化、自粛ムード
一九八九 昭和64		1・7昭和天皇崩御 1・8平成に改元	
一九八九 平成1	1・9第一〇回観世寿夫記念法政大学能楽賞・第一回催花賞贈呈式 3・10「和辻哲郎文庫」(一九六一年入手)整理終了、和辻生誕百年記念、披露の集い(80年館)		4・1消費税3%導入 6・3北京天安門広場事件(6・4) 11・9ベルリンの壁崩壊
一九九〇 平成2		6・27旧姓等使用承認基準(規定第四五三号)制定(7・1施行) 全学ストライキ実行委員会、「即位の礼・大嘗祭・結婚の儀粉碎」をスローガンに富士見校区でバリケード・ストライキ(6・28)	1・13センター入試第一回 11・12天皇即位の礼 11・22大嘗祭 12・28東証大納会の終値、大幅下げ、バブルはじける
一九九一 平成3	8・22第二次日中合同タクラマカン沙漠学術調査(9・13、総隊長・三井嘉都夫、日本隊隊長・伊藤玄三など法政大学7名、中国12名)	6・26法政大学個人情報保護規程(規定第四六一号)の制定 9・18理事会、一九九二年度新入生の学費改定を決定、「平成4・5年度新入生の学費の改定にあたって」を全学生に郵送 11・20法政大学大学院自己点検・評価委員会規程制定	1・17湾岸戦争始まる 2・17バブル崩壊 6・3長崎雲仙普賢岳で大火爆流発生

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九九一 平成3	12・18 市ヶ谷5字部長（文学部・堀江拓充ら）「全学の学生諸君、教職員に訴えます」提出		12・26 ソ連消滅宣言
一九九二 平成4	4・27 能楽研究所40周年記念・能楽文献資料展（6・4、国立能楽堂展示室） 5・13、5・27 記念講演会（国立能楽堂大講堂） 6・9 記念試演能（国立能楽堂） 8・5 第二次日中合同タクラマカン沙漠学術調査（9・8、日本側22名、中国側20名） 9・5 「日本復帰・沖縄文化研究所創設20周年記念講演会」（那覇市琉球新報ホール） 10・12 沖縄文化研究所創設20周年記念沖縄古文書展（10・17、沖縄文化研究所） 11・10・17 記念講演会（920番教室） 11・7 琉球古典舞踊と音楽の会（多摩2号館大教室）	3・11 学生事故災害補償基金規程制定（後援会補助金により）「学生教育研究災害傷害保険」に加入、専任教職員育児休職規程制定 4・8 法政大学自己点検・評価委員会規程制定 10・20 新田町校舎92年館（大学院棟）竣工 11・27 53年館解体工事、妨害により中止	2・8 アルベールビル冬季オリンピックク開催 6・14 PKO協力法成立 7・25 バルセロナオリンピック開催
一九九三 平成5		2・10 法政大学字部長会議規程制定 2・26 法政大学字生部長補佐規程・字生部長補佐会議規程制定 2・27 53年館解体工事、再び妨害により中止	1・1 E C統合市場発足

一九九三 平成5	10・3 故桂田利吉博士記念レリーフ除幕式（英文学科有志・ワンダーフォーゲルクラブ等による「桂友会」主催、長野県白馬・遠見ヒュッテ）	3・10 法政大学国際交流基金規程制定、法政大学大内兵衛記念学術振興基金規程制定、法政大学古田育英会奨学基金規程制定 5・7 千代田区民大学講座「哲学と人生」（6・25、千代田区教育委員会との共催、毎週金曜日、全8回、858番教室） 10・23 「オレンジ校友会」（通信教育部卒業生）設立総会（541番教室） 10・31 法政大学校友会文化講演会「変革の音が聞こえる―そしていま―放権の時代」（若国哲人、日比谷・東京会館） 12・1 『HOSOI VIEW』（『Kompas』の前身）創刊 12・3 「課外教養プログラム」第一回「自然環境を考える」（学生部主催） 12・8 教職員選挙定年制度制定	2・12 リレハンメル冬季オリンピック開催 4・2 対共産圏輸出統制委員会（COCOM）解散 6・30 社会党の村山富市首班の3党（自・社・さきがけ）連立内閣発足
一九九四 平成6	4 日本文学科、文学コース、言語コース、文芸コースの三コース制開始	5・18 「市ヶ谷再開発全学教職員集会」阻止行動をめくりリンチ事件（学生会館） 5・25 『Kompas』（学生部）創刊	

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
一九九五 平成7 8・12 第一回「法政大学能楽セミナー」(9・16、大学院・能楽研究所主催、テーマ「能楽戦後五十年」) 12・16 沖縄文化研究所小湾字誌調査委員会『浦添・小湾字誌』『浦添・小湾方言辞典』、第一六回沖縄タイムス出版文化賞特別賞を受賞	1・21 阪神大震災被災者に特別措置(被災受験生に対する受験票再交付、入学検定料免除、学費減免、短期貸付金等) 3・26 53年館解体工事着手 5・17 法政大学国際交流基金による国際シンポジウム助成規程制定 7・19 通信教育部学則改訂(学費値上げ) 9・27 学校法人法政大学卒業生評議員選挙規則・同施行細則制定	1・17 阪神大震災 3・20 地下鉄サリン事件 10・30 オウム真理教に解散命令	一九九六 平成8 1・10 教学改革本部規程制定 3・19 『学生部白書』創刊 7・5 市ヶ谷再開発についての「第一回ティーチン―教学改革に向けて」(理事・各学部長・学生部長、920番教室) 7・24 市ヶ谷再開発本部規程制定 9・27 市ヶ谷再開発についての「第二回ティーチン―市ヶ谷再開発パート2」(理事・学生部長、920番教室) 11・27 法政大学研究推進委員会規程制定 12・1 法政大学のホームページ開始 7・19 アトランタオリンピック開催 7・20 病原性大腸菌「O157」による集団食中毒

一九九七 平成9	2	能楽研究所「古川久文庫目録」発行（江戸期版本コレクション） 4・11 沖縄文化研究所「小湾字誌」が日本地名研究所「風土研究賞」を受賞（川崎市国際交流センター） 9・23 本学学生・三曲会8名、能楽研究会7名、引率教員1名、中山大学国楽研究会との合同演奏会のため訪台（9・26） 11・25 沖縄文化研究所創設25周年記念・琉球舞踊「南風の志情」公演（新垣典子の会、千代田区紀尾井ホール）	4・28 通信教育部創設50周年記念「洋上スクーリング」（5・5 学生445名、教職員49名）、上海外国語大学へ2万冊、上海交通大学へ1万冊の図書贈呈 6・14 法政大学後援会創立50周年記念式典（ホテルグランドパレス） 7・2 全学教育芸術情報ネットワーク整備委員会規程制定（全学LAN整備開始） 7・29 通信教育部創設50周年記念講演会	4・1 消費税5%へ引き上げ 4・22 リマの日本大使館公邸占拠事件で革命運動14人を射殺 7・1 香港、イギリスから中国へ返還
一九九八 平成10	7・16 藤沢周（日文学）第一一九回芥川賞受賞（フエノスアイレス午前零時） 11・10 HES開校記念特別企画、対談「法政が生んだ二人の芥川賞作家が語り合う」（藤沢周・笠原淳（834番教室） 11・28 第一八回法政大学国際シンポジウム「アジアの中の琉球・世界の中の沖縄」（12・1、沖縄文化研究所主催、11・28 沖縄大会・那覇市琉球新報ホール、12・1 東京大会・千代田区星稜会館）	10・1 法政大学総長賞授与規程制定（本学学生の人命救助やボランティア、福祉、地域など顕著な社会的活動・献身的活動に対して）	6・2・7 長野冬季オリンピック開幕 6・12 23年ぶりマイナス成長	

年	一九九九年 平成11	二〇〇〇年 平成12
法政大学文学部関係事項		
法政大学関係事項	3・10 学校法人法政大学環境憲章制定（グリーン・ユニバーシティの実現を目指し、環境マネジメントシステムを構築） 3・13 法政大学校友会創立110周年記念式典（赤坂プリンスホテル） 4・1 国際文化学部、人間環境学部を設置 9・28 ISO14001 認証取得（日本の総合大学初）	2・9 セクシアル・ハラスメント防止・救済規程制定 3・31 ボアソナード・タワー竣工式 4・1 現代福祉学部、情報科学部を設置 8 山手線沿線私立大学図書館コンソーシアム開始 9・30 法政大学創立120周年記念式典・祝賀会（新高輪プリンスホテル）、大学創立120周年記念写真誌『法政大学1880-2000 そのあゆみと展望』発行 10・1 大学創立120周年記念国際シンポジウム「グローバル化と地域との時代」（10・3、BT25・26階、全6セッション）
国内外主要事項	5・24 日米防衛協力新指針関連法成立 8・9 国旗・国歌法成立、日の丸・君が代法制化 12・20 マカオ、ポルトガルから中国へ返還 12・31 パナマ運河、米からパナマへ返還	4・1 介護保険制度開始 5・18 ストーカー規制法成立 7・8 三宅島礁山噴火 9・15 シドニーオリンピック開催

二〇〇〇 平成12	11・2「グリーン・ユニバーシティ」 商標登録 12・20 法政大学エクステンションカ レッジ招聘教員規程制定	
二〇〇一 平成13		3・31ユニバーサル・スタジオ・ジャ パン開園 6・8 大阪・池田小に刃物男、児童8 人殺害 9・4 東京デイズニーシー開園 9・11米、同時多発テロ
二〇〇二 平成14	4・1 国際日本学研究所、文科省21世 紀COMプログラムに「日本発 信の国際日本学の構築」、文科 省私立大学学術研究高度化推進 事業（学術フロンティア部門） に「国際日本学の総合的研究」 が採択 9・1 国際日本学研究所設立	2・8 ソルトレーク冬季オリンピック 開催 5 食品の不当表示問題が多発（4330 件） 5・31 韓共催のサッカーW杯開催 8 牛肉偽装事件多発 10・15 北朝鮮拉致被害者5人が24年ぶ りに帰国
二〇〇三 平成15	4・1 心理学科を設置（教育学科を改 組）、日本文学科が昼夜開講制 に移行 大学院人文科学研究所に国際日 本学インスティテュート（昼夜 開講）修士課程開設 10・31 国際日本学研究所「国際日本学」 創刊	3・20 米英豪波連合軍がイラク攻撃 （12・13フセイン元大統領拘束） 春 新型肺炎（SARS）が中国な どで大流行 4・1 郵政事業庁が日本郵政公社に （平成19・9・30） 9・26 平成十勝沖地震発生 12・1 東京、名古屋、大阪で地上波デ ジタル放送開始

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
二〇〇四 平成16	4・1 大学院人文科学研究科に国際日本学インスティテュート（昼夜開講）博士課程開設、大学院人文科学研究科国際文化専攻設置、国際日本学インスティテュートに博士課程を設置		4・1 営団地下鉄が民営化され、東京地下鉄株式会社（東京メトロ）に 8・13 アテネオリンピック開催 10・23 新潟県で中越地震発生 この年、拉致被害者の家族が相次いで日本へ移住
二〇〇五 平成17	6・30 国文学会、『法政文芸』創刊	4・1 SSI（スポーツ・サイエンス・インスティテュート）を設置	2・17 中部国際空港（セントレア、海上国際空港）開港 3・25 愛知万博開催 4 中国各地で反日デモ 4・25 J R 福知山線で脱線事故、107人死亡 8・24 つくばエクスプレス開業 11・17 姉歯建築事務所によるマンション耐震性構造計算書偽装問題発覚 この年、鳥インフルエンザ、アジアで猛威
二〇〇六 平成18	4・1 日本文学科が初年次教育科目「大学での国語力」を開講 4・1 大学院人文科学研究科心理学専攻を設置	3・31 新山口坂校舎改良工事竣工 9・15 富士見坂校舎改良工事竣工	2・9 トリノ冬季オリンピック開催 10・1 Vodafone の日本人が Sortbank に この年、北朝鮮が核実験、ミサイル発射開始

二〇〇七 平成19	4・1 国際日本学研究所、学術研究高度化推進事業に「異文化研究としての「日本学」」プログラムが採択	2・28 市ヶ谷キャンパスに外濠校舎竣工 4・1 工学部3学科（建築学科、都市環境デザイン工学科、システムデザイン学科）を改組転換し、デザイン工学部を設置	1・9 防衛庁、防衛省へ移行 3・18 首都圏の私鉄・バス共通ICカード乗車券PASMOが運用開始 7・16 中越沖地震、柏崎刈羽原発でトリプル多発 10・1 日本郵政公社民営化 この年、各地で食品偽装発覚
二〇〇八 平成20	4・1 哲学・英文学・史学・地理学・心理学各学科が初年次教育科目「基礎ゼミ」を開講 英文学科が独自の留学制度「スタディ・アブロード（SA）プログラム」を開始 哲学科を拠点に、法政大学が欧州連合（EU）のエラスムス・ムンドゥス修士課程プログラム「ユーロフイロソフィ」の大学コンソーシアムに正規メンバーとして参加 地理学科が東京都のECO-TOPIプログラム（自然環境保全のための人材育成プログラム）に認定	2・28 市ヶ谷キャンパスに市ヶ谷田町校舎竣工（旧62年館）、デザイン工学部を収容 4・1 理工学部、生命科学部、GIS（グローバル教養学部）を設置	4・1 後期高齢者医療制度（長寿医療制度）スタート 5・12 中国四川省で大地震 6・8 秋葉原で通り魔事件、死傷者17人 6・14 岩手・宮城内陸地震発生 8・8 北京オリンピック開催 9・15 金融危機が世界に波及、株価暴落（リーマンショック）
二〇〇九 平成21		4・1 スポーツ健康学部を設置	1・20 オバマ、初の黒人米大統領に就任 5・21 裁判員法施行、裁判員裁判開始

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
二〇〇九 平成21			8・3 日本初の裁判員裁判が東京地裁で開廷 9・16 民主党圧勝、政権交代（鳩山内閣） この年、豚インフルエンザの感染、全国で猛威
二〇一〇 平成22	4・1 国際日本学研究所、文科省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討―〈日本意識〉の過去・現在・未来―（研究期間5年）が採択 国際日本学研究所、文科省「国際共同に基づく日本研究推進事業」に「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」（研究期間3年）が採択		2・12 バンクーバー冬季オリンピック開催 この夏 記録的な猛暑 この年、宮崎県で〇蹄疫、尖閣事件めり中国各地で反日デモ
二〇一一 平成23	4・1 学部共通のキャリア形成支援科目「文学部のキャリア形成―現代のコンセンサス―」を設置 哲学科が独自の海外研修制度「国際哲学特講」を開始 大学院日本史学専攻を史学専攻に変更し、東洋史、西洋史を増設		3・11 東日本大震災、原発事故、電力不足が深刻化 7・24 地上アナログテレビ放送終了、地上波デジタル放送へ完全移行 この年、歴史的円高、一時1ドル＝75円32銭、最安値

二〇二二 平成24	3・31 二部（夜間課程）を廃止	4・1 国際日本学研究所、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）海外学術調査「在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信」が採択（研究期間3年）	二〇一四 平成26
2・29 東京スカイツリー竣工 7・27 ロンドンオリンピック開催 12・16 衆議院選挙で民主党大敗、自由民主党大勝	夏秋 台風や大雨の影響で、各地で土砂崩れや増水などの被害が相次ぐ 12・6 特定秘密保護法が成立 この年、アベノミクス始動、中国で「PM2.5」の汚染深刻化	5・31 市ヶ谷キャンパスに二〇坂校舎竣工	二〇一三 平成25
2・7 ソチ冬季オリンピック開催 3・18 ロシアによるクリミア・セヴァストポリの編入 4・1 消費税率8%に引き上げ 4・16 韓国旅客船「セウォル号」が沈没 7・2 ネイチャー誌、STAP細胞に関する論文を、捏造改竄により撤回 8・20 広島で土砂災害 9・27 御嶽山が噴火 この年、ウクライナ危機、エボラ出血熱感染拡大、国内でデング熱感染者発生、香港民主派デモ		4・1 田中優子（日文卒）、総長に就任（令和3・3・31）	

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
二〇一五 平成27			7・1米・キューバ国交回復 9・19安全保障関連法が成立 10・5マイナンバー法施行 10・14三井不動産レジデンシャル販売の大型マンションが傾く 11・30COP21パリ協定採択 この年、外国人観光客激増・爆買い、ギリシャ金融危機
二〇一六 平成28	4・1国際日本学研究所、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）海外学術調査「在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究」が採択（研究期間4年）	8・12市ヶ谷キャンパスに富士見ゲート（ゲート棟）竣工	2・16日銀、マイナス金利を初導入 3・26北海道新開線開業、北海道から九州まで新幹線がつながる 4・14熊本地震 6・19公職選挙法の改正により、選挙権年齢18歳に引き下げ 8・5リオデジャネイロオリンピック開催 8・8天皇陛下、退位の意向示唆 11・4地球温暖化対策のパリ協定発効 12・16日口、北方四島で共同経済活動
二〇一七 平成29			3・23森友学園問題 7・5九州北部豪雨 7・10加計学園問題
二〇一八 平成30		4・1二コマの授業時間を90分から100分に改定	1・26大手仮想通貨取引所コインチェックで仮想通貨580億円分が流出

二〇一八 平成30	2・9 平昌冬季オリンピック開催 5・10 日本大学アメフト選手との悪質なタックルが波紋 6・13 改正民法成立 6・7 西日本豪雨 9・6 北海道胆振東部地震 10・6 築地市場閉鎖、豊洲へ移転	4・1 人文科学研究所国際日本学インスティテュートと上海外国語大学日本文化経済学院との共同学位（ダブル・ディグリー）プログラム開設	4・1 国際日本学研究所、エコ地域デザイン研究センターと協力し、「江戸東京研究センター」調査研究活動開始	二〇一九 平成31 令和1
二〇一八 平成30	2・23、24 建て替え工事に伴い解体される校舎へのお別れイベント 「55・58 フェアウェルローズ」開催 3・15 市ヶ谷キャンパスに大内山校舎竣工 55・58 年館解体工事開始（令和2）	3・24 新型コロナウイルスの感染拡大により卒業式中止（学位授与は各学科で実施） 4・1 EOSE ミュージアム開館 4・3 新型コロナウイルスの感染拡大により入学式中止、授業は当面オンライン授業とする 9・18 対面・オンライン・オンデマンド・ハイフレックス授業開始	4・7 基本的に対面授業、一部オンライン（ハイフレックス）授業を開始	二〇二〇 令和2
二〇二一 令和3	7・3 熱海で土石流 7・23 東京2020オリンピック開催、原則無観客	1・31 英、EU 離脱 7・1 レジ袋有料化スタート この年、新型コロナウイルス（第一波〈第三波〉感染拡大により各種活動自粛、緊急事態宣言発令、東京五輪・パラ1年延期	7・3 熱海で土石流 7・23 東京2020オリンピック開催、原則無観客	二〇二一 令和3

年	法政大学文学部関係事項	法政大学関係事項	国内外主要事項
二〇二一 令和3			8・24東京2020パラリンピック開催 この年、新型コロナウイルス（第三波〈第六波〉）感染拡大、ワクチン2回接種
二〇二二 令和4	10・15文学部創立百周年イベント「文学部の過去・現在・未来―百年問のたからもの―」（BTSカイホール、YouTubeライブ配信）	4・7基本的に対面授業、一部オンライン（ハイフレックス）授業を開始	2・4北京冬季オリンピック開催 2・24ロシア、ウクライナ侵攻開始 4・1民法改正により、成年年齢18歳へ引き下げ 7・8安倍晋三銃撃事件 この年、新型コロナウイルス（第六波〈 〉）感染拡大、3〜4回目のワクチン接種

出典：『法政大学百年史』1980年

『法政大学と戦後五〇年』2004年

『法政大学卒業記念アルバム』法政大学、2001〜2020年度

法政大学HP

法政大学施設部内部資料

（作成 宇都宮美生）

後記

法政大学文学部は、二〇二二年に創立百周年を迎えた。

文学部では文学部創立百周年記念事業実行委員会を組織し、さまざまな記念事業を行った。総合コンセプトを「文学部の過去・現在・未来」として、これまでの歴史を振り返り、現在を位置づけ、さらに次の時代の文学部がどのような使命と存在理由を持つのかを展望することを目指して、企画を立てていった。

まず、各学科で動画撮影を行い、ホームページにアップした。これは、学科の歴史や遺産、現在の学生・教員の活動、卒業生の活躍の三つをキー・コンセプトとして、学科の過去・現在・未来を可視化する試みである。

次に、二〇二二年一〇月一五日一三時より、市ヶ谷キャンパスのボアソナード・タワー26階スカイホールにおいて、百周年記念行事を開催した。

第一部は文学部とゆかりの深い野上記念法政大学能楽研究所と共同開催で、日文科卒業生の能楽師井上貴覚氏と、同じく大学卒業後に能楽師になられた小鼓方の大山容子氏にご登場いただき、両者へのインタビューならびに実演を行っていただいた。

第二部は「文学部の過去・現在・未来——百年間のたからもの」と題して、各学科の名誉教授の先生方にご登壇いただき、シンポジウムを開催した。本誌に掲載されているのはその時の模様を記録したものである。

これらはいずれも、文学部ホームページで視聴できる。

そして三つめが本誌の刊行である。Ⅱでは文学部および各学科の歩みと現在の状況を通史的にまとめた文章と資料編として教員一覧・歴代学部長・定員数・卒業生数などを掲載した。歴史のみならず、次の百年にむけての文学部のありようを考えるうえでの資となれば幸甚である。

この事業には、文学部卒業生諸氏、多くの元教員、現任教員、現役学生その他の各氏に、寄付金を始め多大な協力を賜った。また、本誌の作成にあたり、日本文学科出身の関口雄士氏に多大な協力をあおいだ。この場を借りて、深謝申し上げたい。

文学部百周年記念事業実行委員会

奥田和夫

菅沢龍文

(哲学科)

小林ふみ子

藤村耕治

(日本文学科)

日中鎮朗

宮川雅

(英文学科)

塩沢裕仁

宇都宮美生

(史学科)

中島弘一

中俣均

(地理学科)

福田由紀

島宗理

藤田哲也

(心理学科)

文学部創立百周年記念事業実行委員長 藤村耕治

法政大学文学部編

文学部の百年

二〇二三年三月二〇日 発行

編集 菅沢龍文・宮川雅・

宇都宮美生・中俣均・

島宗理・藤田哲也

益田佳依・村尾のどか

(代表) 藤村耕治

発行

法政大学文学部

東京都千代田区富士見二一七―一

印刷・製本

岩城印刷株式会社

東京都板橋区板橋一―二二―九

